寺井町千代（せんだい）デジロA遺跡・大長野（おおながの）A遺跡

－県営ほ場整備事業寺井南部地区小杉工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

1 9 9 5

石川県立埋蔵文化財センター

寺井町千代デジロＡ遺跡・大長野Ａ遺跡

石川県立埋蔵文化財センター

例　言

1　本書は石川県能美郡寺井町小杉地内に所在する埋蔵文化財包蔵地、千代(せんだい)デジロA遺跡と大長(おおなが)野(の)A遺跡の発掘調査報告書である

2　上記2遺跡の発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課所管の県営ほ場整備事業寺井南部地区小杉工区の施工に起因し、同課の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査及び報告書刊行に係る費用は、一部文化庁から補助金を得た他は耕地整備課が負担した。

4　発掘調査から報告書の刊行に至るまでには下記の機関、個人の協力を得た。

文化庁記念物課、石川県農林水産部耕地整備課、石川県小松土地改良事務所、石川県埋蔵文化財保存協会、寺井町教育委員会、寺井町小杉公民館、小杉地区の皆さん、樫田　誠、小島和夫、宮田信一、大藪智子

5　上記2遺跡の発掘調査の期間、面積、費用、担当者は下記の通りである。

調査期間	平成4年9月21日～11月17日（2遺跡合算）
調査面積	510㎡（千代デジロA遺跡150㎡、大長野A遺跡360㎡）
調査費用	3,741,560円（2遺跡合算、県費・国庫補助金合算）
調査担当	石川県立埋蔵文化財センター主事　本田秀生、同主事　安　英樹
調査補助員	大藤雅男

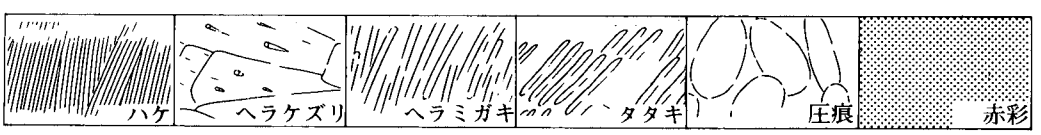
6　出土遺物の整理については平成5年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に作業を委託し、小屋玲子、松田智恵子、川崎由紀子が担当して行った。

7　出土遺物の写真撮影及び写真図版の作成は安が行った。

8　本報告書の執筆はⅠを本田が、Ⅱ～Ⅴを安が分担して行い、編集は安が行った。

9　本文・図版・挿図についての凡例は下記の通りである。

(1)方位は全て真北を示す。(2)水平基準は海抜高である。(3)遺跡名・遺構名で調査後、整理作業の過程で一部改称したものがあり、詳細はⅡに記した。発掘調査で得られた諸資料の記録、出土遺物の注記等は旧称によって行っているので、活用・検索の際は対照されたい。(4)遺物番号は挿図・図版で共通する。(5)遺物番号は、同一遺構で複数の挿図・図版にまたがるものについては連番とし、その他は図毎に1から振った。(6)遺物実測図の表現は下記の通りである。須恵器・珠洲焼については実測図断面を黒塗りした。(7)注、引用・参考文献はⅠ～Ⅴそれぞれでまとめ、各章末に示した。



10　発掘調査で得られた記録資料、出土遺物は石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

目　次

報告書抄録

Ⅰ　遺跡の位置と環境……（本田）……1
　1　遺跡の位置
　2　遺跡周辺の地形と遺跡の展開

Ⅱ　経緯と経過……（安）……11
　1　発掘調査に至るまで
　2　発掘調査
　3　屋内整理

Ⅲ　千代デジロＡ遺跡……（安）……15
　1　概要
　2　遺構
　3　遺物
　4　小結

Ⅳ　大長野Ａ遺跡……（安）……29
　1　概要
　2　遺構
　3　遺物
　4　小結

Ⅴ　南加賀の月影式土器に関する小論
　ー梯川中流域右岸地域の土器胎土と甕形態についてー……（安）……77
　1　はじめに
　2　胎土分類と観察方法
　3　観察資料の概要
　4　胎土別組成の比較
　5　月影甕の形態と胎土
　6　おわりに

写真図版目次

図版１　遺跡周辺の航空写真
図版２　千代デジロＡ遺跡　上　調査後全景（南から）　下　調査後全景（北から）
図版３　千代デジロＡ遺跡　上　１号土坑（東から）　下　４号ピット（東から）
図版４　千代デジロＡ遺跡　上　１号溝（北から）　下　２号溝（西から）
図版５　千代デジロＡ遺跡　上　３号溝（西から）　下　４号溝（西から）
図版６　千代デジロＡ遺跡　上　14号溝（東から）　下　15号溝（東から）
図版７　千代デジロＡ遺跡　上　16号溝（東から）　下　19号溝（南西から）
図版８　千代デジロＡ遺跡　上　17～19号溝（北東から）　下　16～19号溝（北東から）
図版９　千代デジロＡ遺跡　出土遺物(1)
図版10　千代デジロＡ遺跡　出土遺物(2)
図版11　大長野Ａ遺跡　上　１～２区調査後全景（南東から）　下　３～16区調査後全景（東から）
図版12　大長野Ａ遺跡　上　12～16区調査後全景（東から）　下　14～16区調査後全景（東から）
図版13　大長野Ａ遺跡　上　１号溝（東から）　下　１号溝（南から）
図版14　大長野Ａ遺跡　上　２号溝（東から）　下　２号溝（北から）
図版15　大長野Ａ遺跡　上　２号溝（遺物取りあげ後、北から）　下　３号溝（北から）
図版16　大長野Ａ遺跡　上　４号溝（北から）　下　５号溝（東から）
図版17　大長野Ａ遺跡　上　８号溝（北西から）　下　８号溝（西から）
図版18　大長野Ａ遺跡　上　９号溝（西から）　下　１号大溝（北から）
図版19　大長野Ａ遺跡　上　１号大溝（木集中地点、北西から）　下　２号大溝（北東から）
図版20　大長野Ａ遺跡　上　１号落ち込み（西半部、西から）　下　１号落ち込み（東半部、西から）
図版21　大長野Ａ遺跡　上　３号落ち込み（北から）　下　１号土坑（西から）
図版22　大長野Ａ遺跡　上　２・３号土坑（北から）　下　４号土坑（南から）
図版23　大長野Ａ遺跡　上　19号ピット（北から）　下　18区調査後全景（北から）
図版24　大長野Ａ遺跡　１号溝出土遺物(1)
図版25　大長野Ａ遺跡　１号溝出土遺物(2)
図版26　大長野Ａ遺跡　１号溝出土遺物(3)
図版27　大長野Ａ遺跡　２号溝出土遺物
図版28　大長野Ａ遺跡　３・５・７号溝出土遺物
図版29　大長野Ａ遺跡　８号溝出土遺物
図版30　大長野Ａ遺跡　９号溝出土遺物
図版31　大長野Ａ遺跡　１号大溝出土遺物
図版32　大長野Ａ遺跡　２号大溝出土遺物(1)
図版33　大長野Ａ遺跡　２号大溝出土遺物(2)
図版34　大長野Ａ遺跡　３号大溝出土遺物
図版35　大長野Ａ遺跡　落ち込み出土遺物(1)
図版36　大長野Ａ遺跡　落ち込み出土遺物(2)
図版37　大長野Ａ遺跡　土坑・ピット出土遺物
図版38　大長野Ａ遺跡　包含層ほか出土遺物(1)
図版39　大長野Ａ遺跡　包含層ほか出土遺物(2)
図版40　大長野Ａ遺跡　包含層ほか出土遺物(3)

報告書抄録

ふりがな	てらいまちせんだいでじろAいせき　おおながのAいせき
書名	寺井町千代デジロA遺跡・大長野A遺跡
副書名	県営ほ場整備事業寺井南部地区小杉工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	本田秀生・安　英樹
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター
所在地	〒921　石川県金沢市米泉4丁目133番地（TEL.0762—43—7692）
発行年月日	西暦1995年3月30日

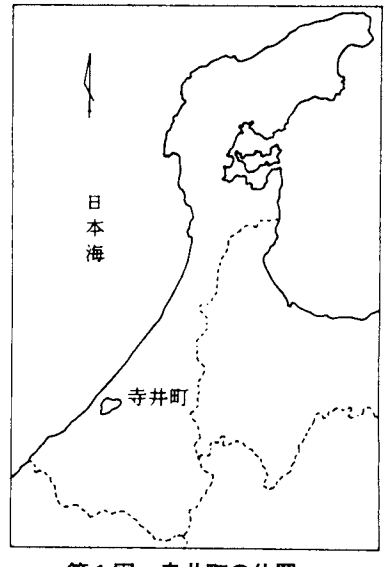
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″		(㎡)	
千代デジロA（せんだいでじろ）	石川県能美郡（いしかわけんのみぐん） 寺井町小杉（てらいまちこすぎ）	17322	004	36度 25分 15秒	136度 29分 30秒	19920921～ 19921117	150	ほ場整備
大長野A（おおながの）	石川県能美郡（いしかわけんのみぐん） 寺井町小杉（てらいまちこすぎ）	17322	001	36度 25分 15秒	136度 29分 15秒	上記遺跡と合算	360	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
千代デジロA	集落遺跡	弥生後期～古墳前期	土坑2基 溝20条 ピット6穴	弥生土器、土師器、石器、木製品、種子等自然遺物	溝は大溝が多く水路的な性格か、環濠の可能性もある。ピットに3段組の礎板をもつものがあり柱穴と思われる。
大長野A	集落遺跡	弥生後期～古墳前期	土坑4基 溝10条 大溝3条 落ち込み4基 ピット24穴	弥生土器、土師器、石器、木製品、種子等自然遺物	ピットのほとんどは規模を確認できないが掘立柱建物になる。遺物量も多く集落の中心部分と思われる。

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置

今回報告する千代デジロＡ遺跡、大長野Ａ遺跡の発掘調査地は、石川県能美郡寺井町小杉地内に位置する。寺井町は石川県南部の加南と呼ばれる地域の北部にあり、金沢市街地から南西に約15キロメートル、日本海までは約４キロメートルの所に位置している。加賀平野を西流する手取川を挟んで北に川北町、その左岸に並ぶように西に根上町、東に辰口町があり、南および南西には入り組むような境界をもって小松市と接している。平成６年発刊の『寺井町史』第三巻によれば面積は約13.5平方キロメートル、人口は約１万６千人である。

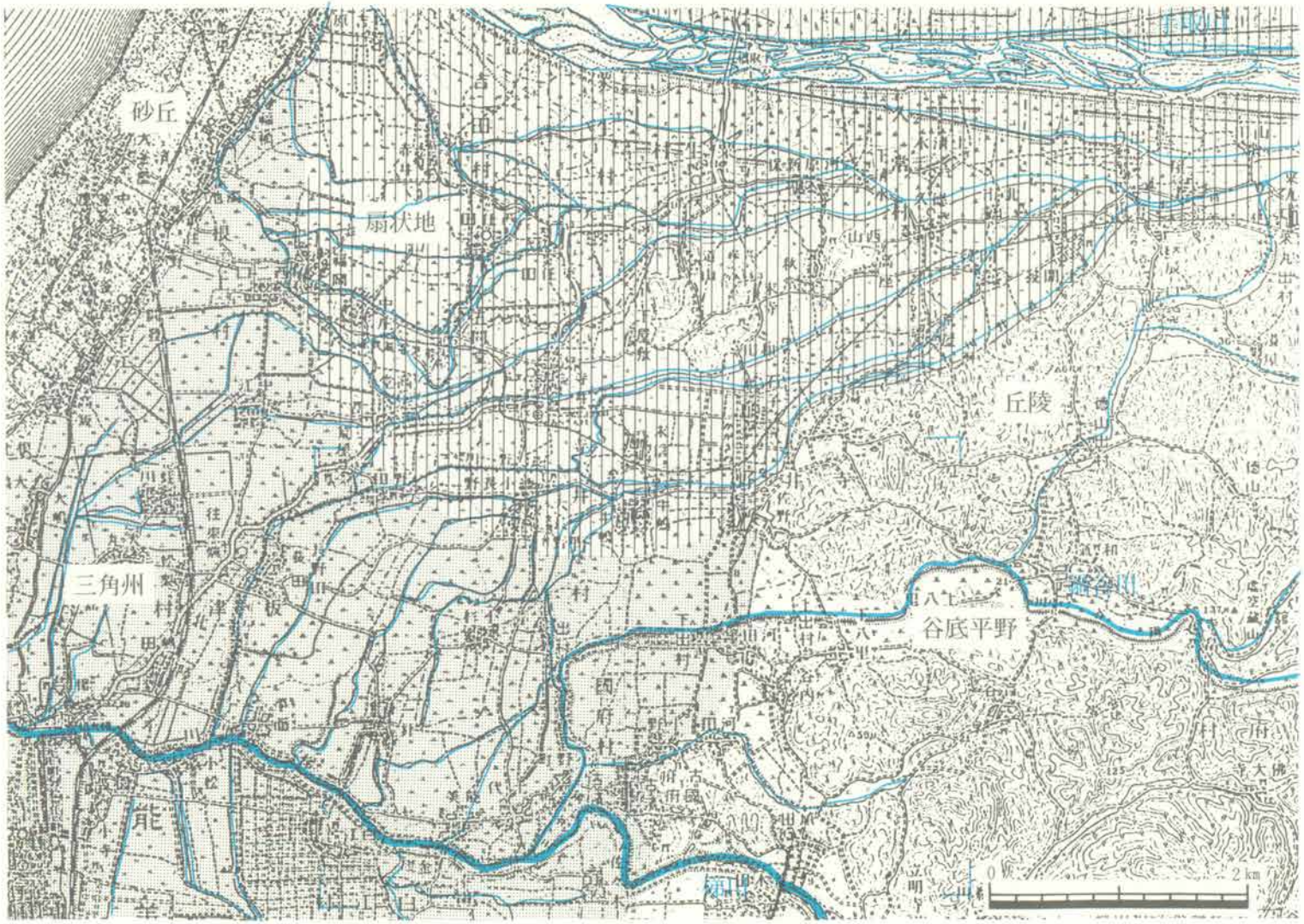


第１図　寺井町の位置

寺井町の地勢を見ると、町北部に和田山、末寺山などの独立丘陵、東部に能美丘陵の先端部がわずかに広がる他は、大部分が低地である。能美平野とも呼ばれるこの低地部は古来より水田開発が盛んで、今日に至っても、今回の調査の要因となったほ場整備事業などその整備が進められ、加南地域の穀倉地帯の一部となっている。また、東部の丘陵地で産出する陶土を用い、幕末に窯が開かれて以来、町は九谷焼の生産地として発展し、現在、その生産量は県内の総生産量の７割を占めるまでになっている。昭和48年からはこの東部の丘陵地に陶芸村と住宅団地の造成を目的とした開発が進められ、九谷焼の里として町立の九谷焼資料館、九谷焼美術館、県立九谷焼技術研修所等が建てられ、町をあげてその発展と後継者の育成に努めている。

鎌倉時代には「三宮古記」に「寺井市」の名が見え、物資の集散地として、江戸時代には藩の収納蔵が設けられると共に、北国街道の宿駅として繁栄した。近年では住宅団地の造成がなされ、道路網整備の進展により金沢、小松方面への通勤圏ともなっている。昭和57年には町域の南西端を通る国道バイパスが大長野付近まで完成した。江戸時代の町域の北西部を斜めに走る北国街道、昭和30年代からの町域西部を南北に貫く国道８号線、そして今回、と三度大きな交通の流れが変わった。これまでも交通の変化に対し町は様相を変えてきたが、今回もまたこれに対応するようその姿が変わりつつある。

さて、発掘調査地である寺井町小杉は寺井町の南西端に位置する。町域は周りを用水路に囲まれた低地で平行四辺形を呈する。集落は町域の北半の東に寄ったところに営まれ、周囲は水田となっている。徳治三年（1308年）五月の「六波羅探題裁許状」（南禅寺文書）に見える佐羅村を小杉町に比定するとの考えもあるが、文献に初めて小杉の名が見えるのは文明六年（1474年）十月の「白山荘厳講中記録」である。藩制期には帳畳表役が課され（小杉区有文書、能美郡物成）、明治10年の「皇国地誌」によれば特産物は米、実綿、茶などで木綿織、製茶が盛んであったらしい。明治後半には絹織物の生産が盛んであったが、戦後衰退した。現在では転作作物として北陸



第２図　遺跡周辺の地形（Ｓ＝1/50,000）□内は第３図の範囲

で初めて取り入れたハトムギ栽培を「ハトムギの里小杉」の名を掲げて推進している。

今回の発掘地点は、町域の北及び北西にあたる。遺跡名が示すように千代デジロA遺跡は小松市千代出村町地内に広がりを見せ、昭和60年に県営ほ場整備事業が要因となり発掘調査が実施されている。一方大長野A遺跡は寺井町大長野地内から小松市能美町にかけての広がりが、県営ほ場整備事業、国道8号線小松バイパス建設工事にかかる分布調査で明らかになった。平成3年に県営ほ場整備事業を要因とし、寺井町大長野地内で発掘調査が実施されている。

2　遺跡周辺の地形と遺跡の展開

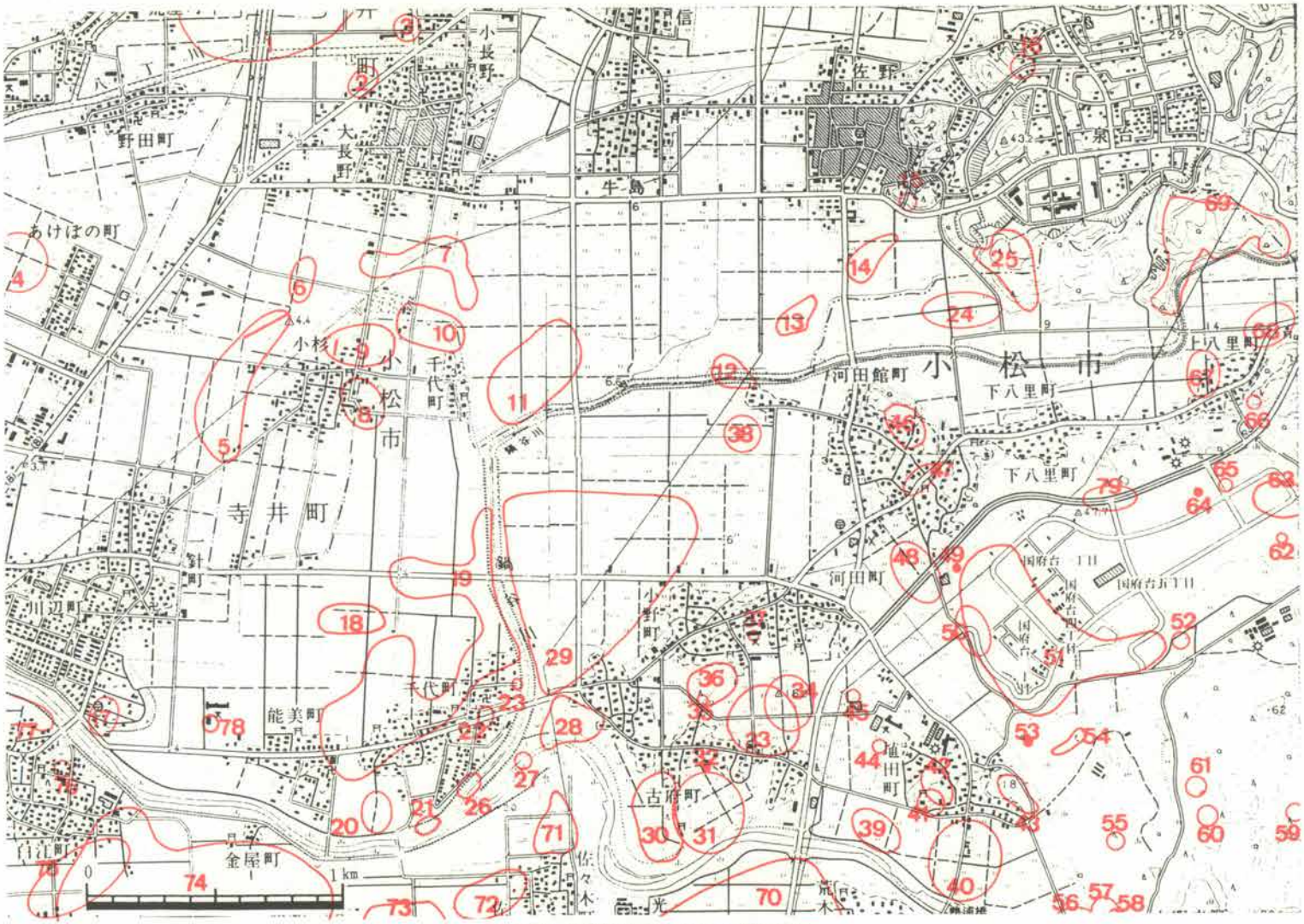
a）遺跡周辺の地形

第2図は昭和2年発行の陸地測量部による五万分の一地形図『小松』、『鶴来』に昭和61、63年の石川県農林水産部耕地整備課による土地分類基本調査『小松』、『鶴来』の地形分類図を合成した図である。地形は西に海岸線に沿う砂丘、東に能美丘陵と呼ばれる丘陵地、そしてこれらに挟まれる低地があり、さらに低地は北側の扇状地、南側の三角州に分かれる。また、これらを南北に区切るように北に手取川、南に梯川が西流し、鍋谷川がその間のエリアの右隅角を長方形に区切る様に流れ、梯川と合流している。

手取川は加賀の霊峰白山の大汝峰、御前峰、別山を源とし、途中尾添川、大日川、直海川等白山山地北部の水流を集めると共に、県内有数の河岸段丘地形を形成し、手取谷を北流する。谷を抜ける石川郡鶴来町付近で流れを西に変え、こんどは石川県最大の扇状地を形成しながら石川郡美川町で日本海へとそそぎ込む。約78キロメートルの流程をもつ県内最長の河川である。流程のわりに山地が浅く、壮年期の山容のため流水は急流となり、また、流域には手取統と呼ばれる後期中生代層が分布し、これが崩壊し易い砂岩、礫岩、頁岩を含むため、古来より暴れ川として知られている。「手取川は、その流路を七度変えた。」との伝承があり、現在の流路は、弥生～古墳時代の「古手取川」と考えられている。一方本流とは別に、扇状地上には樹根状に自然河川が流れており、紡錘形の島状地形を無数に形成している。第2図では手取川の扇状地は現流路と丘陵地の間に広がり、寺井町佐野から小松市野田町、根上町福岡、根上町吉原をむすぶ弧状のラインがその末端となっている（縦線の範囲）。

梯川は小松市大杉町鈴が岳に源を発する大杉谷川と、小松市大倉岳に源を発する郷谷川が小松市金野町付近で合流し、さらに中海町で小松市中峠町東方の御像山や火灯山などに源をなす滓上川と合流し、この付近から流れを西に取り、蛇行しつつ小松市安宅町で日本海にいたる。また、鍋谷川は石川郡鳥越村と能美郡辰口町鍋谷との境をなす揚原山を源とし、能美丘陵の流れを集めつつ谷底平野を西流し、低地部に入ると小松市千代出村町付近で流れを南に変え梯川と合流する。この二つの河川は上流部では礫河床で谷底平野を形成するが、下流部では泥河床となり三角州を形成している。

一方、海岸部には小松砂丘と呼ばれる砂丘があり、手取川扇状地以南の低地部は砂丘背後の後背湿地とこれら河川の三角州から構成される（網点の範囲）。これら低地部を流れる小河川の流路を見ると、扇状地では手取川の流れと同じか、あるいはやや南に振った方向を取るが、扇状地



第3図　周辺の遺跡（S＝1/25,000）

第1表　周辺の遺跡

No.	遺跡名	時代	その他
1	高堂遺跡	弥生後期～古墳後期 奈良・平安 中世	1979～1981　埋文センター調査
2	小長野B遺跡	弥生後期末	
3	小長野遺跡	不詳 (土師器・須恵器)	
4	長田遺跡	弥生末 ～古墳	
5	大長野A遺跡	弥生後期 ～古墳前期	1991、1992　埋文センター調査
6	大長野B遺跡	弥生末	
7	牛島宮の島遺跡	平安	1992、1993　埋文センター調査
8	千代デジロB遺跡	弥生末 ～古墳後期	1984　〃
9	千代デジロA遺跡	弥生後期 ～古墳後期	1985、1992　〃
10	千代デジロC遺跡	古墳・平安	1985　〃
11	牛島ウハシ遺跡	古墳前期 奈良・平安 中世	1990、1991　〃
12	佐野A遺跡	弥生	1991　〃
13	佐野八反田遺跡	奈良・平安	1991　〃
14	佐野B遺跡	弥生末・中世 古代	1993　〃
15	狭野神社前遺跡	平安	
16	湯谷遺跡	古墳前期	
17	一針遺跡	縄文	
18	千代能美遺跡	奈良・平安	
19	千代オオキダ遺跡	弥生前期 後期～古墳 奈良・平安 中世	
20	千代マエダ遺跡	古墳～平安	
21	千代本村遺跡	古墳	
22	千代城跡	室町	
23	小野町遺跡	古墳	
24	河田向山下遺跡	縄文・平安	
25	向山古墳群	古墳	
26	横地遺跡	縄文後期	
27	フトンド遺跡	平安	
28	古府遺跡	弥生～中世	1984、埋文センター調査
29	古府しのまち遺跡	古墳前期 平安	1973　県・市教委調査 1988　市教委調査 1989　埋文センター調査
30	古府シマ遺跡	平安・中世	
31	南野台遺跡	縄文中期 古墳	
32	古府横穴	古墳	
33	小野遺跡	平安	
34	小野スギノキ遺跡	平安 中世	
35	十九堂山中世墓群	中世	
36	十九堂山遺跡	平安 中世	
37	小野窯跡	江戸	
38	下出地割遺跡	不詳	
39	埴田ウラムキ遺跡	平安 中世	
40	埴田遺跡	奈良・平安	
41	埴田フルカワ遺跡	古墳	
42	宮谷寺屋敷遺跡	縄文・室町	
43	埴田後山明神1～3号墳 〃　無常堂古墳	古墳後期	3号墳,無常堂古墳　1982　市教委調査
44	埴田ミヤンタン遺跡	不詳	
45	埴田ミヤケノ遺跡	不詳 (土師器)	
46	河田館跡	縄文中期 ～中世	
47	谷内横穴	古墳	
48	河田C遺跡	不詳 (土師器)	
49	河田横穴	不詳	
50	河田B遺跡	奈良	
51	河田山古墳群	岩宿～奈良	1986、87　市教委調査
52	河田山窯跡	不詳	
53	御菩提所古墳	古墳	
54	埴田1、2号墳	古墳	
55	埴田塚	中世	
56	遊泉寺クボタA遺跡	平安～中世	
57	〃　B	平安～中世	
58	隆明寺跡	平安初	
59	里川D遺跡	縄文中期	1990　市教委調査
60	〃　E　〃	平安	〃
61	〃　F　〃	平安	1989　〃　分調
62	上八里1号窯跡	不詳	
63	上八里横穴群	不詳	
64	穴場横穴	古墳	
65	上八里C遺跡	奈良	
66	上八里2号窯跡	不詳	
67	上八里A遺跡	縄文・平安	
68	上八里中世墓	室町	
69	八里向山遺跡群	岩宿～平安	1993～　市教委調査中
70	荒木田遺跡	縄文晩期 弥生～中世	1992　埋文センター調査 1993、1994　市教委調査
71	佐々木アサバタケ遺跡	弥生～中世	1984　埋文センター調査
72	佐々木ノテウラ遺跡	弥生～中世	〃
73	佐々木遺跡	平安	
74	漆町遺跡群	弥生～中世	1979～81,84～86　埋文センター調査 1980、81、84　市教委調査
75	白江念仏堂遺跡	弥生～中世	1979　埋文センター調査
76	白江堡跡	室町	
77	白江梯川遺跡	弥生 中世	1982～84、87　埋文センター調査
78	定地坊跡	室町	
79	下八里横穴群	中世	

末端から低地部にいたると大きく南に振れ梯川にそそぎ込んでいる。同時に扇状地では、ほぼ東西方向基調の島状地形が形成され、低地部では南北に近い方向で微高地が形成されている[1]。

この低地部に谷底平野を伴って張り出す能美丘陵は、標高は50～150メートルで顕著な定高性をもち、先端部の一部が海岸段丘で中位段丘とされる以外は高位段丘に対比されている。また、寺井町寺井の東側から辰口町西山付近には能美丘陵とは別の独立丘があるが、これも能美丘陵と同じく高位段丘とされている。これら丘陵の裾部にはいくつかの湧水点があり、図中では寺井町湯谷町付近や寺井町佐野町付近が知られている。

b）周辺の遺跡

第３図に周辺の遺跡分布を示した。付図には県営ほ場整備事業寺井南部地区、小松北部地区を中心とした地域の、表層等高線と遺跡の範囲、発掘調査の実施された部分を示した。また、第２図には第３図の範囲を示しておいた。第３図を中心として時代を追ってその変遷を見て行きたい。

岩宿時代～弥生時代中期

岩宿時代の遺跡は能美丘陵の先端部付近で２遺跡が発見されている[2]。いずれも小松市教育委員会の調査成果によるものである。51は河田山古墳群である。石川県教育委員会1992年発行の『石川県遺跡地図』には古墳群の記載しかないが、岩宿時代から奈良時代までの遺跡である。少量の石器が流土中から出土したのみであるが、県内では初めての翼状剥片が出土している。69は八里向山遺跡群でＡ～Ｆ遺跡からなる。現在も調査継続中である。試掘調査の段階で遺跡が発見され、現在４遺跡から遺物が出土している。Ｄ遺跡では２つのブロックが確認されている。一つは流紋岩を主体とするブロックで、県内初の有樋尖頭器が出土している。もう一つのブロックは安山岩を主体としている。Ｃ遺跡では流土中からではあるが安山岩製の国府型ナイフ形石器が出土し、Ｄ遺跡との関連が窺える。また、国府型ナイフ形石器も県内初の出土である。Ｂ遺跡では流土中から茂呂型ナイフ形石器が出土し、現在調査中のＥ遺跡では剥片が出土している。いずれも小規模な遺跡であるが、出土状態がはっきりしており、能美丘陵の岩宿時代を考える上で第１級の資料となろう。もちろん県内の岩宿時代研究を進める上でも貴重な資料であり報告がなされれば調査方法を含め今後の研究の指針ともなろう[3]。この２遺跡は最終氷期最寒冷期以降の遺跡と考えられる。

縄文時代の遺跡は12遺跡が確認されている。この他、土器片が数点出土した遺跡を含めれば数は少し増えよう。県営ほ場整備事業の試掘調査で牛島ウハシ遺跡付近から出土した前期末葉の土器が最古の資料となる。発掘調査が実施されある程度の資料が得られた遺跡は先の河田山古墳群、千代オオキダ遺跡などがあり、河田山古墳群では中期、千代オオキダ遺跡では晩期の資料が出土している。全体的な傾向を見れば中期の遺跡は丘陵上に、後期以降の遺跡は低地部にと他地域と同様な傾向を示すものの、はっきりとした動向はつかめない。

弥生時代前期、中期の遺跡も少ない。前期では72佐々木ノテウラ遺跡、74漆町遺跡群、９千代デジロＡ遺跡等で少量の土器片が出土し、中期では77白江梯川遺跡や第３図からは外れるが寺井町和田山下遺跡等でやはり少量の土器片が出土している。

岩宿時代から弥生時代中期は氷河期から最終氷期最寒冷期の海面低下、縄文前期をピークとす

る海進があり、さらに縄文後晩期からの小海退と環境変動が大きい。現状の遺跡のあり方だけではその動態は探れない[4]。

弥生時代後期～古墳時代前半期

弥生時代後期はその初頭の遺跡が見つかっていないものの、それ以降は爆発的に遺跡が増加する。付図に示した低地部の遺跡を見ると島状の微高地上に立地する事が窺え、また、多少の変動はあれこれ以降遺跡の立地する地点が大きく変化することはない。この段階までに地形が現況に近い形に完成されたと思われる。弥生時代後期後半から古墳時代前半期の遺跡では八丁川流域の1高堂遺跡、鍋谷川右岸の5大長野A遺跡、6大長野B遺跡、8千代デジロB遺跡、9千代デジロA遺跡、11牛島ウハシ遺跡のグループ、12佐野A遺跡、14佐野B遺跡のグループ、鍋谷川、梯川合流部付近の19千代オオキダ遺跡、20千代マエダ遺跡、21千代本村遺跡、23小野町遺跡、28古府遺跡、29古府しのまち遺跡のグループ、梯川左岸の70荒木田遺跡、71佐々木アサバタケ遺跡、74漆町遺跡群、77白江梯川遺跡があり、各河川の上流部にはそれぞれ弥生時代末では丘陵上の集落、古墳時代前半期では古墳群が確認されている。集落は一定の微高地群上を拡大、縮小あるいは変遷している様に見受けられる。

古墳時代後半期～古代前半期

古墳時代後半から古代前半期では確認できる範囲において基本的には遺跡立地の大きな変更は掴めない。しかし、確認される遺構、遺物数の減少、遺跡の非連続性など前段階とは大きく様相が異なる。とくに鍋谷川右岸以北ではその連続性が追えない状況にある。高堂遺跡では6世紀初めの土坑や建物は確認されるものの、それ以降の痕跡がはっきりとしない。千代デジロA、B遺跡でも当該期の遺物は前段階の遺物に比べきわめて少ない。10千代デジロC遺跡では6世紀後半の遺構、遺物が少量確認されている。また、佐野B遺跡周辺でも当該期の遺物が若干出土しているらしいが、現状でははっきりとした集落跡はつかめていない。ただし、八里向山遺跡群では6世紀末葉頃の須恵器窯が確認されている。一方、梯川右岸域では新しい遺跡の出現も認められるなど鍋谷川右岸以北の地域とはやや様相が異なる。31南野台遺跡、埴田フルカワ遺跡などが梯川右岸の台地上に出現する。千代オオキダ遺跡ではその南半域で6世紀代の遺物の出土があり、7世紀後半から8世紀前半ごろの建物が確認されている。また、当該期の遺物の出土量が前段階の遺物に比較してやや多い。古府遺跡でも弥生時代以後途絶えていたが、7世紀後半ごろから遺物が出土し始める。梯川左岸ではさらに様相が異なる。漆町遺跡群では6世紀中葉から7世紀中葉にかけて一時衰退する現象がみられるものの7世紀後半からは確実な遺構の存在が確認できる。佐々木ノテウラ遺跡では7世紀前半から遺構、遺物が確認でき、7世紀後半では一屋敷程度の遺構群が検出されている。白江梯川遺跡でも6世紀前半の遺物が出土している。

全域を通して6世紀前後から7世紀中葉の時期は発掘調査で明瞭な集落遺跡の確認は少ない。このような現象は全県的な現象であるらしい[5]。それに対し、古墳群は、鍋谷川右岸では現状ではその確認例がないものの、八丁川流域では図幅から外れるが辰口町西山古墳群が、梯川右岸では河田山古墳群が、梯川左岸では43埴田後山明神古墳群、埴田後山無常堂古墳や、これも図幅から外れるが小松市八幡古墳群などが確認され、盛んな造営が見て取れる。集落とのバランスが問

題となろう。漆町遺跡群の報告（田嶋他1986・同1988）で田嶋明人氏は6世紀前後の集落衰退の要因の一つに洪水をあげている。もしこれが的を得たものとすれば、集落の立地はその地点を大きく変えた可能性が高い。梯川右岸の丘陵地に新しく遺跡の進出が図られるのもその表れの一つかも知れない。また、地域的な差として、梯川流域では7世紀代に入りその初めごろから遺跡の確認例があり、8世紀代以降は遺跡数は多くないものの集落跡が確認されているが、鍋谷川右岸以北の地域ではその様相が今の所はっきりしないという現象がある。古墳群の消長と類似した動きであり興味深い[6]。

古代後半期

8世紀後半にはいると鍋谷川以北でも若干の動きがある。千代デジロC遺跡はで8世紀後半の遺構、遺物が確認され、八里向山遺跡群で8世紀末から9世紀初頭ごろの寺院跡が確認されている。9世紀代後半に入ると各河川流域で多くの遺跡が形成される。遺跡立地は弥生から古墳時代前半期と同じ微高地上に立地しているが若干場所を変えている。また、調査のおよんだ遺跡では、建物跡、井戸等明瞭な遺構の確認例が多い。注目されるのは各河川流域でそれなりの遺跡が形成されると共に、国府、国分寺の比定地である梯川右岸の古府台地の先端部付近に30古府シマ遺跡、33小野遺跡、34小野スギノキ遺跡、36十九堂山遺跡など新しい遺跡が集中して形成されていることであろう。ただ、周辺の遺跡の動態が文献資料から見る加賀立国（823年）とは若干のずれがあることは多くの研究者が指摘している[7]。また、60里川E遺跡では9世紀末から10世紀前半の寺院跡が発見され、前述の八里向山遺跡群や58隆明寺跡、図幅からは外れるが小松市浄水寺跡など宗教関連遺跡が目だつのもこの時期の特徴である。この隆盛も10世紀の中葉を過ぎると急速に衰退し、11世紀代の集落遺跡としては漆町遺跡群や白江梯川遺跡等以外はきわめて少なく現状ではこれら以外のはっきりとした集落跡は掴みづらい。これも6世紀後半から7世紀前半頃の集落の衰退と同様大きな変化である。当該地域ではないが羽咋市寺家遺跡（小嶋他1986）などでやはり環境の変化が言われている。

中世

12世紀以降は集落の確認例が増加して安定している。八丁川右岸では高堂遺跡がある。鍋谷川流域では牛島ウハシ遺跡や千代オオキダ遺跡北部、46河田館跡があり、上流に68上八里中世墓が確認されている。梯川流域では前段階に優勢であった遺跡に再び遺跡が形成されている。詳細に遺跡立地を見ると、どの河川流域でも若干位置を変えている。また、その遺跡の隆盛期を見るといくつかのグループ内で補完関係が存在しそうである。

以上、地形と遺跡の展開について大ざっぱに述べてきた[8]。まとめてみると、弥生時代中期までは遺跡の発見例が少なく、その動態については不明な点が多い。弥生時代後期から古墳時代前半期では概ね現在に近い地形が完成し、小河川に挟まれた一微高地群が集落域となり、その微高地群上を変遷している可能性が高い。古墳時代後半期から古代前半期ではその前半期に大きく集落の衰退が見られ、7世紀から8世紀前半に梯川流域を中心に再び集落が形成されて来る。集落衰退の要因はおそらく大きな環境変化であり、集落は地点を変えると共に再編成されつつ再び形成されるのがこの期間であろう。それは8世紀後半段階から徐々に進展し、9世紀～10世紀にピ

ークをむかえ、10世紀後半には衰退する。この古代後半期のピーク時の遺跡立地は弥生後期～古墳時代前半期の微高地をほぼ踏襲しており、同様な地形が回復したと思われる。また、10世紀後半以降の衰退はやはりその要因の一つに環境変化が推定される。これ以降存続している遺跡を見ると中世にいたり再び隆盛を迎える遺跡であり、この段階に再び集落の再編成がなされていると思われる。中世には各河川の両岸に遺跡が形成され、岸毎にいくつかのグループが形成されその隆盛時期が推移していることが窺われる。これ以降いくつかの大きな変遷を経て現在にいたるものと思われる。

最後に、千代デジロＡ遺跡と大長野Ａ遺跡について述べておく。両遺跡とも県営ほ場整備事業に係る発掘調査で、幅２ｍのトレンチ調査であり、建物等はその全容を明らかにし得ない。検出された遺構の多くは溝状の遺構で、弥生時代後期から古墳時代前半期の溝はその多くがトレンチに直交する方向で検出されている。千代デジロＡ遺跡は1985年の調査（湯尻他1992）ではＦトレンチにあたるが、溝は東西方向に流れ本報告の調査区と矛盾をきたさない。一方大長野Ａ遺跡はその流路を北西ー南東の方向に取るものが多く、千代デジロＡ遺跡とは異なる。付図を見ると両遺跡間には低地があり、その低地は長く延びる大長野Ａ遺跡のちょうどまん中を抜けている。おそらくこの低地部に大きな流路があり、その周辺を中心として水田域が広がっていたものと思われる。また、千代デジロＡ遺跡の今回報告地点にはちょうど現集落を迂回するような溝も確認されており、現集落下にも遺跡が広がっている可能性が窺える（おそらく千代デジロＢ遺跡）。

注

(1) 遺跡の分布をみるとほぼこの微高地の流れに沿って分布している。

(2) 八里向山遺跡群の内容は小松市教育委員会樫田誠氏の教示による。

(3) 県内で行政発掘の試掘調査で岩宿時代の発見例はこの八里向山遺跡群と辰口町能美丘陵遺跡群しかない。土層の薄い本県にあってどの様な試掘調査の方法が望ましいのか、この八里遺跡群の試掘調査の方法が公表されば対比可能となり、今後の方法の参考となろう。また、県内で発掘された当該期の遺跡の内、発掘中に当該期の遺物を確認し、遺物の原位置の記録に及んだ調査はまだ５指にみたない。依然として調査後の遺物整理段階でそれが解るという状況が続いている。これでは石川県の得意とする編年研究すら行えず、石川県の当該期の研究は昭和23年の岩宿遺跡発見当時と変わらない状況にある。

(4) この時代は以降の時代とはタイムスケールが違いすぎ、同様な比較はできない。本来ならば縄文時代までで一区切りするべきであろうが、遺跡数が少ないことと、環境、地形変化が弥生時代中期まで影響が大と考えるためこのような区切り方とした。図幅から外れるが、『寺井町史』第三巻第11章「末寺」には和田山の裾野のなだらかな丘陵地が、大正時代初めの耕地整理で取り崩された際に、おびただしい貝や石製品が出土したという記載がある。また、同第１章「寺井」には和田山の周辺に沼地が広がっていたという記載がある。一方県営ほ場整備事業寺井南部地区の発掘調査では遺構は確認できないものの縄文時代の土器片が散発的に出土している。また、表土から遺構検出面までの土層が辰口西部地区などと比べて薄いという現象が認められる。これらからすると、当該期の地形、環境が大きく変形していることと、当該期に通例の遺跡環境がある程度存在した可能性が窺われる。

(5) 第２回村落遺跡研究会発表要旨（村落遺跡研究会は石川県内の有志が集まり村落に関するあらゆる現象に関して様々な視点から知見を深めることをめざして発足した会である。）を参考にした。

(6) ７世紀からの遺跡の動態を政治的な流れで理解しようと言う考えがある（北陸古代土器研究会1993）が、本地域の集落遺跡を見ていると、６世紀前後からの衰退や古代後半期の遺跡立地を考えると、それのみでは説明がつかないように思われる。水田耕作の可能な地域はこの時代に至っても限定されていたであろうし、また、かりに新技術や大量の労働力の投下によって新規開発が行われたとしても、それによってそれまでの集落が殆ど消え去るに近い形にまで衰退するとは考えにくい。一方、地域毎の変化からすると（特に古墳群の変化）からすると、全くの環境変化だけでは

説明しきれないが、変動の契機となった可能性は高いのではないだろうか。

(7) 「加賀における奈良・平安時代遺跡の動態」『佐々木ノテウラ遺跡』(北野1986) 等。

(8) 対象とした地域は第2図を見る限り梯川とその支流域で、地域的にも梯川河口を玄関口とするまとまりのある地域である。その意味では第3図の範囲はやや中途半端な設定であったかも知れない。特に水環境の様相に基づいた遺跡立地を考えねば実相には迫りづらいと思われる。また、この地域は発掘調査や研究報告が多くなされているが、その成果を生かせなかった。これについては筆者の能力のなさであり、お詫びすると共に後述される遺構や遺物の項や次年度以降刊行される関係報告書に委ねたいと思う。

引用・参考文献

垣内光次郎 『浄水寺墨書資料集』 石川県立埋蔵文化財センター 1989年

木立雅朗 『白江梯川遺跡』Ⅱ 石川県立埋蔵文化財センター 1989年

北野博司他 『佐々木ノテウラ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1986年

北野博司他 『辰口西部遺跡群』Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター 1988年

北野博司他 『千 代』 石川県立埋蔵文化財センター 1992年

小村茂・橋本澄夫『小松市古府しのまち遺跡』 石川県教育委員会 1974年

寺井町史編纂委員会 『寺井町史』第一巻 寺井町 1992年

寺井町史編纂委員会 『寺井町史』第三巻 寺井町 1994年

田嶋明人他 『漆町遺跡』Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター 1986年

田嶋明人他 『漆町遺跡』Ⅱ 石川県立埋蔵文化財センター 1988年

戸澗幹夫他 『小松市高堂遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1990年

那須孝悌他 「4 活動の舞台」『弥生文化の研究』1 1989年 雄山閣出版株式会社

紬野義夫他 『土地分類基本調査 鶴来』 石川県農林水産部耕地整備課 1987年

紬野義夫他 『土地分類基本調査 小松』 石川県農林水産部耕地整備課 1985年

紬野義夫・三浦静・藤井昭二 「特集 北陸の丘陵と平野」『URBAN KUBOTA』№31 株式会社クボタ 広告宣伝部 1992年

浜崎悟司他 『古府しのまち遺跡発掘調査報告書』 石川県立埋蔵文化財センター 1991年

北陸古代土器研究会 『北陸古代土器研究』第3号 1993年

三浦ゆかり他 『軽海西芳寺遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1994年

山本直人他 『佐々木アサバタケ遺跡』Ⅱ 石川県立埋蔵文化財センター 1988年

湯尻修平他 『白江梯川遺跡』Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター 1988年

米沢義光 『小松市古府遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1987年

千代デジロA遺跡調査風景

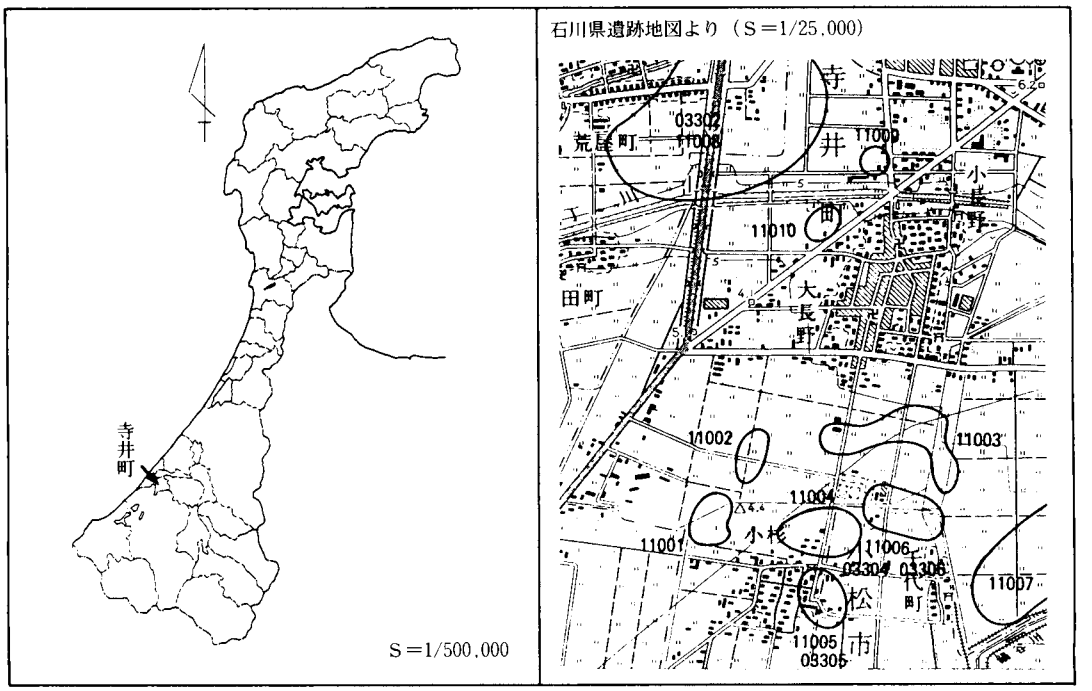
大長野A遺跡調査風景

Ⅱ　経緯と経過

1　発掘調査に至るまで

石川県農林水産部は耕地整備課を主管課として県下の水田のほ場整備事業を進めている。石川県立埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）は、県耕地整備課に対して次年度に実施予定の事業の内容照会を毎年行っており、関係する埋蔵文化財の保護について協議を重ねている。具体的には埋蔵文化財の有無を確認するために現地踏査、試掘等の方法で分布調査を行い、埋蔵文化財が分布する場合はその範囲、層位、地表からの深さ等、詳細な分布状況を把握する。そのデータをもとに、工事掘削が遺跡に影響を及ぼさない設計となるよう、施工担当の各土地改良事務所に指導を行う。設計・工法の変更が不可能で埋蔵文化財に影響が及ぶ箇所、例えば排水路設置箇所については緊急発掘調査を行い、記録保存措置を取る。石川県立埋蔵文化財センターは、県営ほ場整備事業の実施に際しては概ね以上の様に対応している。

寺井町小杉地内については、寺井南部地区小杉工区として面積5.4haを対象に平成３年度に計画・設計がなされ、平成４年度の工事着手、７年度の完了が予定された（第４図）この件については平成３年８月27日付けの照会に対して、県耕地整備課から８月29日付けで回答が得られている。県埋文センターは県耕地整備課と協議の後、施工予定区域内の埋蔵文化財の有無を確認するためには分布調査が必要であると判断し、９月26日付けでその旨回答した。分布調査に際しては施工担当の小松土地改良事務所と打ち合せの後、10月４日に実施した。その結果、埋蔵文化財は東部と北西部の２箇所で確認された。東部は千代デジロＡ遺跡（県遺跡№03004／11004）[1]である。千代デジロＡ遺跡は県営ほ場整備事業の小松北部地区千代工区の施工に係り発見された遺跡



第４図　事業対象区域図

であり、昭和59～61年度にかけて発掘調査が行われている[2]。分布調査ではその範囲がより西へ広がり寺井町小杉地内まで及んでいるものと推定された。北東部は大長野A遺跡（県遺跡No.11001）[1]である。大長野A遺跡はやはり県営ほ場整備事業寺井南部地区大長野工区の施工に係り発見された遺跡であり、平成3年度に発掘調査が行われている[3]。分布調査ではその範囲がより南へ広がっているものと推定された。県埋文センターは調査結果を11月21日付けで県耕地整備課へ回答し、施工担当の小松土地改良事務所と協議の結果、田面に関しては盛土工法で保存が可能、排水路設置箇所については発掘調査が必要と言う方針で合意した。

県耕地整備課は翌平成4年4月に排水路設置箇所の発掘調査を依頼し、県埋文センターは年度後半の調査実施を予定し、その旨回答、計画書を提出した。千代デジロA遺跡、大長野A遺跡の発掘調査は、以上の経緯で実施に至ったものである。

2　発掘調査

発掘調査には平成4年9月21日から着手した。着手前には小松土地改良事務所担当者と現地打ち合せを行ったが、その際に同事務所担当者から工事の工程上、千代デジロA遺跡の調査を大長野A遺跡より先に進めて欲しいとの要望を受けた。他、調査期間中は仮設事務所とするユニットハウスの設置場所、また調査に従事する作業員については小杉地内で募って確保することなどが決定した。調査は要望に従って千代デジロA遺跡から進め、一時期作業を並行させて大長野A遺跡へ移行した。

大長野A遺跡を調査中であった10月29日、調査区を並走する基幹水路の入れ替えを進めていた工事業者が重機で工事区域外の耕土をすきとり、今回の調査区外の遺跡に損傷を与える事態が発生した。工事は県耕地建設課所管の基幹排水対策事業（宗座地区）の施工であり、県埋文センターが前年度に把握していた工事内容は既設水路をそのまま使用し構造物のみを入れ替える作業というものであったため、工事に支障はないと判断し回答していた事業である。調査担当者は直ちに状況を施工業者に説明し、工事の中止を了解してもらった。工事が中断している間に小松土地改良事務所担当者と連絡を取り、説明を求めた。すきとり箇所は遺構面が露出し削られた遺構が確認され、周囲に遺物が散乱したため、できる限り採集に努めた。採集遺物は図化し、第22図に掲載している。翌30日調査担当者が現地で施工業者、土地改良担当者から経緯の説明を受けた。それによれば、工事そのものは県埋文センターが把握していた内容に変更はないが、遺跡の範囲内での施工であり、既設水路以外の掘削は許されない箇所であることの説明が不十分であったため、耕土を構造物の埋土・法土にしようと業者が現場で判断してしまったとのことであった。調査担当者は周囲の埋蔵文化財の状況を説明しその保護についての配慮を求めると同時に、今後この様なことが起こらないよう遺跡の周知化を徹底するよう念を押した。損傷箇所は注意深く埋め戻され、事態は一応収拾されたものと言える。

上記の様に調査に直接関係のないアクシデントがあったものの、調査そのものはほぼ予定通り進行し、11月17日に作業をすべて完了し、器材を撤収した。出土遺物は両遺跡合せてパンケースで27箱に及ぶ量であった。発掘調査作業には下記の方々の参加があった。

第５図　調査区の位置（Ｓ＝1/3,000）

石田智枝子、浮田正雄、北村栄子、北村繁、清水和夫、杉本きく、杉本広雄、杉本文四郎、杉本八重子、田上宗清、田中兀、田中庄蔵、田中公二、田中初枝、西田孝蔵（以上寺井町小杉）、竹田倫子（金沢市）、伊藤康子（野々市町）

3　屋内整理

遺物整理を中心とする整理作業については、調査年度の平成４年度とその翌年度の平成５年度は社団法人石川県埋蔵文化財保存協会（以下、保存協会）に委託して行い、平成６年度は県埋文センターの直営で行った。各年度の整理作業の内容については下記の通りである。

平成４年度　遺物洗浄作業

平成５年度　遺物記名・分類・接合・復元・実測・トレース作業、遺構図トレース作業
（保存協会　整理作業担当　小屋玲子、松田智恵子、川崎由紀子）

平成６年度　遺物写真撮影・写真図版作成、原稿執筆・編集、報告書印刷・刊行

また、遺跡名・遺構名のうちで、整理作業の過程で調査時のものを改称したものが生じている。千代デジロＡ遺跡の遺跡名、大長野Ａ遺跡の遺構名については次の通り改称している。

(旧)千代デジロＢ遺跡 → (新)千代デジロＡ遺跡。

(旧)５区大溝 → (新)１号大溝、(旧)６区大溝 → (新)２号大溝、(旧)11区大溝 → (新)３号大溝、(旧)４～５区落ち込み → (新)１号落ち込み、(旧)７区落ち込み → (新)２号落ち込み、(旧)14区竪穴状遺構 → (新)３号落ち込み、(旧)14区土器溜まり → (新)４号落ち込み

注

(1)　石川県教育委員会『石川県遺跡地図』1992年
(2)　石川県立埋蔵文化財センター『千代』1992年
(3)　石川県立埋蔵文化財センター『年報』第13号　1993年

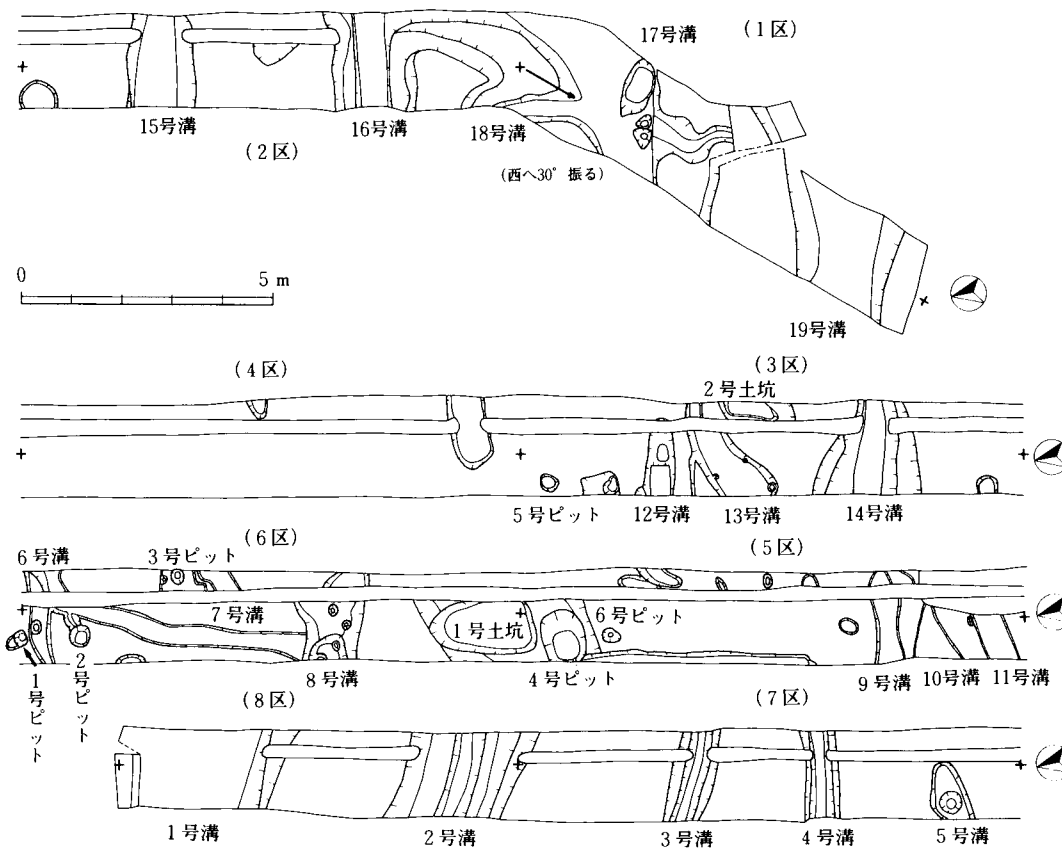
発掘調査参加者記念写真

Ⅲ　千代デジロＡ遺跡

1　概要

千代デジロＡ遺跡の発掘調査は排水路が設置される幅２ｍ、総延長約75ｍ、面積150㎡の調査区で行われた。水路のセンターを調査区の主軸とし、南から10ｍ毎に１～８区まで区割りを行った。ただし１区は７ｍ、８区は８ｍ程度の全長になる。調査区の主軸は１区ではＮ－40°－Ｅを指すが、２区以降は西へ30°振って曲がるためＮ－10°－Ｅを指す。層序は基本的に盛土・耕作土の直下が遺構面（地山）となる。遺物包含層は顕著でなく、遺構覆土の最上層に位置し遺構外まで広がりが確認される黒褐色粘質土や暗灰色粘質土が相当すると思われるが、その層厚は薄いうえ上面は凹凸が著しい。後世の削平や撹乱がかなり及んでいることが窺われる。撹乱の最たるものが調査区内に並行して東寄りに埋設され遺構面に食い込んだ塩化ビニル製の水道管である。これにより検出された遺構のうち東西方向に走る溝はのきなみ東部に撹乱を被っている。遺構面の標高は3.5ｍ前後を測る。

発掘調査によって検出された遺構は土坑２基、溝20条、遺物を出土したピット６穴である。その主体は平面的にも立体的にも溝である。溝の中には幅１ｍ以上、深さ50㎝以上に達するような



第６図　千代デジロＡ遺跡　発掘調査区全体図（Ｓ＝1/150）

規模の大きいものが見られた。本来は大溝として区別すべきかもしれないが、それが非常に多く確認されかつ他の溝に規格性が乏しかったこともあって、溝は一括して連番で扱うことにしたものである。出土遺物は土器が主で、他に石器、木製品、自然遺物があるが、全体的に少なく総量でもパンケース１箱程度である。遺物を多量に包含した遺構も存在しなかった。以下、遺構、遺物についての詳細を記す。

２　遺構

ａ）溝

１号溝（第７図）

８区北端に位置する。東西方向に走る溝のようであり、南側肩部と溝底を確認した。北岸の肩部は調査区外へ出るのであろう。幅は現状で3.5ｍ以上、深さは80㎝程度の大溝と思われる。南側肩部は２段掘り状で下段が鉛直に近く強く掘り込まれる。覆土は５層（層４～８）、うち層４には遺存する遺物包含層も含まれる。層７・８に有機物が多く含まれており、遺物が出土した。下位の層８は砂層であるが、有機質から分解したカルシウム成分が層下位を固めたようであり、非常に堅緻であった。出土遺物は弥生土器、石器の他、モモ種子、貝といった自然遺物も確認されている。貝はヤマトシジミと推定される。

２号溝（第７図）

８区南端に位置する。東西方向に走り、幅2.2～2.4ｍ、深さ60～70㎝を測る大溝。肩部は直線的な落ち込みを見せ、北岸側がより傾斜が強く掘り込まれる。さらに溝底には流向に沿って走る小溝状の浅い落ち込みが認められた。覆土は６層（層２～７）、うち層２には遺物包含層の残存部も含まれる。層４・５・７に有機物が多く含まれており、遺物も出土した。出土遺物は弥生土器、木片がある。

３号溝（第７図）

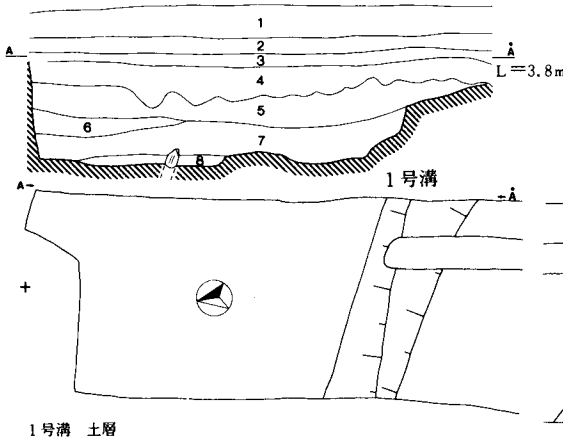
７区に位置する。東西方向に走り、東西端が少し幅が細まる様に見える。幅70～90㎝、深さ40㎝を測る。幅の割りに深くしっかりと掘り込まれた遺構という印象を得た。覆土は２層（層３・４）である。層２は遺物包含層、層５は地山への漸移層で当時の生活面を示すものかもしれない。遺物は覆土から出土しており、弥生土器、木片がある。

４号溝（第７図）

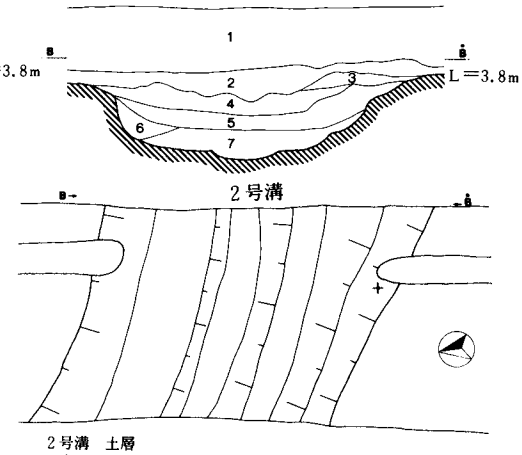
７区、３号溝の南2.5ｍに位置し、東西方向に並走する。ほぼＵ字形断面を呈するほどにしっかりと掘り込まれている遺構。幅60～68㎝、深さ35～40㎝を測る。覆土は２層（層３・４）である。層２は遺物包含層、層５は地山への漸移層で当時の生活面を示すかもしれない。遺物は覆土から出土しており、弥生土器とチャート質の剥片状の石がある。

５号溝

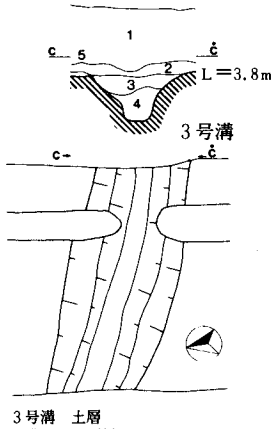
７区に位置し、東端は完結、西端は調査区外へ出る。平面形は不整で最大幅76㎝、深さは３～６㎝と浅い。溝内にはピットが確認され、径45㎝、溝底からの深さ14㎝を測る。遺物は覆土から弥生土器が出土している。

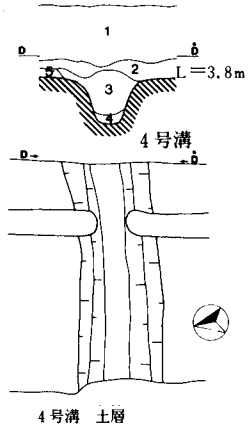


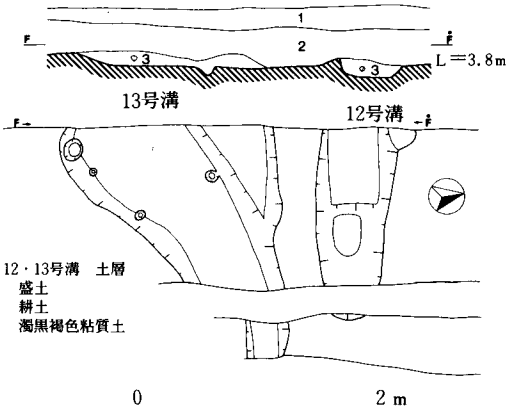
1号溝　土層
1　盛土
2　耕土
3　旧耕土
4　黒褐色粘質土
5　灰色粘質土
6　暗灰色粘質土
7　暗灰色粘質砂質土（有機物含む）
8　暗灰色砂（有機物含む）



2号溝　土層
1　盛土および耕土
2　黒褐色粘質土
3　明茶灰色粘質土
4　茶灰色粘質土（有機物含む）
5　灰色粘質土（有機物、炭化物含む）
6　濁灰色粘質土（白色粘土ブロック、灰色粘質土ブロック含む）
7　灰色粘質土



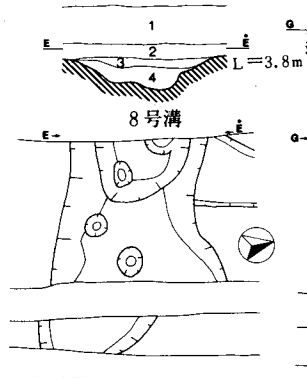


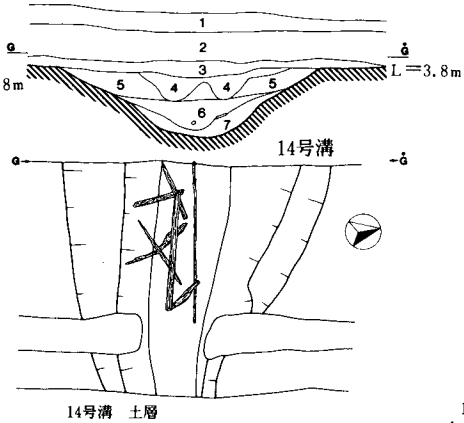


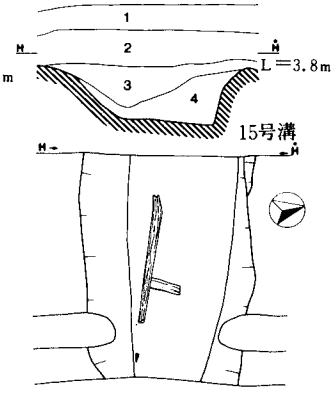
12・13号溝　土層
1　盛土
2　耕土
3　濁黒褐色粘質土

3号溝　土層
1　盛土および耕土
2　黒褐色粘質土
3　暗灰色粘質土
4　灰色粘質土（白色粘土ブロック含む）
5　濁ったベース質土

4号溝　土層
1　盛土および耕土
2　黒褐色粘質土
3　明灰色粘質土
4　灰色粘質土（白色粘土ブロック含む）
5　濁ったベース質土







8号溝　土層
1　盛土
2　耕土
3　黒褐色粘質土
4　濁暗灰色粘質土（白色粘土ブロック含む）

14号溝　土層
1　盛土
2　耕土
3　暗灰色粘質土
4　茶灰色粘質土（黒色土が帯状に混じる、撹乱か）
5　茶灰色粘質土
6　暗茶灰色粘砂（有機物を多量に含む）
7　濁灰色粘質土（白色粘土ブロックを含む）

15号溝　土層
1　盛土
2　耕土
3　暗茶灰色粘質土（撹乱土か）
4　濁暗灰色粘質土（白色粘土ブロック含む）

第７図　千代デジロＡ遺跡　遺構実測図(1)（Ｓ＝1/60）

6号溝

6区北端に位置する。東西に走り7号溝に切られるように見えるが、切り合い部分は撹乱されており不明確である。幅は一定でなく28～45cmを測り、西側が狭まる。深さは2～4cmと浅い。溝内には小ピットが確認され、溝底からの深さ14cmを測る。遺物は出土していない。

7号溝

6区に位置する。あまり直線的ではないが北東から南西方向に走り、北端は6号溝を切って東へ曲っていくようであり、南端は8号溝に切られる様である。幅35～55cm、深さは2～4cmときわめて浅い。遺物は出土していない。

8号溝（第7図）

6区に位置する。東西方向に走り7号溝を切るようである。幅は一定せず65cm～1.4m、深さ10～12cmを測る。東端は収束して行くようであるが撹乱により不明確である。溝底にはピットが複数穴確認されており、溝西部では、最大径75cm、溝底からの深さ8cmを測る不整形なピットを半掘した。遺物は覆土から弥生土器、すり石、炭化木片が出土した。

9号溝

5区に位置し、南に近接して10号溝・11号溝が並走する。東西方向に走り、南端はほぼ調査区内で完結する。幅は一定せず42～60cmを測り、深さは3～5cmと浅い。遺物は出土していない。

10号溝

5区に位置する。幅は20cm～1mを測り、極端に東側へ直線的に狭まる。深さは2cmときわめて浅い。遺物は出土していない。

11号溝

5区南端に位置し、北に近接して9号溝・10号溝が並走する。東西方向に直線的に走るようであるが、東部は撹乱を受け詳細は不明である。幅60cm、深さは西部で20cmを測る。遺物は、覆土から弥生土器と、石器の可能性がある花崗岩片が出土した。

12号溝（第7図）

3区に位置し、南に13号溝が近接する。東西方向に走り東端は完結する。幅60cm、深さ10cmを測る。東端部はピット状に掘り込まれており、深さは18cmを測る。遺物は出土していない。

13号溝（第7図）

3区で、北に12号溝、南東に2号土坑が近接し、挟まれる位置にある。東西にややカーブ気味に走り、幅が広がる西部の北側肩部には2段の落ち込みが認められる。幅は東端で30cm、西端では1mを越える。深さは10cmを測る。遺物は、覆土から弥生土器が出土している。

14号溝（第7図）

3区に位置する。東西方向に走り、幅は90cm～2.15m、深さは最大で50cmを測る。東から西へ向かって幅を広げるが、溝底では幅がほとんど変らず推移する。覆土は4層（層4～7）、うち層6が有機物を多く含んでおり、遺物を出土している。層3は遺物包含層の残存部か。出土遺物は弥生土器、土師器、木製品がある。木製品は数点の棒材であり、溝底から少し浮いた状態で不規則に重なって出土した。層位的には層6の下位で層7との境界近くに位置すると思われる。

15号溝（第７図）

２区に位置する。東西に走り幅1.08～1.36ｍ、深さは35㎝を測る。断面形は緩Ｕ字を呈し、北肩部がより立ち上がりが鋭い。溝底はほとんど凹凸がない。覆土は２層（層３・４）、層３は包含層と同質であるが、傾斜して南側へ深く堆積しており、他遺構では見られない状況である。遺物は覆土から弥生土器、木製品が出土した。木製品は棒材であり、溝底から少し浮いた状態で出土した。

16号溝（第８図）

２区に位置する。東西に走っており、東端では17号溝と重複し、切り合うかもしくは合流するようであるが、先後関係は層位からは不明である。肩部の掘り込みは深さ20㎝程度で緩傾斜に転じ、緩傾斜面をテラス状に利用してさらに一周り細い溝を掘削する。幅は上段で1.6～1.7ｍ、下段の溝は幅70～80㎝、深さは最大で50㎝を測る。覆土は５層（層３～７）、層７が有機物を多く含んでいる。そして層６の堆積後、北岸から層５、南岸から層４、また北岸から層３、と両側から交互に流れ込んでこの層序を形成したと思われる。遺物は主に層７から出土し、弥生土器、木製品、モモ類種子がある。木製品は棒材数点で、溝底から少し浮いた状態で出土した。

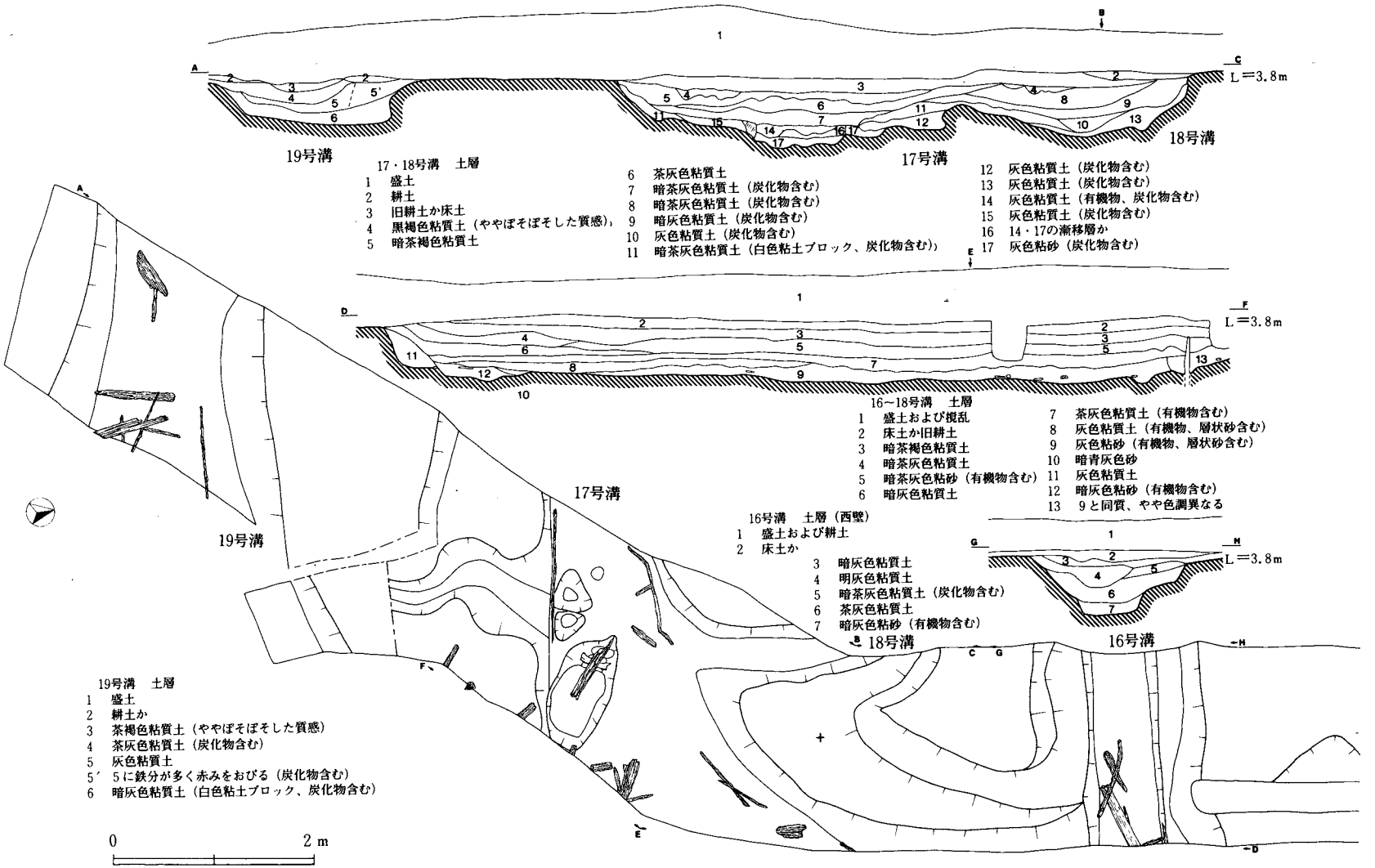
17号溝（第８図）

１区・２区の境界付近に位置する。16号溝・18号溝と切り合うかもしくは合流するようである。18号溝とは特に重複著しく、限られた調査区内では両溝ともに規模・形状を明らかにできなかった。東西方向に走るが、他の溝より北東・南西方向に流向を振ると思われる。不明確ながら最大幅は2.5ｍ、深さは溝内中央付近が最大となり60㎝を測る。溝底には18号溝と帰属を区別できないが、不整形なピットや浅い落ち込みが認められる。最大のピットは南壁に寄った位置で長径1.2ｍ、短径56㎝、深さ34㎝を測る。覆土は東壁では10層（土層図ＤＥＦ　層２～10・13)、うち層５・７・８・９に有機物、遺物が含まれる。層９の下位には、硬化して非常に堅緻になった砂層の薄い堆積が見られる。西壁の層序からは17号溝が18号溝に先行して掘削され（土層図ＡＢＣ　層14～17)、一時期併存して（層11)、18号溝が先に埋まり（層８・９)、17号溝が埋まる（層５・６）過程が示される。層５・６から須恵器片が出土しており、17号溝の埋没時期は古代と推定できる。16号溝との関係は不明である。遺物は18号溝と帰属を明確に区別できないが、弥生土器、須恵器、木製品、不明木片、モモ類種子がある。木製品とモモ類種子は全て覆土下層(層14～18)からの出土。モモ類種子は６点が出土。木製品は板材と棒材で、溝底から少し浮いた状態で出土した。

18号溝（第８図）

１区・２区の境界付近に位置する。17号溝との重複著しく規模・形状は不明確ながら、南北方向に走る溝と推定したい。幅は調査区西壁の断面で1.2ｍ前後を測定できる。深さは最大で56㎝を測る。溝底の浅い落ちこみは推定流向に沿っており、18号溝の掘り込みの痕跡かもしれない。覆土は西壁では８層（土層図ＡＢＣ　層２～４・８～11・13)、17号溝との関係は先にふれた通りであり、出土遺物および溝底の遺構がどちらに帰属するかは明確ではない。

19号溝（第８図）



第8図　千代デジロA遺跡　遺構実測図(2)（S＝1/60）

1区に位置し、東西方向に走る。東壁を一部拡張して伸びを確認すると東部は少し北へ振ることが確認された。幅1.75～2.15m、深さ40cmを測り、東側が幅が広がる。覆土は4層(層3～5)、層6の堆積後北岸から層5、南岸から層4が順に堆積し、層3でほぼ完全に埋没する。遺物は覆土から弥生土器、木製品が出土した。木製品は板材と棒材で、溝底から少し浮いて出土している。

20号溝

5区に位置し、現況での北端部は4号ピットを切っている。調査区西壁に沿って5m近く伸びる片側の肩部のみ確認したに過ぎず、規模・形状はわからない。深さは最大で29cmを測る。遺物は単層の覆土から弥生土器が出土している。

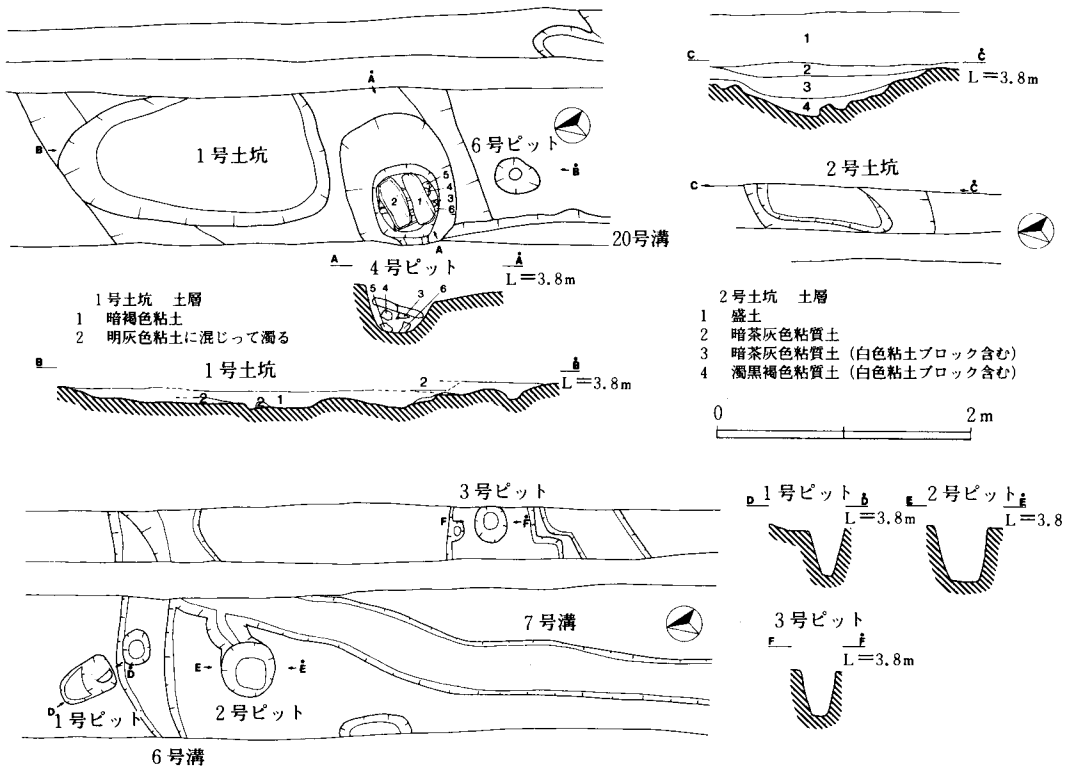
b）その他

1号土坑（第9図）

6区南端に位置する。浅い落ち込み内に4号ピットと並んで検出された。平面形は不整形で非常に浅い不明確な遺構である。遺構の東部は調査区外へ出ているが、現状で南北径2m、東西径1m、落ち込み底からの深さ10cm未満程度の規模を測る。覆土は暗灰色粘土で地山土と混じる。落ち込みの覆土から少量の弥生土器が出土している。

2号土坑（第9図）

3区、13号溝に隣接して位置する。遺構の東部は調査区外へ出、西部は撹乱を受けており全形は不明である。掘り込みは外側に浅い落ち込みを伴い、2段掘り状を呈する。南北径は1.4m、



第9図　千代デジロA遺跡　遺構実測図(3)（S＝1/60）

深さは30～40㎝を測り、底面は不整ながら土層堆積はレンズ状をなしている。覆土から少量の弥生土器が出土している。

ピット（第９図）

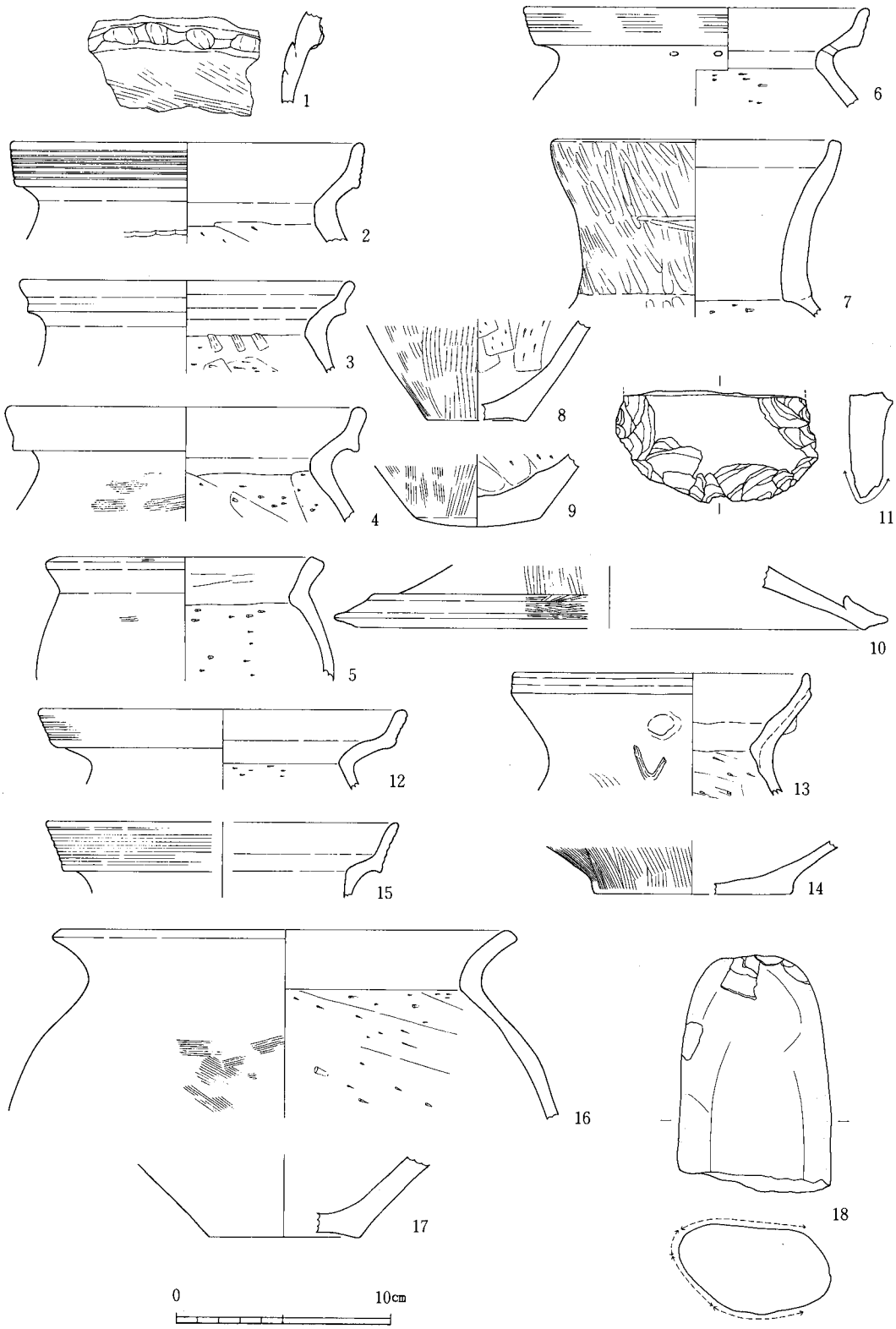
１～６号まで数えられ、いずれも弥生土器を出土している。３号ピットからは木片も出土した。１号ピットは６区・７区境、２号ピット・３号ピットは６区、４号ピット・６号ピットは５区北端、５号ピットは３区北端に位置する。１～３・５・６号ピットは径30～40㎝、深さ40㎝前後を測り柱穴の可能性がある。４号ピットは浅い落ち込み内に１号土坑とならんで検出された。南端を20号溝に切られている。平面形は隅丸方形状を呈し、東西径１ｍ、南北径85㎝を測り、さらにその内側に２段掘り状に同60㎝、50㎝を測る掘り込みをもつ。内側の掘り込みは落ち込み底から50㎝の深さをもちその中には２枚ずつ並べた長方形の木板が上下に３段積み重なった状態で検出された。下２段は長軸を南北方向に向け、最上段はそれらに直交させ東西方向に配しており井筒状に組合わせている。最上段の幅広い２枚の木板は、略台形の平面の張り出す側を交互に向い合わせて配して方形状に組み合わせて掘り込みをほぼ覆い、下２段に支えられる形になっている。この状況から判断して４号ピットは掘立柱建物の柱穴であり、木板は礎板となるものと考えられる。当然ながら掘立柱建物の一部を構成するはずであるが、限られた調査区内では柱列を見出せなかった。

３　遺物

以下で記述する土器は、特にことわりがない限り弥生土器である。石材については小島和夫氏に鑑定をお願いしている。

ａ）溝（第10図、第11図１～14）

第10図１～11は１号溝出土。１は外傾接合、外面条痕調整、内面はナデ調整で製作。外面は横位に凸帯を貼り付けてその上に指頭押圧を加える。他の出土土器よりも古く、弥生前期頃の壷形土器か。２～５は甕形土器。２は擬凹線がある有段口縁。擬凹線帯の上部は最終調整時に少し潰れている。外面下端に横位の沈線の引き・止めが見られ、肩部装飾の一部と推定される。煤は外面全域で油膜状、内面ではきわめて薄いが一面を浅黒く染める。３・４は有段口縁を呈し口縁帯は無文。外面全域に煤が付着し、４では油膜化している。３の内面は頸部屈曲部に縦位のヘラ状の調整痕がほぼ一定の間隔をおいて見られる。５はくの字口縁、端部は斜めに面を取る。小型のわりに厚手、胴部外面の調整はヨコハケのちナデ、但しハケ痕はほとんど残さない。６・７は壷形土器で、６は短頸の有段口縁。やや摩滅し、擬凹線の有無は不明確。頸部には２孔一対の紐穴を穿つ。煤は外面は口縁帯下端以下、内面は薄く全面に付着し、確実に煮沸に用いている。７は長頸で、筒状に緩やかに開く口縁。外面のミガキは幅４㎜程のやや太目の単位か。８・９は平底の底部で、８は甕、９は壷のものであろう。８の外面は全面煤が付着する。10は高杯形土器でおそらく無段の脚部。端部に凸帯を貼り付けその上下端を反り返り気味に整えている。外面の凸帯の辺りに黒斑がある。11は打製石斧の刃部で、重量は145.3ｇを測る。石材は流紋岩もしくは石英安山岩である。



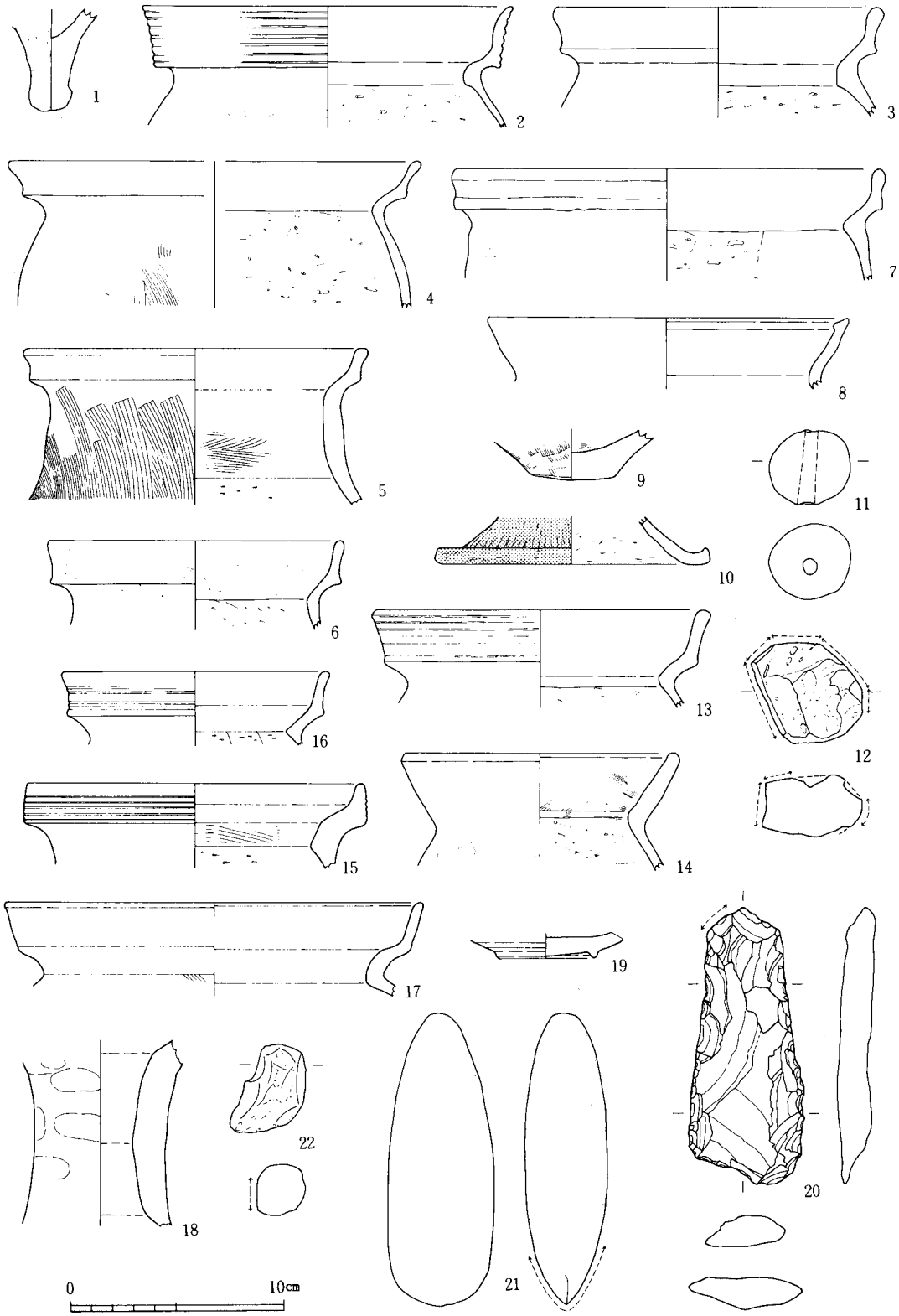
第10図　千代デジロＡ遺跡　出土遺物実測図(1)（Ｓ＝1/3）

12～14は２号溝出土。12は甕形土器で、擬凹線がある有段口縁。13は壷形土器、広口で口縁端部を細く立ち上げて幅の狭い縁帯を形成する。頸部外面に「Ｖ」字状の記号文、その上に不整形な突起が見られる。突起の内面には相対するように小隆起が見られるが、その単位や機能については不明である。14は大径の底部で、底面は平坦。おそらくは壷形土器。15は３号溝出土の甕形土器で、擬凹線がある有段口縁。全体的に摩滅している。16～18は８号溝出土。16は甕形土器、端部に斜めに面を取るくの字口縁。胴部内面を削るわりに厚手で、煤の付着は口縁部外面のみである。17は底部で16と同一個体と思われる。内面は粗いケズリのちナデ調整。18は打つ・擦る機能を持つ石器と思われる。平面の一方が平滑で、側面には複数の叩打が認められる。重量は525.3ｇを測る。石材は珪質の流紋岩で、非常に硬い。第11図１は14号溝出土。中実のまま棒状に伸びる底部で、摩滅しているがおそらくは尖底の鉢形土器と思われる。２・３は15号溝出土の甕形土器で、有段口縁。２は口縁帯に擬凹線があるもので、内面を外反気味に形成し端部を尖らせる。この部分のみ煤が付着する。３は口縁帯無文のもの。少し摩滅している。４は16号溝出土の甕形土器、有段口縁は無文。５・６は17号溝出土の壷形土器。５はその拡張部出土、長頸で有段口縁。口縁下部から頸部の外面調整はハケであるが、２㎝前後の原体幅が明確である。６は覆土上層出土、短頸・広口で有段口縁。口縁部内外面ミガキの精製品。７～12は17・18号溝の覆土下層出土。７は甕形土器。有段口縁を呈し、口縁帯は無文、その下端は調整工具が当たったのか波打つ部分がある。煤は外面は一面に、内面は口縁帯のみにうっすらと付着する。８は土師器、布留系甕形土器の口縁部。外面は一面に油膜状に、内面は一部に煤が付着する。９は底部、おそらく壷形土器。10は脚部、小径なため、高杯形土器と思われる。ラッパ状に開き端部は水平に接地して伸び面を取る。赤彩の範囲は外面から内面の接地面まで及ぶ。11は土錘。不整球形で、黒斑がある。重量は48.4ｇである。12は軽石。風化侵食で不整な面と、擦る行為による平滑な面がある。重量は32.6ｇを測る。13・14は19号溝出土。13は甕形土器。有段口縁、口縁帯に擬凹線をもつ。外面は煤が一面に付着する。14は壷形土器。広口でくの字口縁。調整はハケを基調とする。

ｂ）その他（第11図15～、第12図）

第11図15は２号土坑出土。甕形土器で、断面三角形の上端を伸ばした厚手の口縁。口縁帯は擬凹線をもつ。16・17は１号土坑と４号ピットがおさまる落ち込みの覆土から出土した。17は甕形土器、無文の有段口縁で、外面に煤が少し付く。18～20は包含層及び表土出土。18は中空の筒状の土器で、おそらくは器台の支柱部であろう。19は陶器の有台皿の底部で、径4.4㎝を測る。外面に左周りのロクロヘラケズリを行い、端に面を持つ高台を削り出したものであろう。この破片については無釉である。17世紀前半頃の越中瀬戸と推定され、現在確認される類例の中では南限の資料となろう[1]。20は打製石斧。基部幅・刃部幅の差が小さいばち型の形態で、刃部は欠けて不揃いである。重量は134.9ｇを測る。石材は流紋岩あるいは珪質の凝灰岩でやや砂っぽい質感を持つ。21・22は調査区周辺からの表面採集。21は磨製石斧で、いわゆる太形蛤刃石斧である。表面はやや風化気味だが、欠損はほとんどない優品である。全長14.1㎝、全幅5.1㎝、全厚４㎝、重量399.9ｇを測る。石材は安山岩。22は軽石、擦った面が一部にある。重量は5.6ｇを測る。

第12図１～６は４号ピット出土の３段組の礎板。１は上段の南、２は上段の北、３は中段の東、



第11図　千代デジロＡ遺跡　出土遺物実測図(2)（Ｓ＝1/3）

第12図　千代デジロＡ遺跡　出土遺物実測図(3)（Ｓ＝1/4）

4は中段の西、5は下段の東、6は下段の西に組まれていたものである。いずれも縦木取りの板目材。全長は36～40cmを測り、ほぼ等しい。1・2は他品より幅広の平面形略台形状の板で、柱がのせられてもっとも荷重がかかっていたと思われる材中央部の張り出し側に褶曲が認められる。最大幅は14cm前後である。同様に3～6も材中央部が褶曲する。最大幅は8cm前後を測る。樹種は鑑定しておらず、不明である。

この他珠洲焼、加賀焼の破片が包含層及び表土から、珠洲焼破片が表面採集で得られているが図化できなかった。

第2表　千代デジロA遺跡　出土遺物一覧

挿図No.	出土遺構	実測No.	備考
第10図1	1号溝覆土	B2	弥生土器甕
2	1号溝覆土	C262	弥生土器甕
3	1号溝覆土	C265	弥生土器甕
4	1号溝覆土	C264	弥生土器甕
5	1号溝覆土	C260	弥生土器甕
6	1号溝覆土	C261	弥生土器壷
7	1号溝覆土	C259	弥生土器壷
8	1号溝覆土	C266	弥生土器底部
9	1号溝覆土	C263	弥生土器底部
10	1号溝覆土	C268	弥生土器脚部
11	1号溝覆土	石18	石器（打製石斧）
12	2号溝最下層砂層	C250	弥生土器甕
13	2号溝覆土・16号溝	C254	弥生土器壷
14	2号溝	C251	弥生土器壷底部
15	3号溝覆土	C256	弥生土器甕
16	8号溝覆土	C269	土師器甕
17	8号溝覆土	C269	弥生土器底部
18	8号溝覆土	石15	石
第11図1	14号溝覆土	C279	弥生土器底部
2	15号溝覆土	C253	弥生土器甕
3	15号溝覆土	C252	弥生土器甕
4	16号溝覆土	C255	弥生土器甕
5	17号溝拡張区	C275	弥生土器壷
6	17号溝上層	C278	弥生土器壷
7	17・18号溝下層	C274	弥生土器甕
8	17・18号溝下層	C273	土師器甕
9	17・18号溝下層	C276	弥生土器底部
10	17・18号溝下層	C258	弥生土器脚部
11	17・18号溝下層	C267	土錘
12	17・18号溝下層	石19	軽石
13	19号溝覆土	C280	弥生土器甕
14	19号溝覆土	C277	弥生土器壷
15	2号土坑	C257	弥生土器甕
16	5・6区間落ちこみ	C272	弥生土器甕
17	5・6区間落ちこみ	C271	弥生土器甕
18	表土	C270	弥生土器器台
19	表土・包含層	D4	越中瀬戸焼皿
20	表土・包含層	石14	石器（打製石斧）
21	表採	石16	石器（磨製石斧）
22	表採（地点不明）	石17	軽石
第12図1	4号ピット	木20	礎板
2	4号ピット	木21	礎板
3	4号ピット	木22	礎板
4	4号ピット	木23	礎板
5	4号ピット	木24	礎板
6	4号ピット	木25	礎板

4　小結

千代デジロA遺跡の発掘調査で確認された遺構の主体は、前述したように溝である。確認された20本の溝は、①幅1m・深さ50cmを越えるような大溝、②幅は50cm～1mの間におさまるが深いしっかりした掘り込みを持つ溝、③幅が不整で浅い溝、に大別される。①は1・2・14～19号溝等が相当する。砂層の堆積があることや、木製品・自然遺物がよく残っていたことからある程度水流があったことが想定される。②は3・4号溝が相当するのみで、その性格については俄かに判断できない。③はその他の溝であるが、後世の削平を受けて往時の姿をとどめないものが多いと思われる。

その他に注目すべき遺構として、井桁状に組まれた礎板を持つ4号ピットがある。礎板は3段組みで上段が幅広で遺構プランをほぼ覆い、それを支える中・下2段が細いものと使い分けられている。さらに上段の2枚、中・下2段の4枚はそれぞれ形と大きさが非常に似通ったものである。本遺跡周辺での類例は、同じ千代デジロA遺跡の昭和60年度調査区Fトレンチ(2)や小松市漆町遺跡若杉ヤシキワリ地区(3)などにあるが、4号ピットとは構造的にやや異なるものである。千代デジロA遺跡FトレンチPit－16例や漆町遺跡例は「キ」字状の2段組みである。千代デジロA遺跡FトレンチPit－27例は「十」字状の2段組みである。また木材は、千代デジロA遺跡例は細いもの太いものを規則性なく組合わせて用いている。漆町遺跡例は角材を用いている。各例は、調査区の制約などの事情から柱列を成さず、建物規模等は不明である。特に漆町遺跡例は非常に大きなプランをもっており、柱穴かどうかも不明である。柱穴とするならば枕木的な性

格が考えられている。時期は確証となる出土遺物に乏しいが、千代デジロA遺跡Fトレンチ例は4号ピットとほぼ同時期、漆町遺跡若杉ヤシキワリ地区例はより後出的な可能性があるものと思われる。建築部材について、通常は建物廃棄後は転用されるか腐朽するかで、遺存するものは少ない。しかし礎板や枕木は一般的に抜き取りがきわめて少なく、またその性質上、後世の削平等が及ぶことも少ないため、地勢によっては非常に遺存が良い場合がある。ここで紹介した各例がそれぞれ遺存が良いという前提で比較するならば、4号ピット例は他例と比べて構造的な違いを無視できないが、非常に丁寧で入念な設置が窺われよう。

遺構の分布は4区が希薄で、1～3区及び8区といった調査区の南北端には①の溝が並走し、両区に挟まれる5～7区に②・③の溝やピット(柱穴)が位置している。また5・6区の遺構の多くは後世の削平を受けているが、もともと他区よりも少し高まっていた旧地形ゆえ顕著に削平されたものと思われる。以上のような遺構配置と微地形を併せて推し量ると、調査区両側の大溝が遺跡の縁辺に位置し、その間は柱穴や小溝が存在する集落域の一部と解釈することも可能であろう。

遺物は各遺構から少量ずつ出土した弥生土器が主体である。弥生土器の大半は後期後半に位置付けて大過ないが、但し1号溝出土の第10図1などは前期に、15号溝出土の第11図2などは後期終末に、17・18号溝出土の第11図8など土師器で古墳時代前期に位置付けられる土器もごく少量ある。遺構の分布と対応させるなら、弥生前期については別地点からの流れ込みで付近に集落が存在する可能性を、弥生後期後半はほとんどの遺構の掘削と集落域の確実な形成を、後期終末と古墳前期については断続的ながら遺跡の存続を示すと解釈できる。①の大溝の類については、17号溝のように浅い窪みとなって奈良・平安時代まで残っていたものがあると思われる。

千代デジロA遺跡については、かつて昭和60年度に県埋文センターにより遺跡の東部に発掘調査の手が及び、その際にも今回同様多くの溝が確認されている。しかしその時期は今回の調査で希薄である弥生時代後期終末と古墳時代前期を中心とするものであった。この様相差からは弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡の存続期間の中で集落域の中心を遷移させている遺跡の姿が窺われる。前回確認された多くの溝については「環濠」的に集落を取り巻くように走るであろうことについてはすでに指摘される通りであり(4)、今回確認された①の溝も同様であろう。しかしその全形と詳しい性格については、限定された調査区内では明らかにしえない。この時期の梯川中流域には実に多くの集落が形成され隣立、消長するが、当遺跡を始めとして完全な調査例に乏しくその実像は鮮明とはいえない。将来的には資料を蓄積しつつ各集落間の比較・検討を進めて行く中で溝の性格も含めた諸問題が徐々に明らかになって行くものと思われるが、今回の調査成果がその際に基礎データとなれば幸いである。

注

(1) 宮田進一氏（富山県埋蔵文化財センター）の教示を得ている。

(2) 石川県立埋蔵文化財センター『千代』1992年

(3) 石川県立埋蔵文化財センター『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』1985年

(4) 『千代』頁17　での湯尻修平・柿田祐司氏の指摘。

Ⅳ　大長野Ａ遺跡

1　概要

大長野Ａ遺跡の発掘調査は排水路が設置される幅２ｍ、総延長約180ｍ、面積360㎡の調査区で行われた。水路のセンターを調査区の主軸とし、東から10ｍ毎に１～18区まで区割りを行った。17・18区のみ８ｍ程度の全長になる。調査区の主軸は１・２区はＮ－75°－Ｗを指すが、３～17区では30°北へ振りＮ－65°－Ｅ、18区ではさらに南へ120°振って曲るためＮ－５°－Ｗを指す。層序は基本的に耕作土の直下が遺構面（地山）となる。遺構面の標高は3.3ｍ前後を測る。地山は７区～13区までが黄褐色細砂、それ以外では灰褐色粘質土となる。包含層は耕作による撹乱が著しく、耕土・床土と混合され、正常な状態ではほとんど認められない。遺構・遺構面もまた耕作による撹乱が及んでおり、畑の畝溝の痕跡が見られる。また16～17区には東西に走る旧河道が位置しており、もともと存在した遺構を切っている可能性がある。18区には直角に曲る旧用水と思われる撹乱が見られた。以上の様に遺跡はかなり損傷を受けた状態にあると言える。

発掘調査によって検出された遺構は土坑４基、溝10条、大溝３条、落ち込み４基、ピット24穴である。ピットは遺物を出土したものあるいは形状から柱穴の可能性があるものを数えた。溝のうち、幅３ｍ以上に達するような大規模のものについては、大溝として他と明確に区別した。落ち込みは、規模が大きいわりにプランが不明確で浅い遺構を指した。遺物は、遺構・包含層ともに非常に多く含まれており、弥生土器が主で、他に土師器、石器、木製品、自然遺物等がある。総量はパンケース26箱である。以下、遺構、遺物についての詳細を記す。

2　遺構

a）溝

１号溝（第15図）

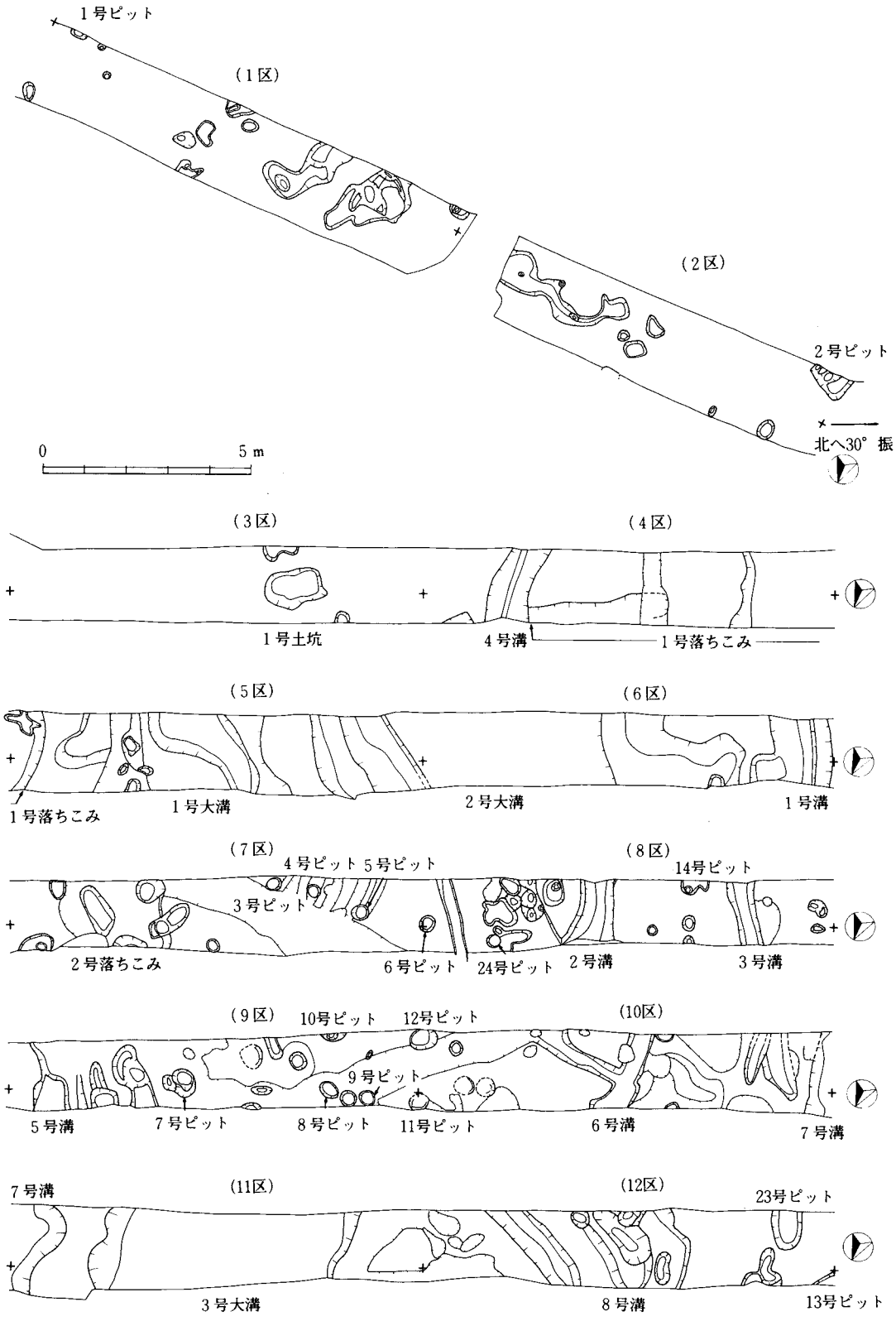
６区西端に位置する。南東・北西方向に振って走る。東側肩部の北が少し膨らむが撹乱によるものか。幅1.4ｍ、深さ55㎝を測る。断面は緩Ｖ字形を呈するしっかりした掘り込みで、底幅は狭い。覆土は３層（層２～４）、うち層２・３が有機物層である。遺物は最上位の層２から多量の弥生土器が出土し、特に北部に集中した。ある程度溝が埋った後で集中的に投棄されたものと思われる。他、木片も出土している。大溝を除くと最も出土遺物の多かった遺構である。

２号溝（第15図）

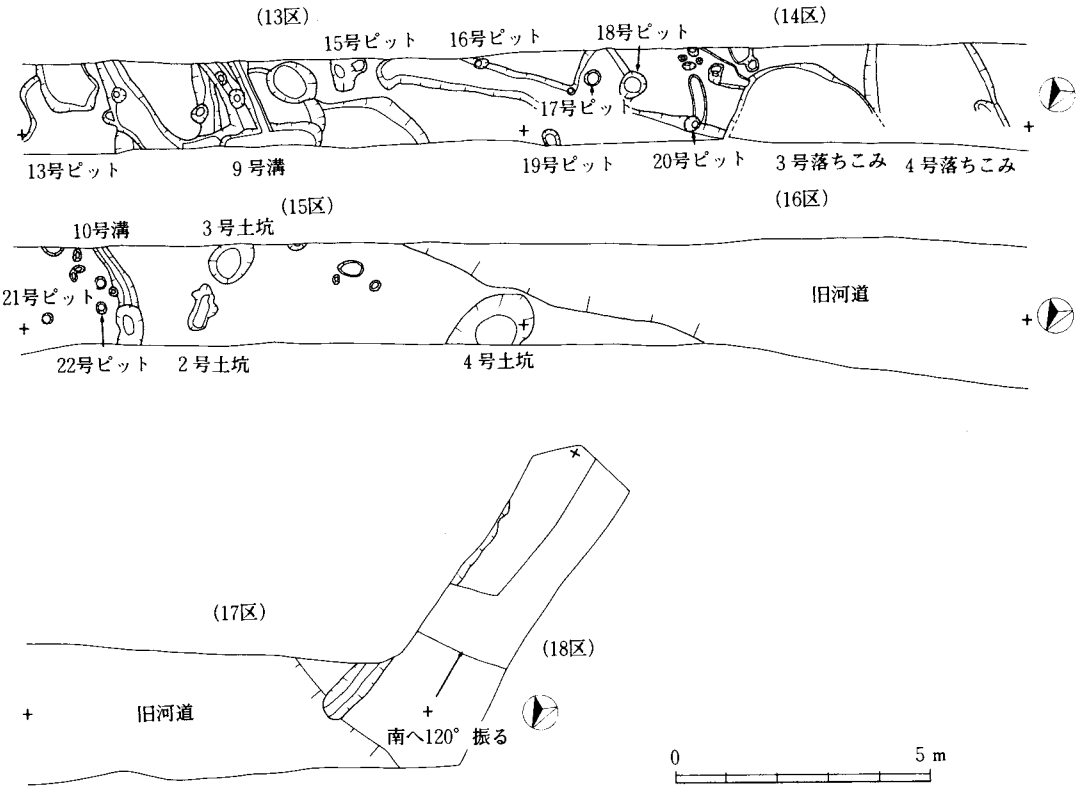
８区に位置する。ほぼ南北に走る。肩部は西側が直線的なのに対し東側は反り返りややカーブする。幅は78～128㎝、北部が広がる。断面は不整ながらＵ字形を呈し、掘り込みはしっかりしている。覆土は２層（層２・３）、両層とも有機物層で、層間にはきわめて薄い炭層が形成される。遺物は上位の層２から多くの弥生土器が出土した。ある程度溝が埋った後で集中的に投棄されたものと思われる。また出土土器には高杯・器台の脚が特に多く含まれていた印象がある。

３号溝（第15図）

８区に位置する。南東・北西に振って走る。溝の東西の遺構面は西側が10㎝ほど高く、また西



第13図　大長野A遺跡　発掘調査区全体図(1)（S＝1/150）



第14図　大長野A遺跡　発掘調査区全体図(2)（S＝1/150）

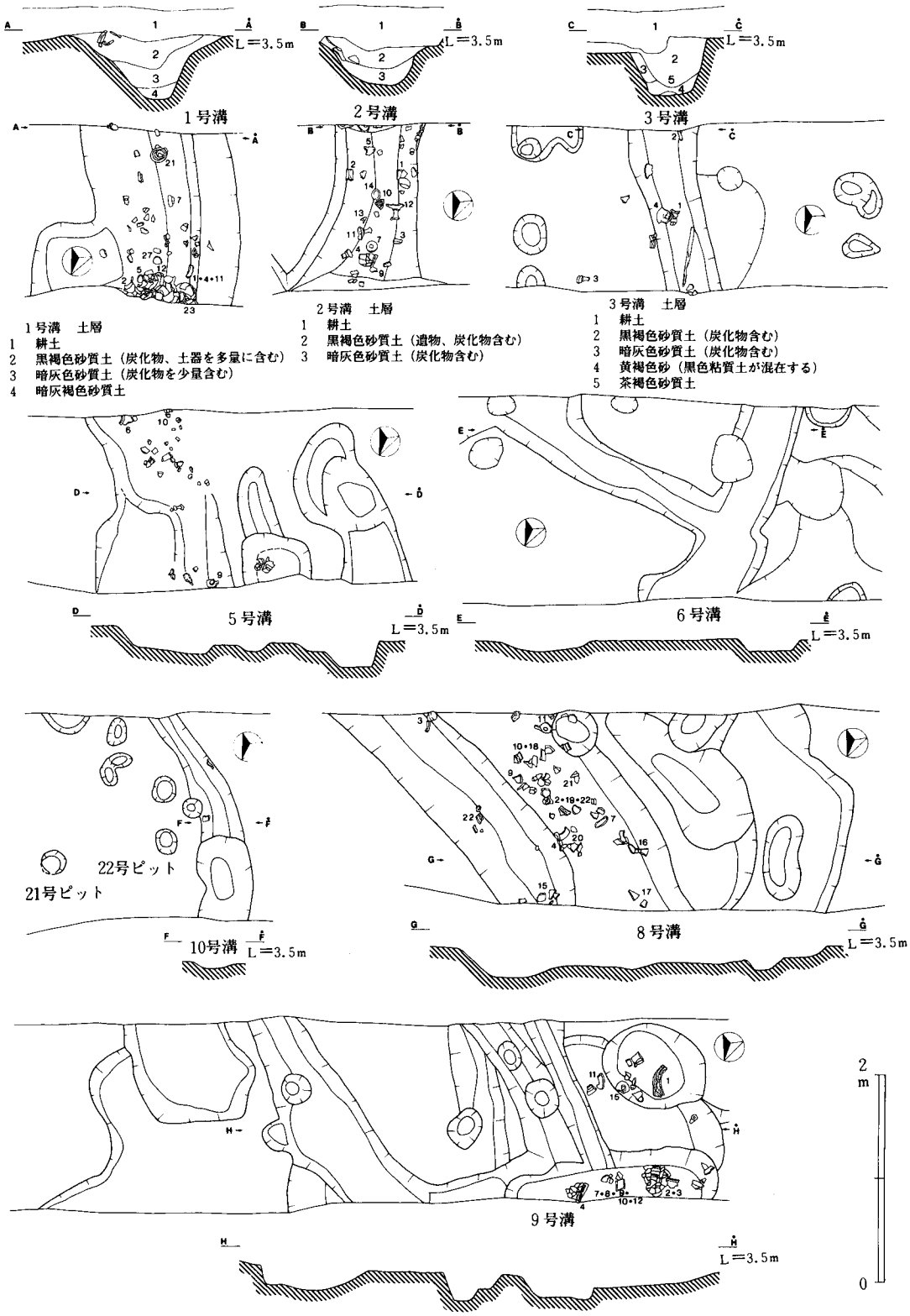
側肩部には浅い凹みが接する。どちらも後世の削平・撹乱による変化であろう。断面はU字形を呈しほぼ鉛直にしっかりと掘り込まれており、底面は平坦である。幅は50～70cmを測り、南側が広い。深さは西側肩部から測って48cmである。覆土は4層（層2～5）、上位の層2・3が有機物層で弥生土器、木片を出土したが、出土状況は散発的でまとまりがない印象である。

4号溝（第18図）

4区に位置する。ほぼ南北に走るがやや西寄りにカーブぎみで、北西端は1号落ち込みに切られる。断面は緩V字形を呈するしっかりした掘り込みで底面を狭くする。幅は86cm～1mで北側が広く、深さは42cmを測る。覆土は4層（層2～5）、うち上位の層2・3が有機物層で、遺物は層3に含まれる。出土遺物は弥生土器・土師器であり、ある程度溝が埋った後で集中的に投棄されたものと思われるが、さらにその後1号落ち込みと切り合い一部混同したものと思われる。出土遺物は図化には及ばなかったが、破片の大きなものは多くが弥生土器であり、また1号落ち込みの出土遺物の主体が土師器であることから、4号溝の掘削、機能時期は弥生後期と推定できる。

5号溝（第15図）

9区に位置する。東側肩部は不整ながら確認できる、西側ははっきりしない。7号ピットの手



第15図　大長野Ａ遺跡　遺構実測図(1)（Ｓ＝1/60）

前までの幅３ｍほどを一応の範囲とした。範囲内では溝、土坑が錯綜しているようだがその全形や相互の関係、性格は不明。深さは20cmほど、さらに遺構内に確認された土坑は24.5cm、溝は10cm程度の深さである。覆土は単層、黒褐色砂質土である。遺物は弥生土器が遺構底から浮いてかつまとまりなく散乱した状況で出土した。また鉄石英剥片も出土している。

６号溝（第15図）

10区に位置する。南北に走る溝に東西に走る溝が取り付き平面形Ｔ字状を呈する。切り合うものか連結するものかは不明。幅は南北溝で57cm、東西溝で40cm、深さは平均して10cm前後である。覆土は単層、黒褐色砂質土である。遺物は弥生土器が小量出土した。

７号溝（第18図）

10区と11区の境に位置する。南北に走るようであるが、非常に不整形である。幅は103～173cm、深さは25～37cmで北側が深い。覆土は６層（層５～10）であるが、層５は床土的、主には同質の層６・10で層８を挟み込む。不整な形状・層位は著しい撹乱による部分が多い。遺物は弥生土器、石器、木片が出土した。

８号溝（第15図）

12区に位置する。南東・北西に振って走る。東側肩部は直線的に走るが、西側は不整になる。遺構内は主に東半が溝、西半が土坑で占められ、錯綜する。その全形や相互の関係、性格は不明。幅は3.5ｍ前後、深さは東半で20～30cm、西半で10cmを測る。西半の土坑は10～20cm程度の深さである。覆土は単層、黒褐色砂質土である。遺物は弥生土器と石器で、東半の溝内に集中して多く見られ、溝底から少し浮いて出土した。他、軽石と須恵器が１点ずつある。

９号溝（第15図）

13区に位置する。不明確な13号ピットの西、複数の遺構が錯綜する幅４ｍ強の範囲を捉えたもの。南東・北西に振って走る東半の溝と、並走する複数の西半の溝、複数の土坑が主な構成である。その全形や相互の関係、性格は不明。東半の溝は幅47～82cm、北側が広く、深さは25cmである。西半の複数の溝は全体で幅40～70cm、深さ25cmを測る。複数の土坑の深さは概ね20～25cmの範囲である。覆土は単層、黒褐色砂質土である。遺物は弥生土器が土坑に入り込んで多く出土した。他、縄文土器、緑色凝灰岩剥片が１点ずつある。

10号溝（第15図）

15区に位置する。東に21・22号ピットを含む小径で浅いピット群がある。南東・北西に振って走るが東へカーブぎみ。幅は25～50cm、深さ５～11cmを測り、北部が広く、深い。北部は土坑状に落ち込んでおり、他遺構と切り合っているのかもしれない。覆土は単層、暗灰色強粘質土である。遺物は少量の弥生土器が出土した。

ｂ）大溝

１号大溝（第16図）

５区に位置する。南北に走るようであるが、幅が広いため不明確になる。東岸の遺構面は撹乱によるものか、やや凹凸がある。幅は3.7～4.8ｍと北側が広く、深さは37cmを測る。遺構内は幅不定の溝が南東・北西に走る。東側肩部は部分的に掘り込まれ、複数のピットが確認される。溝

は幅70㎝～1.8ｍと南側が広い。深さは遺構底から12㎝ほどである。ピットの深さは最大のもので40㎝を測る。覆土は６層（層６～11)、層２～５は包含層か２次堆積層が撹乱を受けたものか。上位の層６は弥生土器の他、古墳前期の土師器を含む。その下位の層７・８はほぼ無遺物層、最下位の層９～11は弥生土器、木製品が多く含まれる。特に、遺構内のピットの下方から溝の東側にかけて多く出土した弥生土器・木製品については、層９の堆積時流れ込んだものと思われる。以上の層序から見て、遺構は弥生後期に掘削され、洪水砂（層９）である程度埋って機能を失い凹みとなり、古墳前期以降完全に埋没した（層６～８）と推定される。本遺構の性格については水路的なものを想定したい。

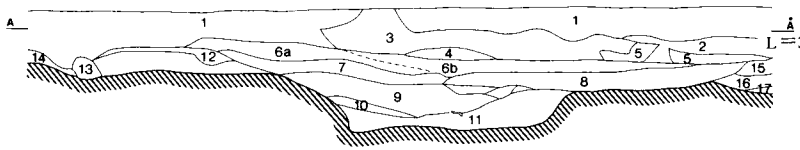
２号大溝（第16図）

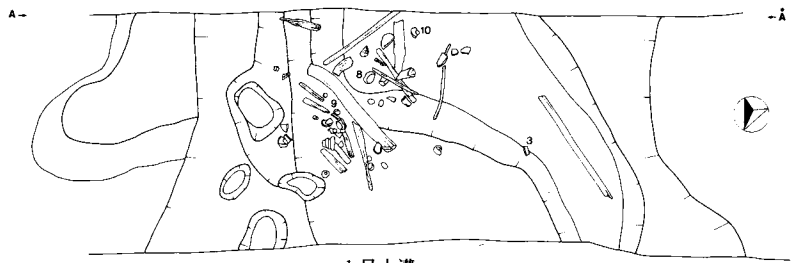
５区から６区にかけて位置する。南東・北西に振って走るようであるが、幅が広いため不明確になる。肩部は傾斜が緩く、特に西側では非常に緩やかな立ち上がりであり鋭い掘り込みは認められない。幅は8.5～10ｍ、北西側で不規則に幅を広げる。遺構内はほぼ平坦であるが東側が若干深く、最大の深さ65㎝を測る。覆土は７層（層７～13)、層２～６は溝が機能を停止してからの堆積である。層３は古墳時代前期の土師器を含む。層２・５・６は１号大溝の層15～17と同一であり１号大溝の最終埋土である層６～８の下位に位置する。層７はほぼ無遺物層、層８以下は弥生土器・木製品を含む。特に遺構東側端に寄って多く出土した弥生土器・木製品については層10の堆積時流れ込んだものであろう。東西岸の遺構面の標高を比較すると、東側、１号大溝との間が40㎝近く低く、かつその上位には西岸では見られない灰色土の堆積がある。層序や西側肩部の緩やかで不規則な立ち上がりから考えると、遺構周辺がもともと鞍部状の低湿な地形であった可能性が高い。その範囲は層序と遺構面の標高から、１号大溝も含んでその東岸までと想定される。低地形を利用して掘削された溝が遺構東側の層10・11の部分であり、本遺構の本流で、水路的な部分であろう。層13などは低地への流土と見なされる。

以上の事項から、本遺構の形成から埋没の過程と近接する１号大溝との関係については、①低湿地に１号大溝（層９～11)・２号大溝（層10・11）の本流が掘削されてから洪水砂で埋り機能を失うまでの段階、②浅い凹みとなった２号大溝がさらに埋没する段階（層２～７)、③浅い凹みとなった１号大溝がさらに埋没（層６～８）し、低地がほぼ完全に埋る段階、と３時期に整理できる。その時期については各層の出土遺物から①は弥生後期末、②は古墳前期、③は古墳前期～古代が想定される。両大溝の掘削の先後については不明である。

３号大溝（第17図）

11区に位置する。不整ながら急傾斜で深く落ち込む肩部が確認され、ほぼ南北に走るものと思われる。幅は６ｍを測る。深さは1.5ｍまで確認したが、それ以下は粗砂層が崩壊する可能性があったため調査を断念した。覆土は７層（層11～17)、層17の層厚とそれ以下の層位については不明である。層３については須恵器を含み、撹乱された包含層であろう。層11～16は弥生土器、土師器を含み、溝がほぼ完全に埋った時期を示す。その下位で特に厚く堆積する層17は粗砂層であり、かなりの水流があって運ばれ堆積する土質と言える。層中からは多くの弥生土器の他、土師器、縄文土器、木片、種子が出土した。本遺構については層17の状況から全域にかなりの水流



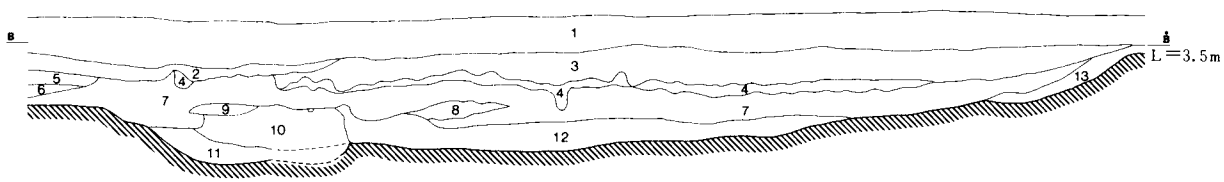


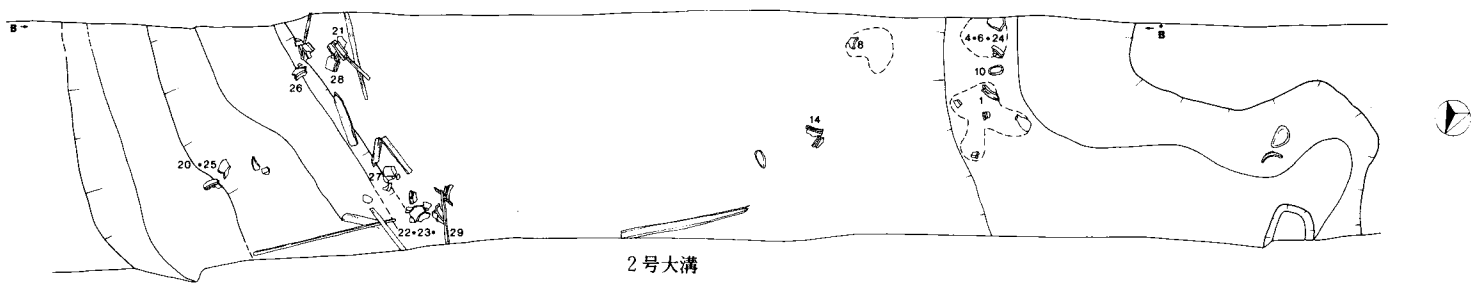
1号大溝

1号大溝　土層

1　耕土（茶色粘質土、粘土ブロック含む）
2　黒褐色粘質土（やや濁る）
3　黒褐色粘質土（粘土ブロック等含む、二次的な堆積）
4　灰褐色粘質土
5　濁灰褐色粘土
6 a　灰褐色粘質土
6 b　6 a に灰色細砂、黄色粗砂多く混じる
7　暗灰褐色粘土（ほぼ無遺物層）
8　青灰色粘土（不規則に砂層混じる）
9　青灰色細砂（粗砂、炭粒含む）
10　青灰色粘砂
11　暗青灰色粘土（炭、土器、木含む）
12　黒褐色粘質土（黄色粘土混じる、包含層の残か）
13　暗褐色粘土
14　暗灰色粘土
15　灰褐色粘土
16　ベースと同質土
17　灰褐色粘砂

0　2 m



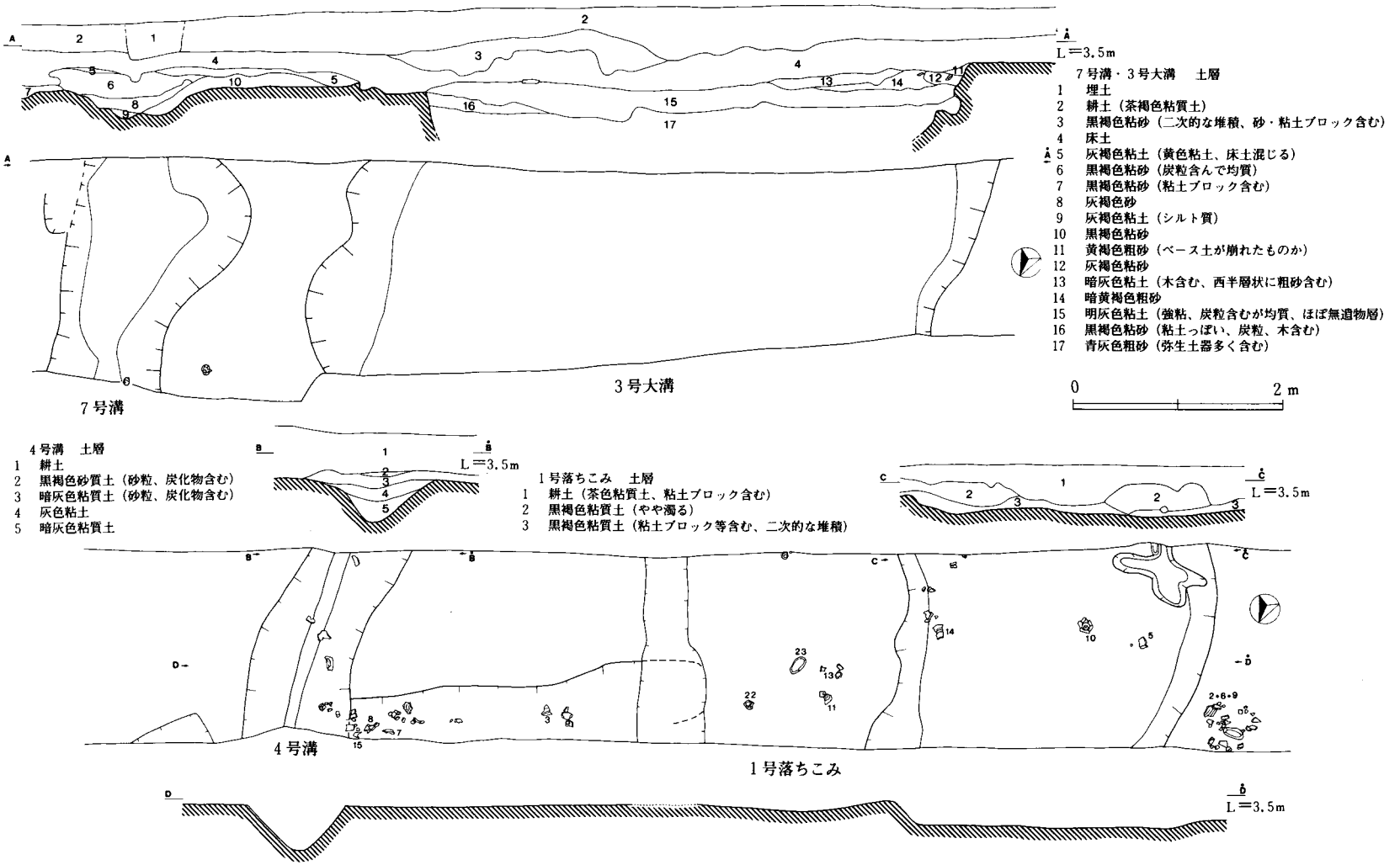


2号大溝

2号大溝　土層

1　耕土・床土（茶色粘質土）
2　黒褐色粘質土（やや濁る）
3　黒褐色粘質土（土器多く含む）
4　灰褐色粘質土
5　灰褐色粘土
6　ベースと同質土
7　灰褐色粘土（ほぼ無遺物層）
8　黒褐色粘質土（灰色粘土ブロック含む）
9　青灰色粗砂
10　暗灰褐色砂質土（木・土器・炭含む）
11　青灰色細砂
12　灰褐色粘土（やや上層より暗い、弱粘性）
13　黒褐色砂質土（黄砂混じる）

第16図　大長野Ａ遺跡　遺構実測図(2)（Ｓ＝1/60）



第17図　大長野A遺跡　遺構実測図(3)（S＝1/60）

が存在したことが推測され、その規模から河道的な性格が考えられる。1号大溝、2号大溝とはやや異趣な遺構である。ただし、水路・水源的な活用も併せてなされていることも当然想定しておかねばならないであろう。

c）落ち込み

1号落ち込み（第17図）

4区～5区端にかけて位置する。1号大溝と4号溝の間で錯綜する浅い溝状遺構を捉えたもの。西部の遺構は南北に走る溝状で幅2.9m、深さは14～23cmで底面は凹凸がある。東部の遺構は北に向かって落ち込む肩部しか確認できず、東は4号溝と重なり、西は浅く不明確になり形状はよくわからない。深さは10cm程度である。遺物は落ち込み内とその周辺から不規則に散乱ぎみに出土しており、土師器が主体で、弥生土器も混在する。4号溝の遺物を含む覆土が本遺構覆土と同レベルにあり、形成時そしてそれ以降の時期の撹乱で、一部混同したものと思われる。

2号落ち込み（第18図）

7区に位置する。幅2.5m前後の溝状遺構が多くのピットと重複しているものを捉えた。緩やかにすり鉢状に落ち込んで行き、深さは最大で20cmを測る。重複するピットの深さは概ね30～50cmである。大型のピットは深いが掘り込みが不明確で覆土の締まりも悪く、木痕と思われる。覆土は単層、黒褐色砂質土で、遺物は弥生土器、石器が出土した。

3号落ち込み（第37図）

14区に位置する。すぐ西に4号落ち込みが位置し切り合うが、先後関係は不明である。現況では遺構の隅円形のコーナー部分のみが確認されており、全形は不明である。少なくとも径2mは超える規模の遺構であろう。肩部は鋭く掘り込まれており、鉛直に近い立ち上がりを示す。深さは13～20cm、底面は比較的平坦で凹凸が少ない。覆土は2層、上位は黒褐色強粘質土、下位は層厚が薄く上位層に白色粘土が混じる土質である。本遺構については竪穴建物跡となる可能性を考えていたが、柱穴・壁溝も認められず、その確証が得られなかったため、性格不明の落ち込みとした。遺物は弥生土器の他、縄文土器が少量出土している。

4号落ち込み（第37図）

14区西端に位置する。すぐ東に3号落ち込みが位置し切り合うが、先後関係は不明である。幅2.5mほどの範囲で、深さは6～11cm、東西両方向からの緩やかな落ち込みである。覆土は1層、白色粘土をブロック状に含む黒褐色強粘質土である。遺物は主に西半部から弥生土器が出土した。

d）土坑・ピット

1号土坑（第38図）

3区に位置する。東西方向に長いが不整形なプランで、長径1.5m、短径90cm前後を測る。深さは10cm程度で浅く、底面には凹凸が見られる。覆土は単層、黒褐色粘質土である。遺物は土器小破片が出土したのみである。

2号土坑（第38図）

15区に位置し、南に3号土坑が近接する。南北方向に長いが不整形なプランで、長径97cm、短径37～48cmを測る。底面はすり鉢状に落ち込んでおり、深さは最大で22cmを測る。覆土は単層、

暗灰色強粘質土である。遺物は弥生土器が出土している。

3号土坑（第38図）

15区に位置し、北に2号土坑が近接する。南端が調査区外へ出るが楕円形のプランと思われる。現状で最大径85cm、深さは8cm程度と浅い遺構で、底面は平坦である。覆土は単層、黒褐色強粘質土である。遺物は弥生土器が出土している。

4号土坑（第38図）

15区西端に位置する。北部が調査区外へ出ており全形は捉えられない。現状で長径は1.6m以上、短径は1.2mを測る。底面は凹凸があり、深さは最大で32cmを測る。覆土は黒褐色強粘質土で、その下位には炭層の薄い堆積が認められる。遺物は、弥生土器が底面から少し浮いて出土している。

ピット（第18図）

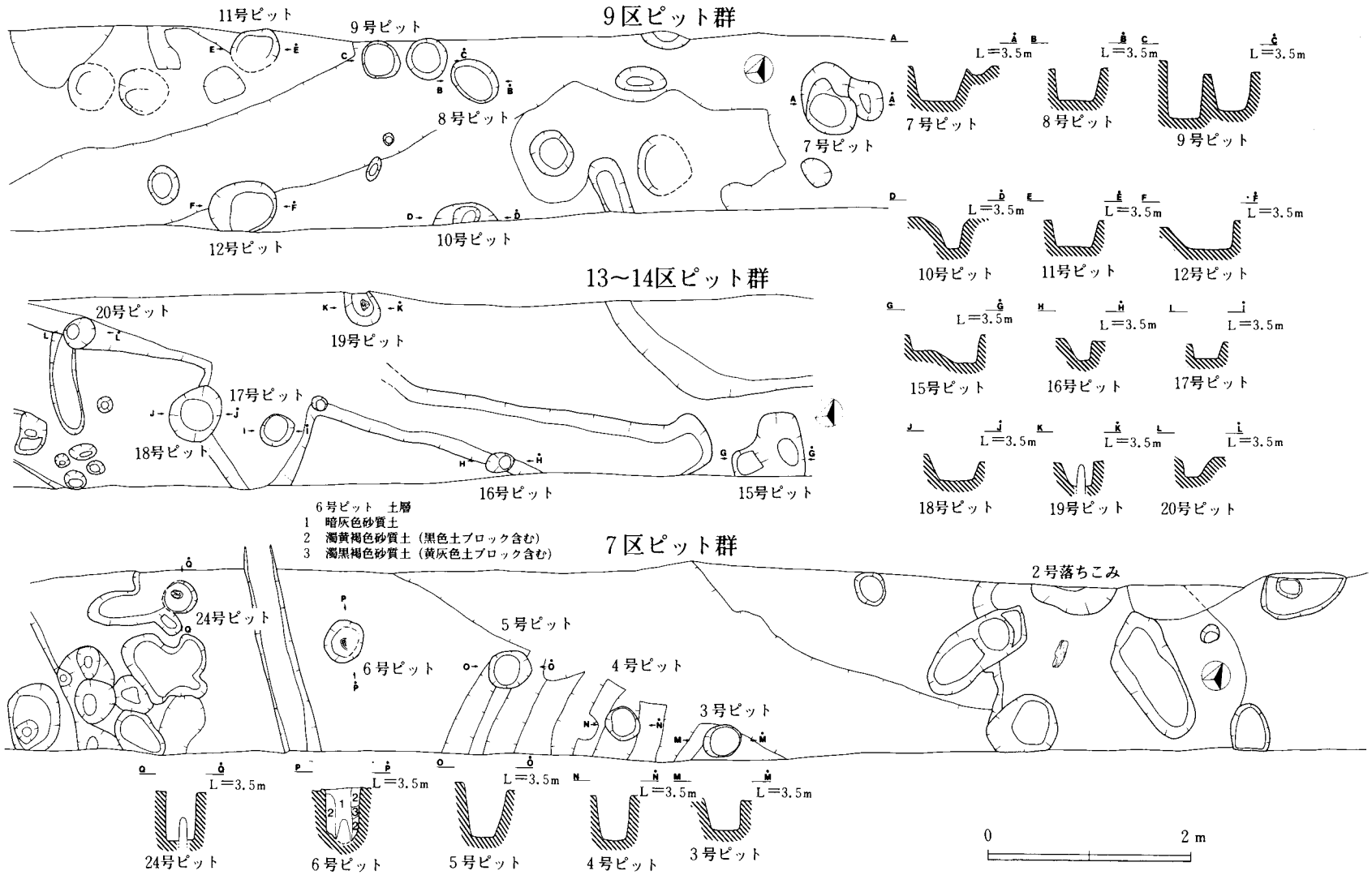
24穴数えられる。1号ピットは1区、2号ピットは2・3区境、3～5号ピットは7区、6号は7・8区境、14・24号ピットは8区、7～10号ピットは9区、11・12号ピットは9・10区境、23号ピットは12区、13・15・16号ピットは13区、17～20号ピットは14区、21・22号ピットは15区にそれぞれ位置する。2～5・7～14・16～18・20～23号ピットで弥生土器が少量ずつ出土しており、遺物の主体を占める。その他の遺物については、5号ピットから木片が、11号ピットからは緑色凝灰岩剥片が出土している。ピットは7区、9区、13～14区に顕著な集中が見られ、それぞれピット群として認識する事が可能である。遺構面は全体的に削平・撹乱を受けており、ピットの規模・形状の現況はその影響を多少なりと受けている姿と考えねばならないだろう。

7区ピット群には3～6・24号ピットが相当する。東西方向に一線に並び、少しばらつくが柱列状の配置をなす。ピットは概ね円形で規模は径40cm前後、深さ31～54cmの範囲にある。3～5号ピットが位置する浅い溝は耕作時の畝溝であり、遺構に伴うものではない。6・24号ピットには木柱が遺存しており、確実に柱穴となる。6号ピットの覆土は3層（層1～3）、層1は柱部に相当し、層2・3は柱の埋土である。

9区ピット群には7～12号ピットが相当する。8号、10号、11号、12号で掘立柱建物の四隅的な配置を取る。7号はやや離れた位置に、9号は柱列からややそれた位置にある。ピットは概ね円形で規模は径40～70cm、深さ27～42cmとばらつきがある。ピットの覆土は周辺の遺構と同質である。7区ピット群同様こちらも遺構面の撹乱が激しい。

13～14区ピット群には15～20号ピットが相当する。規則性を見出しがたい配置で、18～20号あるいは17・19・20号が掘立柱建物の一角となる可能性が指摘できるに過ぎない。ピットは15号が径58cm、18号が径70cmと大きめである他は径30cm前後に落ち着き、深さは概ね20cm前後で浅めである。ピットの覆土は周辺の遺構と変りない。19号ピットには木柱が遺存していた。

他、1・2号ピットはどちらも深さ10cm程度で、浅い。13号ピットは9号溝に近接する不整形で浅い落ち込みを、23号ピットは不明確な溝状の遺構を数えたもの。21号ピットは径24cm、深さ16cm、22号ピットは径24cm、深さ22cmと似通った小さめの規模で、10号溝の東に隣接している。



第18図　大長野Ａ遺跡　遺構実測図(4)（Ｓ＝1/60）

3　遺物

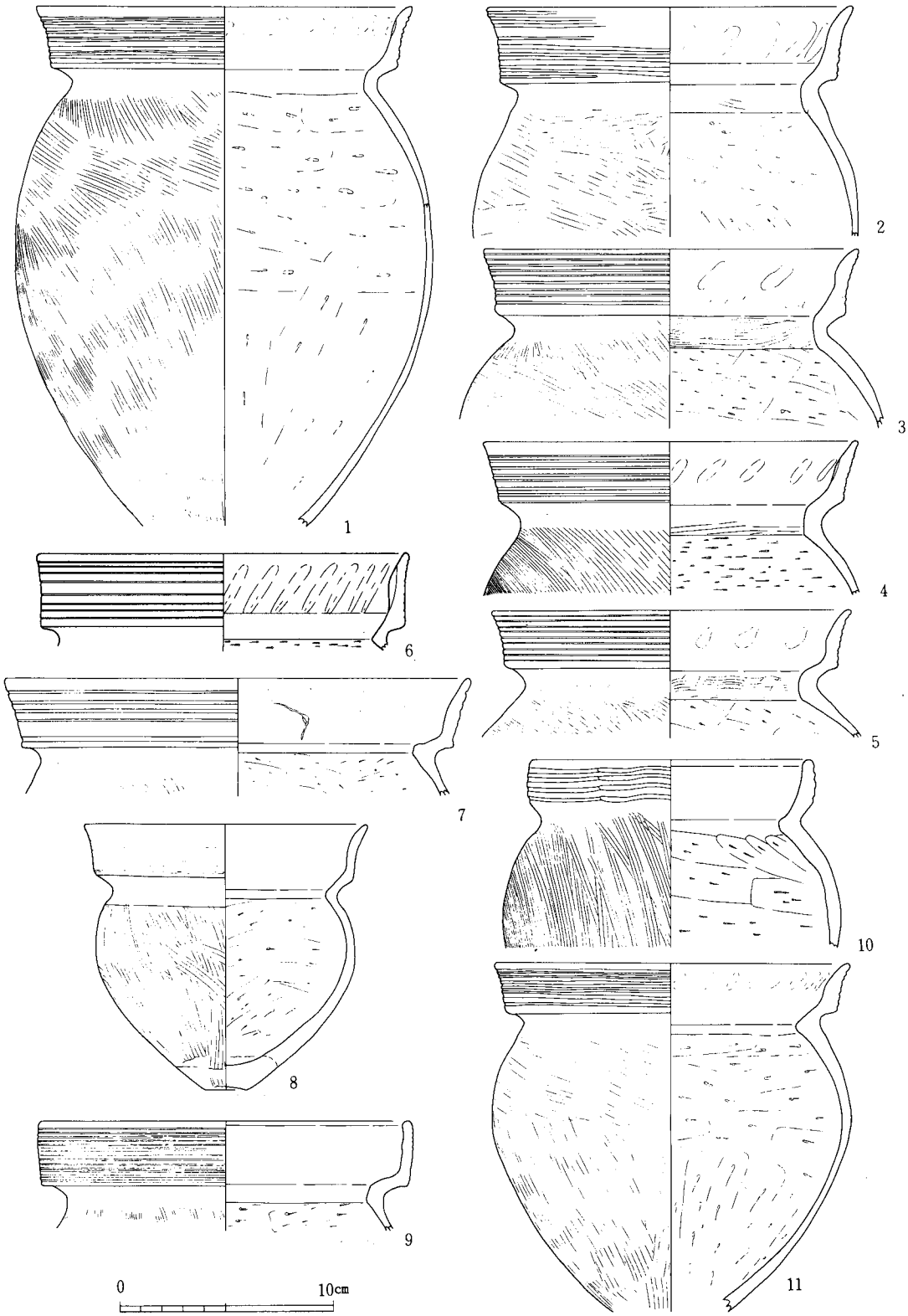
以下、記述する遺物は特にことわりがない限り弥生土器である。石材については小島和夫氏に鑑定をお願いしている。

a）溝出土遺物

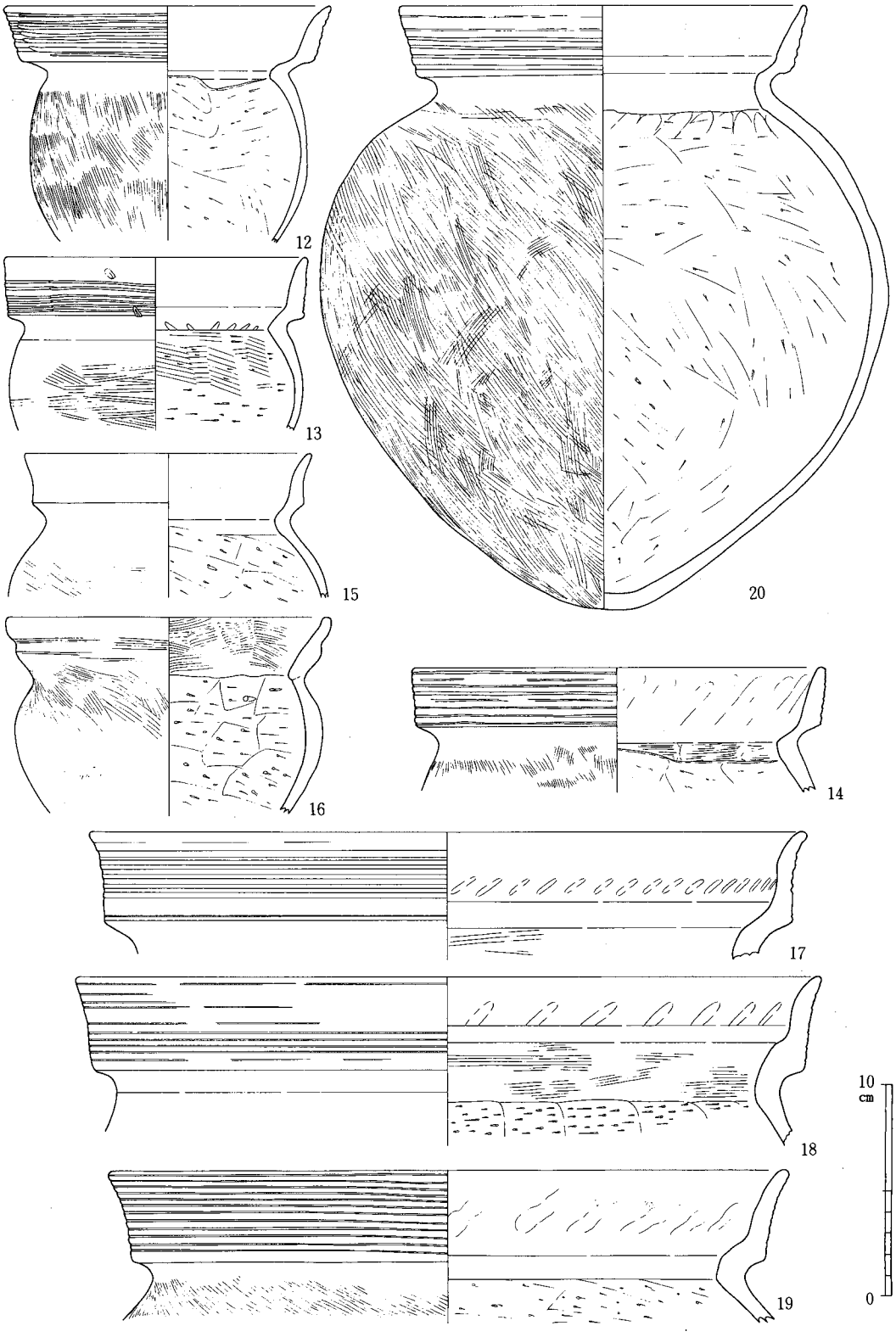
1号溝出土遺物（第19図～第21図）

第19図1～11、第20図12～19はすべて甕形土器である。16以外は全て有段口縁で、さらにそのうち8・15以外は全て口縁帯に擬凹線をもっている。第19図1～5は頸部は内面が筒状で、口縁は外反ぎみで内面に指頭圧痕を巡らせ先端を細く尖らせるタイプ。筒状の頸部内面にはヨコハケを残す傾向がある。一般に言われる「月影甕」である。1は図上復元ながら、口縁帯から胴部下位までの形態が明らかなもの。底部は、接合しないが小径の平底があり、同一個体の可能性が高い。胴部は口径以上に張り出し、外面は肩部に強いナナメハケが入り、内面は徹底したヘラケズリで非常に器壁を薄くする。また煤が、外面は厚く全面に、内面は薄く胴部下位のみにという特徴的な付き方を示す。2・3も1の様に肩部に明瞭なナナメハケを入れている。2は擬凹線がより太く、引き方もやや雑。3は逆に擬凹線が細かく、内面の指頭圧痕の間隔は広い。4はやや身が小振りで指頭圧痕はとても浅いものになる。5は器面が風化ぎみ、擬凹線は非常に細い。6は頸部内面が筒状にならず、くの字に強く屈曲するタイプ。口縁帯内面の指頭圧痕は細長く、間隔が狭く非常に密に巡る。7はやや身が大振りで、擬凹線の間隔が広い口縁帯の内面にはヨコナデ時に流れて寄った粘土の盛り上がりが見られる。8はほぼ完形品で、口径13.4㎝、器高12.8㎝、底径1.9㎝を測り、最大径は口径に持つ。小型甕の部類に入るが、そのわりに口縁は長く伸び外反度が強い。外面は厚く煤が付き、擬凹線の有無は不明。内面は指頭圧痕が見られない。9～11、第20図12～14は「月影甕」の本流からは外れる形態。9は口縁帯がほぼ直立し、その端部は内面へ少し丸め返されている。10は口縁帯が短く内湾ぎみで、端部は丸くおさめる。擬凹線は太く、条数も4条と少ない。頸部内面の屈曲ラインは不揃いで上下し、筒状になるところとならないところがある。11は図上復元品。口縁帯は短いが、それ以外の形態では前記した「月影甕」に共通する特徴を備える。12・13は11に似るが、やや小振りで、口縁形態がより直線的なもの。12は条が細いハケ調整と、それに比して太く粗く引かれる擬凹線を持つ。13は内面胴部上位にヘラケズリ後ハケ調整を加えていると思われる。胴部外面のハケよりもかなり条が太く別原体と思われる。おそらく調整目的も異なり、ケズリに等しいものかあるいは仕上げ的なものかもしれない。14はやや大振り、頸部内面の屈曲ラインが不揃いで、上下する。15は無文の口縁帯を持つもの。口縁帯は外反し先端が尖る。少し摩滅している。16はくの字口縁を原型に、その端部に強いヨコナデを行って稜と面を作り、有段口縁に似せたと思われる。口縁内面がヨコハケ、胴部はケズリを行うが器壁は余り薄くなっていないなど、技法的にも「月影甕」とは異なる。17～19はいずれも口径30㎝以上に復元されるもので、他の品より圧倒的に容量が大きいと思われ、大甕の部類に入る。

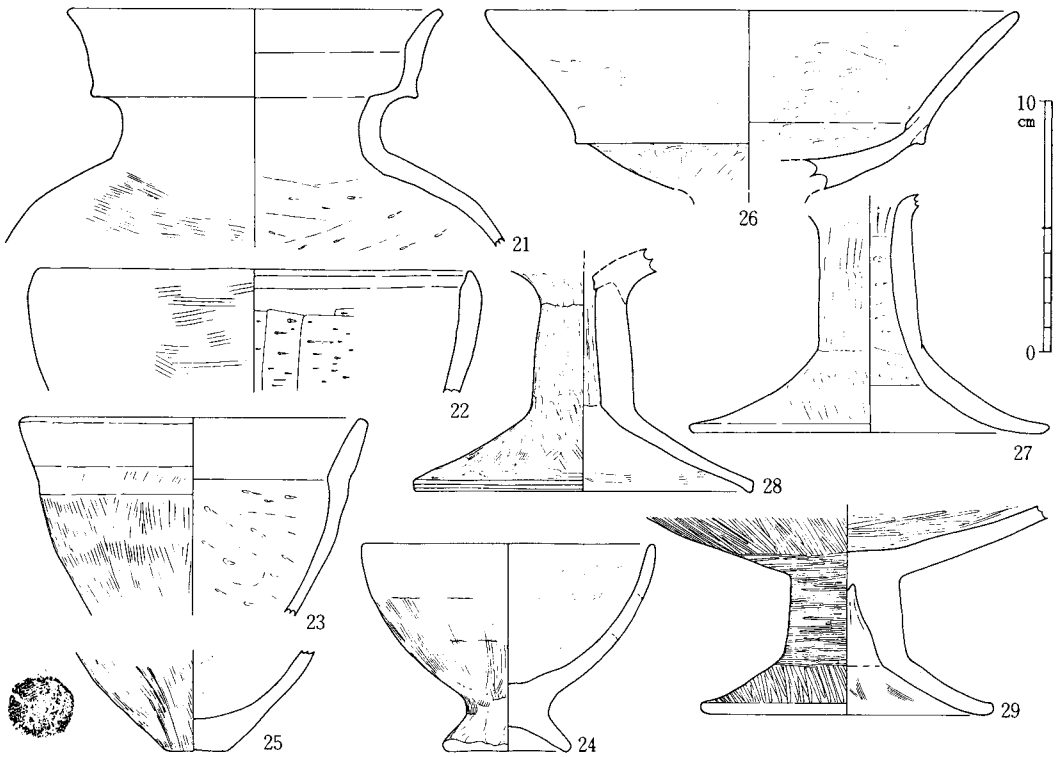
第20図20・第21図21は壷形土器で、どちらも有段口縁をもつ。20は接合の結果、完形に復元された。口径17㎝、器高28.6㎝、最大径は胴部中位にあり27㎝を測る。球形の胴部、ほとんど平坦面を持たない底部、括れが少なく内面が筒状になる頸部、擬凹線を持ち直線的に外傾し先端を尖



第19図　大長野Ａ遺跡　１号溝出土遺物実測図(1)（Ｓ＝1/3）



第20図　大長野Ａ遺跡　１号溝出土遺物実測図(2)（Ｓ＝1/3）



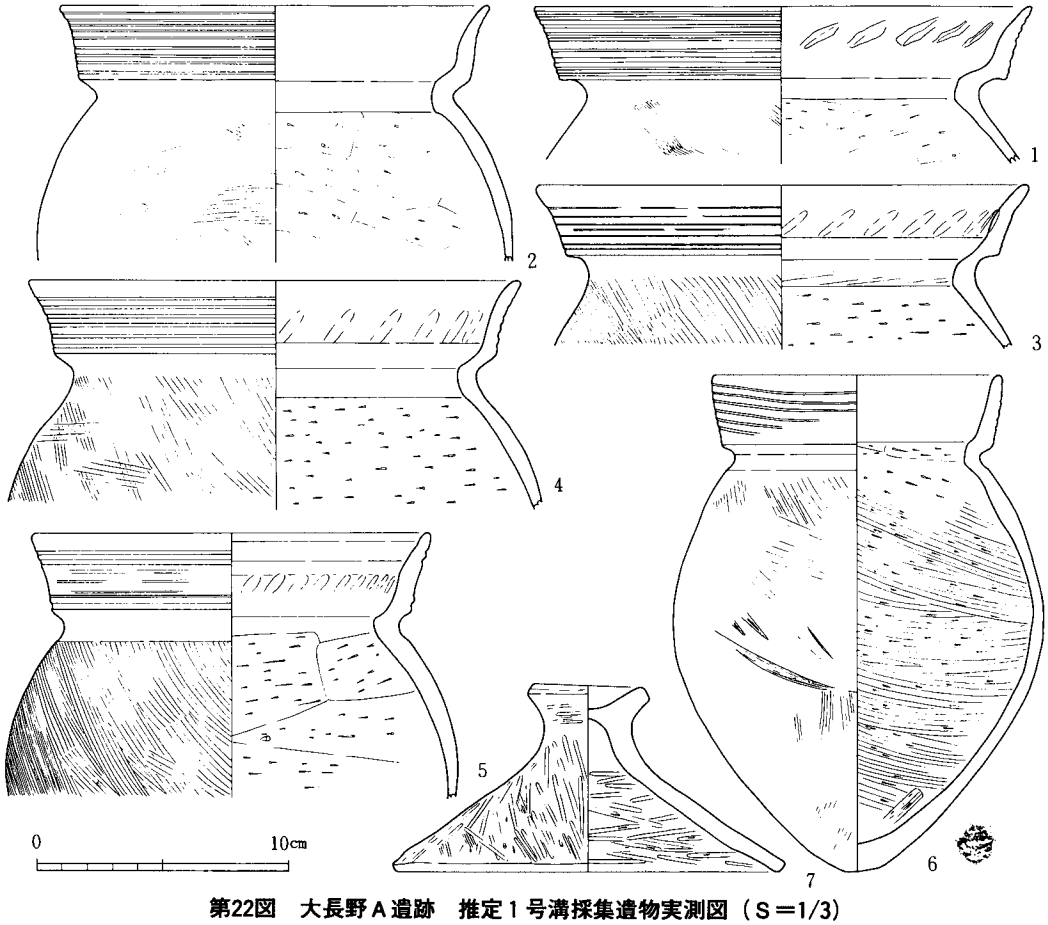
第21図　大長野A遺跡　1号溝出土遺物実測図(3)（S＝1/3）

らせる口縁帯、からなる。胴部内面はヘラケズリを行っているが、意外と厚ぼったい。黒斑は外面の2箇所で認められるが、煤・炭化物の付着は認められなかった。技法的・形態的には非常に甕に似るが、胴の張るプロポーションと、煮沸痕が認められなかった点、さらに他遺跡での類例から、広口壷として分類した。21は口縁部が全存するもので、径15cmを測る。口縁部は内面に強い段を持って外反し、無文、先端が尖る。外面全面に煤が付着しており、煮沸使用が窺われる。22～24は鉢形土器である。22は先端を直立に尖らせて仕上げるタイプ。23は頸部を持つタイプ。外面はヨコナデによる窪み、内面は鈍い屈曲によって口縁部と胴部を画する。24は丸みを持って立ち上がる鉢身に低い台が付く。鉢身内外面と台外面に煤が付着している。25は底部である。26～28は高杯形土器である。26は杯部。丸みを持つ杯底部から段を付けて口縁部が外反して伸びる。段そのものはあまり明確でなく、粘土を貼って強調している。27・28は脚部、どちらも無段脚で、杯部底は完全に剥離している。27は裾が外反してラッパ状に開く。28は27よりも偏平な器形で、裾は直線的に開き、端部は鉛直に面を取る。外面には黒色の油脂が付着する。29は27・28をさらに偏平にしたような脚に、かなり大型の鉢形もしくは壷形の身が付くようである。身・脚のバランスから見て、高杯ではなく台付土器と捉えるべきであろう。

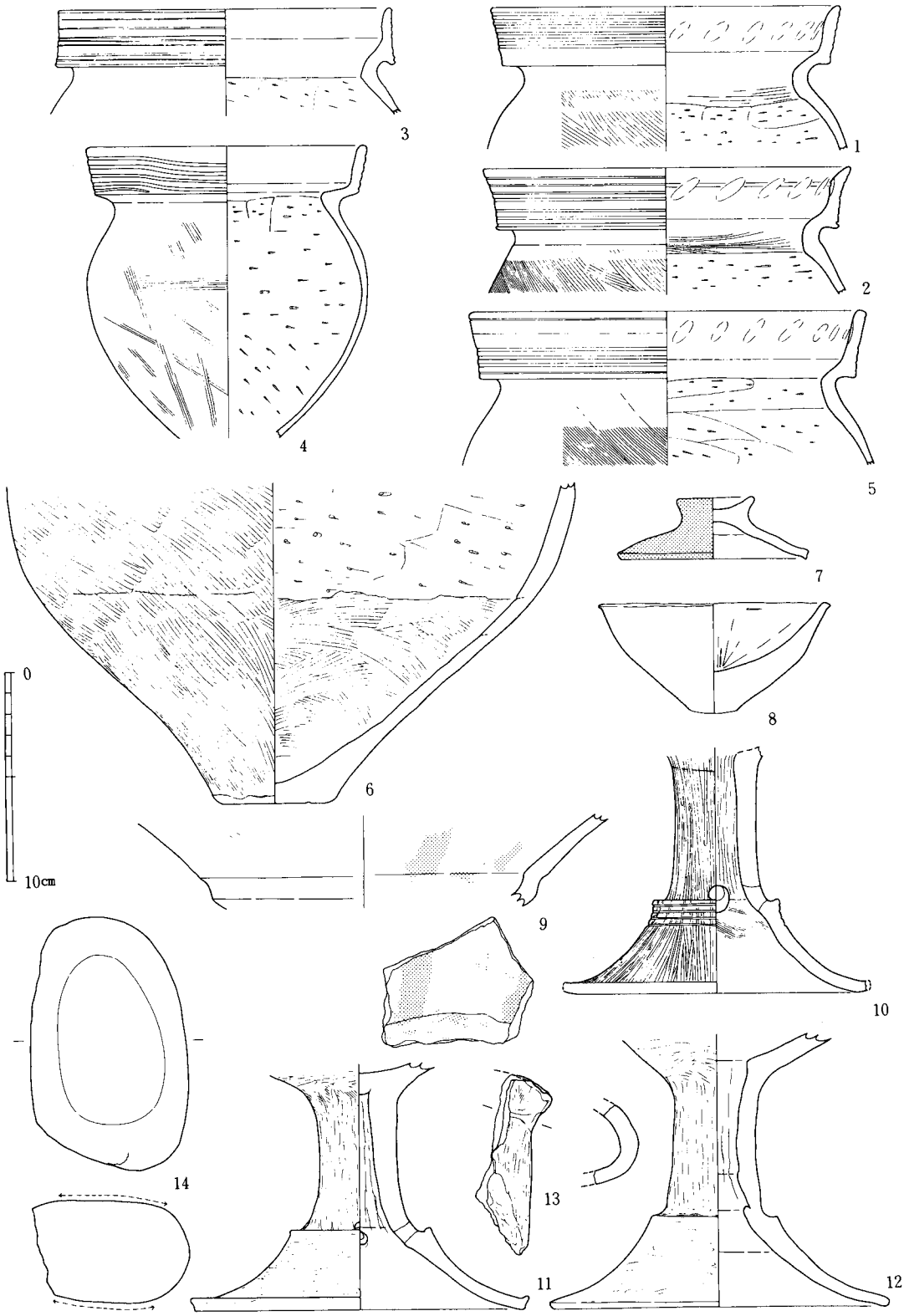
この他図化できなかったものもあるが、1号溝から出土した土器群は一括性が高く、投棄時期を弥生後期終末のさらに限定される時期と捉えて大過ない資料と思われる。

推定１号溝採集遺物（第22図）

第22図１～７は調査区の北方で遺跡が損傷を受けた地点から採集した資料である。いずれももともとは遺構内もしくは直上に包蔵されていた遺物がすきとりによって露出したものである。遺構は溝状遺構でその方向から見て１号溝の延長の可能性が高いと考え、遺物をここに掲載する。１～６は甕形土器で、いずれも有段口縁に擬凹線を持つもの。１～５はいずれも外反する口縁帯を持つが、１・２は先端の尖りが強く、擬凹線が帯の全面に及ぶもの。３～５はそうでないもので、擬凹線は口縁端には及ばない。２の口縁帯内面には指頭圧痕が見られず、肩部のハケはほぼ横方向に揃う。４は口縁帯がよく外反して伸びる一方、厚さが均一化し先端は尖った感じが薄れる。５は頸部内面がほとんど筒状にならないもの。全体にやや厚手で、口縁帯は外反度・端部の尖り度合いも小さい。６は個体の約半分が遺存していたものを復元した。小型甕で、底部はほとんど面を持たず、胴部は卵型を呈し、口縁部はほぼ直立し端部を丸くおさめ雑な擬凹線が引かれる。胴部外面には斜め方向の深いヘラ痕がハケ調整を切って見られ、その上に煤が付着している。成形時に工具が当たって抉ったものと思われる。胴部内面はヘラケズリ後にハケ調整を加えていると思われる。このハケはケズリと同じ効果を持つと思われるが、器壁は厚めである。７は蓋形土器である。完形で口径15.5㎝、つまみ径4.2㎝、器高7.7㎝を測る。口縁端部・つまみ端部は斜



第22図　大長野Ａ遺跡　推定１号溝採集遺物実測図（Ｓ＝1/3）



第23図　大長野Ａ遺跡　２号溝出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

めに面を取る。調整は全面ヘラミガキで、外面は縦方向で放射状に、内面は横方向に行われているが、ハケ・ケズリが部分的に見られ、前調整を完全に消し切っていない。

2号溝出土遺物（第23図）

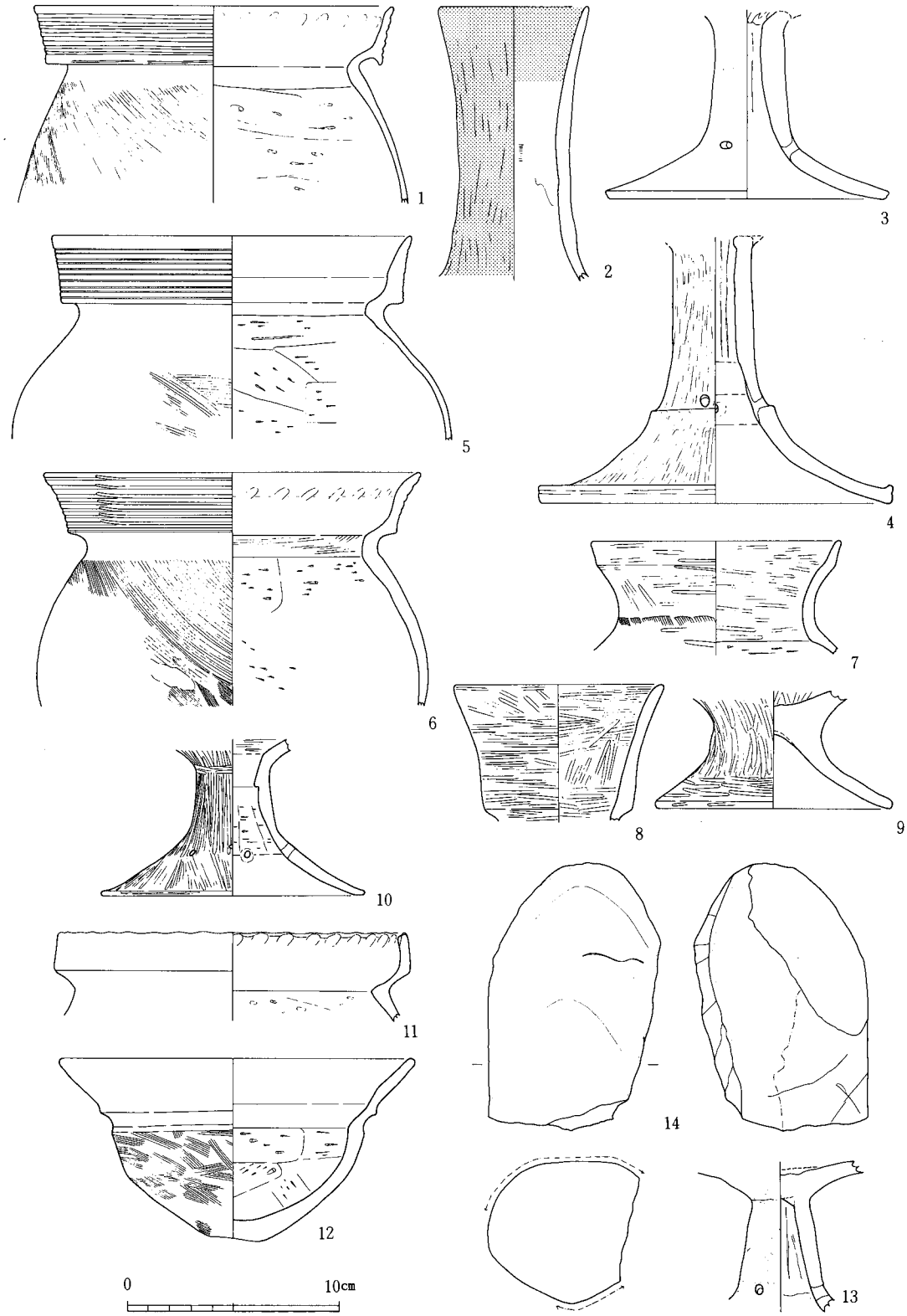
第23図1～5は甕形土器で、いずれも有段口縁に擬凹線を持つ。1・2は筒状の頸部内面にヨコハケが見られる。1は直線的な口縁帯を持ち、先端はあまり尖らない。2は対照的に口縁帯が外反し、先端が強く尖る「月影甕」。3・4は頸部内面がくの字に屈曲するもの。3は口縁帯が直立かやや内傾気味になる。4は口縁帯がほぼ直立し、端部は丸くおさめている。5は頸部内面が筒状になりながらも、下位と同様にヘラケズリしている。口縁帯は4に似る。6は壷形土器の下半部であろう。内面は接合痕を境に上位ヘラケズリ、下位ハケと明確に調整を分かつ。7は小型の蓋形土器。完形品で、口径8.7cm、つまみ径3.5cm、器高3cmを測る。8は鉢形土器。完形品で、口径10.9cm、底径2.3cm、器高5.3cmを測る。平底の底部は分厚く、口縁は短くかつ先細りしており、成形は粘土塊から口縁を引き出して行い、内面は板状の工具で整えたと思われる。外面は煤が付着している。9～11は高杯形土器。9は杯部で、内面に赤彩痕が縦位・横位に走り、彩文の一種と思われる。10は有段の脚部。棒状の支柱と外反して広がる裾からなる。杯部底は剥離しており、脚裾も端部を欠く。段部に4条の沈線を持ち、その直上に透孔を4方に空ける。11は10に似るが裾はより偏平で、沈線はなく、透かし孔は内外面の2方向から空けられたものが重なって縦長に見える。12は器台形土器の脚部。無文の有段脚であり、おそらく脚裾径を上回る有段の器受け部が付く上下対称形の器台であろう。13は鉢か壷の口縁部の一部で、片口状に張り出す部分と思われる。14は石、一部欠けている。表裏に平滑な面を持つが、人為によるものかどうかは不明。重量は753.7gを測る。石材は流紋岩で、非常に硬質である。

3号溝出土遺物（第24図1～4）

第24図1は甕形土器である。有段口縁に擬凹線を持ち、口縁帯は直線的で上端が尖り下端が少し垂下する。外面は黒斑に覆われる。2は壷形土器で、筒状に非常に長く伸びる口縁部。外面と内面上部が赤彩される。いわゆる細長頸壷の口縁部である。3・4は高杯か器台形土器の脚部である。3は遺構外ながら近接する位置での出土であり、関係の深い遺物としてここに掲載する。無段脚で、ラッパ状に裾が開くタイプ。4は有段脚で、3より全体に大振りな作り、裾端部は鉛直に面を取り粘土を上方へ盛り上げる。透かし孔は4方に空ける。

5号溝出土遺物（第24図5～10）

第24図5・6は甕形土器で、どちらも「月影甕」。5は内面頸部の筒状帯の幅が狭い。6は口縁帯の伸び・外反、内面頸部の筒状帯の幅が大きい。7・8は壷形土器。7は広口壷、口縁上部が弱い稜で有段状に立ち上がる。8は有段口縁の口縁帯部分で、外傾してよく伸びている。おそらくは装飾壷の類。外面は黒色の油脂状の被膜が付着する。9は台付土器の台部。身の底部内面と台内面端部には部分的に黒色の油脂状の被膜が見られる。10は器台形土器の脚部。弥生土器の器台では小型の部類に入る。脚裾はラッパ状に開くタイプで、透かし孔は割り付けると6方以上に空けられると推定される。



第24図　大長野Ａ遺跡　３・５・７号溝出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

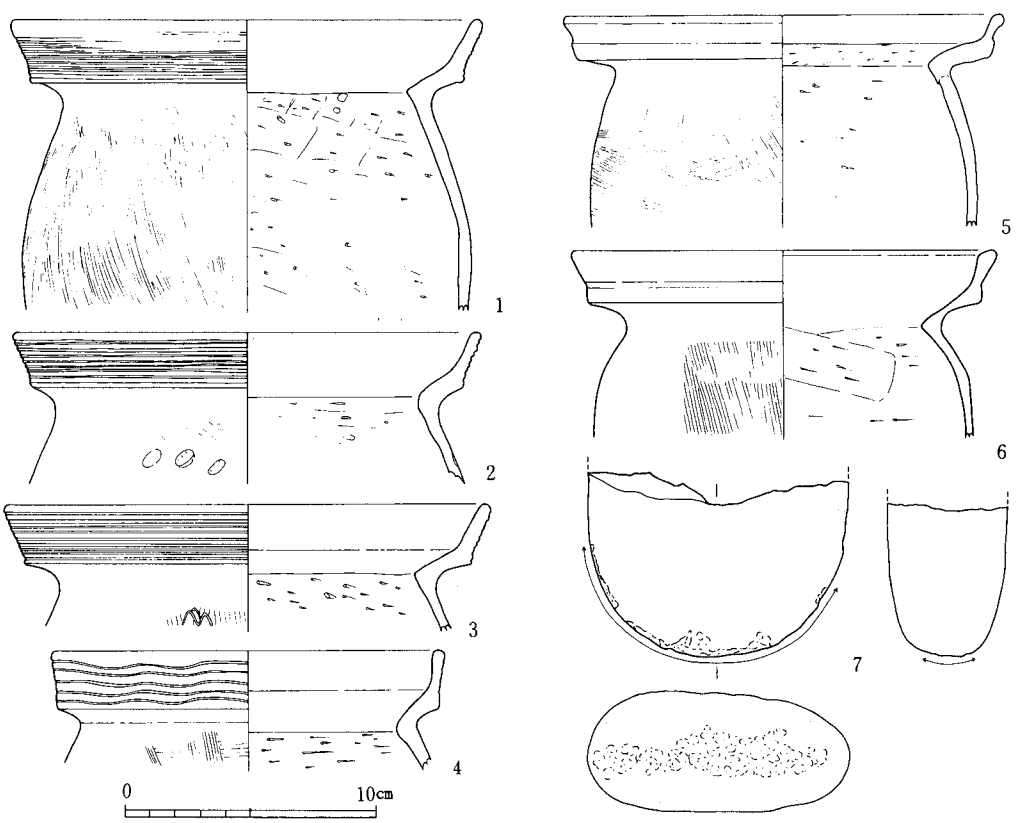
7号溝出土遺物（第24図11～14）

第24図11は甕形土器。頚部内面がくの字に屈曲する有段口縁で、無文。直立もしくは内傾する口縁帯は内面上端に指頭圧痕を密に入れる。12は鉢形土器。径2.2cmの平底から無文の有段口縁へ緩V字状に大きく開く、いわゆる有段鉢の類。外面は黒色の油脂状の被膜が付着する。13は高杯形土器の脚部で、おそらく無段。杯身底は中央で剥離している。14は石、割れ面を含む表面のほとんどに煤が付着しており、被熱が確実な資料。割れ面には大粒の石英がよく目立つ。重量は1049.1gを測る。石材は珪質の流紋岩である。

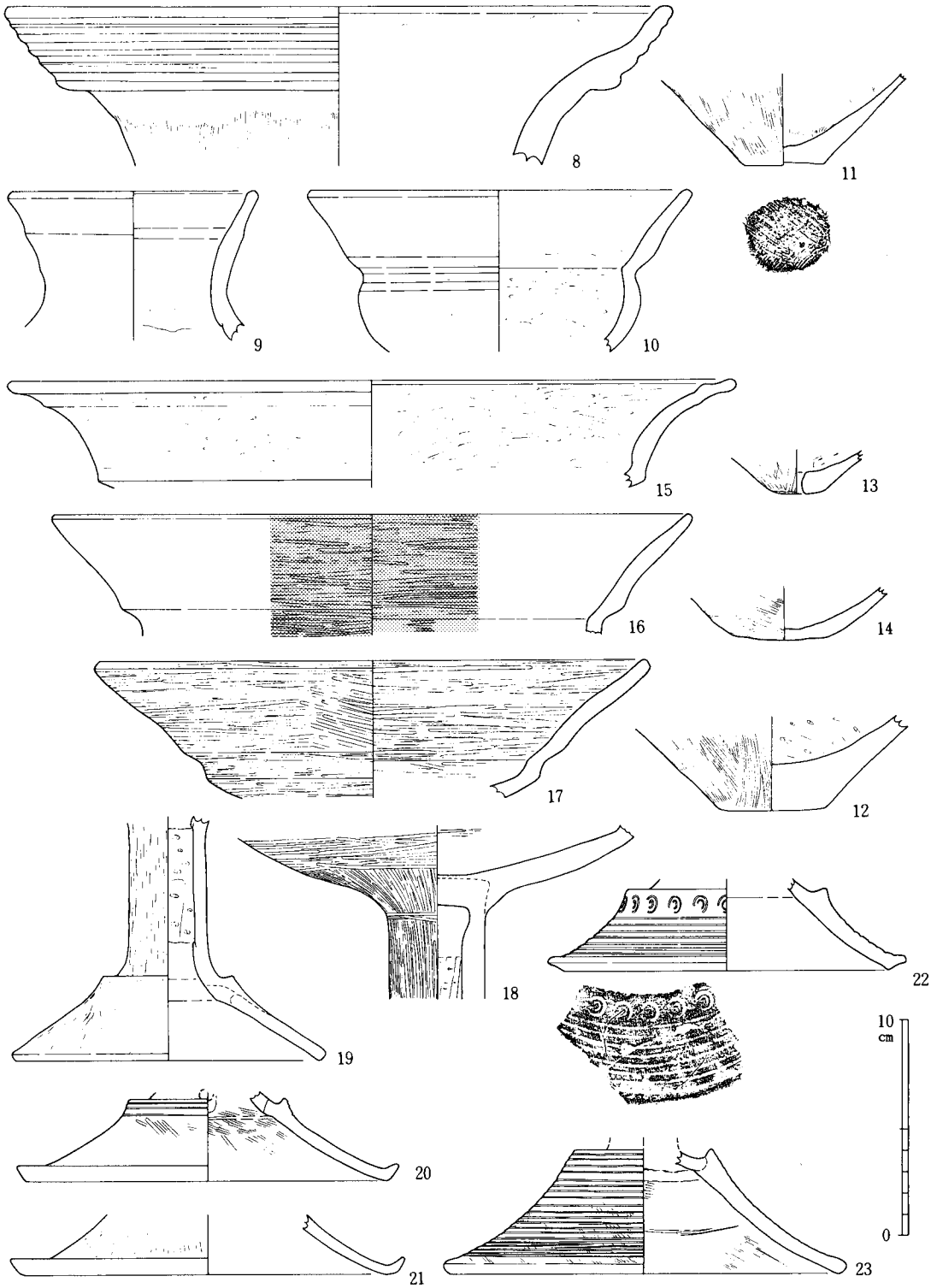
8号溝出土遺物（第25図、第26図）

第25図1～6は甕形土器である。いずれも有段口縁で、頚部内面が明瞭なくの字かそれに近い屈曲をする。1～4は口縁帯に擬凹線を持つもので、端は細めず自然におさめる。1～3は外傾、4はほぼ直立する。2は肩部に刺突を巡らせているようである。3も肩部に文様を持つもので、波状に見えるが部分的にしか残らないため不明確。形態的には2によく似ており同一個体の可能性もある。4は1～3より小振りのもので、擬凹線は間隔が広く、少条。5は口縁基部が分厚く、口縁帯は短く立ち上がる形態。6は口縁帯に強いヨコナデがなされ、中位が凹んで、上下端が膨れて厚く見える形態。7は石器。半分欠けるが、一方に叩打痕が顕著であり、叩石と思われる。重量は518.5gを測る。石材は花崗岩である。

第26図8・9は壷形土器である。8は径推定で30cmに達するであろう大型壷の口縁部。厚手の



第25図　大長野A遺跡　8号溝出土遺物実測図(1)（S＝1/3）



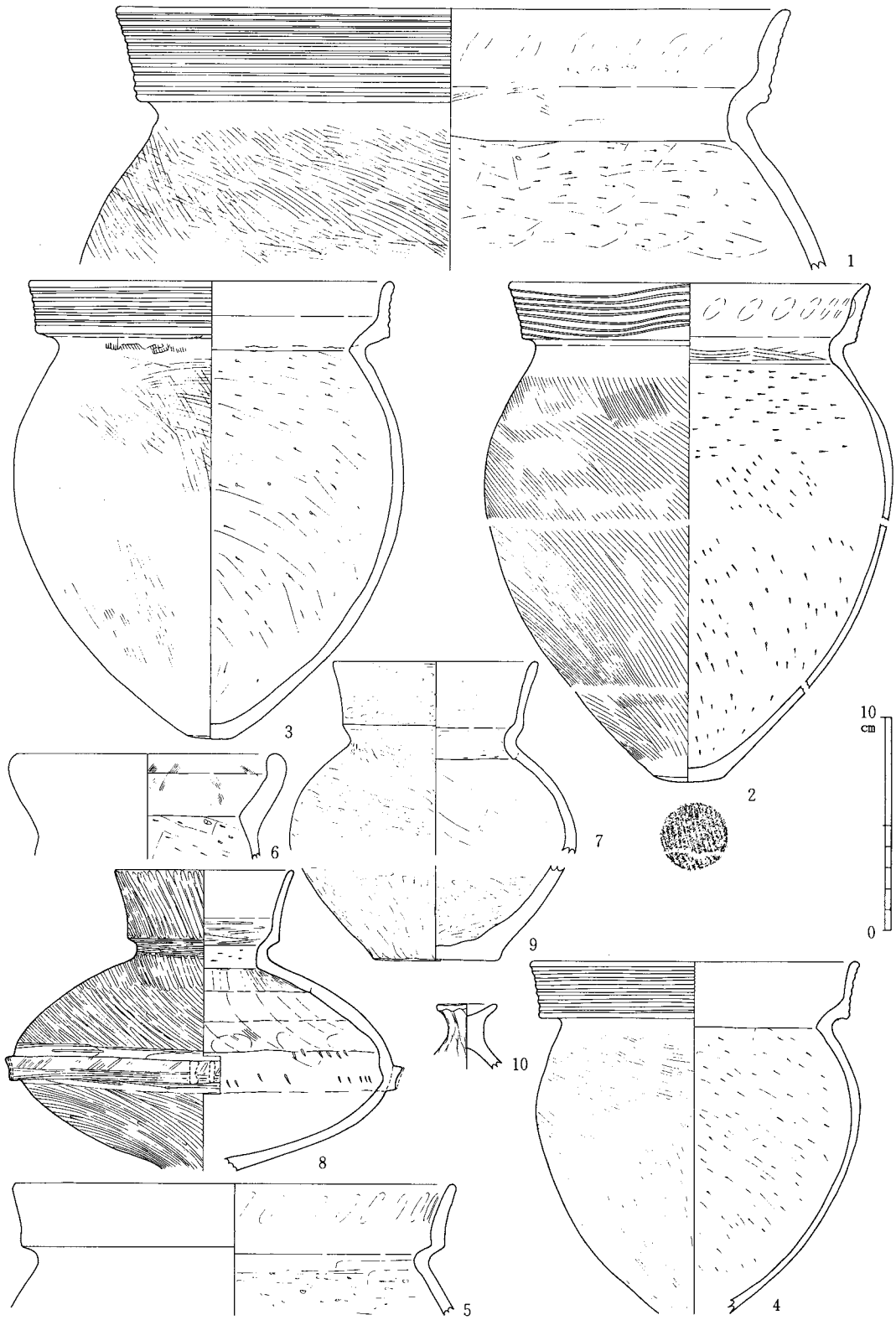
第26図　大長野Ａ遺跡　８号溝遺物実測図(2)（Ｓ＝1/3）

有段口縁で、太い擬凹線を持つ。9は外反ぎみに開く口縁部で、端近くでは弱い稜が付いて有段状になる。黒色の油脂状被膜が帯状に縦位に2箇所、直径線状に相対するような位置で内外面ともに認められ、その性格が注目される。10は鉢形土器、有段鉢である。外面一帯に煤が付着する。11～14は底部。11は内外面ともハケ調整。12の外面は黒斑に覆われ、内面も同様に黒色になる。厚手なため火回りが悪かったのだろうか。13は穿孔された品で、有孔土器の類と思われる。14はミガキ調整されており、壷であろう。15～18は高杯形土器。15は有段の杯部で、径30cmを越える大径。口縁部は水平縁に近い外反を示し、端は内面に小突帯を、外面に稜を持たせて区画している。16・17は有段の杯部であるが、器面が帯状に抉れるように段が付くタイプで、有段鉢の器型に似る。16・17を比較すると17の方が大径ながら口縁が短くなっている。どちらも内外面にわずかに赤彩痕が残るが、その範囲は不明。18は杯部と脚部の境にヨコミガキが入る。ちょうどその辺りで接合しており、圧着と継ぎ目消しの意図があるのかもしれない。19～23は脚部で、19～21は高杯脚、22・23は擬凹線を持つので器台脚であろう。19は有段の裾部に棒状の支柱が付く。20も有段で、段部に3条の沈線を持ち、裾は大きく外反して、端部は斜め上に折り返している。21は20と同形態の裾であるがより折り返しが長い。段の有無は不明である。22は有段脚で、段部にスタンプ文を巡らし、以下は擬凹線を入れる。スタンプ文は二重の同心円文である。端は面を取っており、外側がやや突出し、内側で接地する。23も有段脚だが、段以下は大きく外反して伸び、多条の沈線を入れている。

8号溝は非常に不明瞭な遺構であったが、出土した土器群は東半の溝内に位置が絞られたためか、ほぼ弥生時代後期後半の時期におさめて大過ないまとまった資料である。

9号溝出土遺物（第27図、第28図）

第27図1～5は有段口縁の甕形土器。1～4は口縁帯に擬凹線を持つ。1は径推定で30cmを越えるであろう大型の「月影甕」。2は同一個体破片を図上復元した品。自立可能な程度に安定感がある平底に、全体に薄手な胴部、内面筒状の頸部、端が尖り指頭圧痕が入るが厚手で短い口縁帯からなる。3は完形に復元される品。口径17.2cm、胴部最大径18cm、底部径2.2cm、器高22.1cmを測る。自立できない小平底に薄手で中位が張り出す胴部、内面がくの字に屈曲する頸部、直線的で端が丸まる口縁帯からなる。4は底部以外は復元される。口径15.6cmと少し小振りで、胴の張りが小さい点以外では3によく似る。2～4の3個体の甕は器壁が薄くなりかなり軽量化してはいるが、「月影系甕」の概念から外れる特徴を個体のどこかに持っている。また胴部外面はほぼ全面に煤が付き、内面は下半一面に炭化物が付くと言う、共通する煮沸痕跡が見られた。5は口縁帯外面に煤・炭化物が厚く付着しているため、擬凹線の有無は不明である。6～8は壷形土器。6はくの字口縁の広口壷か。口縁部は厚手で、端が内湾する。7は有段口縁の短頸壷。上半が全存し、口径8.6cmを測る。外面に黒色の油脂状被膜、内面に炭化物が付着しており、確実に煮沸に使っている。8は算盤玉形状の胴部に有段口縁が付くもので、底部以外はほぼ完存し、口径8.3cm、胴部最大径18cmを測る。底部に剥離痕があり、脚台が付くと思われる。胴部外面の調整はナナメミガキであるが、螺旋状に施されている。胴部の張り出しには、所々欠けたり剥がれたりしているが平板な突帯と、さらにその上に棒状浮文が貼られる。浮文は縦位に2本1対で、



第27図　大長野Ａ遺跡　９号溝出土遺物実測図(1)（Ｓ＝1/3）

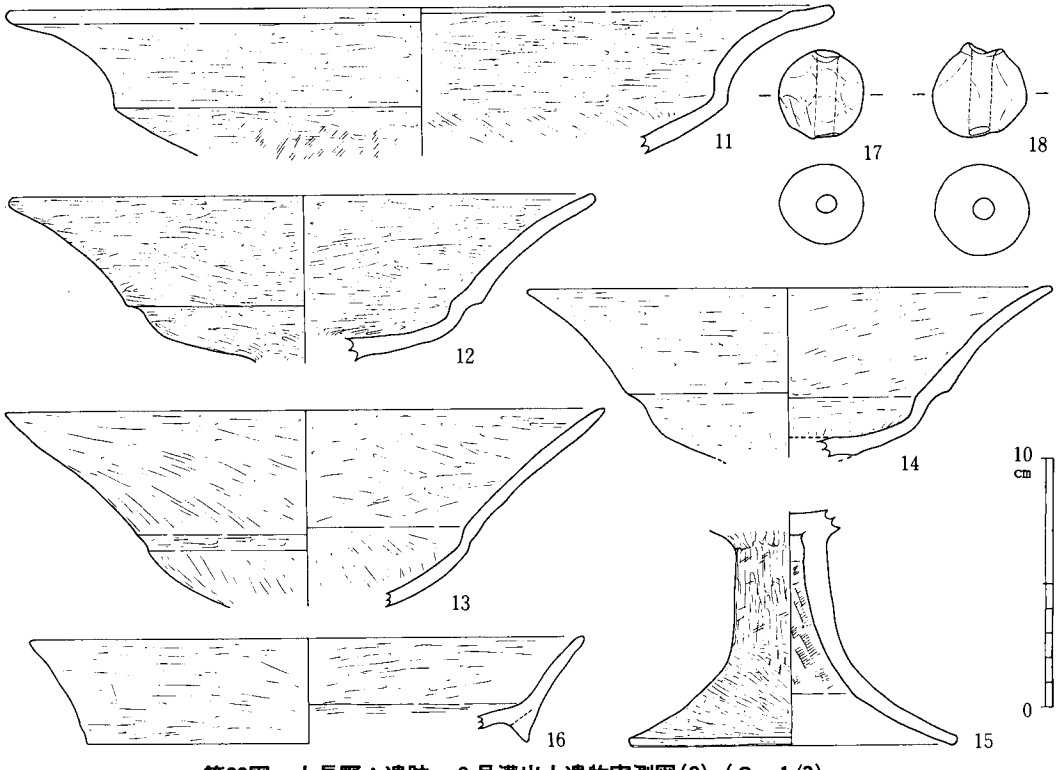
1方を欠くがおそらく4方に貼られていたと思われる。非常に華美な品であり、装飾壷の類に入る。9は底部、おそらく壷形土器であろう。10は蓋形土器のつまみ部である。外面は黒色であるが、黒斑の部分と油脂状被膜の部分がある。

第28図11～15は高杯形土器である。11～14は有段の杯部。11は口縁が強く外反し、端部は厚くし内面に稜を取って水平に近い面をつくる。12～14は有段鉢に類する形態のもの。いずれも11に比して小型で、底部が縮小する一方で口縁部が長く伸びる形態。15は脚部、無段でラッパ状に開く。支柱の内面の調整はケズリ後ハケを行っている。16は器台形土器の有段の器受け部。口縁帯は無文で外反し、下端はわずかに垂下される。17・18は土錘。いずれも不整球形で、器面に黒斑が見られる。重量は17が37.5g、18が43gを測る。18は孔の一方が不整に盛り上がる。

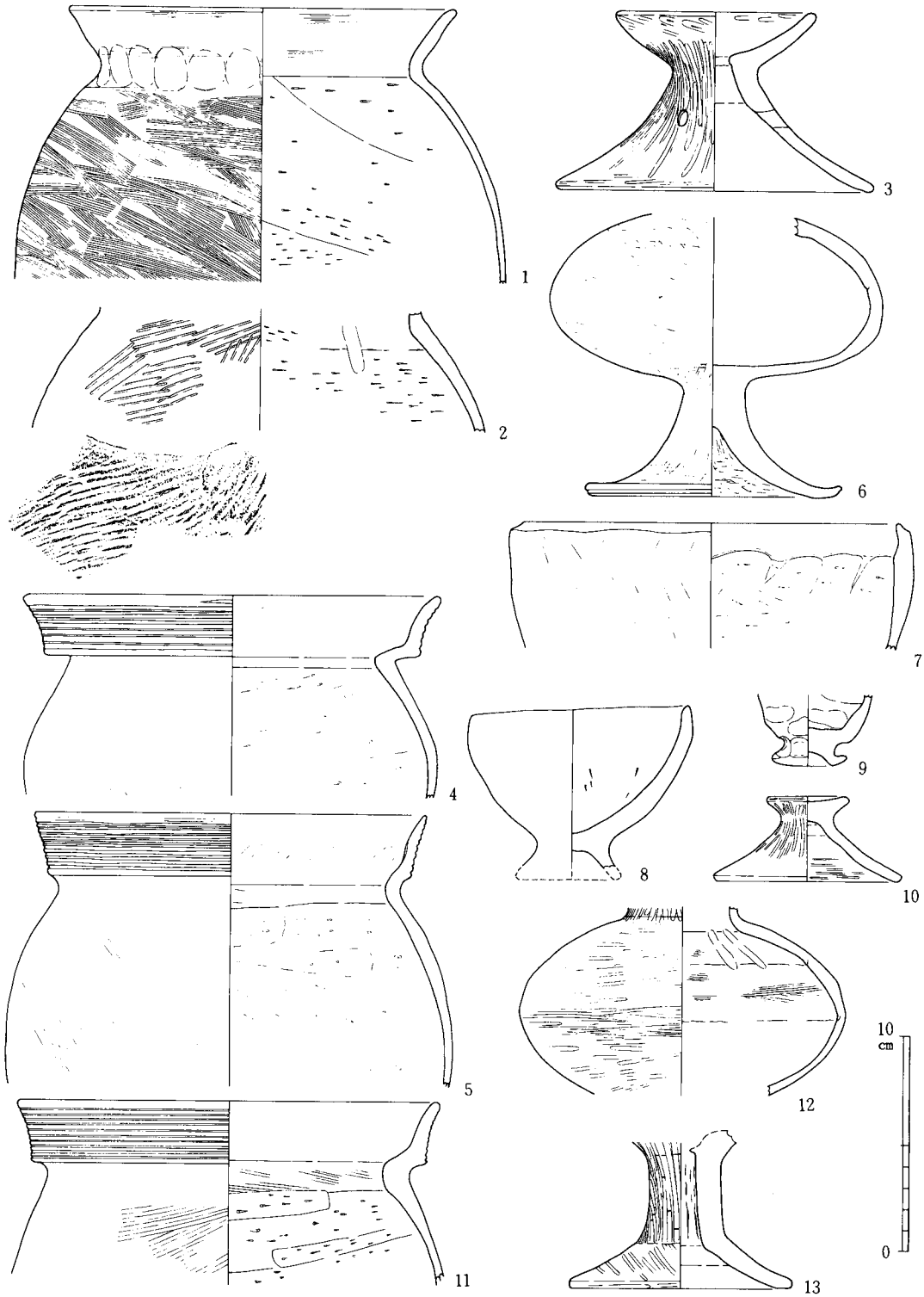
b）大溝出土遺物

1号大溝出土遺物（第29図）

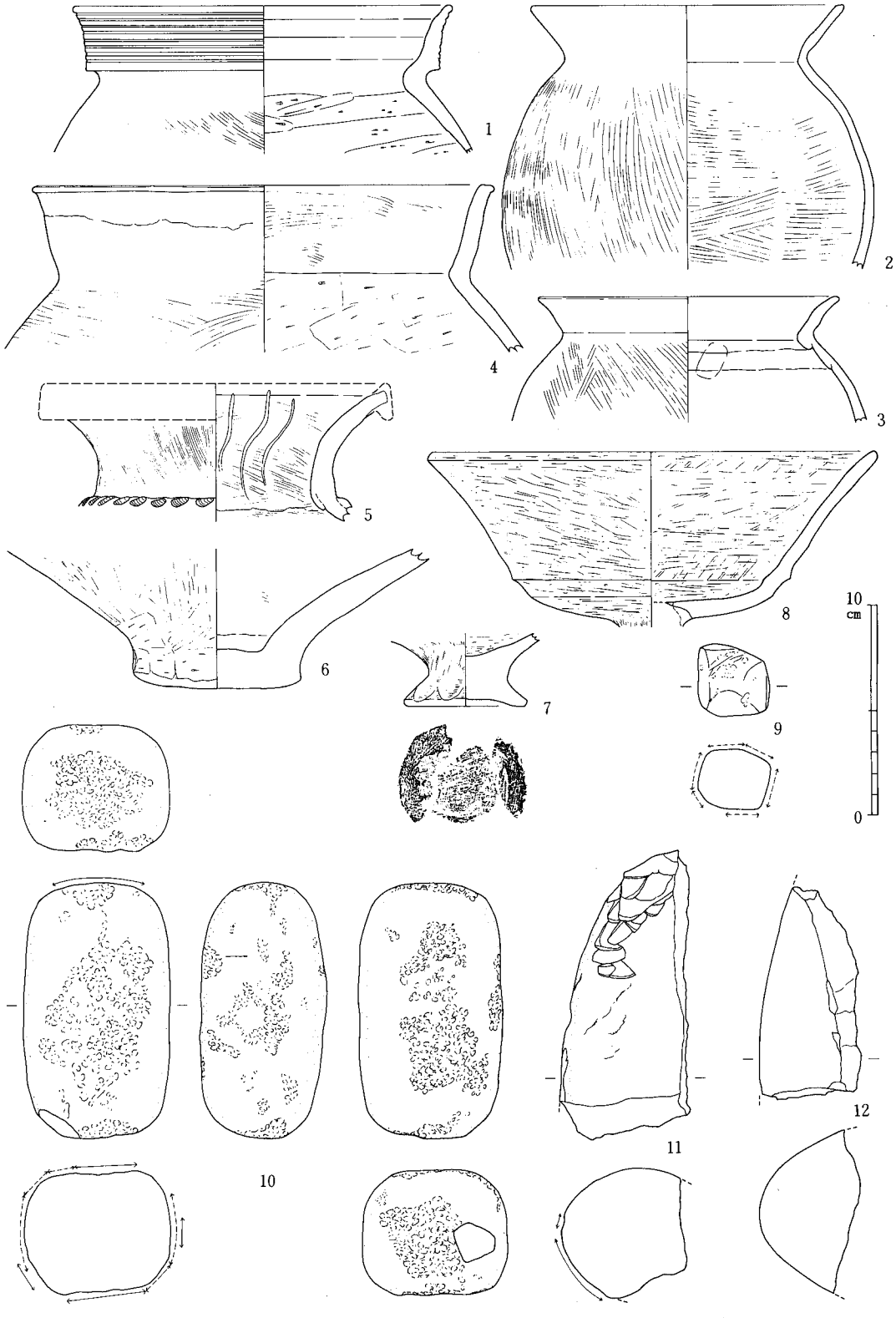
第29図1～3は上層（第16図層6）出土で、いずれも土師器。1・2は甕形土器。1はくの字口縁で頸部外面を押さえているようで浅く凹む。胴部は外面が細かいハケ、内面がヘラケズリで仕上げ、薄い。2は胴部上半の破片であり、外面は左下がりの叩き調整を行っている。3は器台形土器で、いわゆる小型器台。器受け部は全存し、径8.6cmを測る。器受け部は緩やかに内湾、脚部は緩やかに外反し、透孔は3方に空ける。4～10は下層（第16図層9～11）もしくは底面出土。4・5は甕形土器、どちらも有段口縁に擬凹線を持つ、「月影甕」の類。4は頸部がわずかに筒状になり、口縁帯は外反するが尖らない。5は頸部・口縁帯については、4とは対照的で筒



第28図　大長野A遺跡　9号溝出土遺物実測図(2)（S＝1/3）



第29図　大長野A遺跡　1号大溝出土遺物実測図（S＝1/3）



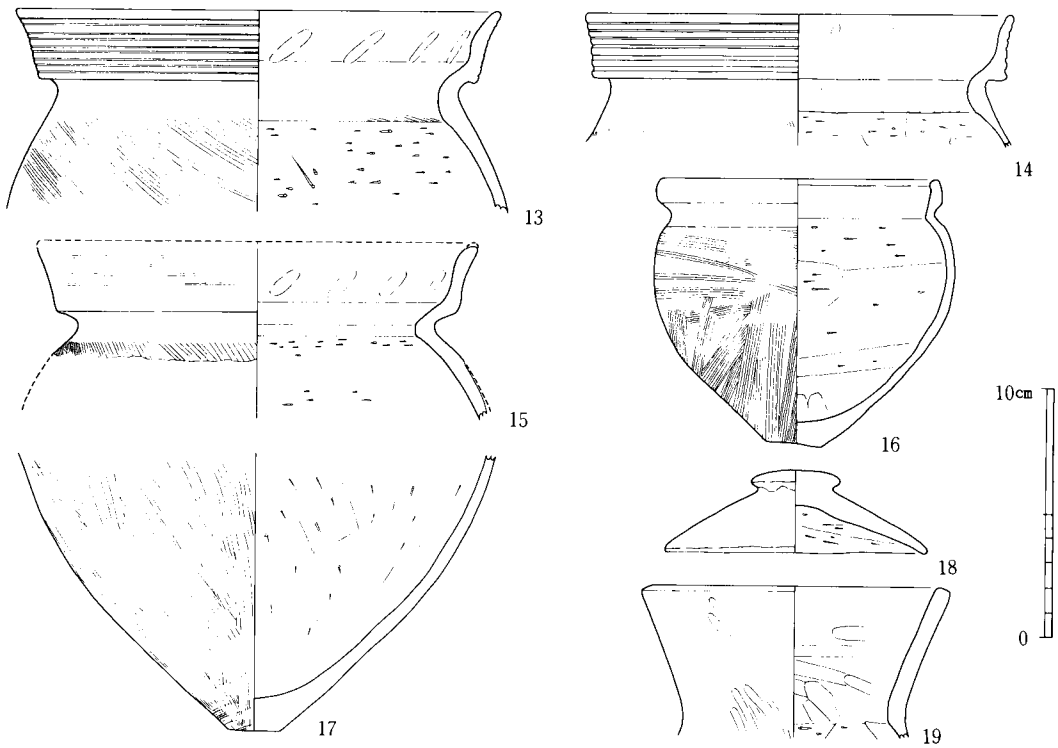
第30図　大長野Ａ遺跡　２号大溝出土遺物実測図(1)（Ｓ＝1/3）

状、端が尖る。6は壷形土器。ラッパ状に開く脚が付く、台付壷。胴部は偏球形で、口縁部は欠ける。7・8は鉢形土器。7は直線的に立ち上がっている口縁部の端をさらに細く立ち上げ、尖らせている。8は内湾ぎみに丸みを持って立ち上がる、台付き鉢。9は小型土器で手ずくね土器、脚台付きである。台付き土器のミニチュア品的な存在と思われる。10は蓋形土器。つまみは頂がほぼ平坦で、径の割に大きめである。11～13は出土層位不明の品。11は甕形土器。12は壷形土器、球形の胴部。口縁部と底部を欠くが、おそらく細長頸壷の類であろう。13は脚部で、裾はラッパ状に開く。高杯形土器と推定しているがやや小径で低器高なため台付壷・鉢の類の可能性もある。

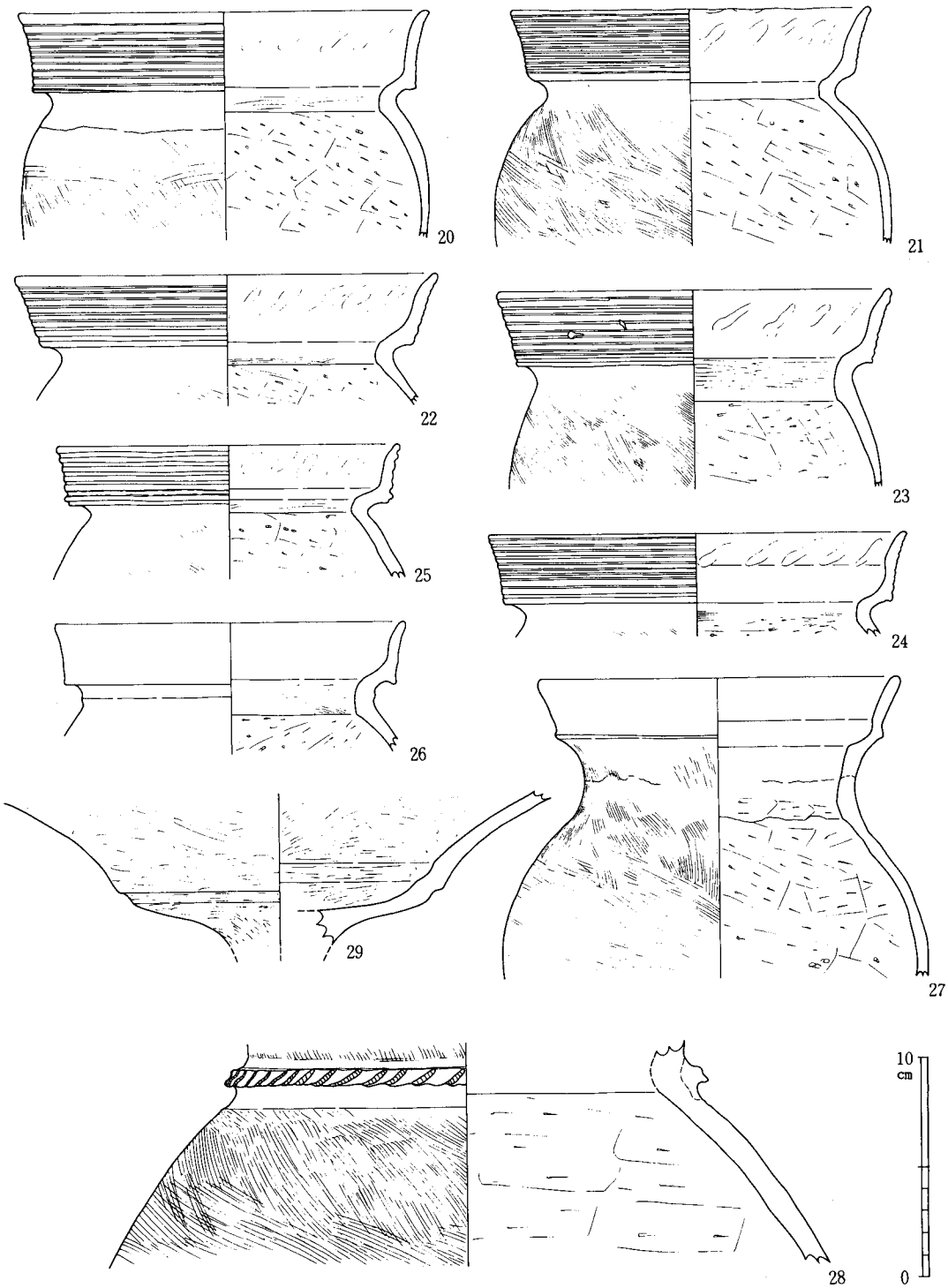
この他図化できなかったものもあるが、1号大溝は下層がほぼ弥生後期終末の土器のみを含み、上層は古墳前期を中心としてその前後の時期の土器が少し混在すると思われる。

2号大溝出土遺物（第30図～第32図）

第30図は上層（第16図層3）出土。1～4は甕形土器。1は有段口縁で、擬凹線を持つもの。2～4は土師器で、いずれもくの字口縁を持つ。2は胴部内外面ともハケ調整ながら意外と薄く仕上げられている。3は口縁部に非常に強いヨコナデが加えられている。4は厚手の品、口縁部は外面は継ぎ目を残すヨコナデ、内面がヨコハケで、端はほぼ水平に面を取る。5は土師器の壷形土器。外反する口縁部には端に上下に拡張する口縁帯がつくと思われるが、剥離して擬口縁状になっている。外面頸部に刻み目のある突帯、口縁部内面に縦位の沈線を入れる。6・7は底部。6はおそらく大型壷であろう。7は底面が張り出し、中空の脚台状である。8は高杯形土器で、杯部は完形に復元され、径21.6cmを測る。有段鉢に類するタイプである。9～12は石器の類。9



第31図　大長野A遺跡　2号大溝出土遺物実測図(2)（S＝1/3）

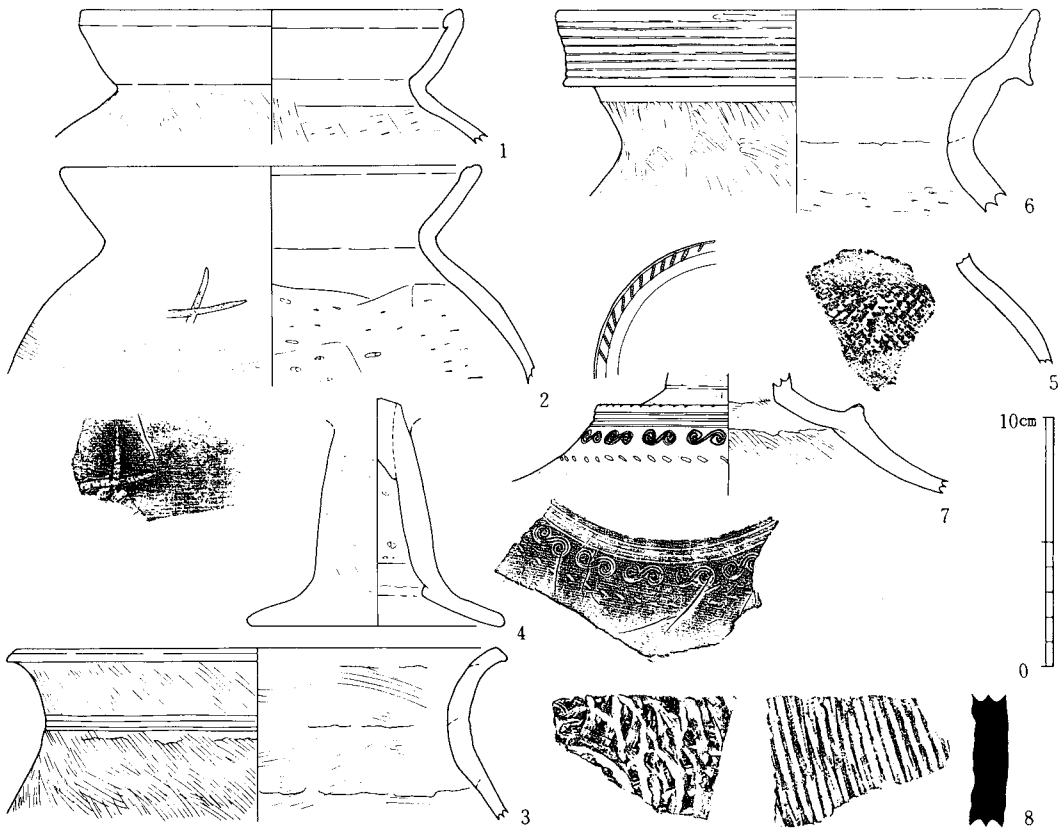


第32図　大長野Ａ遺跡　２号大溝出土遺物実測図(3)（Ｓ＝1/3）

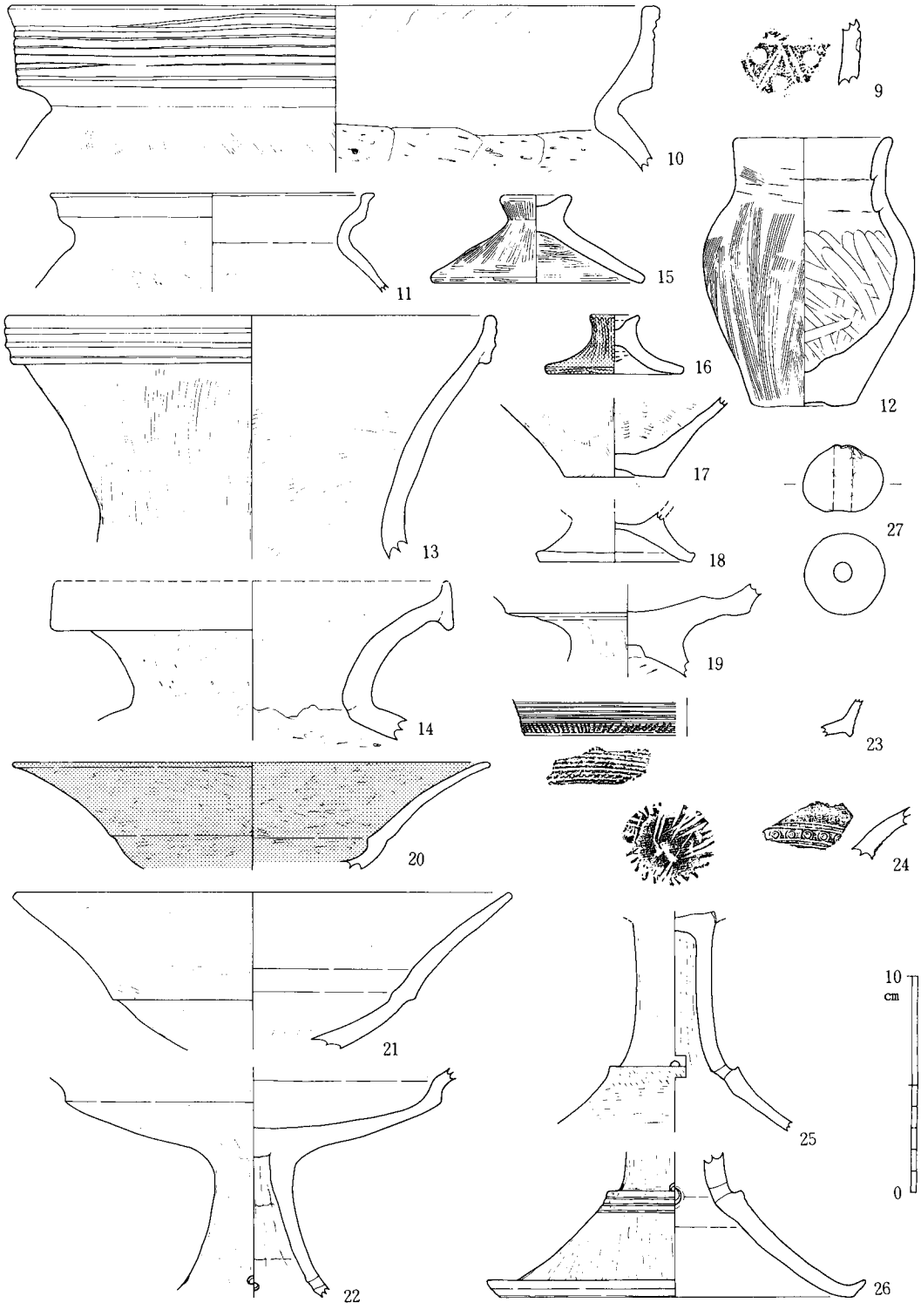
は軽石、器面は平滑で擦られている。重量は13.8ｇを測る。10は隅丸の角柱状の形態の石器で、ほとんどすべての面に叩打痕が見られ、叩石と推定する。欠損はなく重量は863.9ｇを測る。石材は流紋岩で、粒子が非常に細かい。11・12は平滑な面を持つが、欠損著しく全形は不明である。11は一部で剥離しているが、人為的なものかどうかは不明。重量381.8ｇを測る。石材は安山岩である。12は重量455.2ｇを測る。石材は流紋岩で、粒径の大きい砂礫が目立つ。

第31図は中層（第16図層７）出土。13～16は甕形土器。13～16は有段口縁で、口縁帯に擬凹線を持つもの。13・14は頚部内面が筒状になるタイプ。15は頚部内面がくの字に近いタイプで、端を欠いている。16は完形に復元され、口径10.7㎝、胴部最大径11.8㎝、底径2.2㎝、器高10.8㎝を測る小型甕。口縁部は短く丸みを持って立つ有段口縁、底部は平底で自立が可能である。外面は全面に煤が付着する。17は土器下半部で、その形状から見て甕であろう。18は蓋形土器、小径でつまみは不整な円盤形である。器面は調整ムラや凹凸が若干あり、丁寧なつくりとは言えない。19は壷形土器。直線的に開くくの字口縁で、調整はヘラミガキである。

第32図は下層（第16図層10～13）出土。20～26は甕形土器、全て有段口縁で、うち20～25は口縁帯に擬凹線を持つもの。器壁は薄く、頚部内面は筒状になり、口縁部端は尖る。程度差はあるが「月影甕」の類。20は口縁帯が直線的で、特に長い。ハケ調整は外面肩部と内面頚部では横方向に入る。25はやや小振りで口縁帯も短くなる。26は25と同じくらい小振りの甕。口縁帯は無文



第33図　大長野Ａ遺跡　３号大溝出土遺物実測図(1)（Ｓ＝1/3）



第34図　大長野Ａ遺跡　３号大溝出土遺物実測図(2)（Ｓ＝1/3）

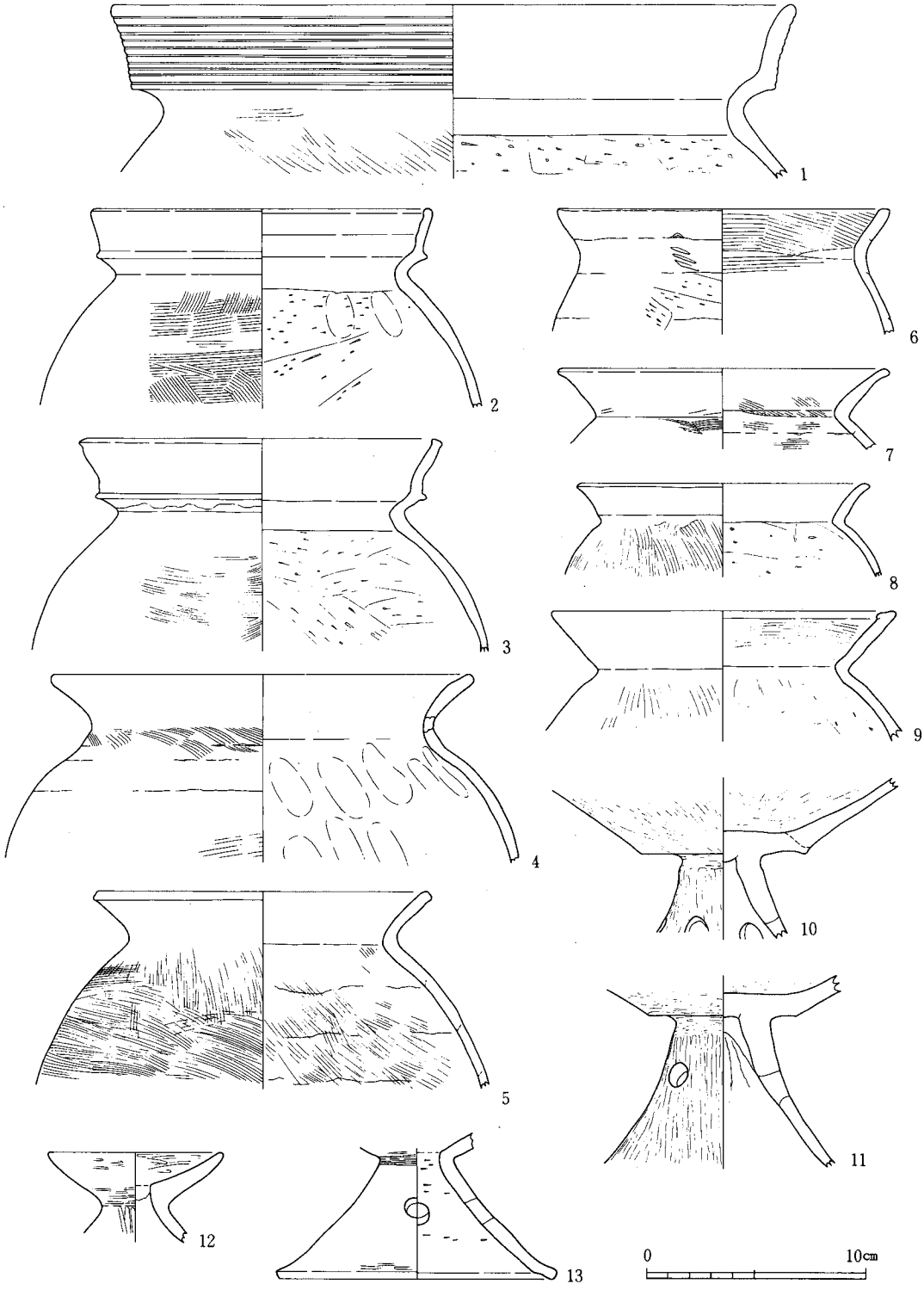
だが、頚部内面・口縁端の形状は20～25と似る。27・28は壷形土器。27は無文の有段口縁を持ち、頚部はあまり括れない。広口壷としたい。28は頚部から肩部である。内面はケズリを行っているが、非常に厚手の大型壷である。頚部には突帯を貼りその上に斜位の刻みを巡らす。内面は剥落ぎみであるが炭化物の付着が認められる。29は高杯形土器の杯部。底と口縁先端を欠くが、有段鉢に類する器型と思われる。

この他図化できなかったものもあるが、2号大溝出土土器群は下層・中層がほぼ弥生後期終末に限定して位置付けが可能である。上層は古墳前期を中心としてその前後の時期の土器が少し混在している状況にある。

3号大溝出土遺物（第33図、第34図）

第33図は上層（第17図層11～16）出土。1～4は土師器。1・2は布留系の甕形土器。1は端部内面を分厚く丸める。2は肩部に「×」字状のヘラ文様が入る。3はくの字口縁の甕形土器。緩やかに外反して広がり、調整はハケ基調。頚部外面に沈線が入り、端は面を取る。北陸にはほとんど見られないタイプで、信州など東日本系の土器との折衷が考えられる。4は畿内系の高杯形土器。支柱のエンタシス度は小さく、裾は屈曲して偏平に広がる。調整は粗いヘラミガキが認められる。5は甕形土器肩部で、櫛状具による横位の連続刺突が見られる。6は有段口縁の広口壷。口縁帯には非常に幅が広い擬凹線を持つ。外面頚部以下の調整はミガキであるが非常に粗く、擬凹線の幅にほぼ等しい太い単位である。共通の工具によるものかもしれない。7は有段の脚部であり、欠いているが棒状の支柱が付くと思われる。段部に上位から刺突、沈線3条、スタンプ文、羽状の刺突を巡らす。スタンプ文はD類である。8は須恵器、甕胴部である。

第34図は下層（第17図層17）出土。9は縄文土器。半截竹管による三角形区画内に円形の押圧文を配する。諸磯a式土器の文様に類似しており、縄文前期に遡る可能性がある。10～11は甕形土器。10は有段口縁に擬凹線を持つ大型甕。11は短くまとまる有段口縁で、端は水平に面を取って少し外側へ引き出す。近江系の受口状口縁甕に類似する。12～14は壷形土器。12はほぼ完形だが、口縁のみは残存がわずかである。頚部にほとんど屈曲がなく口縁が真っ直ぐに立ち上がる壷で、小振りだが非常に厚手で雑につくられる。底部が特に厚いが、底面は中央が窪んでいる。土器の胎土は角閃石を多量に含んでいる。13は口縁部に粘土を貼り足して有段状の口縁帯をつくり、擬凹線を引いたもの。調整はハケ基調。14は口縁端を上下に拡張するもの。口縁帯は上端を欠くため全形は不明だが、器面にかすかに剥離痕があり、浮文があった可能性がある。15・16は蓋形土器。15は直線的に開くタイプで、端部をなでて面を取り、中凹みのつまみが付く。16はより小型で、外反して開き、端部は面を取る。つまみの凹みは深い。17～19は底部。17の底面は中凹み。18は低平な台で、完存しており、径6.9cmを測る。19は有段高坏に似るが、非常に厚手で粗いつくりであり、台付鉢の類と思われる。20～22は高杯形土器。20・21は杯部であり、どちらも有段鉢に類するもの。20は薄手で流麗な形態で、内外面赤彩の優品。21はより厚手で直線的な形態に感じられる。22は杯口縁・脚裾を欠くが、有段の杯部に無段の脚部が付いていると思われる。23・24は小破片だが器台形土器の器受け部であろう。23は有段部分で、口縁帯には擬凹線が引かれ、下位はその上から刺突を巡らせている。刺突原体は貝殻腹縁の可能性がある。24も器受け部でお



第35図　大長野Ａ遺跡　落ち込み出土遺物実測図(1)（Ｓ＝1/3）

そらく有段であろう。沈線３条を文様帯とし２段配し、その間にスタンプ文を巡らす。スタンプ文は同心円文である。25・26は脚部で、おそらく高杯形土器と思われる。25は有段脚。透孔は４方に持つ。支柱端は杯部とは剥離しているが、接合時に密着させるために入れたと思われる切り込みが見られる。26も有段脚で、段部に沈線が３条入れられ、端は斜め上へ折り返して処理されている。27は土錘。黒斑があり、重量39.1ｇを測る。

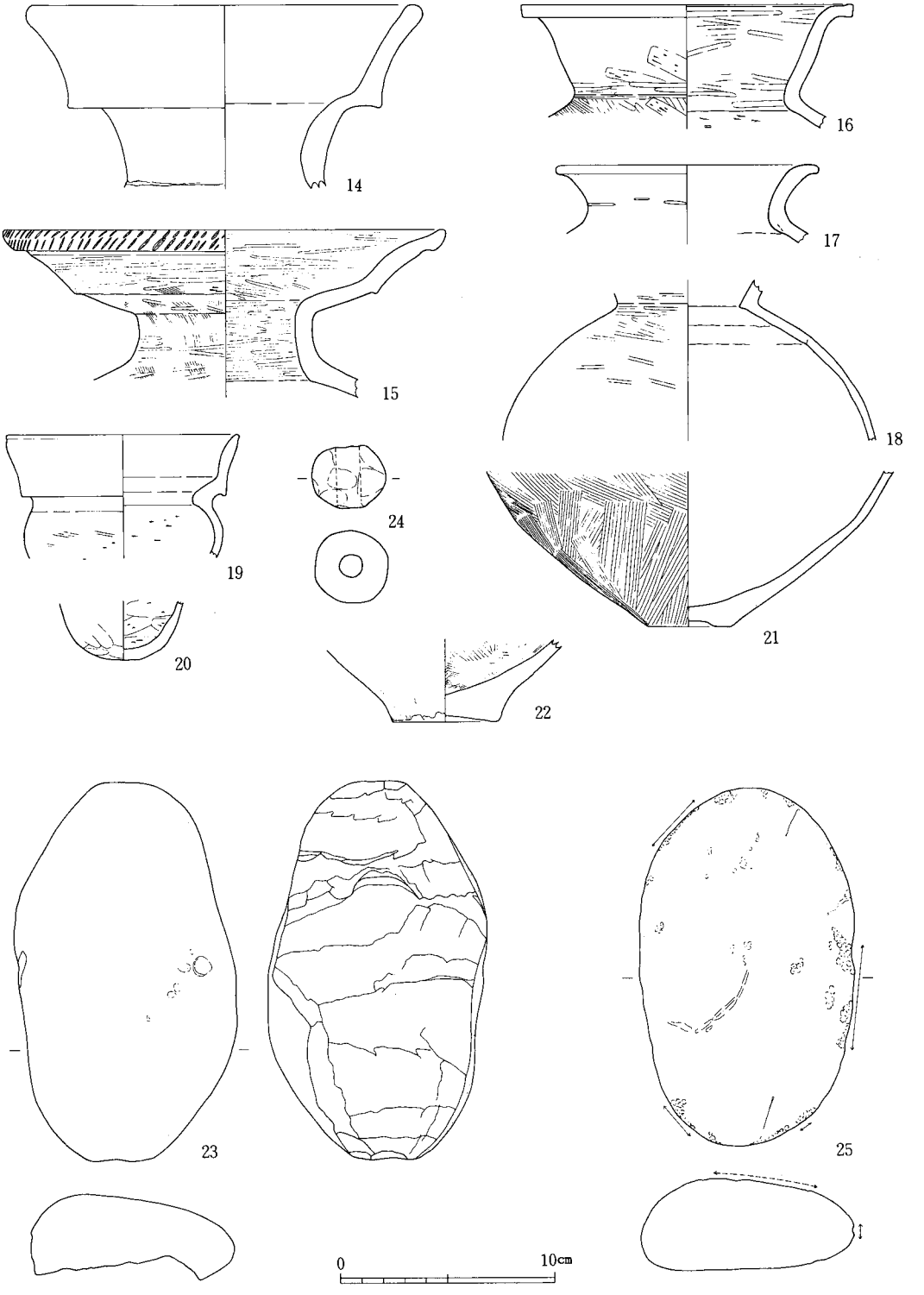
３号大溝は特に下層より弥生後期後半から古墳前期にかけての土器が非常に多く出土しているが、基本的には混在した状況であり一括性は低い。

ｃ）落ち込み出土遺物

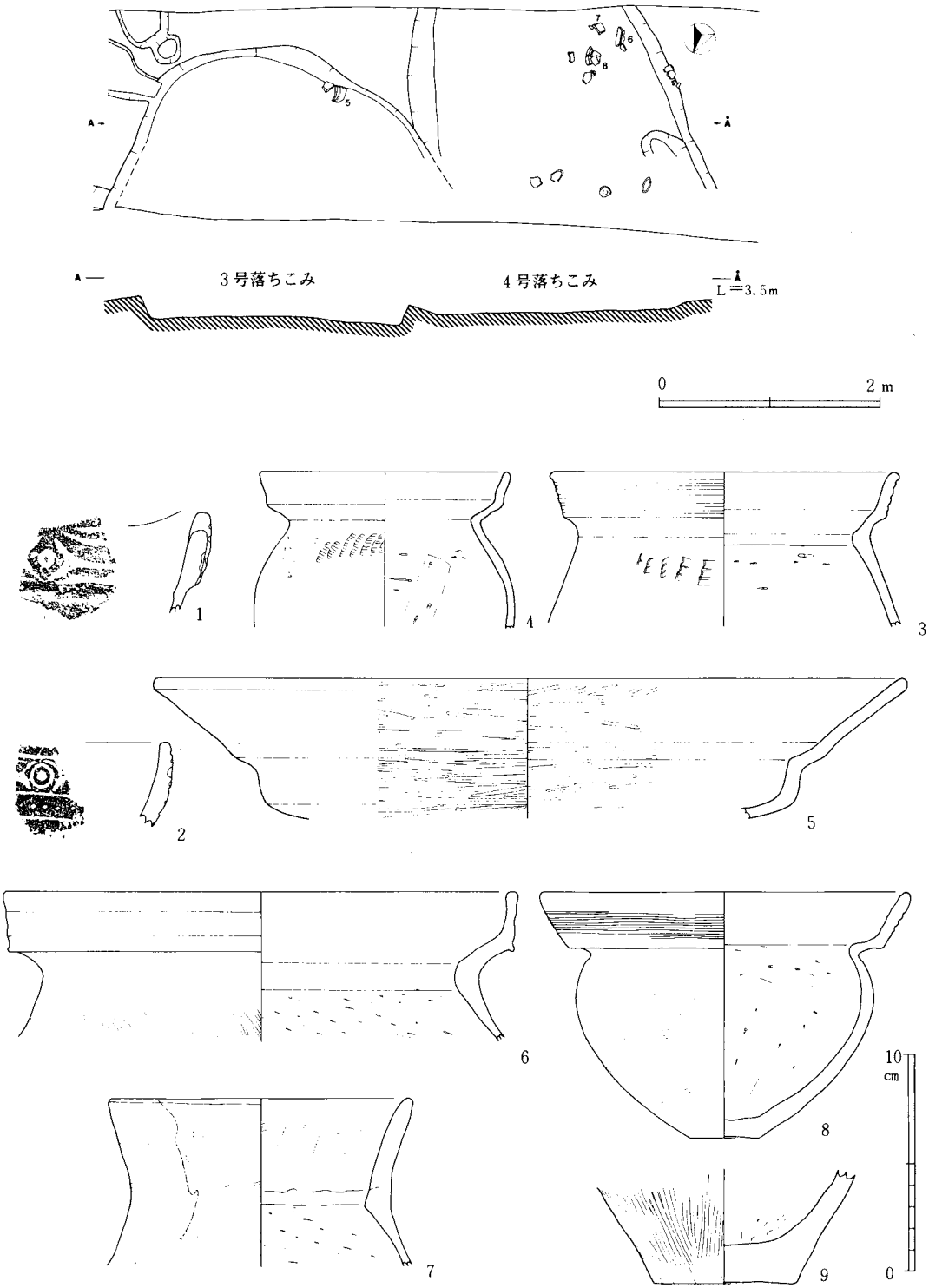
１号落ち込み出土遺物（第35図～第36図14～23）

出土遺物の大半は土師器である。第35図１～10は甕形土器。１は大型甕で、有段口縁に擬凹線を持つ。２・３は有段口縁の口縁帯下端が突出する、山陰系甕。２は端を内面に丸め返す。３は頸部に不整な弱い稜線が入る。調整の隙間であろうか。４～９はくの字口縁甕。４は口縁端が丸みを持って自然におさまる形態、外面に接合痕が見える。調整はハケをナデ消しているようで、接合部にはハケが残る。５は口縁端が斜めに面を取る。胴部の調整は細かいハケを基調とし、内面に接合痕が見える。６は外面には接合痕が見え、口縁のラインも不整で、作りはよくない。調整は全体的にナデを基調とし、外面の一部にヘラケズリ、内面口縁部にヨコハケを行う。ヨコナデなど回転運動を利用する調整は見られない。この様な特徴は近江系、特に湖北地方の粗製甕と共通するものであり、６もその類の一つであろう。７は鋭く屈曲する口縁部を持ち、頸部外面はヘラ状具をあてて軽くならしているようである。調整はハケ・ナデ基調。８も同様に屈曲が鋭く、頸部外面はヘラ状具で調整しているが、口縁は７より短く、胴部調整は外面ハケ・内面ヘラケズリと明らかに分ける。９は布留系甕。内面に肥厚する口縁端部は水平面を持つ。10・11は高杯形土器。どちらも平坦で少径の杯底部に、緩やかに広がる支柱が付く、東海系の有段高杯であろう。10は６方に透かし孔を持つ。11は支柱内に杯との接合部から繋がって粘土紐が付着しており、充填時に余ったものをなでつけたと思われる。透かし孔は３方に持つ。12・13は器台形土器。どちらも小型器台であり、12は器受け部、13は脚部である。12は端が短く細く尖る器受け部で、脚部は大きく広がるようで13の様なタイプが付くのであろう。13は大きく広がる脚部で、低器高で偏平なプロポーションになる。

第36図14～18は壷形土器。14・15は有段口縁を持つ。北陸以外の地域では一般に二重口縁と呼ばれることが多い形態。15は外反度・外展度ともに高く、端はなめらかに丸みの付いた面を取る。全体に作りは雑で、段部は不整、ヘラミガキは不徹底で所々にハケが見える。端は斜位の刺突を２段、同じ方向に巡らせる。16・17はくの字口縁を持つ短頸の広口壷。16の頸部は屈曲が明確で、口縁部は端をさらに水平に曲げ、鉛直に面を取る。17はほぼ16と同形態ながら、より短頸で丸みを持つ。外面頸部には沈線が断続的に見られるが、調整目的の工具痕と考えている。18は頸部の屈曲が明確で、直線的に広がって伸びる口縁部が付くと思われる。19は鉢形土器。有段口縁を持ち、端が尖る。内外面に煤が付着する。20～22は底部。20は丸底で、小型土器の底部であろう。21は胴部下半も遺存し、調整は外面ハケ、内面ナデである。底面は中凹みする。22は厚手で、外



第36図　大長野Ａ遺跡　落ち込み出土遺物実測図(2)（Ｓ＝1/3）



第37図　大長野Ａ遺跡　落ち込み実測図・落ち込み出土遺物実測図(3)（遺構Ｓ＝1/60、遺物Ｓ＝1/3）

面ナデ、内面ハケである。23は石。一面を欠損する。重量は1011.1ｇを測る。石材は流紋岩である。

1号落ち込み出土土器群は、一部重複する4号溝周辺で混在する弥生土器と区別を付けにくいが、その大半は古墳前期の土師器である。土師器については古墳時代前期前半を中心とするものとして、調査区内で最も量的にまとまっている資料と考える。

2号落ち込み出土遺物（第36図24・25）

第36図24は土錘である。重量は29.6ｇを測る。25は石である。平坦な面を一面持つ。重量は1089.1ｇを測る。石材は流紋岩である。

3号落ち込み出土遺物（第37図1～5）

第37図1・2は縄文土器である。1はおそらく波状口縁となるもので、端は面を取る。数条の沈線と玉抱き三叉文が見られる。2は口縁の残存が少なく、波状か平縁かはわからない。沈線間に上から玉抱き三叉文、列点文2段が見られる。列点文は上下で点の位置をずらして交互に点が配されると思われる。1・2は縄文晩期初頭の御経塚式に位置付けられる。3・4は有段口縁の甕。3は直線的な口縁帯に擬凹線を持ち、肩部に連続刺突が見られる。刺突は非常に曲線的なラインを持ち、貝殻腹縁による可能性もある。4は3よりやや小振りの甕で、口縁帯は無文、肩部にはハケ状具による連続刺突が見られる。5は高杯形土器の杯部。口径30㎝をゆうに超える大型品で、有段鉢に類する形態である。

4号落ち込み出土遺物（第37図6～9）

第37図6は甕形土器。やや大型で、有段口縁を持ち、口縁帯は無文。7は壺形土器。頚部は外面ではほとんど屈曲せず、口縁部はわずかに開く程度に伸びる。口縁部は内外面ともハケと指頭圧痕が顕著に見られ、ナデで消し切れていない。また、外面には煤が付着しており、確実に煮沸に使用しているようである。8は鉢形土器。口縁部は有段で口縁帯は擬凹線を持つ。同じ口縁形態の甕を上下に圧縮したような器型である。底部は安定感のある平底である。9は底部である。底面は非常に平坦で、安定して接地する。

3号落ち込み・4号落ち込み出土土器群は少量ながら、弥生後期後半を中心時期とする比較的まとまった資料と言える。

d）土坑・ピット出土遺物

2号土坑出土遺物（第38図1）

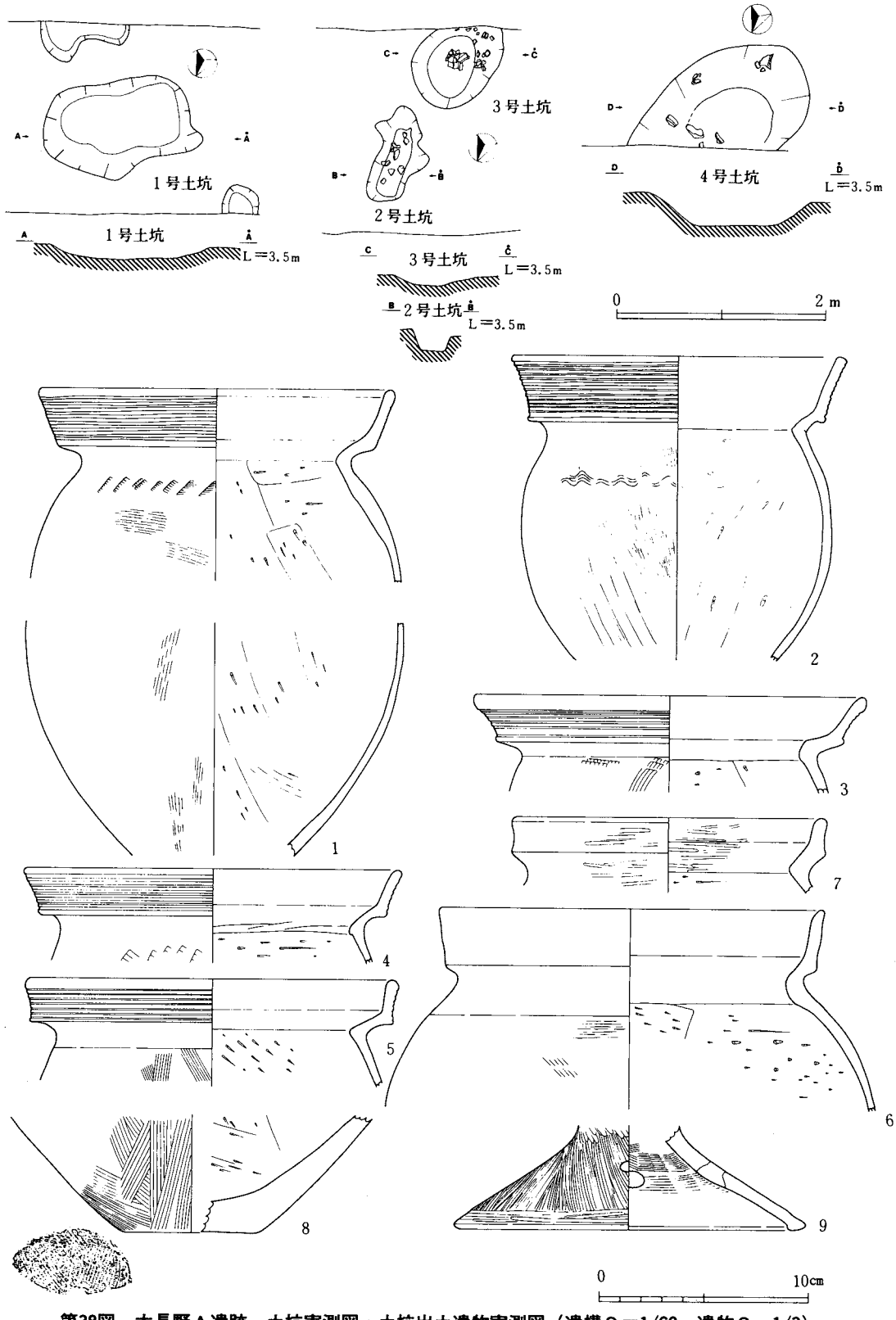
第38図1は甕形土器、図の上半・下半は同一個体と思われるが接合せず、図上で復元したもの。有段口縁で、口縁帯に細い多条の擬凹線を持つ。肩部にはハケ条具による刺突を巡らせる。

3号土坑出土遺物（第38図2・3）

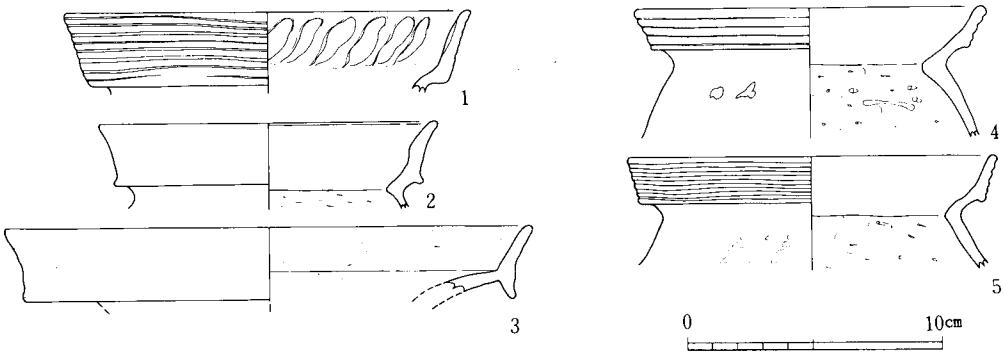
第38図2・3は有段口縁の甕形土器で、口縁帯に擬凹線を持つ。2は直線的に外傾する口縁帯と内面く字屈曲の頚部、口径ほどには張り出さない胴部からなる。肩部には波状文が1/4周ほどめぐるが、他では見られない。一部ハケ、ナデで消された部分もある。3は2に比して短いがより外傾度が大きい口縁帯を持つ。頚部内面は筒状になる。

4号土坑出土遺物（第38図4～9）

第38図4～6は有段口縁の甕形土器。4・5は口縁帯に擬凹線を持ち、頚部内面がくの字に屈



第38図　大長野Ａ遺跡　土坑実測図・土坑出土遺物実測図（遺構Ｓ＝1/60、遺物Ｓ＝1/3）



第39図　大長野Ａ遺跡　ピット出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

曲するもの。４は肩部に刺突が確認される。６は口縁帯が無文のもので、頸部内面は筒状になる。外面は広範囲の黒斑が見られる。７は短い有段の口縁部で、内外面へラミガキ調整が行われており、壷形土器であろう。有段口縁の短頸広口壷と思われる。８は底部。外面は広い範囲で黒斑が見られる。９は高杯形土器の脚部である。無段脚で八の字状に広がる。端は肥厚して接地面を取り、外面のみは横位のへラミガキを行っている。

２号土坑・３号土坑・４号土坑出土土器群はそれぞれ少量ずつながら、弥生後期後半を中心時期とする資料と言える。

ピット出土遺物（第39図）

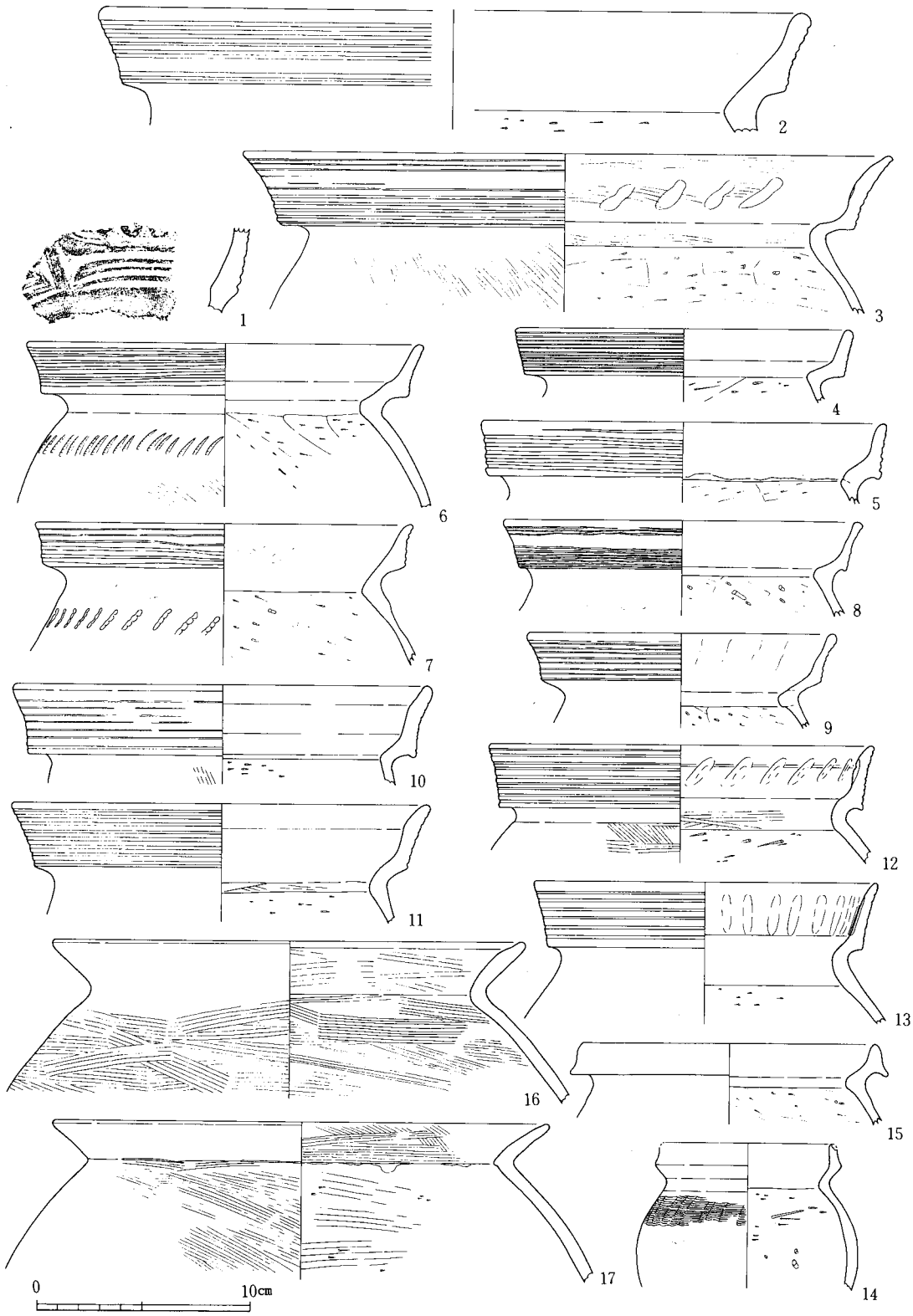
第39図１・２は４号ピット出土の甕形土器。どちらも有段口縁であるが１は口縁帯に擬凹線を持つもの。内面は指頭圧痕が密に巡る。２は口縁帯が無文でその端が尖るもので、頸部は内面がくの字に屈曲する。３は13号ピット出土の器台形土器。有段の器受け部で、口縁帯は下方にも拡張され垂下される。４は16号ピット、５は21号ピット出土の甕形土器。４・５とも口縁は有段で、頸部は内面がくの字に屈曲する。４は口縁帯が無文で、ヨコナデの痕跡が凹線状に見えるもの。肩部には小凹みが見られるが、刺突かどうかは不明。５は口縁帯に擬凹線を持ち、肩部にハケ状具によるらしい刺突を持つものである。

ｅ）包含層・その他出土遺物（第40図～第43図）

包含層出土遺物（第40図～第42図、第43図１・２・12～14）

遺物には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、土製品、石器類があり、区別し難いものもあるが、弥生土器が主体と思われる。

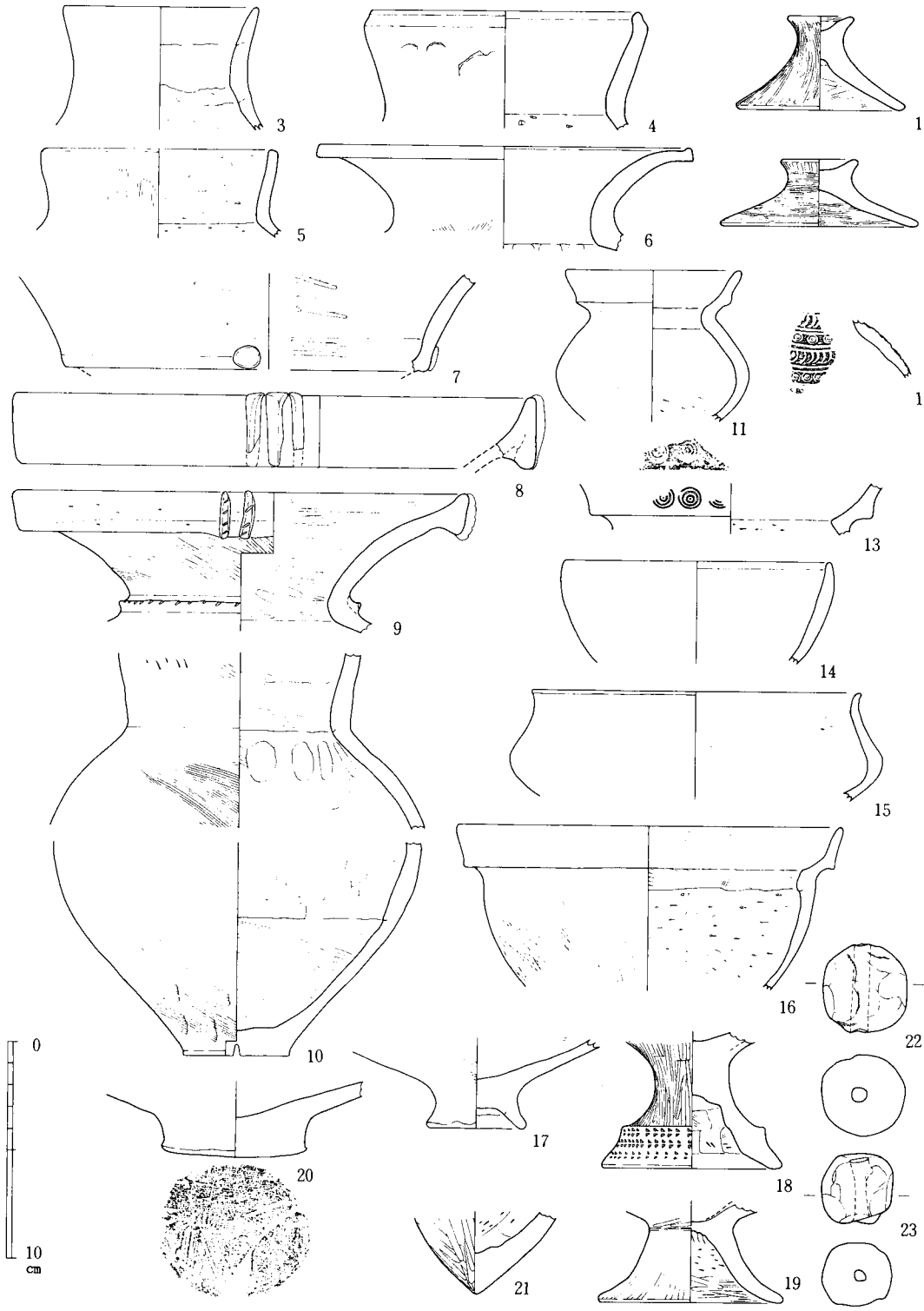
第40図１は縄文土器。端が欠けるが波状口縁の口縁部と思われる。上から、口縁に沿って弧状に巡る沈線２条、三叉文を配する直線的な太い沈線１条、沈線３条からなる文様帯が確認される。縄文後期末から晩期初頭に位置付けられる。２～17は甕形土器。２～13は有段口縁で擬凹線を持つもので、うち２・３は大型甕。２は厚手で、口縁帯は短く端を自然におさめる。３は２と対照的に薄手、口縁帯は長く伸びて外反し端は尖る「月影甕」の形態。４～13は概ね中型甕の口径を測るものである。４・５は厚手で短い直立気味の口縁帯を持つもので、頸部は内面くの字に屈曲する。６は４・５に比べ口縁帯の外傾度が大きく、頸部内面はわずかながら筒状部を持つ。７は



第40図　大長野Ａ遺跡　包含層ほか出土遺物実測図(1)（Ｓ＝1/3）

短い口縁帯の端を鋭く尖らせるもので、頸部は内面くの字に屈曲する。6・7は肩部にハケ状具による刺突を巡らせている。8・9は端を丸く厚めにおさめるもの。頸部内面は筒状になるが狭く不整であり、明確な筒状とは言えない。10・11は口縁帯がやや厚めながら内面に稜を持ち、端が尖り気味のもの。11の内面頸部は狭いながら筒状部を持ちヨコハケが見られる。12は端の尖りが顕著で、筒状の頸部内面にヨコハケが見られる。口縁帯内面は指頭圧痕が巡り、中位にヨコナデ工具の当たり具合からか沈線が走る。13はやや摩滅しており、本来の稜の鋭さを欠く。胴部は大きく膨らんで張り出すように思われる。14は内傾する無文の口縁帯を持つ、小型甕。端は欠けている。頸部内面はくの字屈曲、肩部外面に文様帯を設ける。文様はハケ状具をわずかに上下しながら横位に動かしたと思われ、振幅の小さい波状文風である。15は断面三角形口縁で、口縁帯は無文、上下端をわずかだけ引出すもの。当遺跡内では希少な口縁形態である。16・17はくの字口縁を持つもので、土師器と思われる。16はハケ調整を基調としており、口縁部外面のみヨコナデで消している。端は内面で稜を持たせ、若干細めている。17は頸部内面は鋭く屈曲するが粘土がはみ出して盛り上がる一方、外面は細いヘラ状具による沈線状の切り込みが入る。

第41図1・2は小型の蓋形土器。1は径の割に器高があり、つまみの凹みも深い長身のタイプ。内面下半も粗いながらミガキ調整を行う。2は1に比べて偏平なタイプで、内面下半にミガキ調整を行うがより丁寧である。3～12は壷形土器である。3は広口で、わずかに外広がりに伸びて端を細める口縁を持つ。外面には黒斑が見られる。4は3と同様の器形ながら、端を内屈させて面を取っている。5は直立する短めの口縁を持つもので、内面はミガキ調整。外面には黒斑が見られる。6～9は土師器と思われる。6は外反して大きく開く口縁で、端は鉛直に面を取り少し内面に折り返している。7は大径の有段口縁と思われ、段下端にボタン状の浮文を1個付す。浮文のすぐ横は欠けており、この種の浮文は1個だけ貼り付けられる事例は少なく、複数貼りつけられていた可能性が高い。8は口縁端に粘土を足して垂下させ口縁帯を形成するもので、縦位に棒状の浮文を付す。浮文は3本単位で、中央のもののみ口縁帯を覆う長さであるが、その両側のものは磨滅もしくは剥離しており、意図的に伸ばしているのかどうかは不明である。9は外反して大きく開く口縁部を持ち、端を肥厚・拡張して口縁帯を形成するもの。頸部には突帯を付して刻み、口縁帯には棒状の浮文を縦位に2本付す。浮文の単位は3条以上となる可能性があるが、すぐ横が欠けており不明である。10は壷上半部と下半部で、接合しないが同一個体と思われる。口縁は端付近を欠くが直線的に立ち上がって伸びるようである。底面は平坦で中央に貫通しない小穴を空けている。11は小型壷で、有段口縁を持つもの。胴部は偏球状に張り出すと思われる。12は肩部の小破片であり、2条単位の沈線間に爪形の刺突とスタンプ文を交互に巡らす。スタンプ文は同心円文である。器外面はミガキのち着色しており赤彩、黒色被膜の痕跡が残る。12はこの様に非常に華麗に飾られる土器であり、装飾壷の類と思われる。13は有段口縁を持ち、口縁帯にはスタンプ文を巡らせていると思われる。スタンプ文は四重の同心円文である。低器高なら鉢になる可能性もある。14～16は鉢形土器である。14は丸みをもって立ち上がる口縁の先端を細く尖らせるタイプ。15は偏平な袋状の器形で端は細めて外反させる。内外面とも丁寧なミガキ調整の精製品。16は有段口縁を持つもので、頸部は内面筒状でヨコハケが見られ、胴部下位はかなり

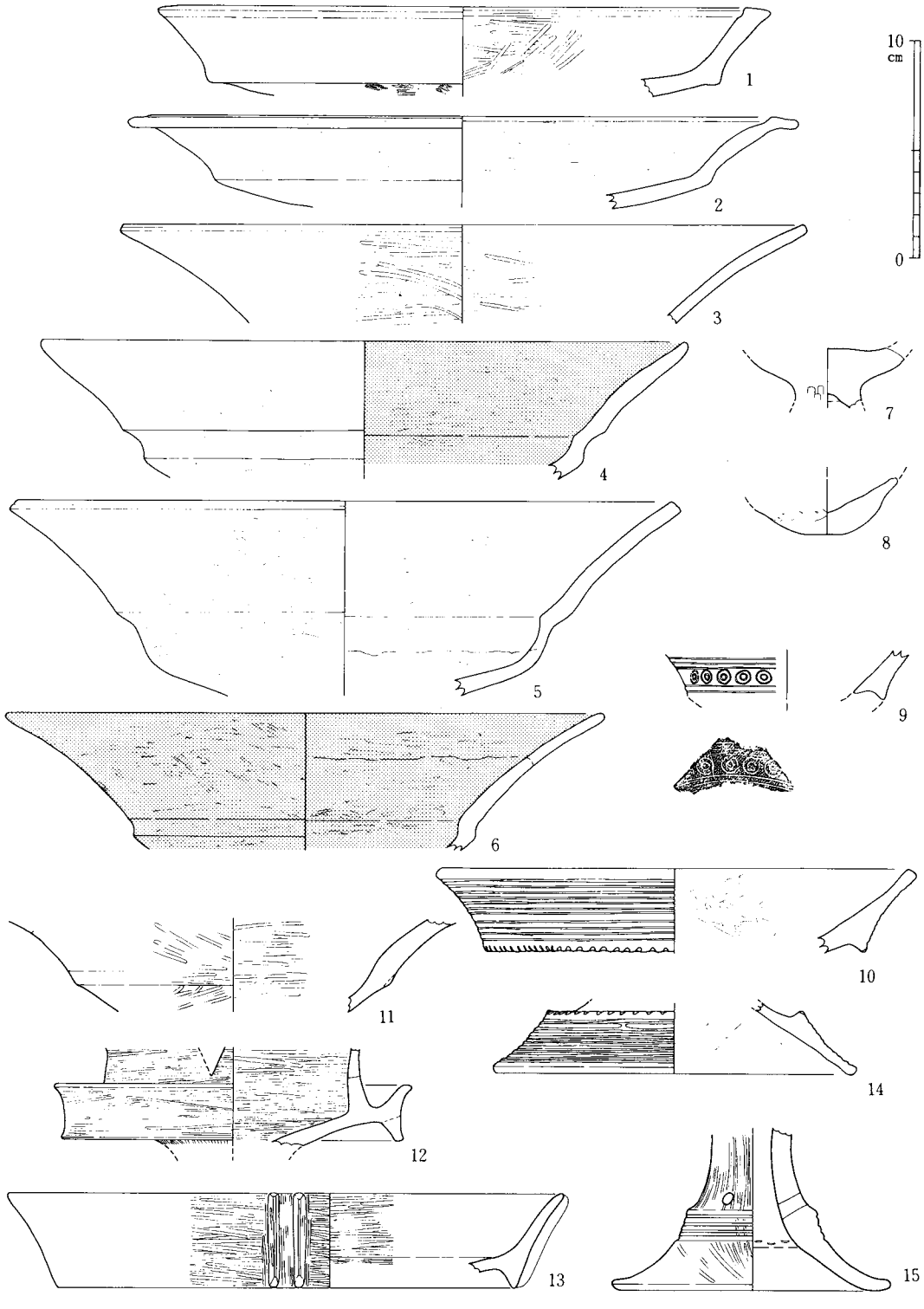


第41図　大長野A遺跡　包含層ほか出土遺物実測図(2)（S＝1/3）

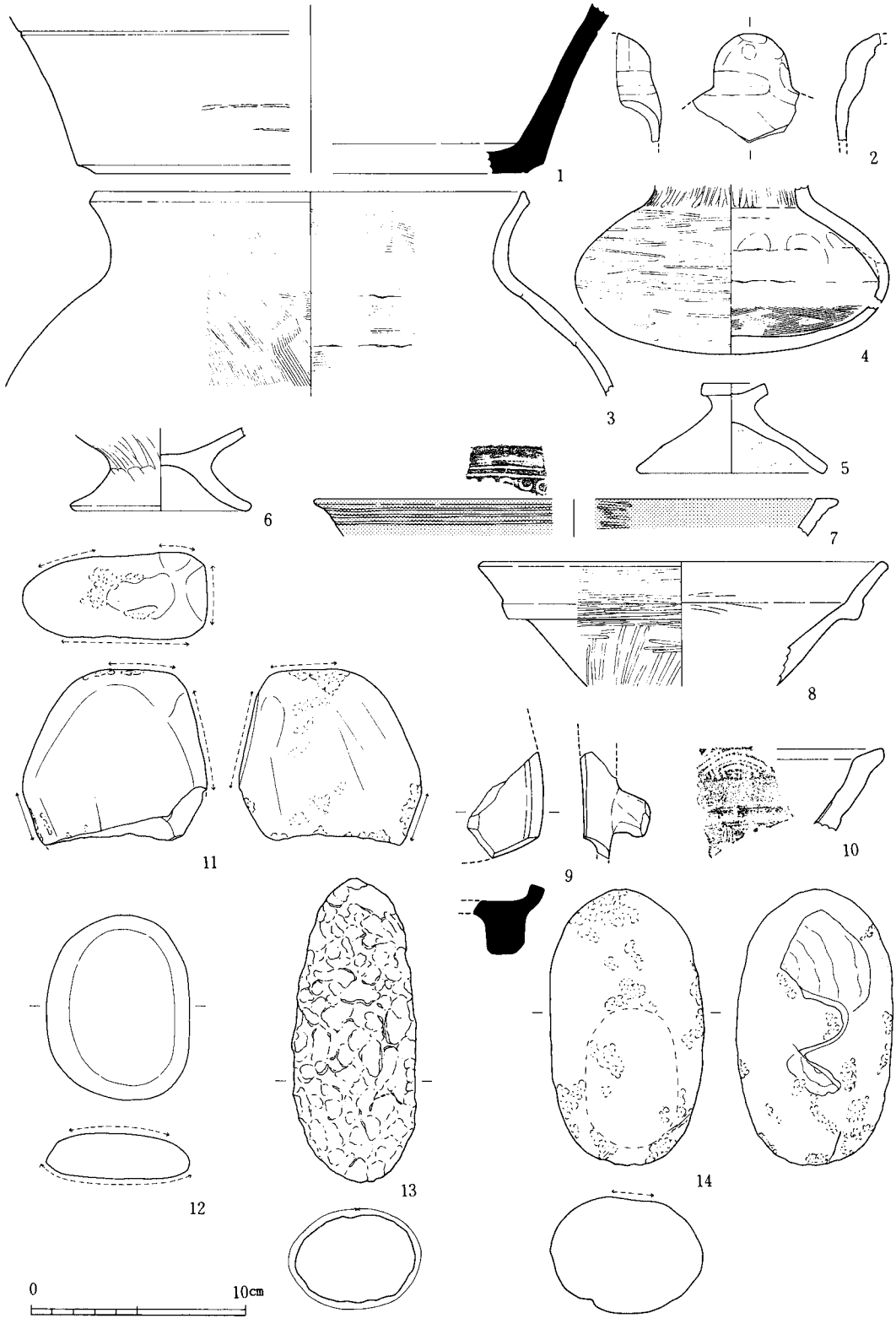
薄手になっている。17～22は底部である。17～19は台脚を持つもので、17は上げ底に近い低い台が付き、内外面ともハケ調整を基調とする土器。18は有段脚が付くもので、きわめて厚手で重量感に富む土器。口縁帯には三角形の刺突を底辺を向い合せて配したものを単位として同じ向きで三段に渡って巡らせている。土器本体にはさらに盛んな加飾が予想され、装飾壷か鉢の類と思われる。19は八の字に開き、裾で微妙に屈曲して広がる台。調整はヘラミガキ基調。20は分厚い円盤底で、底面にはヘラ状具による引っ掻きの痕跡が見られる。球形の胴部を持つ壷の底部となる例が多い形態である。21は厚手で尖底、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ調整を行う。尖底の鉢と思われる。22・23は土錘である。どちらも不整球形で一部に黒斑が見られる。重量は22が41.5g、23が31.5gを測り、23が外見通りやや小型で軽量である。

第42図1～9は高杯形土器である。1～7は杯部で、うち1・2は有段の杯部。1は厚手で、口縁部が短く、身が浅く、端は面を取るもの。2は1より口縁が長く外反するもので、端は外側へ折り返して面を取る。3は口縁部が長く発達したものであるが、底部の形態は不明。4～6は抉り状の段部から口縁部がよく発達して伸びる、有段鉢に類する形態の杯部。4は端に面を持たず、自然に細めておさめている。赤彩は内面のみ痕跡が残り、外面は確実ではない。5は端を斜めに面取るもの。6は段部分の凹凸が小さくなり、端は面取りせずおさめるもの。7は杯底部のみ遺存しているもの。8は杯部に充填する栓が剥離したものと思われる。内外面はヘラケズリされるが、内面は凹んでおり、更に粘土が貼られて平坦な杯底部となっていたのであろう。9～15は器台形土器であり、すべて有段を基本器形とする。9～13は器受け部である。9は口縁下半で、段近くで剥離したと思われる。比較的小径に見えるが、口縁がよく発達して伸びるなら大型品となる可能性もある。上3条、下2条の沈線間にスタンプ文を巡らせる。スタンプ文は二重の同心円文である。10は口縁帯に多条沈線を入れ、下端の段に刻みを巡らすもの。11は高杯の可能性を残すが、底が収束せず緩やかに狭まるようであり、器台形土器と推定した。12は器受け部からひとまわり小径の口縁が立ち上がる、いわゆる装飾器台。透かし孔の形状、単位は不明。13はかなり大型品と思われる品で、口縁帯上端が伸びるのみではなく、下端も少し垂下される。口縁帯には2本の棒状浮文を縦位に貼り付け後、その周辺のみ縦位にヘラミガキしている。14・15は脚部である。14は10とほぼ同じ文様と器形を持つ。内面には10のヘラミガキのように丁寧な調整がなされず、10より小径であることから、脚部と判断した。10・14は同一個体で上下対照形の有段器台となる可能性が高い。15は小径のわりに、沈線4条が入る段部分が重点的に厚手に作られ、裾が外反する脚部。装飾器台に多い脚形態である。

第43図1は須恵器で、大型の平底の鉢である。胴部には沈線が1条見られる。鉢Cに分類されるものであり、8世紀代に多く見られる[1]。2は土製品で、おそらく泥人形の頭部がほぼ半分に割れたものであろう。近世以降の品である。12～14は石器の可能性を持つ石である。12は偏平な面の表裏とも平滑であり、重量203.5gを測る。石材は珪質の流紋岩である。13は断面楕円形、平面形は長短比の高い、乳棒状の石である。非常に脆く細かく自然剥離しており、使用痕は不明確である。重量は529.6gを測る。石材は花崗岩である。14も風化しており、使用痕は不明確である。重量は793.4gを測る。石材は安山岩である。



第42図　大長野Ａ遺跡　包含層ほか出土遺物実測図(3)（Ｓ＝1/3）



第43図　大長野Ａ遺跡　包含層ほか出土遺物実測図(4)（Ｓ＝1/3）

その他出土遺物（第43図３～11）

第43図３～10は表面採集された品である。３は甕形土器。頸部の屈曲は鈍く、口縁部は端を面取りする。調整はハケ基調である。４は壷形土器。偏球形で無台の胴部・底部は同一個体と思われ図上で復元した。内面調整は胴部ナデ、底部ハケと分かれる。５は小型の蓋形土器。端は面取り、内面はヘラケズリ調整である。６は底部。ハの字に広がる低台脚が付く。７・８は器台形土器。７は器受け部口縁の端で、水平面を取っている。口縁帯には上から沈線３条、竹管スタンプ文を巡らせる。８は有段で、脚部から器受け部へは逆ハの字状に開くものと思われる。外面には黒斑が見られる。９は須恵器、風字硯の破片で、脚の付く部分である。縁は面取りしている。平安時代のもので、産地は南加賀と推定される。10は珠洲焼、すり鉢である。端は内面下がりの面を取って波状文を巡らしている。下半は残りが悪いがおろし目は存在した痕跡がある。珠洲Ⅵ期、15世紀後半ごろに位置付けられる品であろう[2]。11は16区の旧河道出土の品で、石器の可能性を持つ石である。半分ほどを欠損するが、偏平な面の片面と側面が平滑になっている。重量434.5ｇを測る。石材は砂質の凝灰岩もしくは砂岩である。

４　小結

大長野Ａ遺跡の調査で検出された遺構は溝10条、大溝３条、落ち込み４基、土坑４基、ピット24穴であった。10条の溝は、幅は狭いが深くしっかり掘り込むものと、浅くプランが不明瞭なものに大別される。前者には１～４号溝が、後者にはそれ以外の溝が相当する。後者の溝については８・９号溝など複数の遺構が重複している事が明らかな遺構も含まれる。後者の溝に似た状況にある遺構に４基の落ち込みがある。土坑は小規模で出土遺物も少ない１～３号土坑と、全掘できていない４号土坑がある。ピットは掘立柱建物の可能性を持つピット群を３群設定できた。各ピット群はある程度の距離を置いた位置関係にあり、住居の配置を示すものかもしれない。また、１号溝では多量の土器が出土したが甕形土器の量比がきわめて高く、２号溝では上半を欠損し脚部のみとなった高坏・器台が多く出土しているなど、特殊な投棄状況を示す遺構があり、特筆しておきたい。各遺構は全掘できていないものが大半で、全形や方向、性格等には不明な点が多い。遺構は調査区の４区～15区に分布するものであり、この間約170ｍ程がコンスタントに遺構が見られる範囲となる。特に細砂を遺構面のベース土とする７区～13区では遺構の集中が顕著であった。７区～13区の以東、以西へは徐々に遺構密度が減って行き、東の１～３区、西の16～18区では希薄な状況であった。

出土した遺物は多く、弥生土器が主で、土師器が次ぐ。弥生土器は後期後半、後期終末の連続する２時期のものが見られる。後期後半の土器は８号溝、２～４号土坑、３・４号落ち込みから出土したものがよくまとまっている。また、４号溝、３号大溝から出土した土器にもこの時期のものがある。包含層出土の土器では第40図４～７、14、15、第41図12、13、18、第42図１、２、９、10などが単品でもこの時期に位置付けが可能であり、その分布の中心は12区～15区にあり、遺構と一致している。後期終末の土器は１号溝、１号大溝下層、２号大溝中・下層から出土したものがよくまとまっている。分布はこれらを中心として、５区～13区の各遺構、包含層に広い範

第３表　大長野Ａ遺跡　出土遺物一覧(1)

挿図No.	出土遺構	実測No.	備考
第19図1	1号溝⑥⑦の下	C 8	弥生土器甕
2	1号溝②	C 3	弥生土器甕
3	1号溝覆土	C286	弥生土器甕
4	1号溝	C34	弥生土器甕
5	1号溝③	C47	弥生土器甕
6	1号溝	C11	弥生土器甕
7	1号溝⑮	C27	弥生土器甕
8	1号溝覆土	C12	弥生土器甕
9	1号溝覆土	C20	弥生土器甕
10	1号溝	C16	弥生土器甕
11	1号溝⑦	C 5	弥生土器甕
第20図12	1号溝③	C 6	弥生土器甕
13	1号溝	C32	弥生土器甕
14	1号溝⑥⑦の下	C10	弥生土器甕
15	1号溝覆土	C25	弥生土器甕
16	1号溝覆土	C28	弥生土器甕
17	1号溝覆土	C290	弥生土器甕
18	1号溝	C33	弥生土器甕
19	1号溝覆土	C26	弥生土器甕
20	1号溝	C 1	弥生土器壷
第21図21	1号溝⑲	C 7	弥生土器壷
22	1号溝	C31	弥生土器鉢
23	1号溝⑤	C 9	弥生土器鉢
24	1号溝覆土	C22	弥生土器台付鉢
25	1号溝②	C30	弥生土器底部
26	1号溝覆土	C24	弥生土器高杯
27	1号溝①	C 2	弥生土器脚部
28	1号溝覆土	C23	弥生土器脚部
29	1号溝	C29	弥生土器脚部
第22図1	推定1号溝	C21	弥生土器甕
2	推定1号溝	C17	弥生土器甕
3	推定1号溝	C18	弥生土器甕
4	推定1号溝	C15	弥生土器甕
5	推定1号溝	C19	弥生土器甕
6	推定1号溝	C14	弥生土器甕
7	推定1号溝	C13	弥生土器蓋
第23図1	2号溝⑮	C287	弥生土器甕
2	2号溝	C289	弥生土器甕
3	2号溝⑬	C91	弥生土器甕
4	2号溝④	C35	弥生土器甕
5	2号溝	C288	弥生土器甕
6	2号溝覆土	C42	弥生土器壷底部
7	2号溝⑦	C37	弥生土器蓋
8	2号溝	C41	弥生土器鉢
9	2号溝⑤	C281	弥生土器高杯
10	2号溝⑪	C39	弥生土器脚部
11	2号溝⑧	C40	弥生土器脚部
12	2号溝	C38	弥生土器脚部
13	2号溝⑨	C36	弥生土器鉢
14	2号溝①	石 8	石
第24図1	3号溝⑤	C45	弥生土器甕
2	3号溝①	C43	弥生土器壷
3	3号溝⑦	C46	弥生土器脚部
4	3号溝④	C44	弥生土器脚部
5	5号溝覆土	C51	弥生土器甕
6	5号溝⑦	C52	弥生土器甕
7	5号溝覆土	C55	弥生土器壷
8	5号溝	C50	弥生土器壷
9	5号溝②	C49	弥生土器脚部
10	5号溝⑥	C54	弥生土器脚部
11	7号溝覆土	C56	弥生土器甕
12	7号溝覆土	C53	弥生土器鉢
13	7号溝覆土	C57	弥生土器高杯
14	7号溝覆土	石 7	石
第25図1	8号溝覆土	C72	弥生土器甕
2	8号溝⑯	C67	弥生土器甕
3	8号溝⑤	C58	弥生土器甕
4	8号溝⑦	C63	弥生土器甕
5	8号溝覆土	C73	弥生土器甕
6	8号溝覆土	C59	弥生土器甕
7	8号溝⑧	石 6	石器
第26図8	8号溝覆土	C71	弥生土器壷
9	8号溝⑭	C64	弥生土器壷
10	8号溝⑫	C65	弥生土器鉢
11	8号溝⑩	C292	弥生土器底部
12	8号溝⑯	C291	弥生土器底部
13	8号溝覆土	C282	弥生土器底部
14	8号溝覆土	C293	弥生土器底部
15	8号溝①	C69	弥生土器高杯
16	8号溝④	C294	弥生土器高杯
17	8号溝覆土	C60	弥生土器高杯
18	8号溝⑫	C294	弥生土器高杯
19	8号溝⑯	C66	弥生土器脚部
20	8号溝⑦	C62	弥生土器脚部
21	8号溝⑱	C68	弥生土器脚部
22	8号溝②	C61	弥生土器脚部
23	8号溝覆土	C70	弥生土器脚部
第27図1	9号溝④	C83	弥生土器甕
2	9号溝⑦	C82	弥生土器甕
3	9号溝⑦	C80	弥生土器甕
4	9号溝⑨	C81	弥生土器甕
5	9号溝東溝覆土	C87	弥生土器甕
6	9号溝④	C84	弥生土器壷
7	9号溝⑧	C76	弥生土器壷
8	9号溝⑧	C74	弥生土器壷
9	9号溝⑧	C295	弥生土器底部
10	9号溝⑧	C77	弥生土器蓋
第28図11	9号溝①	C79	弥生土器高杯
12	9号溝⑧	C78	弥生土器高杯
13	9号溝東溝覆土	C89	弥生土器高杯
14	9号溝西溝覆土	C88	弥生土器高杯
15	9号溝②	C75	弥生土器高杯
16	9号溝西構覆土	C90	弥生土器台
17	9号溝	C85	土錘
18	9号溝西溝覆土	C86	土錘
第29図1	1号大溝上層	C127	土師器甕
2	1号大溝上層	C119	土師器甕
3	1号大溝上層①	C120	土師器器台
4	1号大溝底	C116	弥生土器か土師器甕
5	1号大溝底	C115	弥生土器か土師器甕
6	1号大溝下層	C113	弥生土器か土師器台付壷
7	1号大溝下層	C114	弥生土器か土師器鉢
8	1号大溝下層⑤	C125	弥生土器か土師器台付鉢
9	1号大溝下層⑩	C123	弥生土器か土師器台付鉢
10	1号大溝下層③	C124	弥生土器か土師器蓋
11	1号大溝セクション	C121	弥生土器か土師器甕
12	1号大溝セクション	C122	弥生土器か土師器壷
13	1号大溝	C126	弥生土器か土師器脚部
第30図1	2号大溝上層⑩	C103	弥生土器か土師器甕
2	2号大溝上層	C110	土師器甕
3	2号大溝上層	C108	土師器甕
4	2号大溝上層⑨	C222	土師器甕
5	2号大溝上層	C109	土師器壷
6	2号大溝上層⑨	C223	土師器底部
7	2号大溝上層	C300	弥生土器か土師器底部
8	2号大溝上層⑧	C95	弥生土器か土師器高杯
9	2号大溝上層	石 4	軽石
10	2号大溝上層⑫	石 1	石器
11	2号大溝上層	石 3	石
12	2号大溝上層	石 2	石
第31図13	2号大溝中層	C104	弥生土器甕
14	2号大溝中層⑦	C102	弥生土器甕
15	2号大溝中層	C106	弥生土器甕
16	2号大溝中層	C111	弥生土器甕
17	2号大溝中層	C107	弥生土器底部
18	2号大溝中層	C112	弥生土器蓋
19	2号大溝中層	C105	弥生土器壷
第32図20	2号大溝下層①	C93	弥生土器甕
21	2号大溝下層④	C94	弥生土器甕
22	2号大溝下層⑥	C98	弥生土器甕
23	2号大溝下層⑥	C99	弥生土器甕
24	2号大溝下層⑨	C220	弥生土器甕
25	2号大溝下層①	C92	弥生土器甕
26	2号大溝下層③④	C100	弥生土器甕
27	2号大溝下層⑤	C97	弥生土器壷
28	2号大溝下層④	C96	弥生土器壷
29	2号大溝下層⑥	C101	弥生土器高杯

第４表　大長野Ａ遺跡　出土遺物一覧(2)

挿図No.	出土遺構	実測No.	備考
第33図1	3号大溝上層	C130	土師器甕
2	3号大溝上層	C129	土師器甕
3	3号大溝・12区包	C146	土師器甕
4	3号大溝上層	C131	土師器高杯
5	3号大溝上層	C139	弥生土器甕
6	3号大溝上層	C128	弥生土器壷
7	3号大溝上層	C149	弥生土器脚部
8	3号大溝上層	D6	須恵器甕
第34図9	3号大溝下層	C248	縄文土器
10	3号大溝下層	C132	弥生土器甕
11	3号大溝下層	C133	弥生土器甕
12	3号大溝下層	C138	弥生土器壷
13	3号大溝下層	C144	弥生土器壷
14	3号大溝下層	C140	弥生土器か土師器壷
15	3号大溝下層	C134	弥生土器蓋
16	3号大溝下層	C142	弥生土器蓋
17	3号大溝下層	C298	弥生土器底部
18	3号大溝下層	C299	弥生土器脚部
19	3号大溝下層	C135	弥生土器台付土器
20	3号大溝下層	C297	弥生土器高杯
21	3号大溝下層	C136	弥生土器高杯
22	3号大溝下層	C143	弥生土器高杯
23	3号大溝下層	C285	弥生土器壷
24	3号大溝下層	C283	弥生土器器台
25	3号大溝下層	C137	弥生土器脚部
26	3号大溝下層	C141	弥生土器脚部
27	3号大溝下層	C145	土錘
第35図1	1号落ちこみセクション内	C233	弥生土器か土師器甕
2	1号落ちこみ⑦	C236	土師器甕
3	1号落ちこみ東⑦	C229	土師器甕
4	1号落ちこみ覆土	C218	土師器甕
5	1号落ちこみ⑥	C228	土師器甕
6	1号落ちこみ⑦	C235	土師器甕
7	1号落ちこみ④⑤	C234	土師器甕
8	1号落ちこみ南④	C232	土師器甕
9	1号落ちこみ⑧	C226	土師器甕
10	1号落ちこみ⑤	C221	土師器高杯
11	1号落ちこみ東⑨	C224	土師器高杯
12	1号落ちこみ覆土	C217	土師器器台
13	1号落ちこみ東⑩	C230	土師器器台
第36図14	1号落ちこみ①	C225	土師器壷
15	1号落ちこみ東③	C231	土師器壷
16	1号落ちこみ覆土	C219	土師器壷
17	1号落ちこみ	C48	土師器壷
18	1号落ちこみ⑦	C237	土師器壷
19	1号落ちこみ覆土	C238	弥生土器鉢
20	1号落ちこみ覆土	C239	弥生土器か土師器底部
21	1号落ちこみ覆土	C218	弥生土器か土師器底部
22	1号落ちこみ東⑧	C227	弥生土器か土師器底部
23	1号落ちこみ東⑪	石10	石
24	2号落ちこみ覆土	C215	土錘
25	2号落ちこみ覆土	石12	石
第37図1	3号落ちこみ	B3	縄文土器
2	3号落ちこみ	B4	縄文土器
3	3号落ちこみ	C209	弥生土器甕
4	3号落ちこみ	C210	弥生土器甕
5	3号落ちこみ①	C208	弥生土器高杯
6	4号落ちこみ⑦	C211	弥生土器甕
7	4号落ちこみ⑦	C212	弥生土器壷
8	4号落ちこみ⑤	C214	弥生土器鉢
9	4号落ちこみ②	C213	弥生土器底部
第38図1	2号土坑覆土	C246	弥生土器甕
2	3号土坑覆土	C242	弥生土器甕
3	3号土坑覆土	C244	弥生土器甕
4	4号土坑覆土	C248	弥生土器甕
5	4号土坑覆土	C247	弥生土器甕
6	4号土坑	C243	弥生土器甕
7	4号土坑覆土	C241	弥生土器壷
8	4号土坑	C249	弥生土器甕
9	4号土坑	C245	弥生土器脚部
第39図1	4号ピット	C207	弥生土器甕
2	4号ピット	C206	弥生土器甕
3	13号ピット	C204	弥生土器器台
4	16号ピット	C203	弥生土器甕
5	21号ピット	C205	弥生土器甕
第40図1	14区包含層	B1	縄文土器
2	13区包含層	C179	弥生土器甕
3	13区包含層	C189	弥生土器か土師器甕
4	14区包含層	C196	弥生土器甕
5	13区包含層	C194	弥生土器甕
6	15区包含層	C198	弥生土器甕
7	13区包含層	C195	弥生土器甕
8	12区包含層	C148	弥生土器甕
9	12区包含層	C155	弥生土器甕
10	13区包含層	C177	弥生土器甕
11	13区包含層	C183	弥生土器甕
12	9区包含層	C160	弥生土器甕
13	13区包含層	C181	弥生土器甕
14	14区包含層	C201	弥生土器甕
15	12区包含層	C153	弥生土器甕
16	5区包含層	C163	土師器甕
17	4区包含層	C169	土師器甕
第41図1	6区包含層	C162	弥生土器蓋
2	4区包含層	C168	弥生土器蓋
3	12区包含層	C147	弥生土器壷
4	15区包含層	C199	弥生土器壷
5	15区包含層	C192	弥生土器壷
6	4区包含層	C170	土師器壷
7	14区包含層	C200	土師器壷
8	4区包含層	C165	土師器壷
9	4区包含層	C171	土師器壷
10	10区包含層・11区大溝	C150	弥生土器か土師器壷
11	13区包含層	C187	弥生土器壷
12	13区包含層	C190	弥生土器壷
13	15区包含層	C173	弥生土器壷
14	13区包含層	C182	弥生土器鉢
15	13区包含層	C185	弥生土器鉢
16	13区包含層	C193	弥生土器鉢
17	13区包含層	C191	弥生土器底部
18	13区包含層	C175	弥生土器脚部
19	4区包含層	C172	弥生土器脚部
20	4区包含層	C171	弥生土器か土師器底部
21	13区包含層	C180	弥生土器底部
22	4区包含層	C167	土錘
23	4区包含層	C166	土錘
第42図1	13区包含層	C178	弥生土器高杯
2	13区包含層	C186	弥生土器高杯
3	9区包含層	C159	弥生土器高杯
4	12区包含層	C154	弥生土器高杯
5	12区包含層	C152	弥生土器高杯
6	13区包含層	C176	弥生土器高杯
7	14区包含層	D2	弥生土器高杯
8	13区包含層	C188	弥生土器高杯の栓
9	12区包含層	C151	弥生土器器台
10	13区包含層	C184	弥生土器壷
11	14区包含層	C197	弥生土器高杯
12	9区包含層	C158	弥生土器器台
13	13区包含層	C174	弥生土器器台
14	13区包、9溝、15号ピット	C216	弥生土器器台
15	8区包含層	C157	弥生土器脚部
第43図1	14区包含層	D1	須恵器鉢
2	8区包含層	C161	泥人形
3	表採	C118	土師器甕
4	表採	C164	弥生土器壷
5	表採	C117	弥生土器蓋
6	表採	C156	弥生土器脚部
7	表採	C296	弥生土器高杯
8	表採	C202	弥生土器器台
9	表採	D5	須恵器風字硯
10	表採	D3	珠洲焼すり鉢
11	16区旧河道	石9	石
12	8区包含層	石5	石
13	4区包含層	石11	石
14	10区包含層	石13	石

囲で多く認められる。土師器は古墳前期と思われる。1号落ち込みから出土したものが量的に最も多い他、1～3号大溝上層でも見られるが、前期初頭から前期後半にかけての時期幅が見られ、時期的なまとまりは顕著でない。包含層出土の土器では第40図16、17、第41図6、8、9などが土師器と思われ、1号落ち込みが位置する4～5区に分布する。他縄文土器、奈良・平安時代の須恵器、中世陶器がごく少量出土しているが、その時期の遺構は確認できない。

以上の遺構・遺物の状況から、弥生後期後半から古墳前期にかけての大長野A遺跡の推移をまとめると、まず弥生後期後半には調査区西側の12～15区で遺構が見られるが、規模的には小さく遺物も少ない、密度の低い分布を示す。後期終末には5区～13区に遺構・遺物の分布域が拡大する。細砂ベースの水はけの良い範囲に、おそらく複数の掘立柱建物を含むであろう多くの遺構が形成される。また5・6区の湿地部には大溝が掘削されるが、この時期の内に下半は埋まり、その機能は失われる。古墳前期については調査区東側の4・5区を中心に遺物が分布するが密度は低く、大溝はほぼ埋まり切ってしまい、確実な遺構は認められない。弥生後期後半と古墳前期の遺構・遺物は、弥生後期終末の遺構・遺物の中心分布域の端で展開する印象である。今回の調査範囲内においての判断であるが、遺跡は弥生後期後半に成立し、後期終末に最も活性化、古墳前期には低調な活動を示すに至る集落、と見なす事ができる。

大長野A遺跡については平成3年度に今回の調査区と約100m離れた遺跡の北東部を県埋文センターが調査しているが、遺構・遺物は希薄な状況にあった(3)。比較すると今回の調査区のほうがより集落域の中心に近いものと考えられる。平成3年度、今回ともいずれも面的な制約が大きい調査であるため、集落の構造、性格など不明な点が多いが、その消長のみを取り上げるならば当地、梯川中流域の集落遺跡では比較的良く見られるパターンになろう。それは弥生後期後半での成立・盛行、古墳前期初頭以降の低調化傾向と定義される。同様に推移する集落遺跡には千代デジロA遺跡や高堂遺跡などが挙げられる。細かく比較すると各遺跡はその比重を置く時期が後期後半であったり後期終末であったりまたその中での新古相の違いであるなど細かく異なっているように思われる。これらのグループと逆行するように、古墳前期以降活性化する集落遺跡として漆町遺跡群、白江梯川遺跡などが対比される(4)。以上の様に弥生時代から古墳時代への移行に際して、当地域の集落遺跡は非常に示唆的な動向を示すものと考えたい。ただし前述したように制約の多い調査区内で捉えられた消長は、集落の動向を正確に反映できない。例えば集落域が遷移している場合は、設定された調査区の位置が確認遺構・遺物の様相を大きく左右していると思われる。前章でも述べたことの繰り返しとなるが、やはり遺跡の評価、比較については慎重でありたいと感じる次第であり、現状ではより詳細な動向についての記述は保留したい。

注

(1) 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』資料編　1988年
(2) 珠洲市立珠洲焼資料館『珠洲の名陶』1989年
(3) 石川県立埋蔵文化財センター『年報』第13号　1993年
(4) 日本考古学協会新潟大会実行委員会編『シンポジウム2　東日本における古墳出現過程の再検討』1993年　頁91～93

V　南加賀の月影式土器に関する小論

── 梯川中流域右岸地域の土器胎土と甕形態について ──

1　はじめに

標題にある「月影式土器」は、金沢市月影遺跡土坑出土土器[1]を標式として、加賀において弥生時代から古墳時代への過渡期を彩る土器様式としてよく知られている。いわゆる月影甕、装飾器台等、きわめて特徴的ながら他地域に直接の祖型を求められない在来的な器種・器形からなる土器群は同時に強い規格性を併せもっている。一方で後出的な外来系土器との共伴が示すように、古墳時代前期まで存続する比較的長命な系譜とも言える。またその分布は北陸でも加賀以西にはっきりと集中しており、能登以東で展開する土器群との様相差が際立っていることは度々指摘されており[2]、加賀能登間をほぼ境とする北陸東西の地域圏の存在を明確にしている。

ところで、月影式土器の胎土については以下の三者が主に検討を行っている。北野博司氏は北加賀において松任市倉部出戸遺跡出土土器の胎土を網羅的に観察し、複数に類型化される胎土で土器群が構成されること、胎土各類が土器の形態差とある程度対応すること、さらに時期を追って胎土が変化していることを指摘している[3]。奥田尚氏は加賀各地の集落遺跡から出土する月影甕の土器胎土の分析を行い、その砂礫構成は付近の水系で採取されるものとほぼ一致することを確認した。この成果から同氏は土器の小地域内での自給的な生産とごく少量の搬入の可能性を指摘している[4]。田嶋明人氏は奥田氏の成果を引用しつつ月影甕の形態と胎土の相関、装飾器台等の特定器種について少数の遺跡での集中的生産と周辺の集落への供給の可能性を示した[5]。

奥田氏、田嶋氏の検討は重要な問題を多々提示しているが、加賀地域の土器胎土の類型化を主な目的としたため、時期を細かく限定した上での検討、遺跡個々の詳細な様相を把握するには至っていない。小論は両氏と逆に、月影式期の遺跡・遺構単位の出土土器群の網羅的な胎土分析に重点を置き、ほぼ同時期に狭域に展開する複数の集落間で比較・検討を行なった。具体的には、今回調査された大長野A遺跡1号溝出土土器群を中心に、その周辺の集落遺跡から出土している一括性の高い資料の胎土を網羅的に観察し、その結果について考察を加えたものである。この作業の意図するところは、梯川中流域右岸地域の月影式期について、胎土から見た土器組成を提示してその背景を考えることにある。また遺跡間で様相を比較する作業には、当地域の集落の動向についても新たな知見が得られないかという期待を込めるものである。

2　胎土分類と観察方法

土器胎土は主に粘土と砂礫で構成され、粘土が素地となる。砂礫は、地中の粘土層のあり方から考えるとその大半は積極的に混和したものと推定されている。今回は胎土に含まれる砂礫を重視して分類を行った。胎土に含まれる砂礫の主なものは流紋岩質岩と石英質岩であり、量差はあっても大半の土器胎土に含まれている砂礫である。流紋岩質岩には色々な色調があり、鈍い光沢を放つ。比較的粒径が大きくL・Mサイズ[6]を主とするため、それが多く含まれる胎土は粗い質感となる。石英質岩は基本的に無色透明、結晶形をなすものは反射光を発する。金属光沢を発す

る輝石や角閃石等の鉱物との区別は光沢や結晶形の違いから可能と思われるが、今回は細かく行なうことができず、石英系の砂礫・鉱物としてまとめて扱った。粒径は比較的小さくM・Sサイズ以下を主とし、土器胎土は基本的に細密な質感となる。今回は土器の器面を主に肉眼で観察し、多く含まれると判断される砂礫・鉱物種に注目して分類を行った。(7)また、胎土に深く関係すると思われる色調についても分類を行った。

土器胎土は大別して0・Ⅰ・Ⅱの3種類で、Ⅰは1～3の3種類、Ⅱは0～3の4種類に細分され、あわせて8種類となる。その特徴は以下の通りである(8)。

0類型　Ⅰ類またはⅡ類と判断できるだけの砂礫・鉱物を肉眼では確認できないもの。含まれる砂礫はごく少量かあるいは粒径がきわめて小さいものと思われ、土器は細密な質感を持つ。

Ⅰ類型　流紋岩質岩と思われる砂礫が顕著であり、石英系の砂礫・鉱物がほとんど目立たないもの。やや粗粒な胎土であるが、粘土素地との相性が良いためか焼成は良好で、硬く乾燥した質感を呈する。流紋岩質岩の色調から3種に細分した。

Ⅰ－1類　赤褐色の流紋岩質岩が目立つもの。

Ⅰ－2類　薄紫色、明灰色、白色の流紋岩質岩が目立つもの。

Ⅰ－3類　灰褐色、暗灰褐色、黒色の流紋岩質岩が目立つもの。

Ⅱ類型　石英系の砂礫・鉱物が顕著に含まれるもの。反射光沢や金属光沢を放つ。混在する流紋岩等の砂礫は多様なあり方を示すが、概ねその含みが少ないものほど細密な胎土となり、軟かく湿ったような質感を呈する。石英系以外の砂礫の含まれ方から4種に分類した。

Ⅱ－0類　石英系以外の砂礫が肉眼では確認できないもの。Ⅱ類中最も細粒である。

Ⅱ－1類　石英系以外の砂礫にⅠ－1類の流紋岩質岩が混在するもの。

Ⅱ－2類　石英系以外の砂礫にⅠ－2類の流紋岩質岩が混在するもの。

Ⅱ－3類　石英系以外の砂礫にⅠ－3類の流紋岩質岩が混在するもの。

土器色調についてはa～dの4種類に分類した。

a　赤色～黄橙色　　**b**　淡黄色～黄褐色　　**c**　灰褐色～オリーブ灰色　　**d**　暗茶色～黒色

なお、胎土と色調についてできるだけ統一的な観察を行えるように、実行にあたっては手法と環境に一定の条件を設けている。主には観察部位と光源に特に留意したものである(9)。

3　観察資料の概要

資料の選定にあたっては、帰属時期を限定できる遺構一括土器群を対象とし、時期幅が想定される土器群については参考資料として扱った。また、その土器群の組成を網羅できるだけの量の胎土を観察する必要があるため、基本的に図化資料の全てを対象とした。未図化資料については必要に応じて観察し、補足的に扱った。主要な遺跡の位置は第44図に示した通りである。

寺井町大長野A遺跡1号溝出土土器群（第45図）

本書報告資料。大溝を除いては最も出土遺物が多い遺構であり、その出土状況から一括性が高いと判断できる。甕は非常に形態的バラエティーに富むが第45図1～5・20～23等の月影甕の存在、壺の口縁形態、高杯脚の形態などから月影式期の範疇で考えて問題ない資料と思われる。今

回は推定１号溝出土土器も含めて観察の対象とした。器種では甕がとても多く、全個体数の3/4近くを占める。胎土はⅠ類が圧倒的に多く、Ⅱ類はごくわずかしか見られない。Ⅰ類の内ではⅠ－１類が多くて全ての器種で確認され、それにⅠ－２類が次ぐ。Ⅰ－３類はごく少量である。Ⅱ類にはⅡ－１～３類が存在するが総合してもⅠ－２類にも及ばない程度に少量と言える。色調については大半がｂ、次いでａとｃが数点、ｄはⅠ－３類で１点あるのみと少数である。

小松市高堂遺跡２次調査20号溝・３次調査40号溝出土土器群[10]（第46図～第49図）

大長野Ａ遺跡の北西約1.5km、八丁川北岸の微高地に位置する集落遺跡である。２次調査20号溝と３次調査40号溝は、調査年次が異なるだけの同一の遺構であるが、土器群は少し距離をおいて出土している。月影甕第46図２・８～10・第48図１・18・19、装飾器台第46図１、台付鉢第46図６・第48図12などの存在から月影式期の範疇で考えて問題ない資料と思われる。２次調査20号溝出土土器群は多くの完形品が集中して検出されたものであり、特に一括性が高い。器種的には無文の有段口縁を持つ甕、有段口縁を持つ大型壷が目立つ傾向があるなどやや特異な様相を示している。３次調査40号溝出土土器群はより甕の量比が高くなり、甕は擬凹線を持つ有段口縁のものが主体を占めている。このような同一時期、同一遺構出土の両土器群に見る様相差は、集落を構成する集団の系譜、投棄の意識の違いなどを示すものと思われ、注目される。

２次調査20号溝出土土器群の胎土には０類、Ⅰ類、Ⅱ類が見られる。０類はごく微量、Ⅰ類とⅡ類はそれぞれ定量見られ、拮抗している。Ⅰ類はⅠ－１類、Ⅰ－２類が、Ⅱ類はⅡ－０類、Ⅱ－１類、Ⅱ－３類がそれぞれ定量確認されている。有段口縁無文甕についてはほとんどがⅡ類、有段口縁擬凹線甕については逆にⅠ類に属する傾向が看取された。色調は大半がｂ、次いでａである。ｃ、ｄはごく少量である。

３次調査40号溝出土土器群の胎土はⅠ類、Ⅱ類が見られほぼ拮抗している。Ⅰ類はⅠ－１類、Ⅰ－２類が、Ⅱ類はⅡ－０～３類まで全て確認された。その中でもⅠ－１類、Ⅰ－２類、Ⅱ－２類が特に多いように感じられる。有段口縁無文甕については２次調査20号溝ほどに明確ではないがやはりⅡ類に多いようである。色調は大半がｂ、次いでａとｃである。ｄはⅡ－２類に１点あるのみである。

高堂遺跡の両土器群の胎土には以上の様にかなり多様な砂礫が確認され、量的な差が少ないため、大長野Ａ遺跡と違って主体となる胎土を見つけにくい状況にある。

小松市千代デジロＡ遺跡４号溝・11号溝・14号溝出土土器群[11]（第50図～第53図）

大長野Ａ遺跡の東約500ｍと、非常に近接した位置にある集落遺跡。本書報告資料ではなく、昭和60年度調査のＦトレンチ遺構から資料を選定した。４号溝・11号溝・14号溝はいずれも比較的幅広の溝であり、多くの遺物が出土しているが、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての時期幅を持つ。土器の観察は月影式期を確実に外れる資料を除いて行ったが、完全に識別することは現実的には不可能であり、ある程度の時期幅を想定して参考資料として扱うことにしたい。

４号溝では、Ⅰ類、Ⅱ類とも見られ、ほぼ等量ずつとなる。Ⅰ類はⅠ－１類、Ⅰ－２類、Ⅱ類はⅡ－０～３類まで定量確認され、多様な構成を示す。色調は大半がｂ、次いでａとｃである。ｄはごく少量である。11号溝ではⅠ－１類、Ⅰ－２類、Ⅱ－１類、Ⅱ－２類が見られ、その中で

はⅠ－２類がやや他類より多いかと思われる。色調は大半がｂで、次いでｃ、ａとｄは少ない。14号溝は調査区内で最も出土遺物が多かった遺構である。土器胎土は０類、Ⅰ類、Ⅱ類とも見られ、Ⅰ類はⅠ－１～３類、Ⅱ類はⅡ－０～３類まで全ての種類が確認された。その中ではⅠ－２類とⅡ－２類がやや他類よりも多いようである。色調は大半がｂ、次いでａ、ｃ、ｄの順である。

千代デジロＡ遺跡出土土器群については、その全てが月影式期におさまるとは言えない資料であるが、土器胎土は全般に多様な傾向を示し、高堂遺跡に比較的近い様相と見ることもできる。

辰口町高座遺跡東調査区出土土器群[12]（第54図）

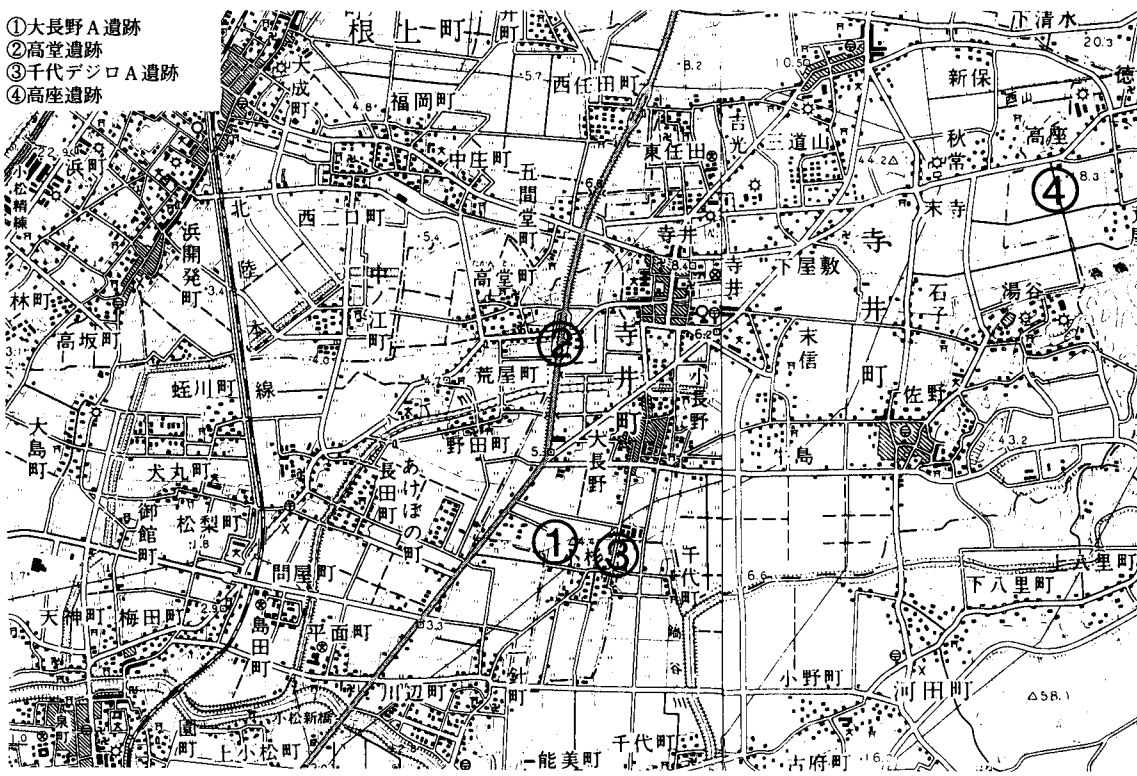
大長野Ａ遺跡の北東約４㎞、和田山丘陵に近接する位置にある集落遺跡。東調査区出土土器群については従来月影Ⅰ式[13]、すなわち月影式の古相として扱われてきた資料である。しかしながら調査区内の非常に広い範囲の包含層から出土した資料でもあり、土器群の一括性は低く、時期、組成等についての評価を下し難いと言える。よってここでは参考資料として扱いたい。

土器胎土はⅠ類、Ⅱ類とも見られ、量的にはⅡ類がⅠ類を上回ると思われる。Ⅰ類としたものも他遺跡と比べると全般に石英系の砂礫・鉱物が多いようであり、Ⅱ類に近似する傾向が感じられた。色調は大半がｂで、次いでａである。

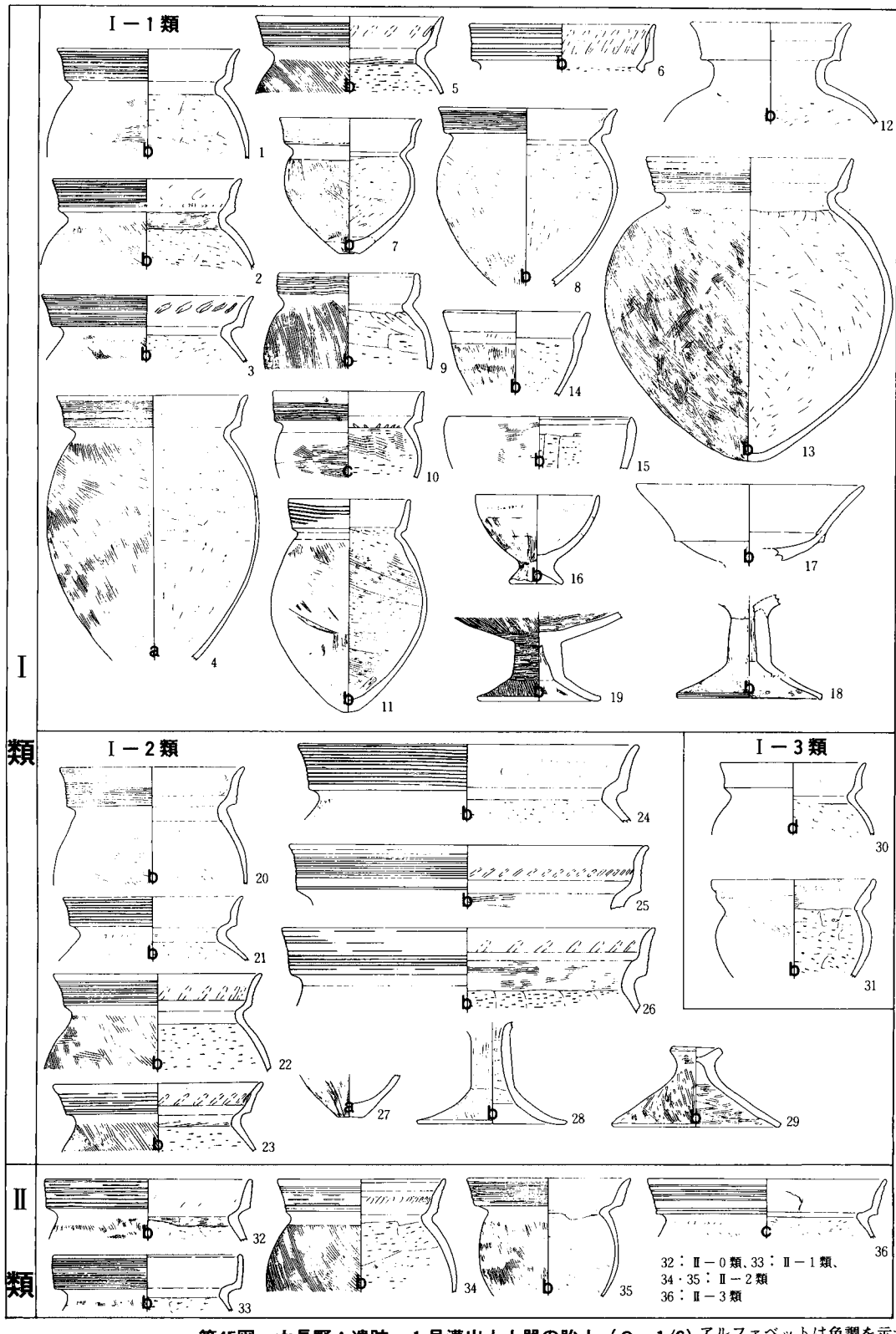
４　胎土別組成の比較

ａ）注目すべき様相差

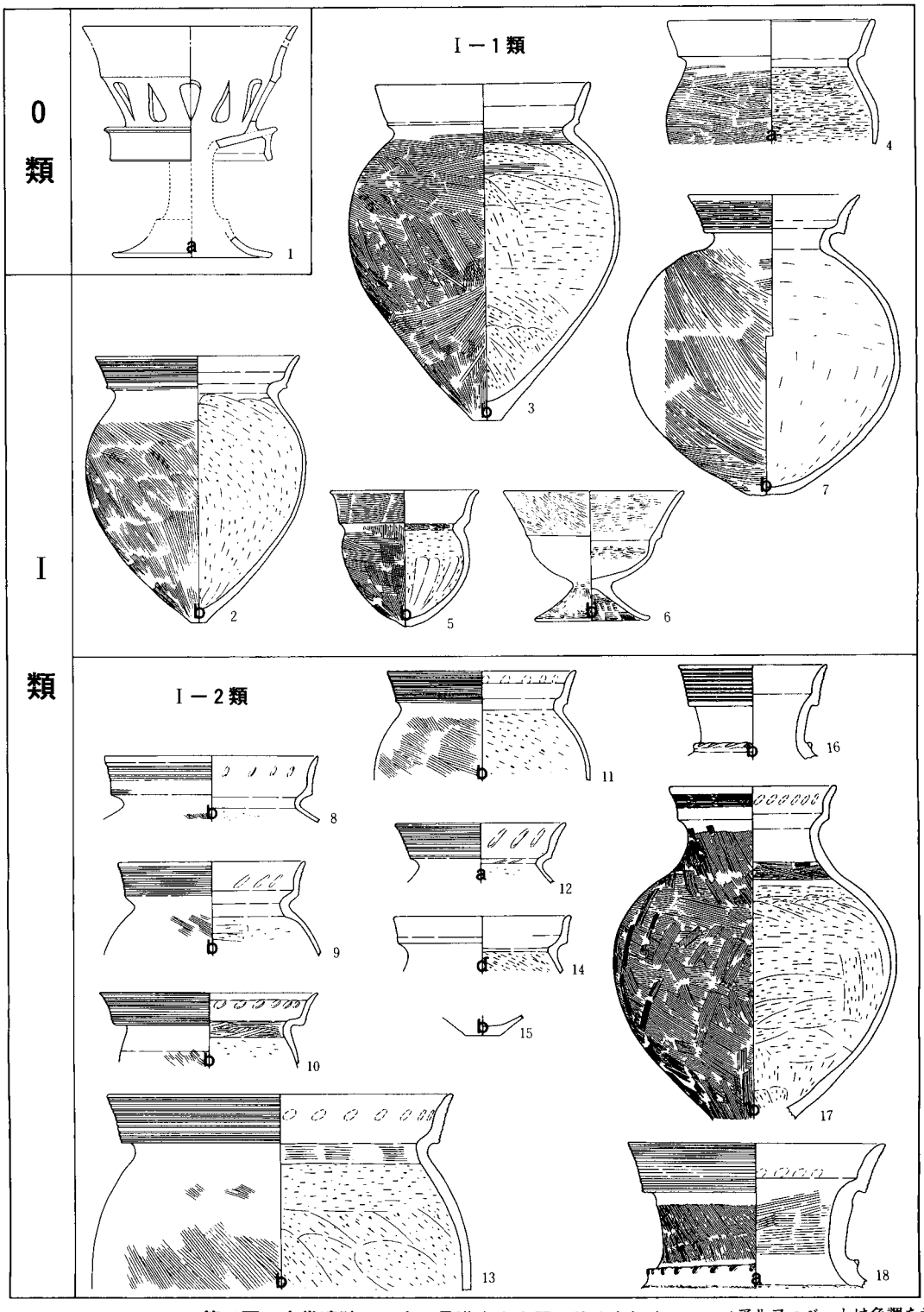
前記した４遺跡は径４㎞圏内の非常に近接した位置関係にありながらも、それぞれの観察結果



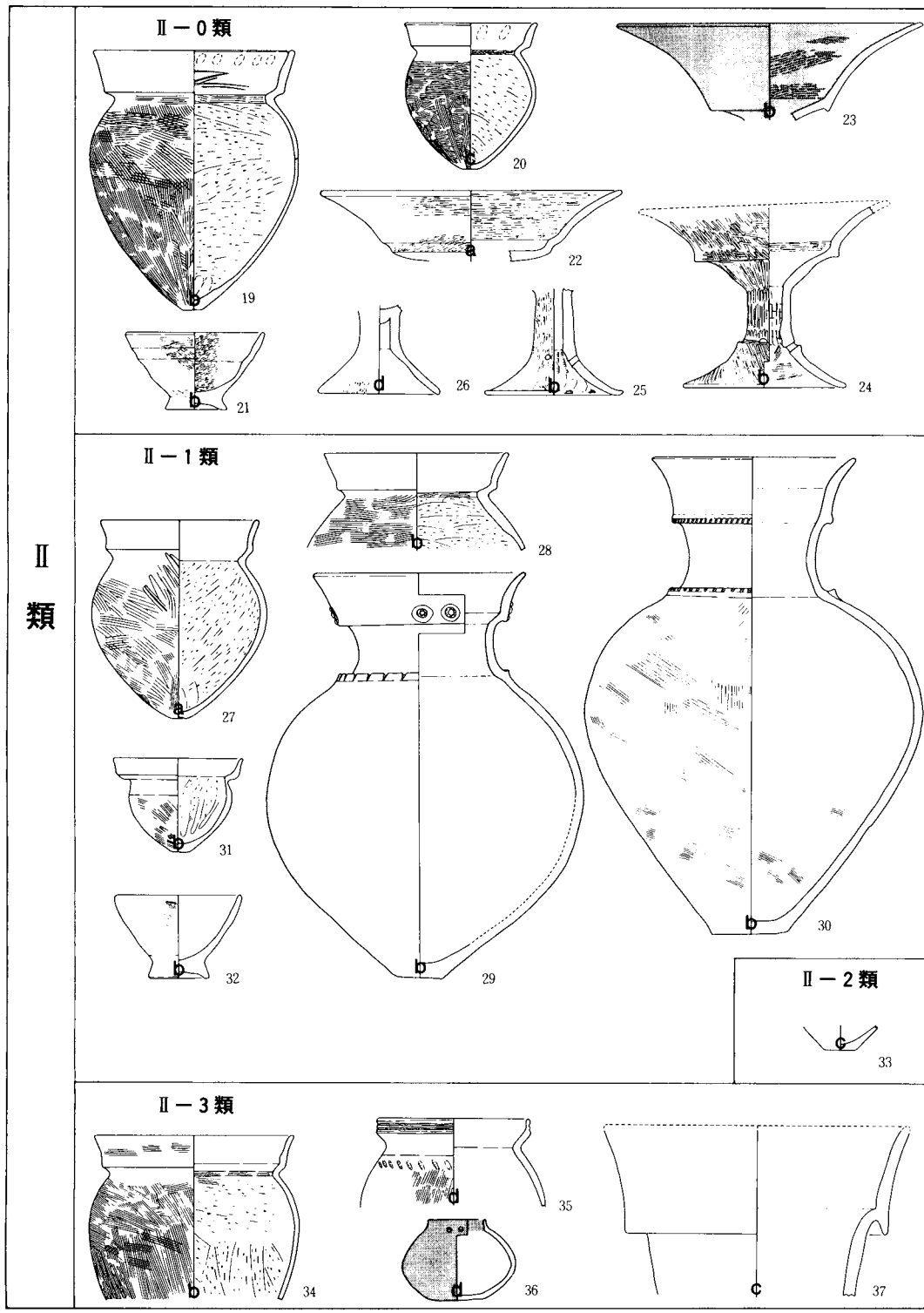
第44図　主要集落遺跡の位置（Ｓ＝1/50,000）



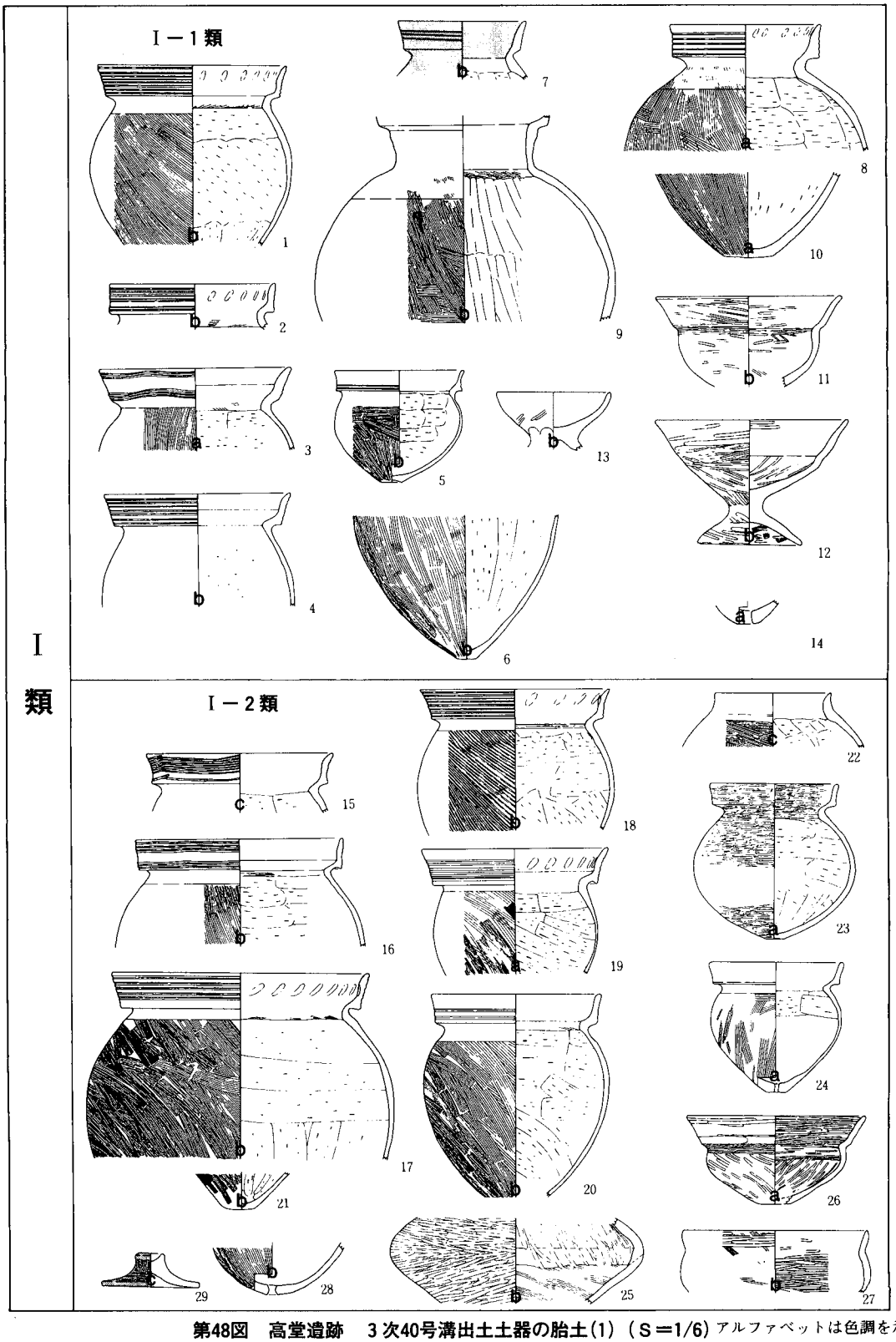
第45図　大長野Ａ遺跡　１号溝出土土器の胎土（Ｓ＝1/6） アルファベットは色調を示す



第46図　高堂遺跡　2次20号溝出土土器の胎土(1)（S＝1/6）アルファベットは色調を示す



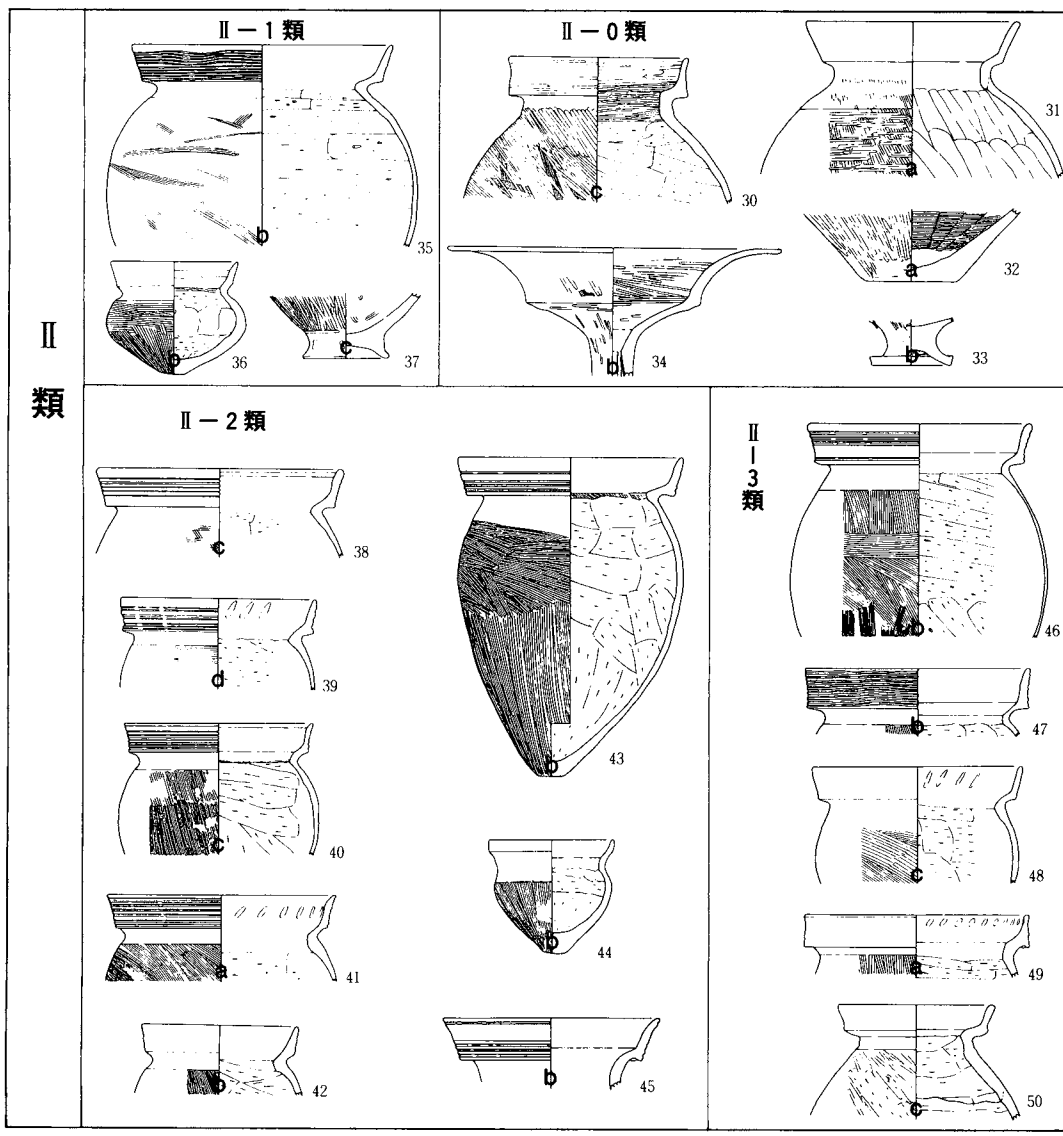
第47図　高堂遺跡　2次20号溝出土土器の胎土(2)（S＝1/6）アルファベットは色調を示す



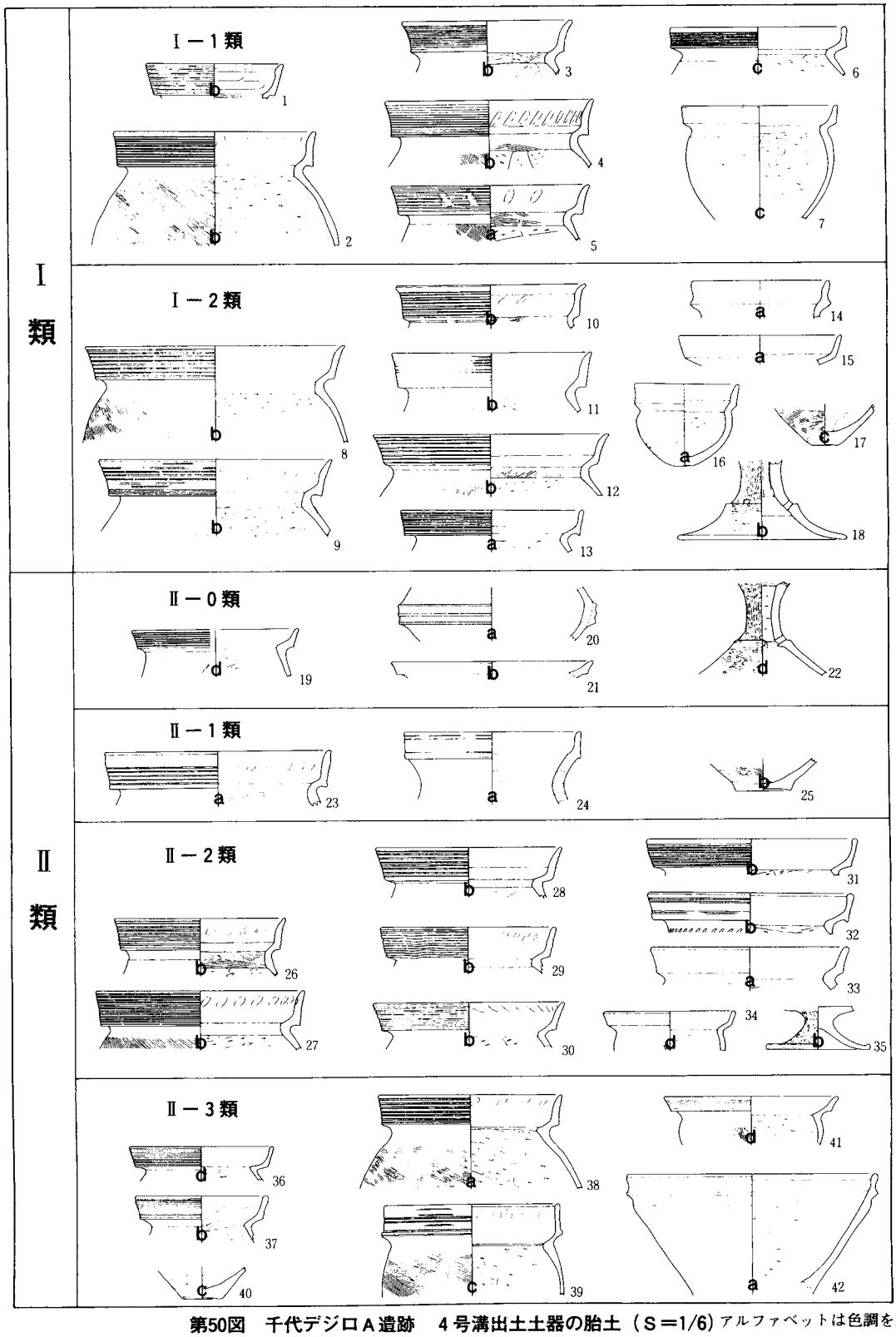
第48図　高堂遺跡　3次40号溝出土土器の胎土(1)（S＝1/6） アルファベットは色調を示す

を比較すると、各土器群の胎土について明確な様相差が認められた。第55図はその模式図である。遺跡別では大長野A遺跡ではⅠ類が圧倒的に多く、特にⅠ－1類が主体となる。これに対し高堂遺跡ではⅠ類とⅡ類の間に量差を見出しにくく、むしろ等量に近い印象を受ける。千代デジロA遺跡では高堂遺跡と似た傾向であるが、Ⅰ－2類とⅡ－2類が他類をやや上回る量のようである。高座遺跡では大長野A遺跡と逆にⅡ類が多くなっており、大長野A遺跡のⅠ類ほどではないが主体的な存在となる可能性がある。

器類・器種別には、ミガキ調整を多用する高杯、器台、精製壷等はほとんど0類、Ⅱ－0類と言った細粒志向の胎土で占められる。これらの器類・器種は細粒の質感を保つために制作時に意図的に細かい砂礫を選んで混和するか、混和量そのものを減らしている可能性が高い。0類、Ⅱ－0類以外の胎土は対照的にハケ調整を多用する甕、粗製鉢、粗製壷等に多く用いられる。粗粒、



第49図　高堂遺跡　3次40号溝出土土器の胎土(2)（S＝1/6)アルファベットは色調を示す



第50図　千代デジロＡ遺跡　４号溝出土土器の胎土（Ｓ＝1/6）アルファベットは色調を示す

細粒の胎土は基本的に用途に応じて使い分けられるようである。この傾向は4遺跡とも共通である。

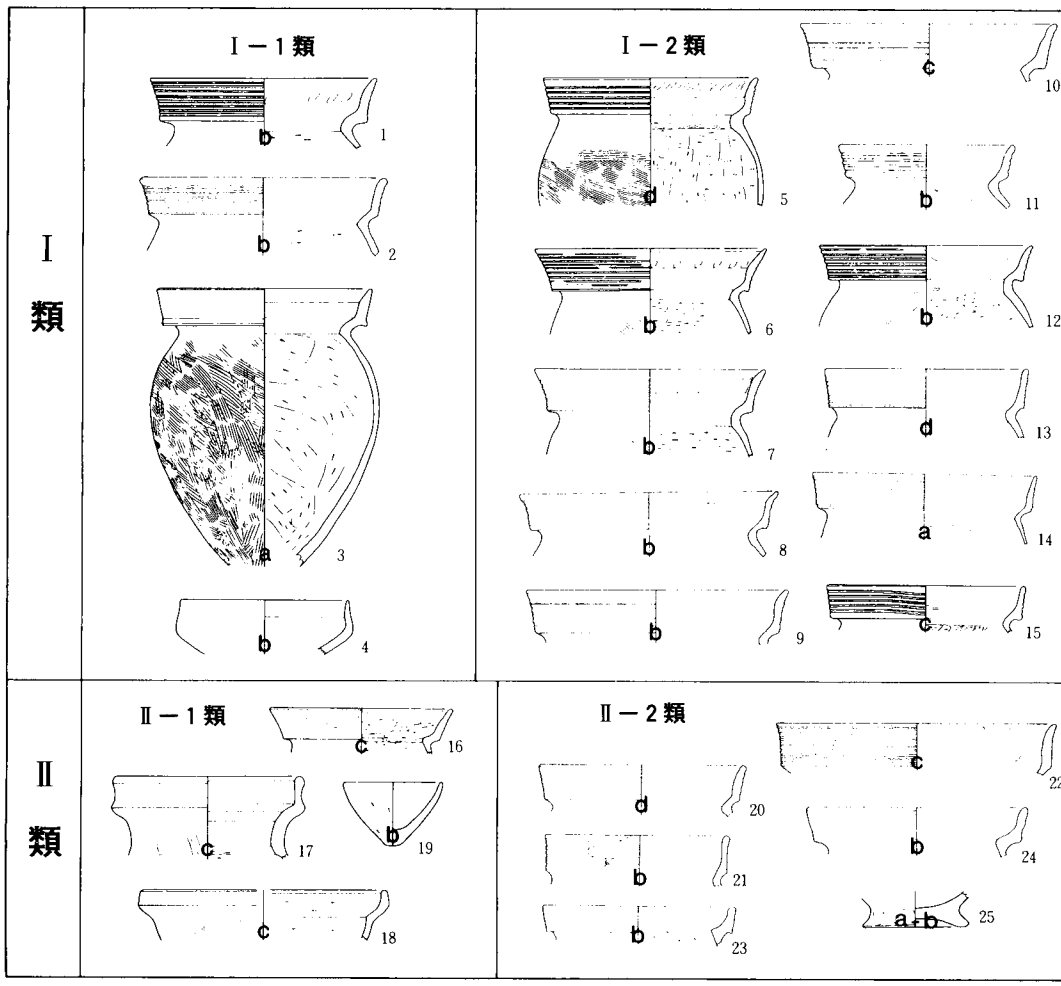
また、甕においては、高堂遺跡で無文の有段口縁甕がⅡ類の胎土で多く作られるという、重要な相関がはっきりと認められた。月影甕など別系統の甕とは胎土が明らかに異なっており、甕の系統に胎土が相関するものとして評価しておきたい。

色調については、どの遺跡でもbが主体でその他は少量というあり方で、共通している。

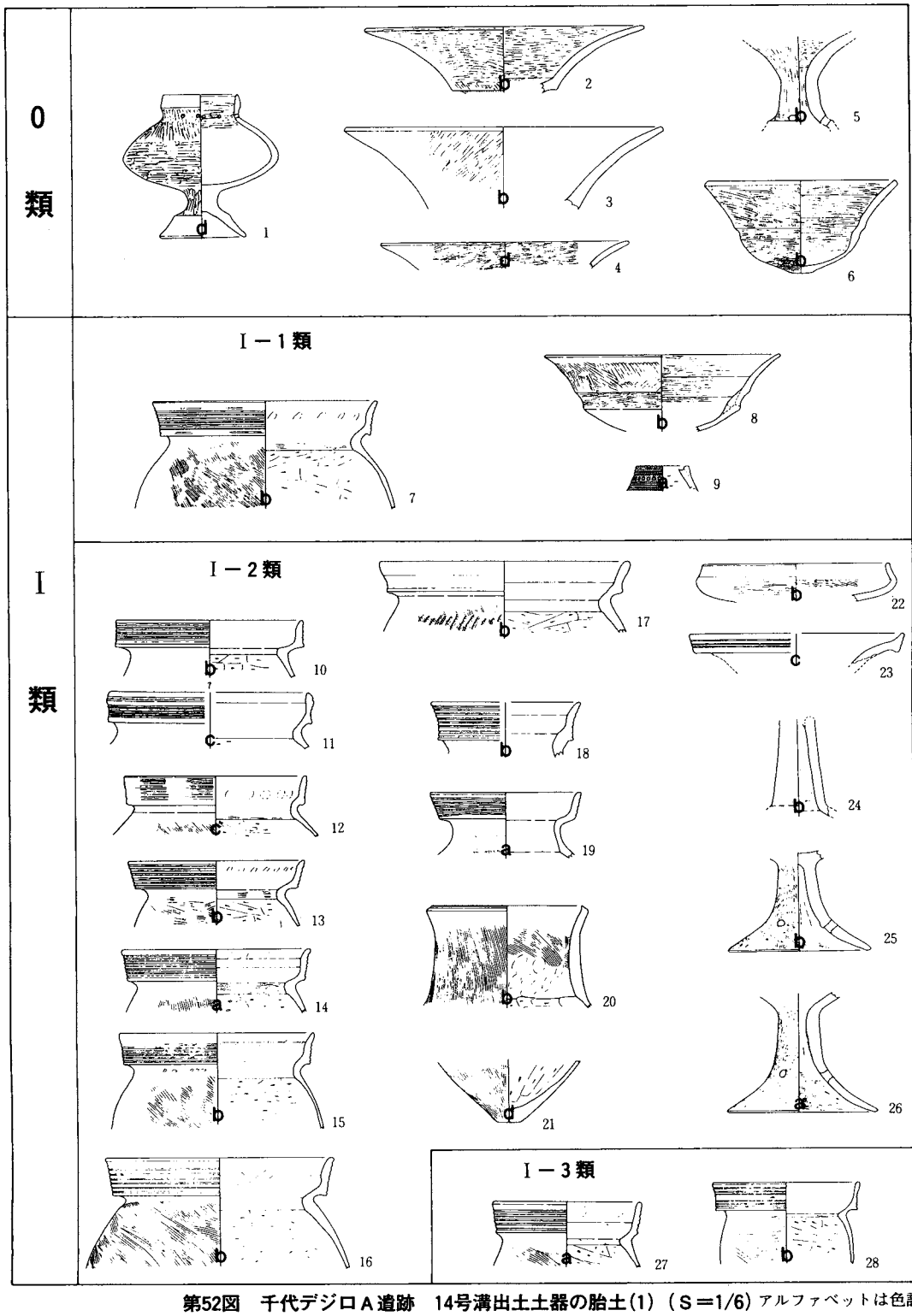
b）様相差の背景

以上の様な様相差を生じる理由については時期的な変遷、遺構の性格、遺跡の性格、地形・地質などが想定されるが、ここでは各要素について若干の検証を行っておきたい。

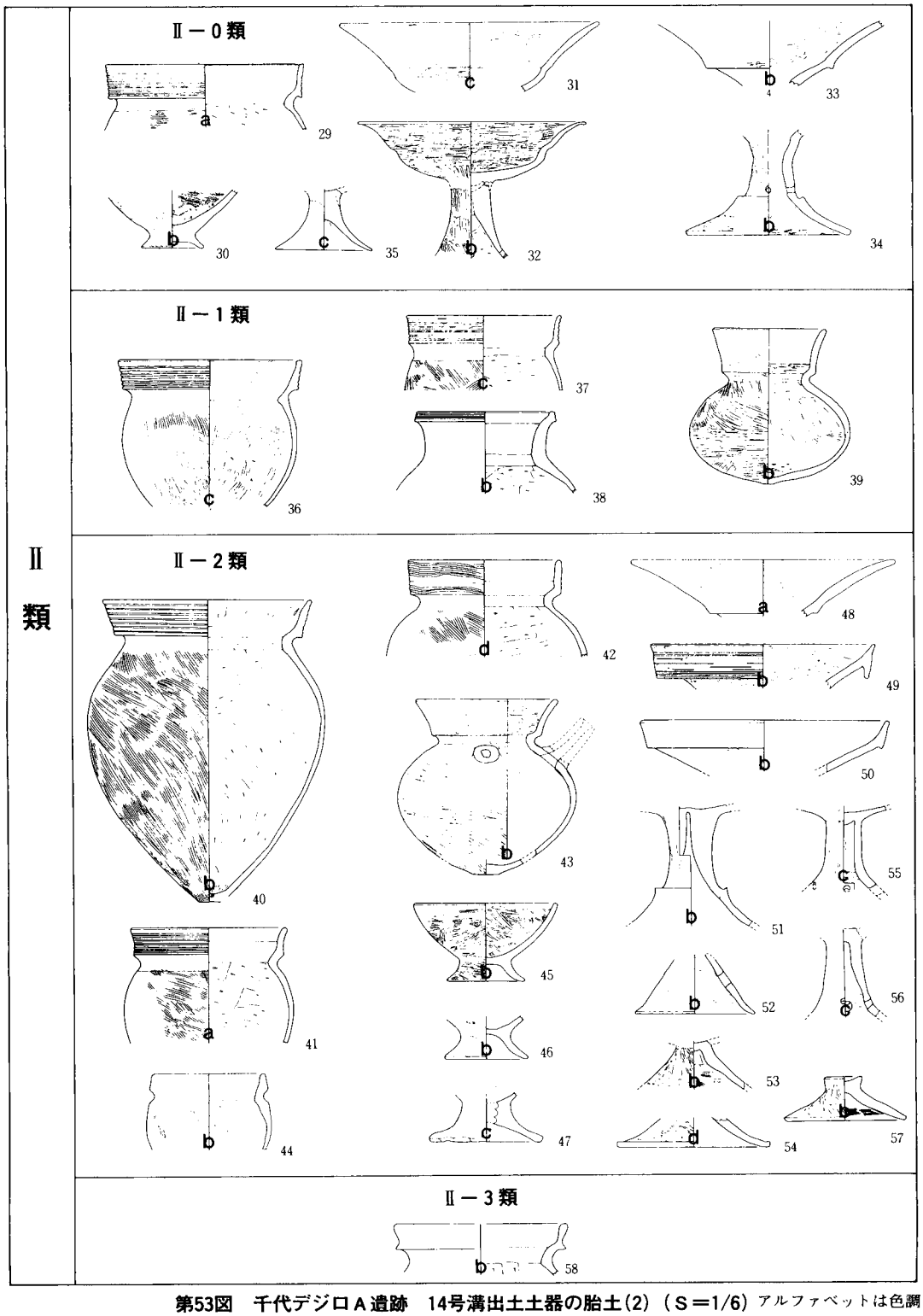
時期による変化については、月影式期の範疇でほぼ限定して考えることができてそう大きな時間差は感じられない資料である大長野A遺跡と高堂遺跡の間にも明らかな様相差が見られたため、主な原因とは考えにくい。住居、墓、水路などの遺構の性格については、今回取り上げた各遺構では調査区がある程度限定されているためもあって判然としない。ただし、大長野A遺跡や高堂



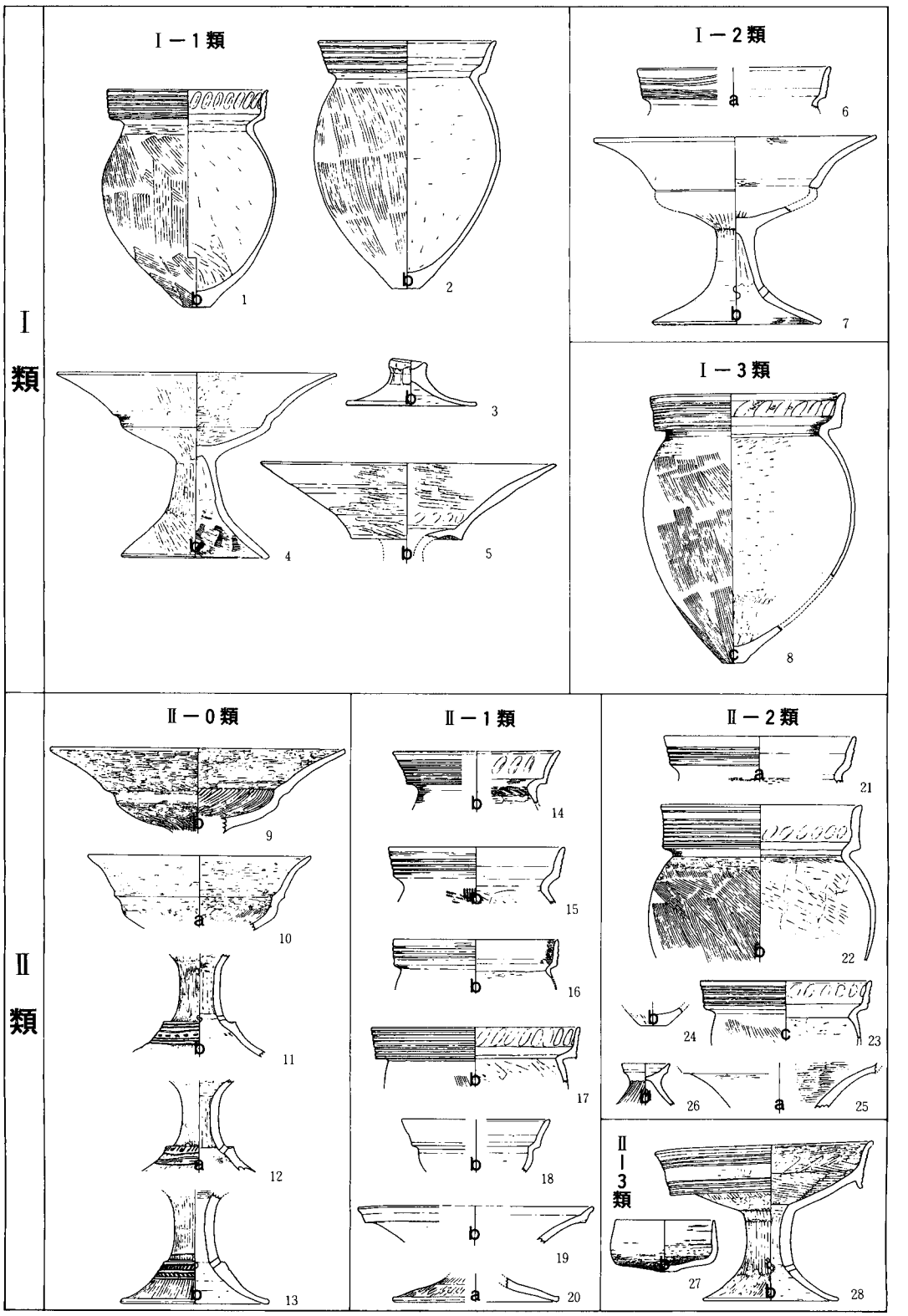
第51図　千代デジロA遺跡　11号溝出土土器の胎土（S＝1/6）アルファベットは色調を示す



第52図　千代デジロＡ遺跡　14号溝出土土器の胎土(1)（S＝1/6）アルファベットは色調を示す

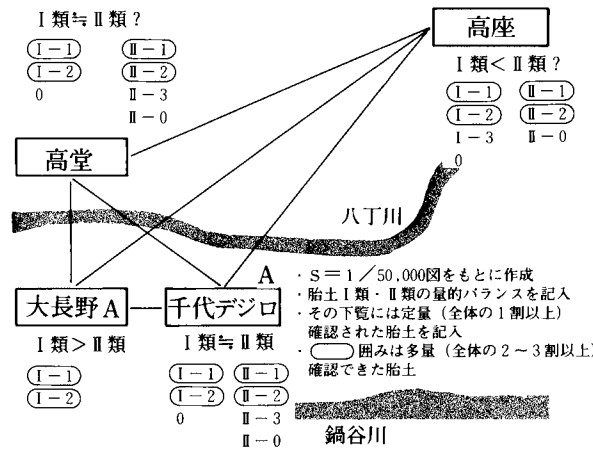


第53図　千代デジロＡ遺跡　14号溝出土土器の胎土(2)（Ｓ＝1/6）アルファベットは色調を示す



第54図　高座遺跡　出土土器の胎土（S＝1/6）　アルファベットは色調を示す

遺跡で見られた器類・器種・器形の偏りはその差を反映する可能性がある。胎土については、各土器群は少なくとも各遺跡総体でみた傾向と極端な差異はなく、基本的に矛盾しないものと理解している。遺跡総体で見た傾向は一般に集落域、墓域、その階層レベルなど、遺跡の性格を強く反映すると思われる。胎土中の砂礫については、土器が在地で自給的に生産されるとするならば[14]付近の地質・水系の影響も考えられるであろう。地形・地勢・地質・水系等の遺跡の地理的な環境については、その交易圏・生業圏・通婚圏等の活動領域を大きく規定し、その地域における地位を左右する要素であり、遺跡の性格の一部に含めて理解すべきものと考えている。



第55図　集落位置・土器胎土模式図

胎土各類については量差はあるが4遺跡でほとんどが確認されており、共有性を持つと思われる。また各遺跡で参考的に観察した弥生後期から古墳前期にかけての土器でも、粗・細の質感は異なるものの同じ砂礫を含む胎土から構成されることを確認している。よってⅠ類とⅡ類の大半は遺跡の所在する梯川中流域右岸地域において、少なくとも月影式期の前後の時期には普遍的で伝統的な在来性の強い胎土と推定できる。

すなわち、今回観察した資料で確認された胎土の様相差に関しては、その主たる要因が時期差や遺構差とは積極的に考えられない状況にあり、よって、その他の要素、地形・地質も含めた各遺跡の性格の差が強く関係するものと推定する。Ⅰ－1類については特に大長野A遺跡に分布の中心を持っているようであり、集落の性格が強く表出している胎土と考えたい。また、搬入品について今回はその存在と胎土を明確にできなかった。おそらくは存在してもごく少量で、肉眼では在来的な胎土と判別しにくいものと思われるが、土器群中に含まれる可能性は否定しない。

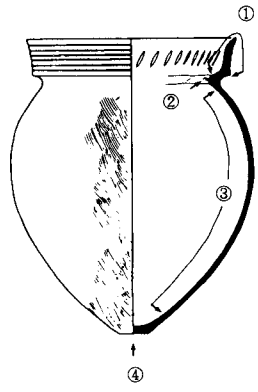
5　月影甕の形態と胎土

a）月影甕の形態分類

さて、観察した土器群の中で最も多かった器類は甕形土器であり、そのほとんどが擬凹線を持つ有段口縁甕であった。月影式期の擬凹線を持つ有段口縁甕の多くはその独特の形態から「月影甕」と呼ばれる。月影甕は月影式期の前段階である法仏式期には見られず、法仏式から月影式への変化をその出現と普及によって表象する重要な器形の一つと言える。主に北加賀において月影甕と捉えられている個体の主な形状を部位別に列記するならば、以下の様になろう[15]。

①口縁部：有段口縁に多条の擬凹線を巡らす。有段口縁が発達しており、よく伸びて外反し、先端が細く尖り気味になる。内面には縦長の指頭圧痕を巡らせるものが多い。

②頸部：内面を帯状に厚くしっかりと形成し、ハケ調整がなされるものが多い。
③胴部：法仏式期の甕に比べて胴が張る倒卵形のプロポーションであり、器壁はヘラケズリできわめて薄く仕上げられ、軽量である。
④底部：平底であるがきわめて小径であり、自立は難しく、安定性に欠ける。



第56図　月影甕の特徴
金沢市月影遺跡土坑出土土器（S＝1/6）

以上の①～④の各部位の形状はそれぞれが非常に特徴的である。しかし、今回観察した土器群の甕については、①～④の各部位は前述した形状ばかりではなく、むしろ比較的多様なあり方を示す。またそれぞれの組み合わせも多様であるように見受けられる。大長野A遺跡1号溝出土土器（第45図）から例をあげると、口縁部については同口径のものであっても口縁帯の短い8、また直立して立ち上がって端が丸くおさまる33など。頸部については明確な帯を作らずに不整にヘラケズリがかかる32、帯を全く作らずくの字に屈曲する部分までヘラケズリがかかる6などである。以上の様に口縁部、頸部では前述した形状の両方を備えるものはかえって少ない状況である。これに対して胴部と底部についてはほとんどが前述した特徴に当てはまるが、ヘラケズリしているにもかかわらず重く厚い11なども少量存在する。各部位の形状の相関については完形品が少ないため完全には追求できなかったが、口縁部・頸部で前述した形状を備える個体については概ね胴部・底部でもその形状が備わるようである。以上の様に観察された月影甕のバラエティーについて、整理して考えるためには形態分類が必要になる。よってここで簡易なグルーピングを行い、後述する胎土と形態の関係についての検討に備えることにしたい。

各土器群中の月影甕で、各部位に前述した形状をすべて備えると思われるグループを、仮に形態A群とする。A群の形態に近いが、その差は口縁部・頸部の一部が異なる程度であるグループを同B群と汎称する。A群とは胴部・底部も含めて歴然とした形態差がある異質なグループを同C群と汎称する[16]。B群はA群とC群の中間的な形態のグループであるため、A群、C群にそれぞれ近似するものが存在する。第57図は各形態群の主な個体を示した概念図である。

b）月影甕の形態と胎土

大長野A遺跡1号溝の土器群はⅠ類主体の胎土組成であったが、口縁部、頸部について前述した諸特徴をすべて備える個体、すなわちA形態はほぼⅠ類の胎土に限定して確認される。さらにⅠ－1類の甕はバラエティーに富んだ形態からなり、A群、B群、C群が混在するのに対して、Ⅰ－2類は中型甕に限れば第45図20～23のようにA群かそれに近い形態のB群がほぼ占める。Ⅰ－3類及びⅡ類の胎土の甕は全体量も少ないが、A群は確認されず、C群が目立つ状況である。

高堂遺跡2次20号溝の土器群はⅠ類・Ⅱ類混在の胎土組成であったが、月影甕はⅠ類に顕著に集中して確認される。うち、Ⅰ－1類の胎土の甕は形態差に富み、C群も定量含まれる。これに対してⅠ－2類の胎土では第46図8・9・10などA群かそれに近い形態のB群もより多く含まれるようである。この傾向は同遺跡の3次40号溝の土器群ではそれほど顕著ではないが、やはりⅡ

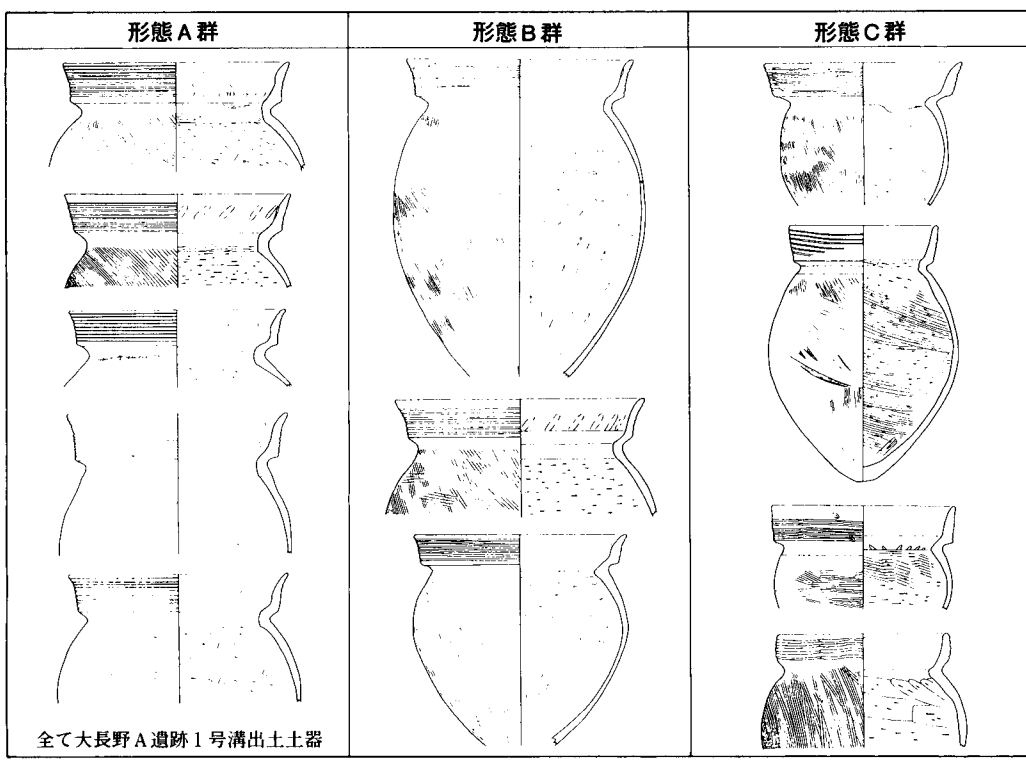
類よりⅠ類の胎土にA群もしくはB群の形態が多いものと思われる。

千代デジロA遺跡の土器群はⅠ類・Ⅱ類混在の胎土組成であり、一定の時期幅を考慮しつつも、A群及びB群の形態が胎土Ⅱ類よりもⅠ類に多い傾向にある。

高座遺跡の土器群は胎土Ⅱ類が主体となる可能性が高い土器群であり、やはり時期が限定できるか不安が残るが、甕でA群はほとんど認められず、C群が非常に多く見られる。

以上から、各土器群の月影甕は口縁部、頸部他各部位の形態において、A～C群の様々な形態を、ある程度胎土も分けて併存させていると指摘することが可能である。さらに形態と胎土との対応は各遺跡でよく似た傾向を示すと言えよう。具体的に言うならば、A群及びそれに近い形態のB群は胎土Ⅱ類よりⅠ類に多く、Ⅰ類の中ではⅠ－2類が最も多く含まれ、Ⅰ－1類がそれに次ぐ。Ⅱ類は量的に最多のⅡ－2類が様々な形態が併存する状況であり、Ⅰ－1類に近い様相になる。Ⅰ－3類、Ⅱ－1類、Ⅱ－3類の胎土については厳密に比較できるだけの量には欠けるが、A群の形態はほとんど見られない。一応Ⅰ－1類、Ⅱ－2類に準じる存在として扱っておきたい。0類、Ⅱ－0類といった細粒胎土については甕自体にほとんど見られず基本的に用いられない胎土と見なしておきたい。0類、Ⅱ－0類を除く胎土各類をA群かそれに近い形態のB群の占有率の高いものから順に仮に序列化するならば、現状では以下のようになろう。

（A・Aに近いB）Ⅰ－2類 → Ⅰ－1類・Ⅱ－2類 → Ⅰ－3類・Ⅱ－1類・Ⅱ－3類（B C）



第57図　月影甕分類概念図（S＝1/6）

c）月影甕小考

月影式土器の編年研究の中では、月影甕の各部位の変化の程度の差が新古の時期差として主に考えられてきた感がある[17]。すなわちA群の形態に近似するほど新しい時期を示すとする理解である。しかしながらここで観察した土器群はA群やそれに近い形態のB群ばかりでなく、形態差の大きいC群やそれに近いB群が混在する組成として評価されよう。中でも、一括性が高く時期を絞って考えることができる好資料である大長野A遺跡、高堂遺跡の土器群は必ずしも月影式の最古段階を示すものとは言い難い状況である。甕においてA～C群の形態が併存している状況[18]は月影式期の古相以外の時期にも現実的に存在するとしなければならない。

従来まで、月影式土器は手取川以南の地において良好な資料が少なく、北加賀に比べてその様相は不明確であった。今回観察した資料は地域をごく狭域に限定しているため、南加賀一円での普遍性があるかどうかは保留するが、少なくともこうした様相は当地、梯川中流域右岸地域における月影式土器の実態を示すものであろう[19]。月影甕については前記した各部位の特徴を全て備えるA群は、当地域では非常に少なく、むしろA群に近い形態を含むB群のほうが多く、より普遍的な存在となる。A群やそれに近いB群の偏在が指摘されている北加賀地域[20]と比較すると、見過ごしがたい月影甕の様相差が顕れているのである。

そして月影甕各形態に胎土の別がある程度相関することは既に述べたが、以上の事象を踏まえて位置付け直しておきたい。胎土Ⅰ－2類には形態A群の存在が特に顕著であるが、現状ではどちらも土器組成の主体とはならない。胎土Ⅰ－1類やⅡ－2類の群は形態A群も含まれるがB群の方が多く、C群や非月影甕が少量混在し、組成の主体となりうる。Ⅰ－3類やⅡ－1類やⅡ－3類はさらにC群や非月影甕を多く含む群で、現状では組成の主体とならない。と以上のように評価できる。

ここまでの分析により、当地域の月影式期には近接する集落遺跡でも主となる土器胎土が異なる場合があり、特定胎土に特定器類・器種・器形がある程度対応することが明らかになった。特に月影甕は胎土と各部位の形態が複雑に組み合わさって、ごく狭域の集落においても複雑な組成が存在しているものと思われる。以上のような様相は当時の生活と社会の状況を何らかの形で反映していることは確実であるが、その実態まで明らかにすることは容易ではない。主には集落の性格と、集落を構成する集団のあり方が示されている[21]ように感じているが、さらに一歩踏み込んで結論を求めるには、あまりにも分かっていないことが多い現状である。集落についてはその構造、交流、土器生産など様々な局面で、遺構・遺物諸要素を多面的に検討する作業が必要であろう。また、分析の結果には胎土分類と観察[22]、データの数量化、型式認定[23]、民族学的な評価など、今後に検討の余地を残す点は多く、修正と資料の蓄積を心掛けたい。

6　おわりに

小論では主に土器の胎土・甕の形態の両面から、梯川中流域右岸地域の月影式土器を分析した。その結果得られた、北加賀以外の地域でこの時期の様相の一部をかなり明らかにした成果には、大きな意義があると考える。月影式期は、甕の大半が、小論で述べた特徴的ないくつかの形態の

うちいずれかをほぼ確実に備える月影甕となり、他の器類、器種も小型化、規格化が進み、きわめて在来的な土器様式が北陸西部各地で成立する画期である。その生活と社会の実像に迫るには、月影式土器をより小地域単位で考えることが有効な方法の一つであると、今回確信した。今後、北陸各地の狭域間集落で同様の検討が行われ、当地域が比較の一対象となるならば幸いである。

小論をまとめるにあたっては、北野博司氏、田嶋明人氏、栃木英道氏、湯尻修平氏の各先学から特に有用な教示を得ている。この場を借りて深謝するものである。

注

(1) 浜岡・吉岡1962。

(2) 田嶋1991頁73、吉岡1991頁130・139等。

(3) 石川県立埋蔵文化財センター1990ｂ頁27～32。

(4) 奥田1991。

(5) 田嶋1994。

(6) 奥田氏の裸眼観察の基準に準拠する（奥田1991頁43）。すなわちＬ＝粒径２㎜以上、Ｍ＝粒径２㎜未満0.5㎜以上、Ｓ＝粒径0.5㎜未満。

(7) 胎土中の海綿骨片については、今回の観察では見い出せなかった。

(8) 胎土分類について、奥田氏は主となる砂礫から大別を、その他の砂礫・鉱物・生物片と組みあわさる構成から細別を行なっている（奥田1991頁30）。田嶋氏は奥田氏の観察データをもとに、基調となる砂礫が流紋岩と石英のどちらとなるかで大別し、その頻度でさらに細別した（田嶋1994頁66～67）。小論での分類は、器面に顕著に見られる砂礫・鉱物が流紋岩質岩であるか石英質岩であるかで大別したという点で、Ⅰ類が田嶋氏の分類の流紋岩基調、Ⅱ類が同じく石英基調に近い。しかし、小論の分類は正確な砂礫の量比に基づいていないため、厳密には整合しない。

(9) 観察部位は同一の土器であってもハケやミガキ等の器面調整によって表出する砂礫に偏りが見られるため、甕などのハケ、ケズリを基調とする器種についてはナデが行われる口縁部の内面を重視した。壷・高杯などミガキを基調とする器種についてはミガキをかけない部分、あるいは全器面の丹念な観察を重視したものである。色調については土器の器面本来の色調を重視した。また、観察時の光源については、電球光は黄色みが強い有色光となり、砂礫の光沢や反射を強調するため、胎土・色調の判別をしにくくする。よってより自然光に近い白色蛍光灯を選択している。

(10) 石川県立埋蔵文化財センター1990ａ。今回の胎土観察にあたっては、出土土器を報告された栃木英道氏に有用な教示を得た。また同氏の胎土観察データも提示していただき、参考にした。

(11) 石川県立埋蔵文化財センター1992。および調査・報告された湯尻修平氏に有用な教示を得た。

(12) 石川県教育委員会1978。

(13) 谷内尾1983頁316～318、石川考古学研究会1986。

(14) 奥田1991頁32で指摘があり、筆者も支持するものである。

(15) 特に、①の口縁部については最も視覚的に月影甕を印象付ける特徴と思われ、ほとんどの文献に同様の記述が見られる。多くの関係者が参考にしたと思われるものは、吉岡康暢氏の記述（石川県教育委員会1976頁232）、谷内尾晋司氏の記述（谷内尾1983頁320）等であろう。

(16) 形態Ａ群については他群よりも特徴をかなり絞り込んでいるにもかかわらず、北加賀を中心として多くの個体が確認されており、月影甕の一型式として認定することが可能と思われる。

(17) 谷内尾1983頁319～320等。

(18) Ａ群との形態差が大きいＢ群・Ｃ群の形態が併存する意味については、現状ではうまく説明できない。参考的に観察した大長野Ａ遺跡８号溝・２～４号土坑・包含層（以上本書報告）から出土した法仏式期の土器にほとんどが祖形を求めることができることから、前段階の古い伝統が各部位で様々な程度で残存する現象を想定し、有力な仮説としたい。法仏式期の甕には、例えば口縁部については長・短・厚・薄・曲・直、頸部については厚・薄、内面帯状・くの字状といった形態差が既に有段口縁擬凹線甕にも存在している。法仏式期の甕が月影甕の下地になり、各部位の変化が全ての甕に必ずしも一様に及んでいないと考えるならば、例えば底部・胴部は変化しても、口縁部・頸部が不十分であるような部位選択的な変化も生じ得るかもしれない。推測を進めるならば、法仏式期に口縁が直線的で短いものはやはり第45図10・32のように短く、頸部内面がくの字状のものは６・８のようになるか、32・35のように帯状を意識して不整になる。各部位の変化を比較的スムーズに受容したものは１～５・20～23など形態Ａ群かそれに近い形態

のB群であり、あまり受容しなかったものは9～11・32・35などのC群となる、と解釈できる。すなわち当地の月影甕には、ある程度前段階の伝統を色濃く残す異質なものを含んで形成され、胎土・器形の別で異なる変化を遂げていく、と言うような非常に在来的で伝統的な評価が与えられる。

(19) 北陸西部における月影甕の形態差の存在については、石川考古学研究会1986頁14～15等で既に指摘されているが、おそらくより多くの関係者が経験的に感じていることとであろう。

(20) 谷内尾1983頁320等で指摘されている。

(21) 土器が集落単位で自給的に生産されることを前提として推測が許されるならば、各遺跡の様相は地形・水系の差も含めた遺跡の性格に大きく影響されたものと考えたい。甕の形態各群・胎土各類については、それに近い数の単位集団が集落内に存在することを示すと仮定するなら、集落内に非常に在来的で伝統的ながら系統が細かく異なる複数の単位集団が存在していて、それぞれで土器を製作している姿が窺われよう。

(22) 今回は胎土中の砂礫を題材としたが、粘土素地についても細分類が可能であり、本来は砂礫と粘土素地の両方を分析しなければならない。今回の観察では、土器の胎土（砂礫・粘土素地）、色調、焼成、形態には一定の相関性がある印象をもっており、製作地、製作者の癖を示すものかもしれない。例えばⅠ類の砂礫には、シルト成分が多くやや砂っぽい粘土素地、bの他aとした赤色～黄橙色を呈する色調が相関する特徴的な質感を有する個体が若干存在する。そして特にⅠ－2類の砂礫及び、A群あるいはそれに近いB群の形態に認められており、北加賀地域からの搬入品が含まれる可能性を考えている。胎土と形態ばかりでなく、質感、調整等の各属性を組み合わせた類型化、土器個々の出自の小地域・遺跡単位での特定、集落の動態の非常にミクロなレベルでの検討、を順を追って行う作業は小論の大きな目標の一つであったが、今回は十分に整理できず、提示するには至らなかった。北加賀地域との対比も含めて今後の課題としたい。

(23) 北陸における月影式並行期の土器型式については、北野博司氏が高杯について既に幾つかの型式を抽出して認定し、時間的・空間的な分布を辿る作業を行っている（石川県立埋蔵文化財センター1991頁170～174）。しかし月影甕については、目にすることが実に多い非常に重要な器種であるのに、型式学的な整理はごく大まかにしかなされていないのが現状であり、小論でも十分把握できなかった。月影甕の型式認定作業はいまだ未確立な月影式土器の編年網の整備に向けての基礎的研究であり、特に急務と感じられる。胎土の分析とは別に、今後取り組んで行きたく思っている。

引用・参考文献

石川県教育委員会『塚崎遺跡』1976年

石川県教育委員会『辰口町・高座遺跡発掘調査報告』1978年

石川県立埋蔵文化財センター『高堂遺跡』1990年a

石川県立埋蔵文化財センター『倉部』1990年b

石川県立埋蔵文化財センター『押水町冬野遺跡群』1991年

石川県立埋蔵文化財センター『千代』1992年

石川考古学研究会『シンポジウム「月影式」土器について』報告編・資料編　1986年

奥田　尚「Ⅲ　調査研究報告　月影式土器の産地とその移動－加賀平野内を例として－」『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報2　平成2年度』1991年

田嶋明人「2土師器の編年　5北陸」『古墳時代の研究6土師器と須恵器』1991年

田嶋明人「Ⅲ　調査研究報告　混和材からみた土器の生産と供給（予察）－加賀地域の月影期前後を中心に－」『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報4　平成4年度』1993年

浜岡賢太郎・吉岡康暢「加賀・能登の古式土師器」『古代学研究』第32号　1962年

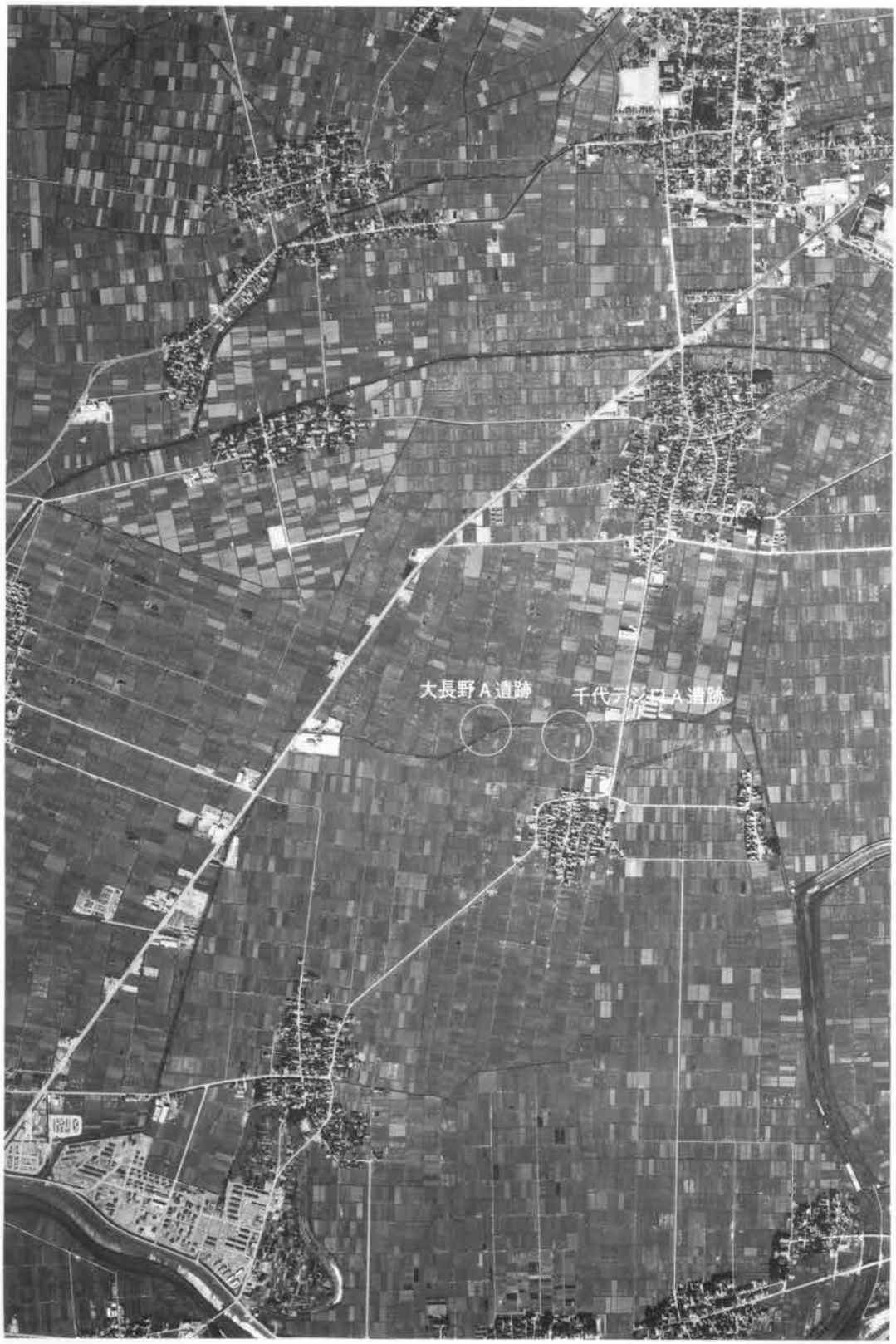
益富壽之助『原色岩石図鑑』全改定版　1987年　保育社

谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』（『石川考古学研究会々誌』第26号）1983年

吉岡康暢『日本海域の土器・陶磁［古代編］』1991年　六興出版

図　版

図版1



遺跡周辺の航空写真

図版2　千代デジロA遺跡

調査後全景（南から）

調査後全景（北から）

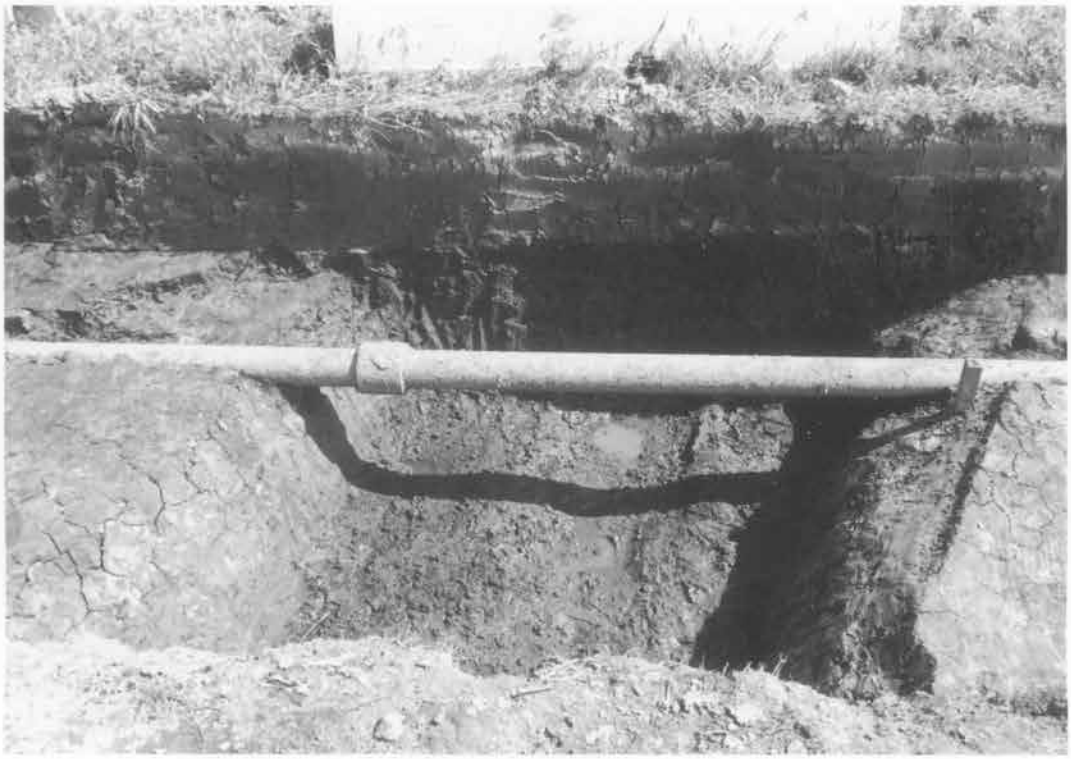
図版3　千代デジロA遺跡

1号土坑（東から）

4号ピット（東から）

図版4　千代デジロA遺跡

1号溝（北から）



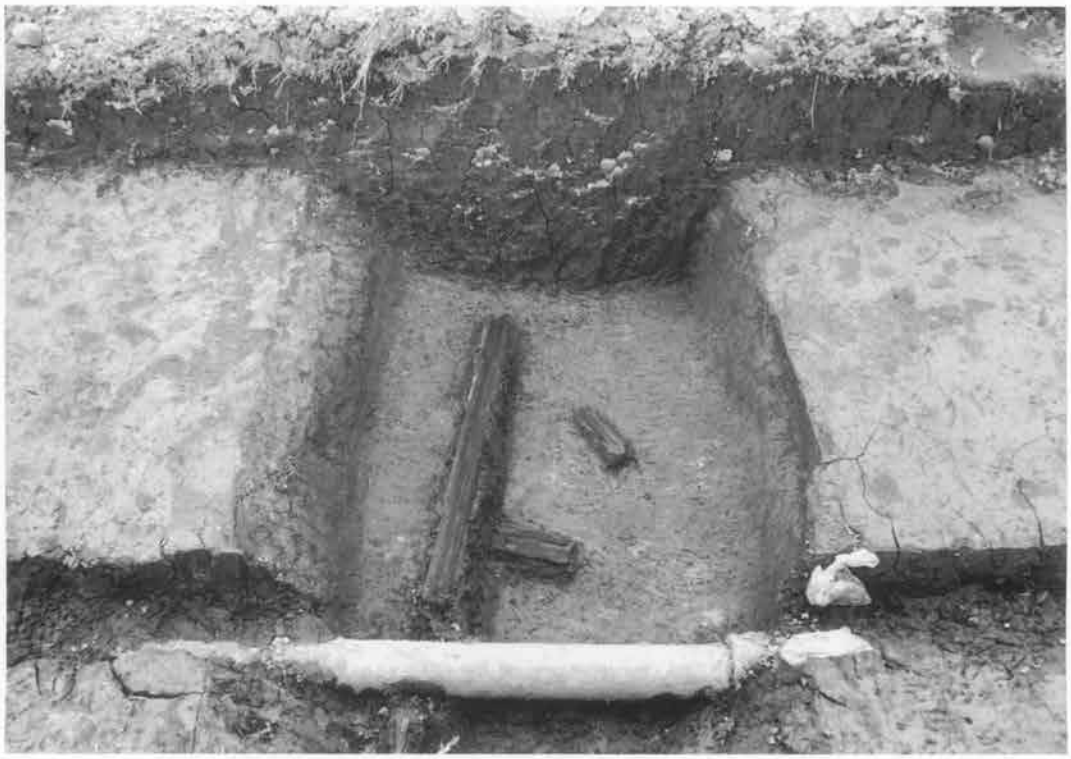
2号溝（西から）

3号溝（西から）

4号溝（西から）

図版6　千代デジロA遺跡

14号溝（東から）



15号溝（東から）

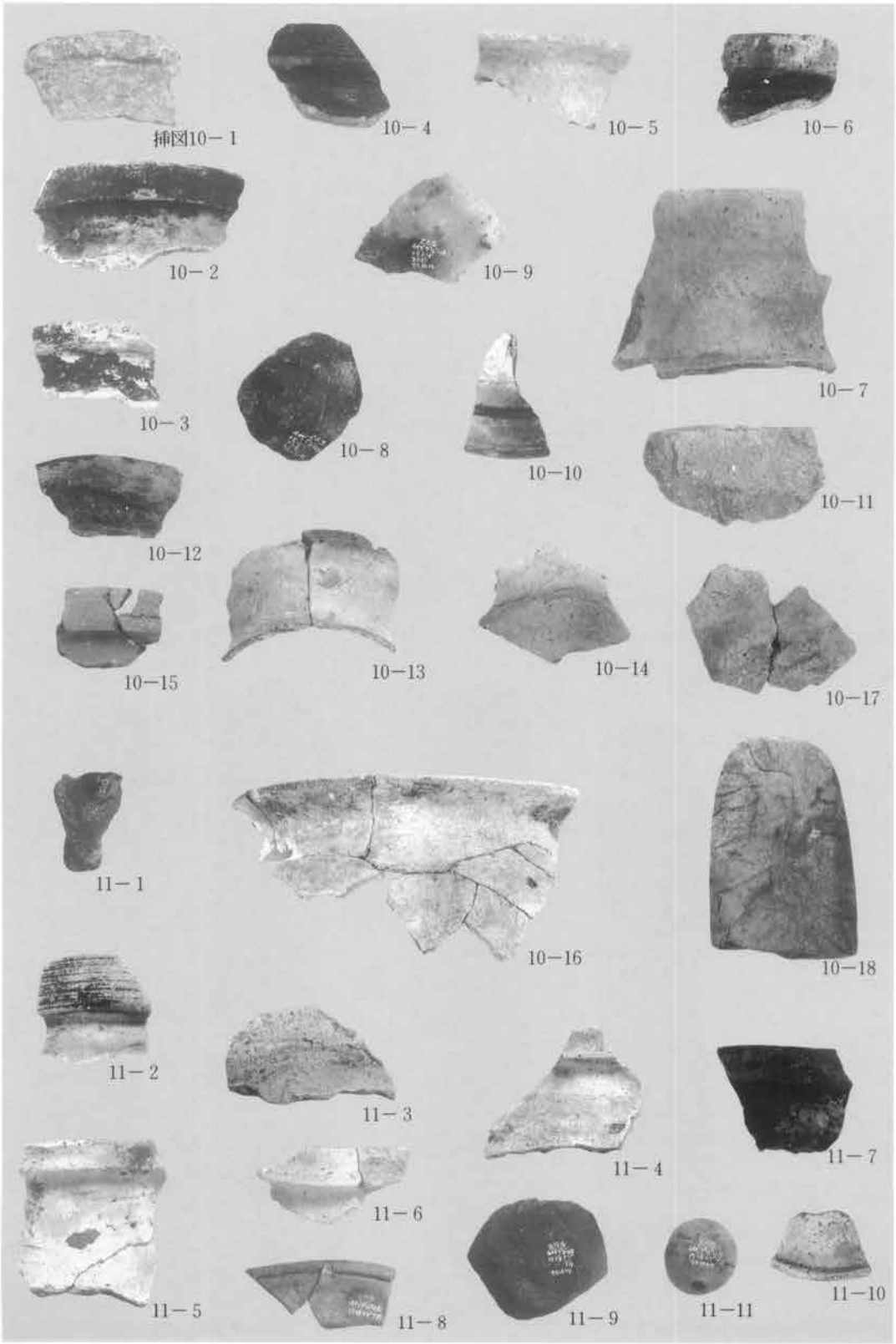
16号溝（東から）

19号溝（南西から）

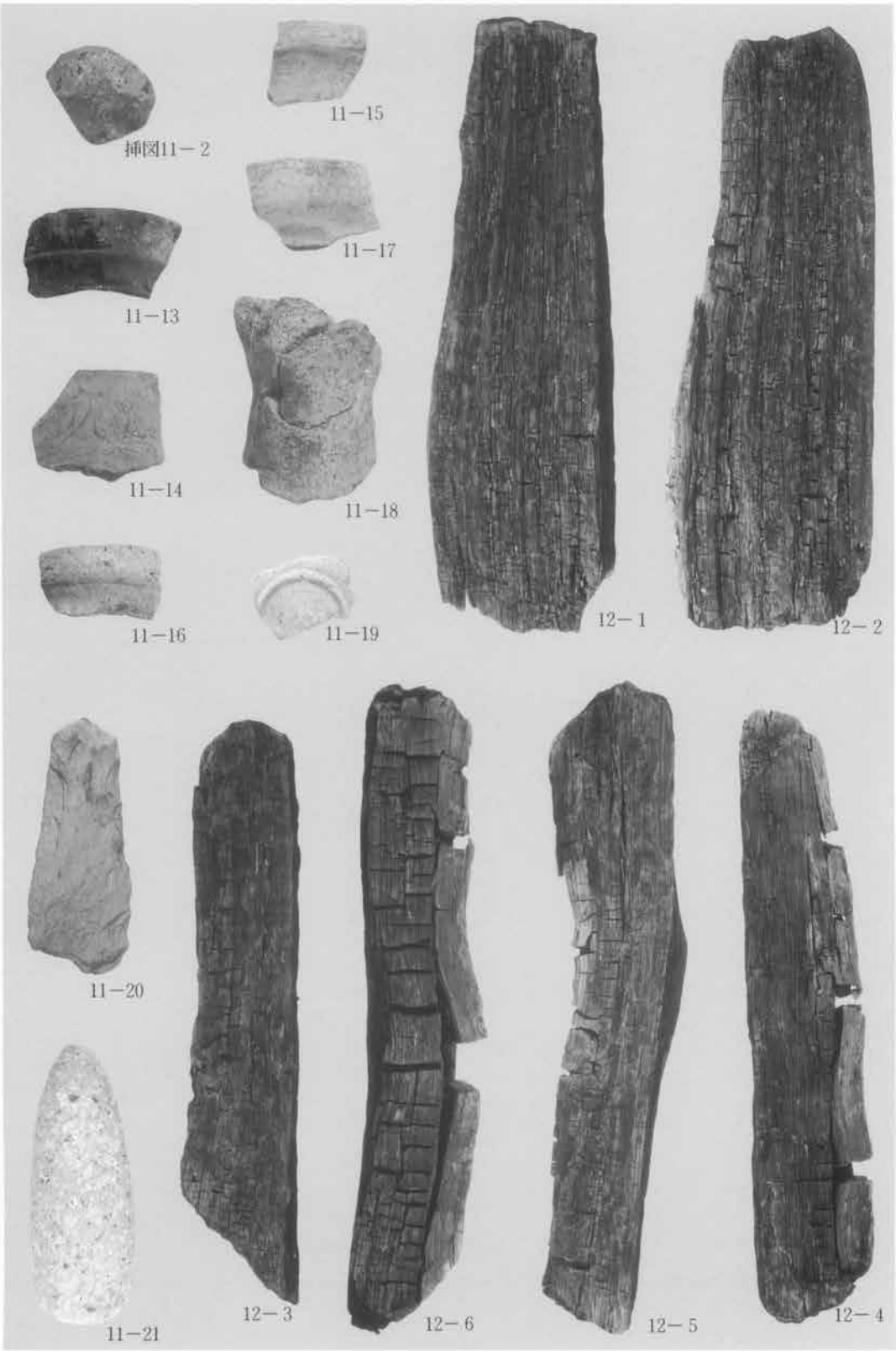
図版8　千代デジロA遺跡

17～19号溝（北東から）

16～19号溝（北東から）



千代デジロA遺跡　出土遺物(1)



千代デジロA遺跡　出土遺物(2)

1～2区調査後全景（南東から）

3～16区調査後全景（東から）

12～16区調査後全景（東から）

14～16区調査後全景（東から）

1号溝（東から）

1号溝（南から）

2号溝（東から）

2号溝（北から）

2号溝（遺物取りあげ後、北から）

3号溝（北から）

図版16　大長野A遺跡

4号溝（北から）

5号溝（東から）

8号溝（北西から）

8号溝（西から）

9号溝（西から）

1号大溝（北から）

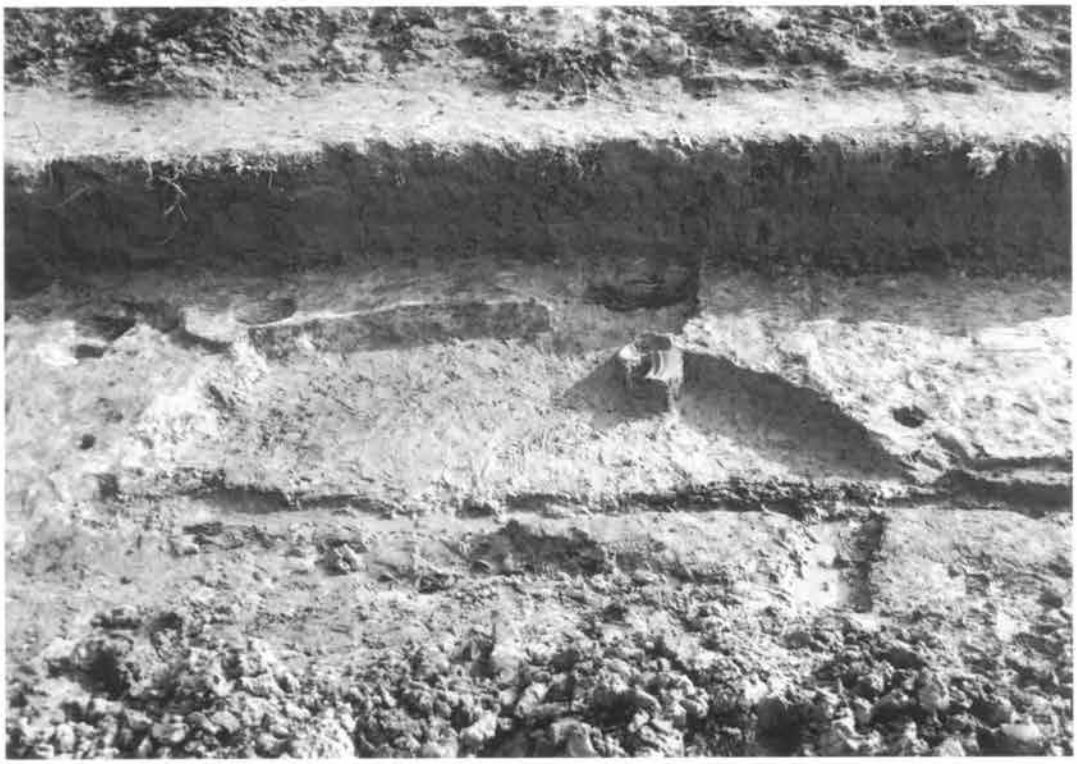
1号大溝（木集中地点、北西から）

2号大溝（北東から）

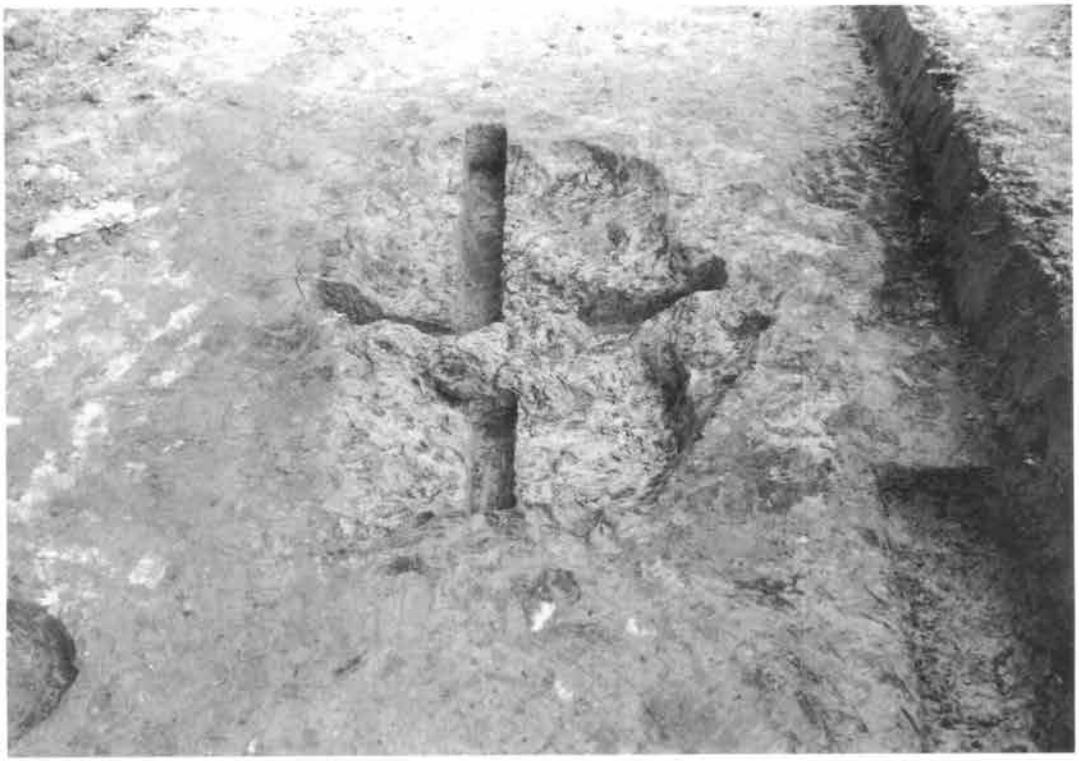
図版20　大長野A遺跡

1号落ち込み（西半部、西から）

1号落ち込み（東半部、西から）



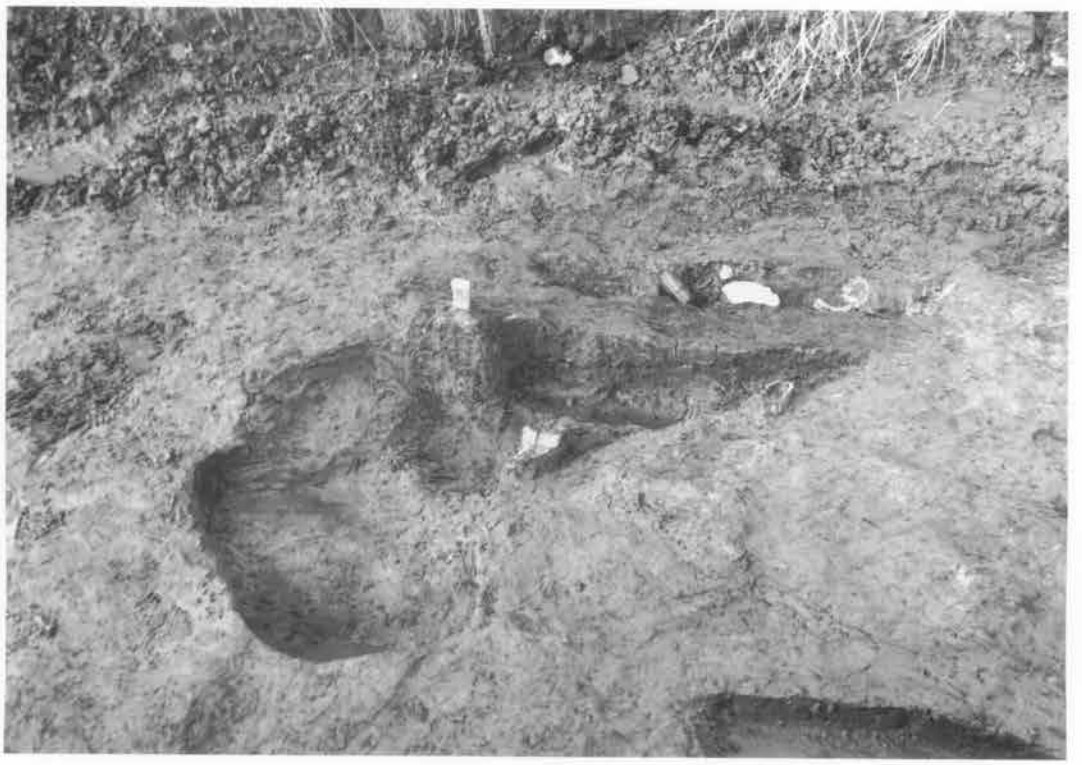
3号落ち込み（北から）



1号土坑（西から）

図版22　大長野A遺跡

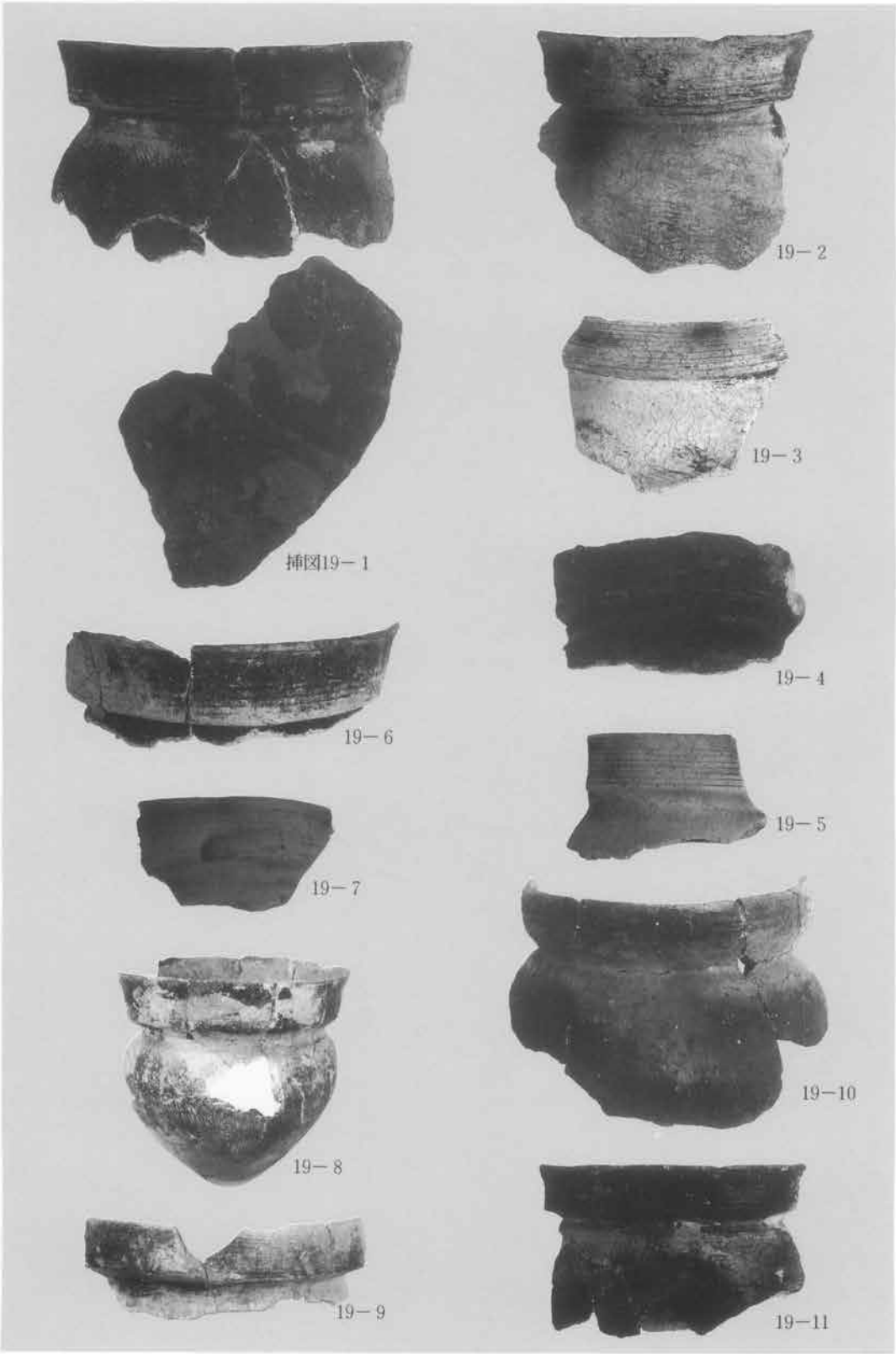
2・3号土坑（北から）



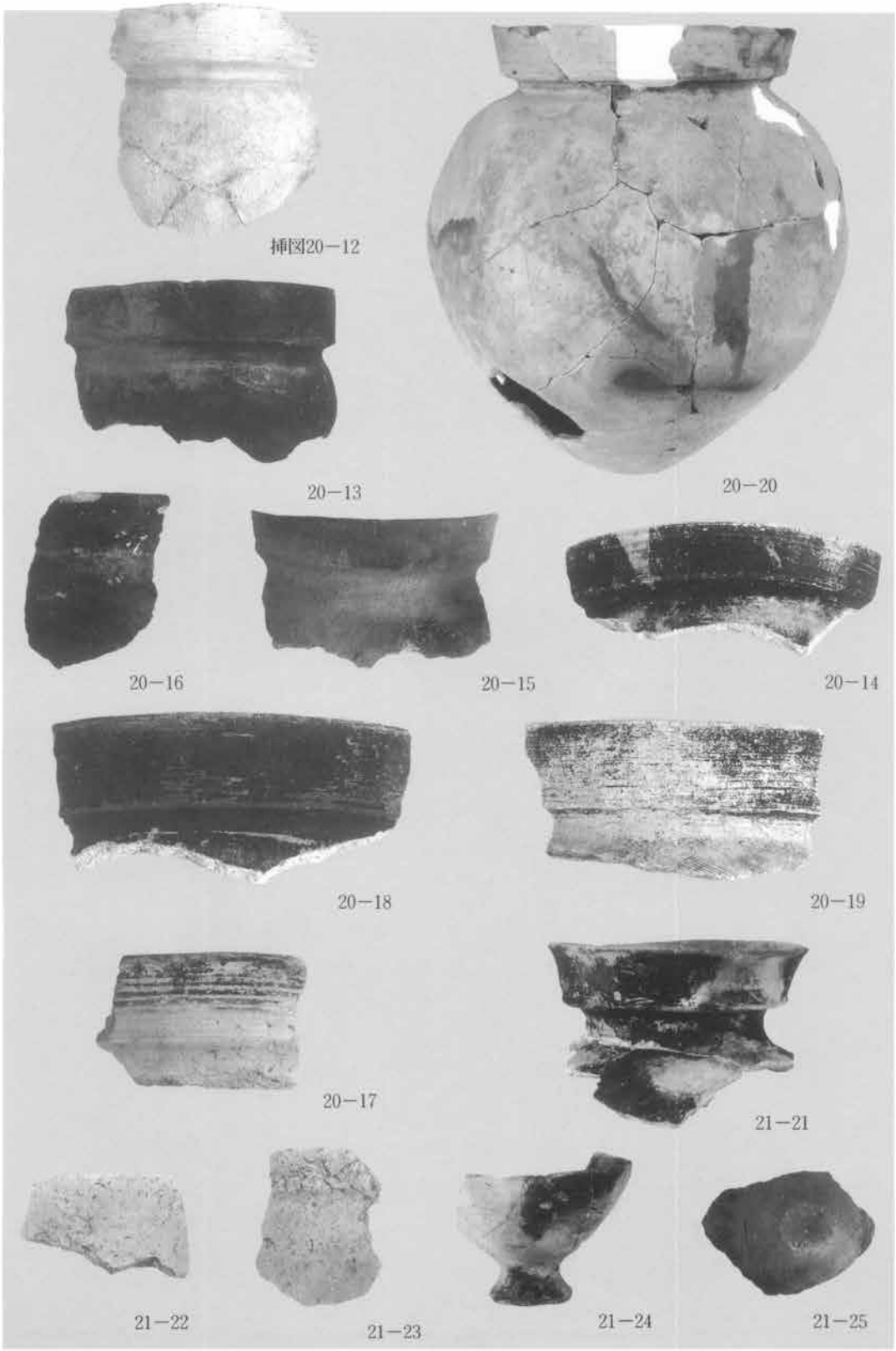
4号土坑（南から）

19号ピット（北から）

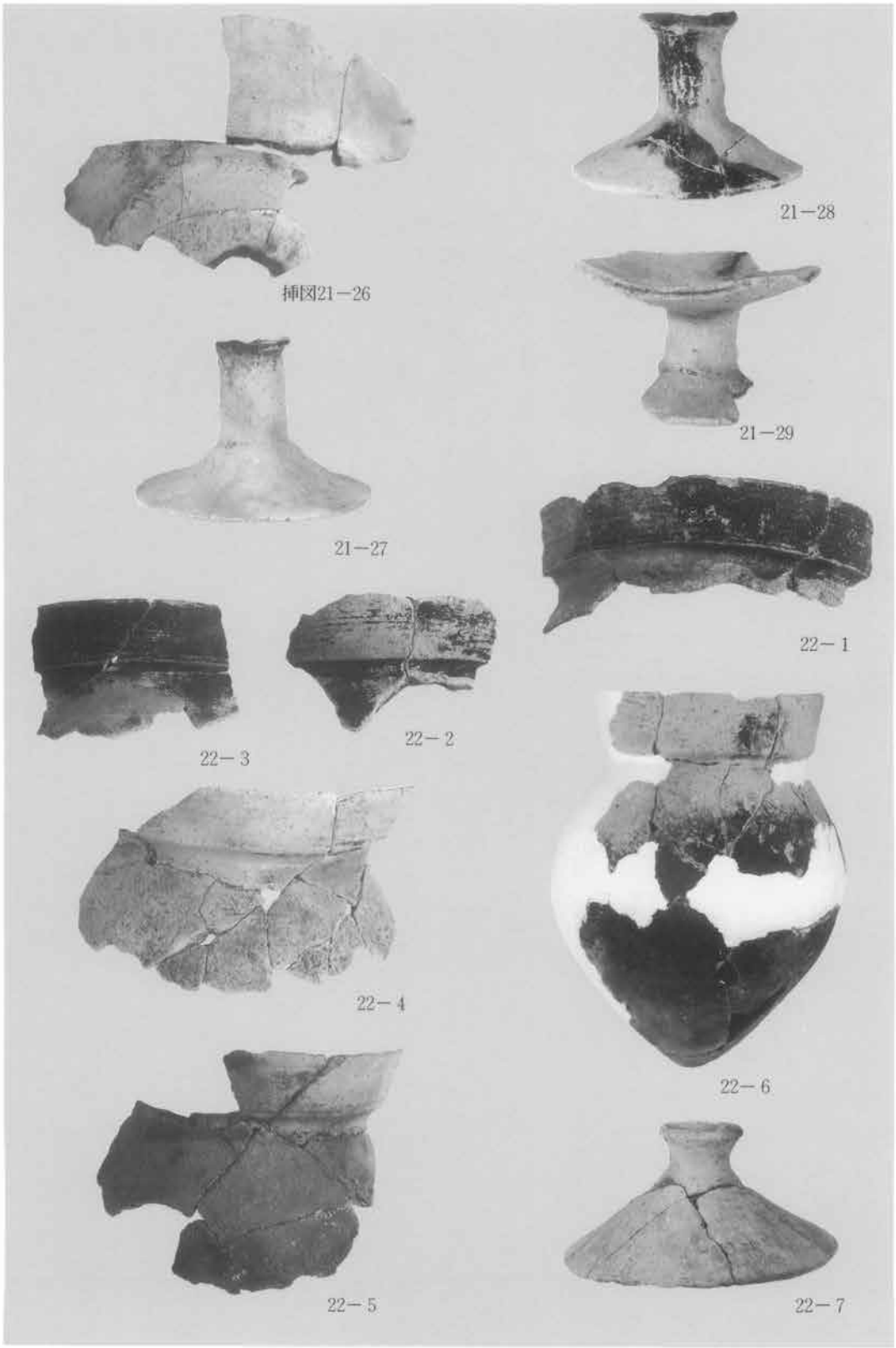
18区調査後全景（北から）



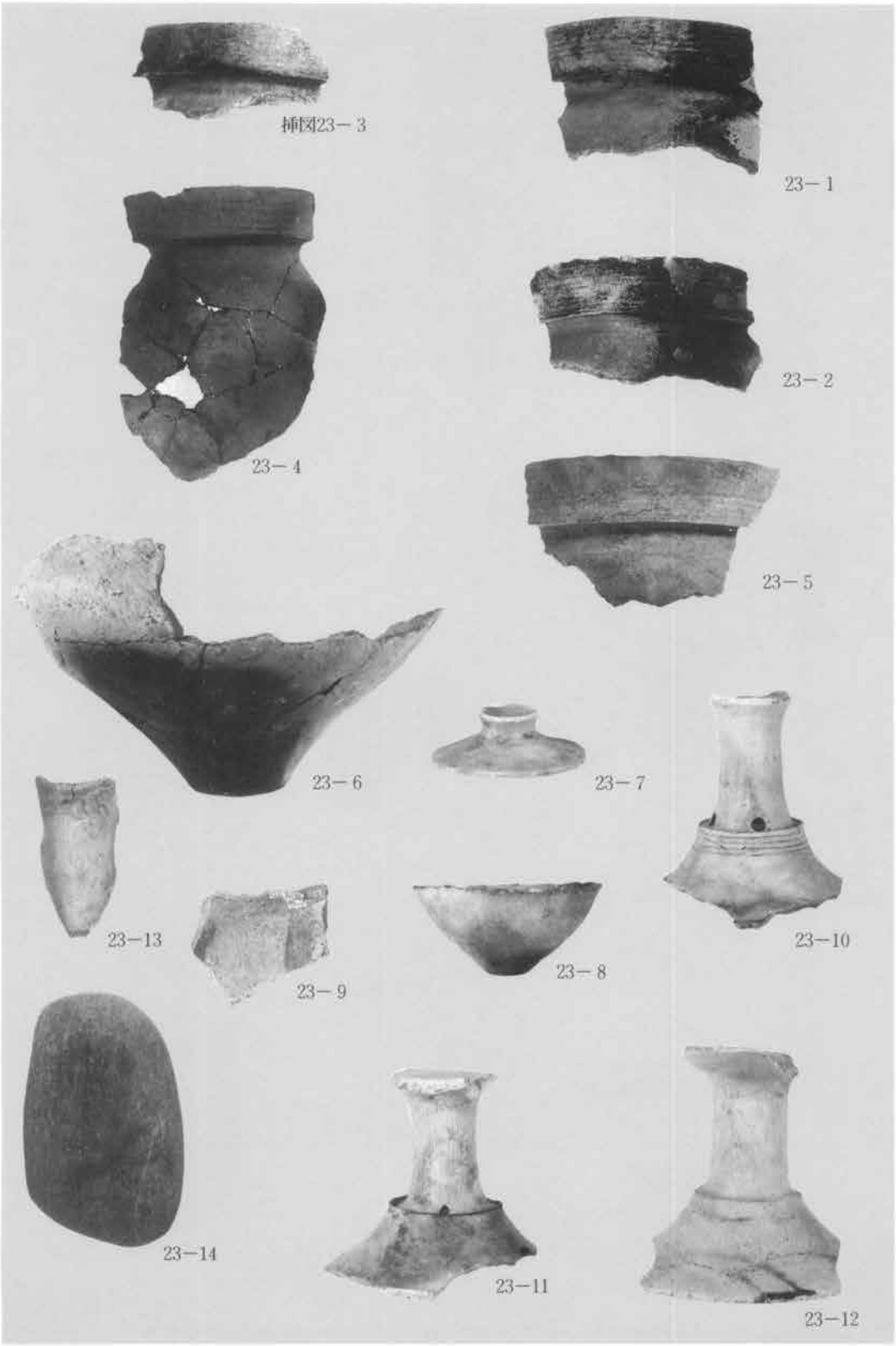
大長野A遺跡　1号溝出土遺物(1)



大長野A遺跡　1号溝出土遺物(2)

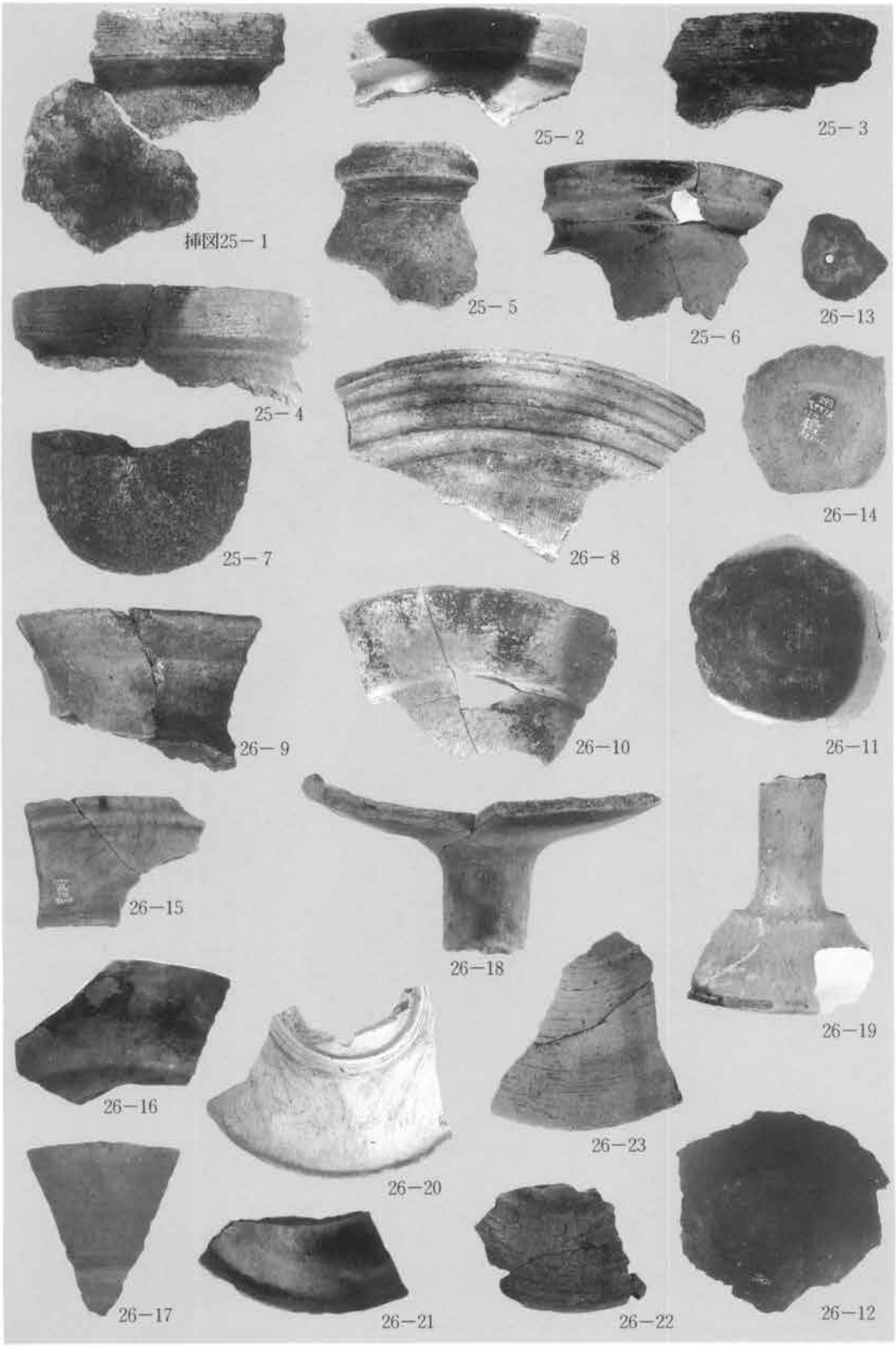


大長野A遺跡　1号溝出土遺物(3)

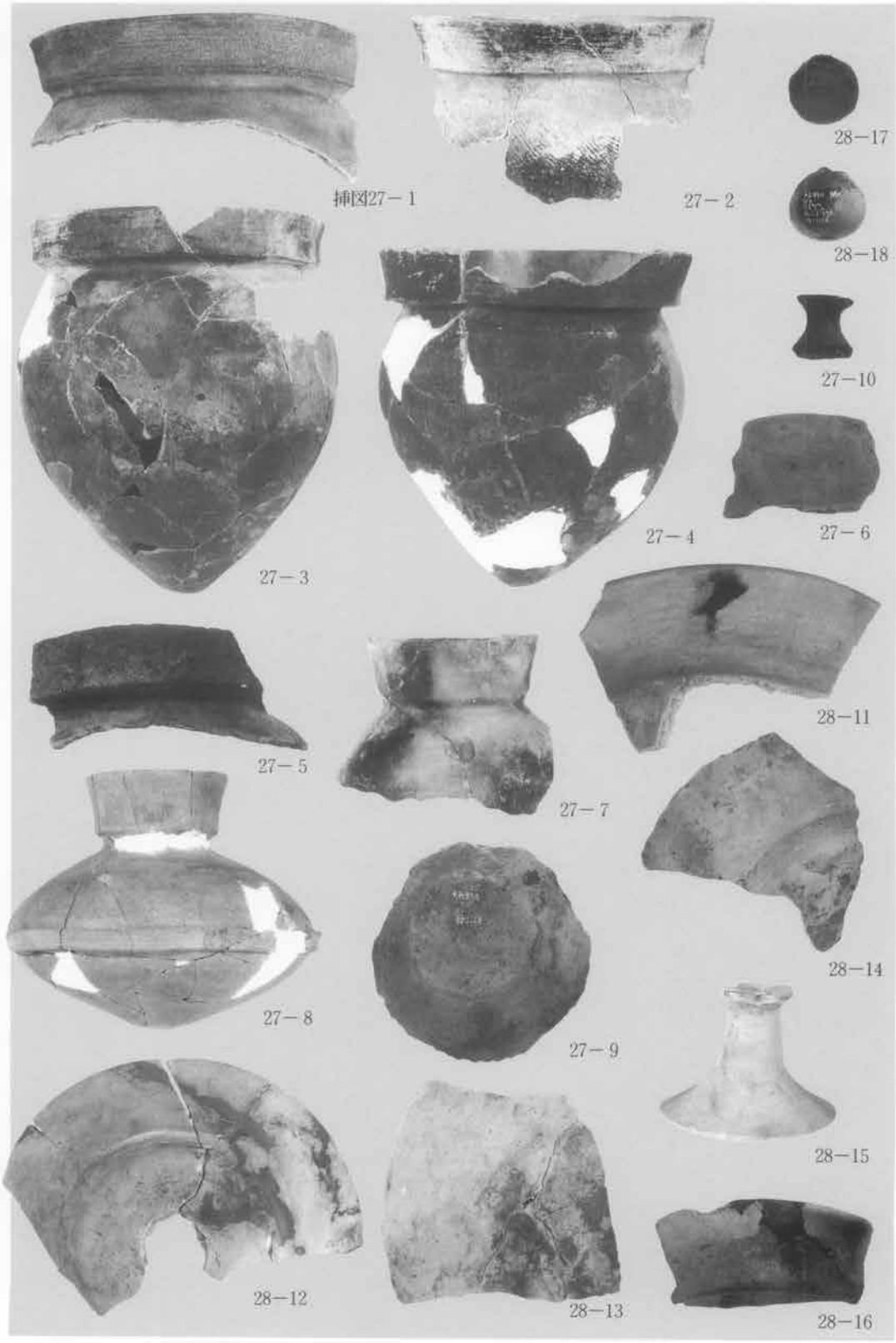


大長野A遺跡　2号溝出土遺物

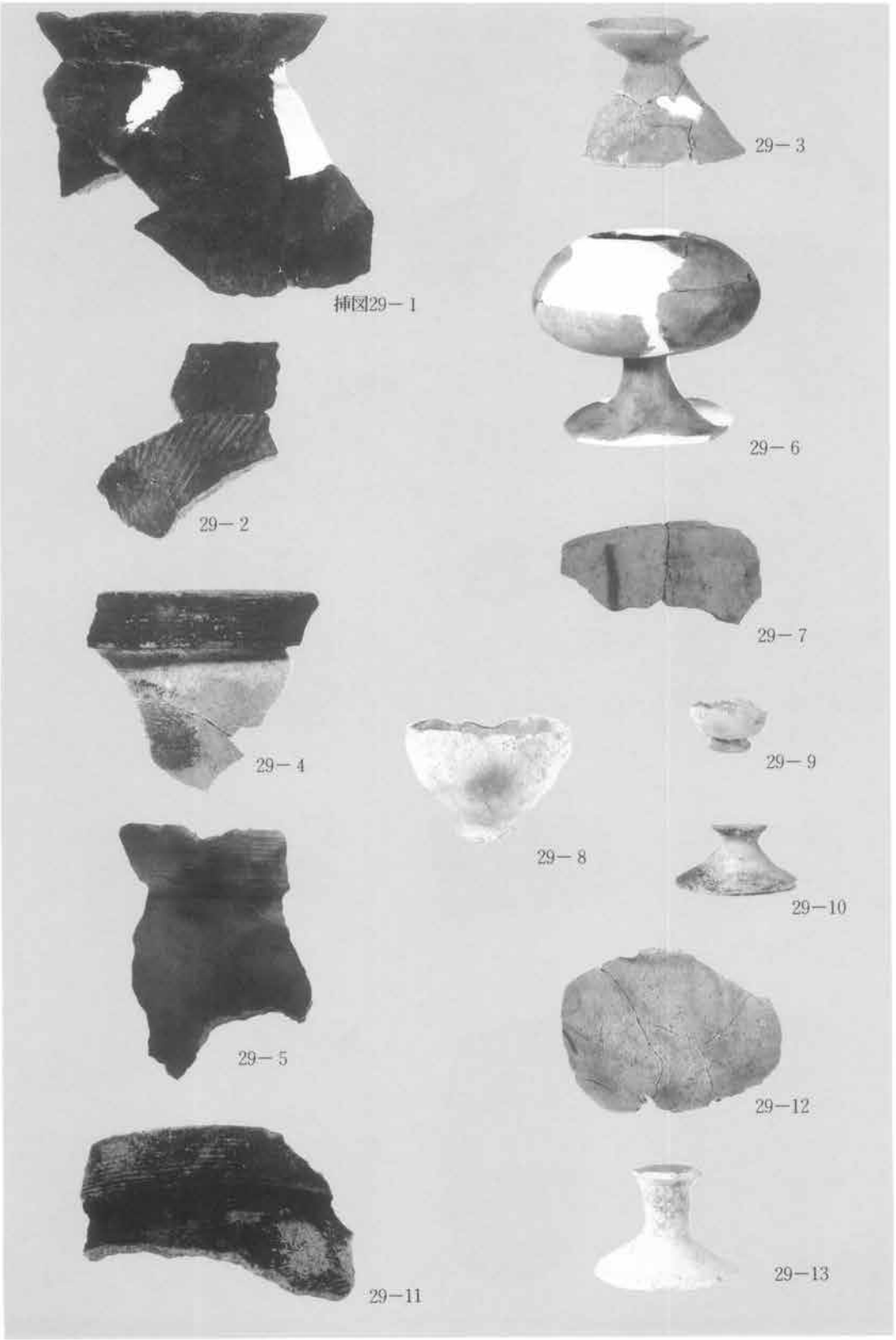
大長野A遺跡　3・5・7号溝出土遺物



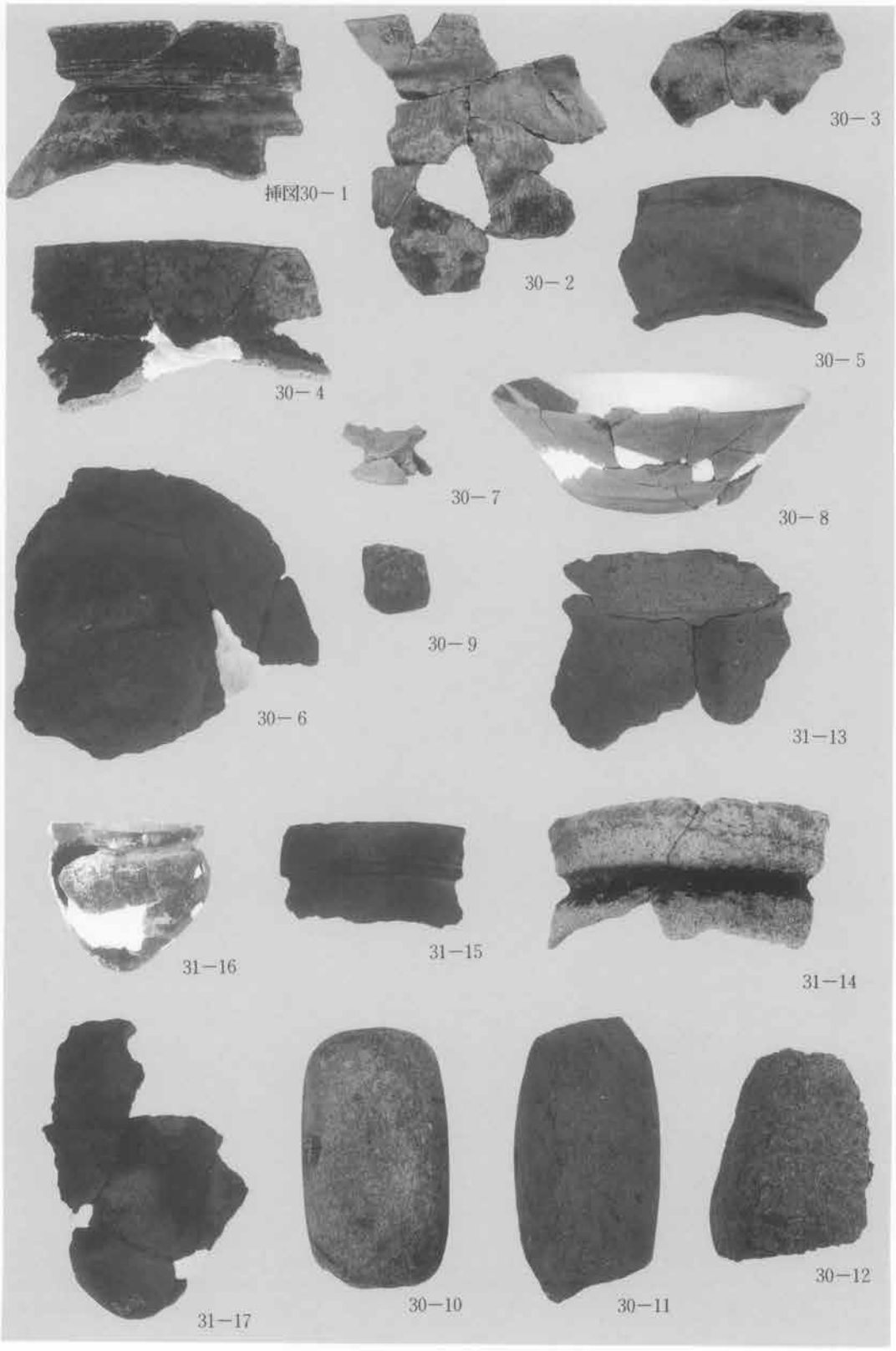
大長野A遺跡　8号溝出土遺物



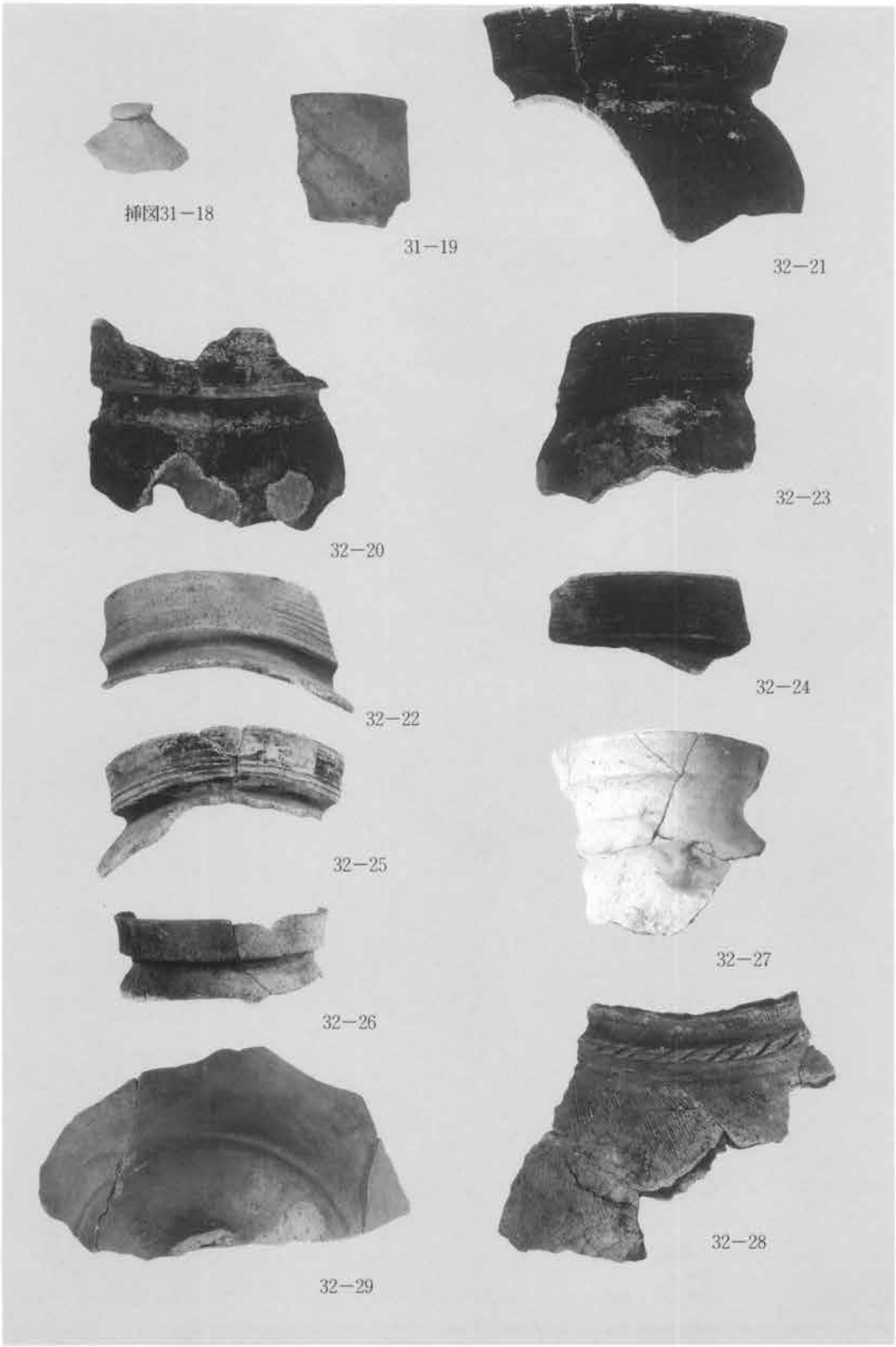
大長野A遺跡　9号溝出土遺物



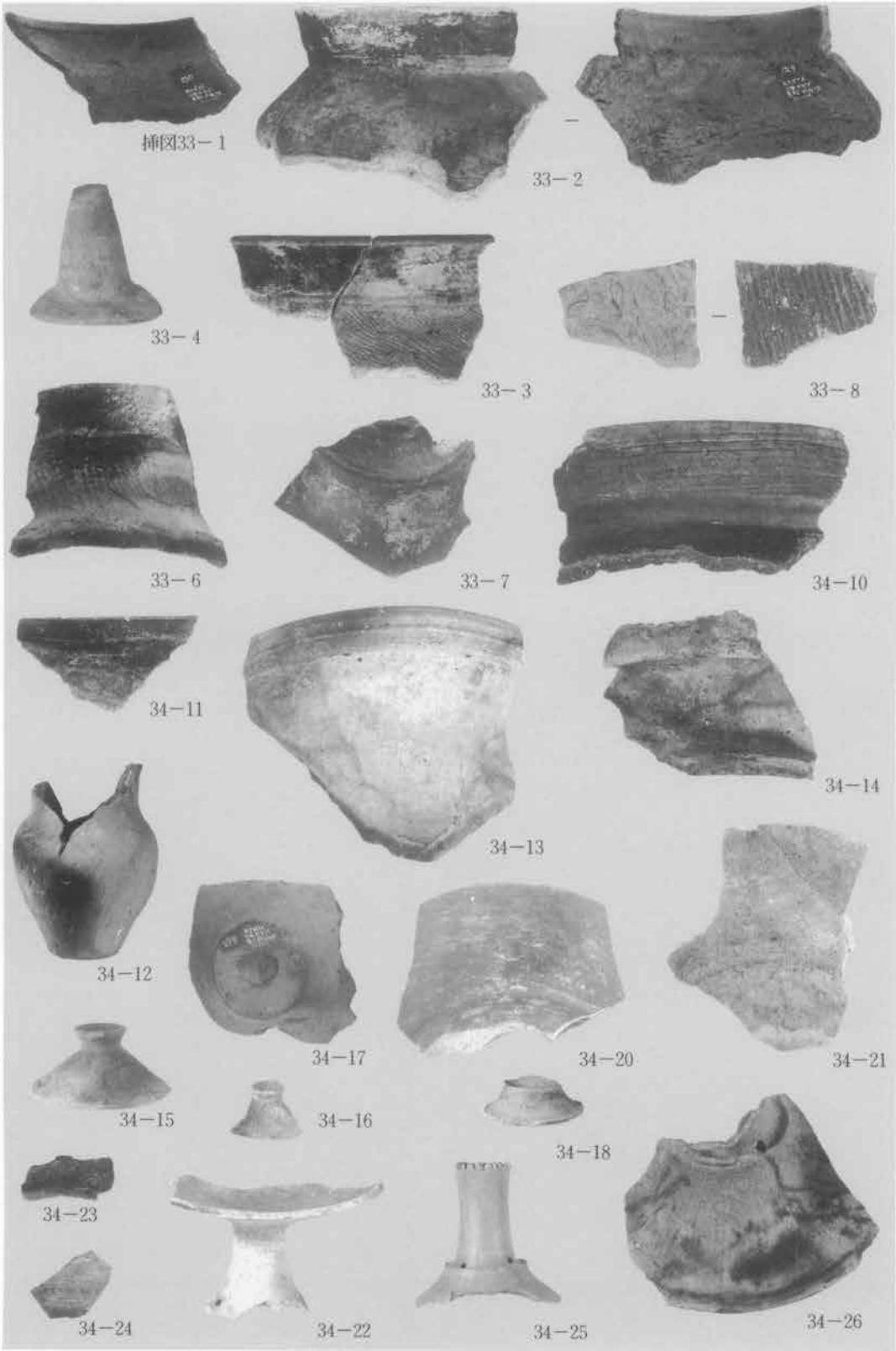
大長野A遺跡　1号大溝出土遺物



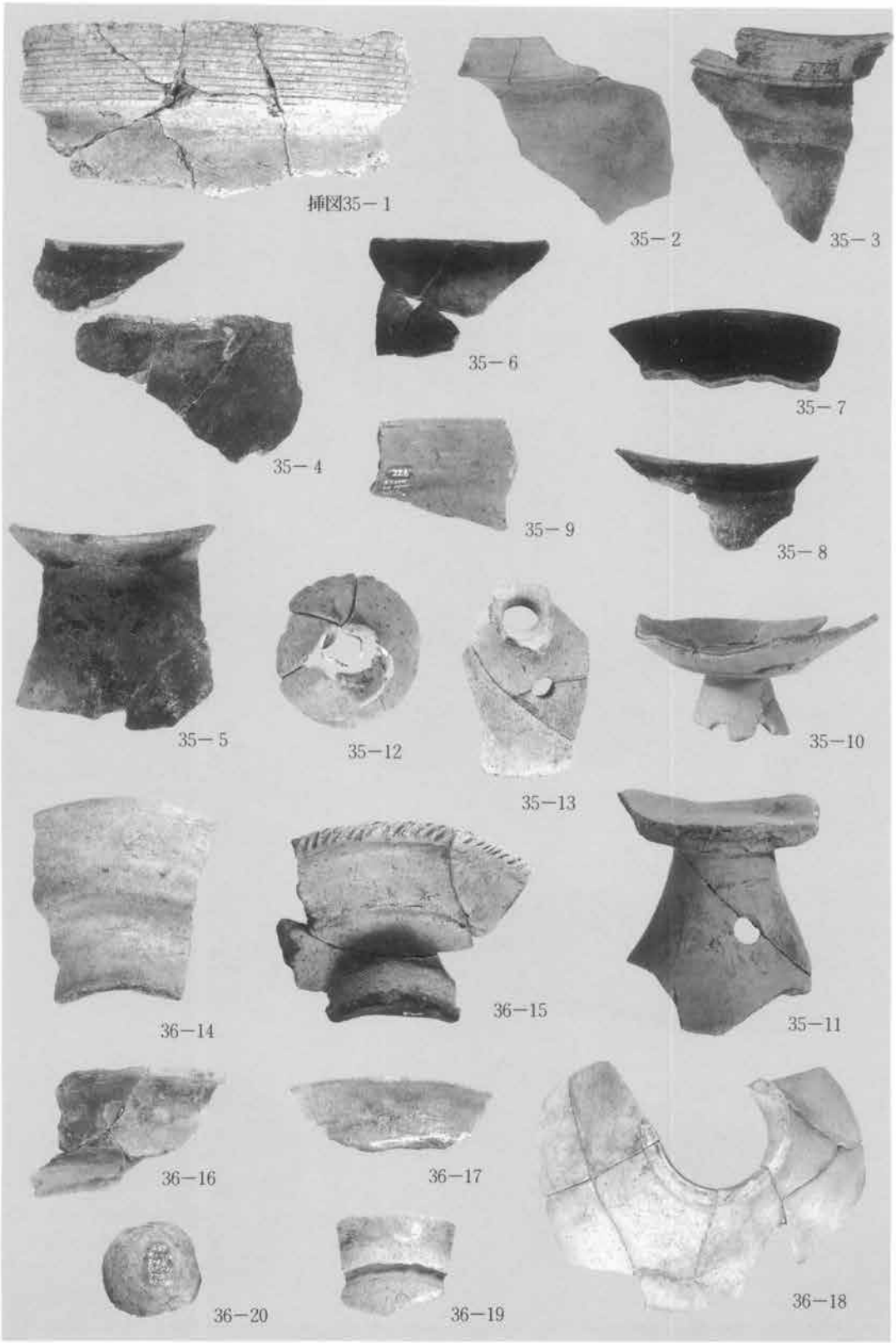
大長野A遺跡　2号大溝出土遺物(1)



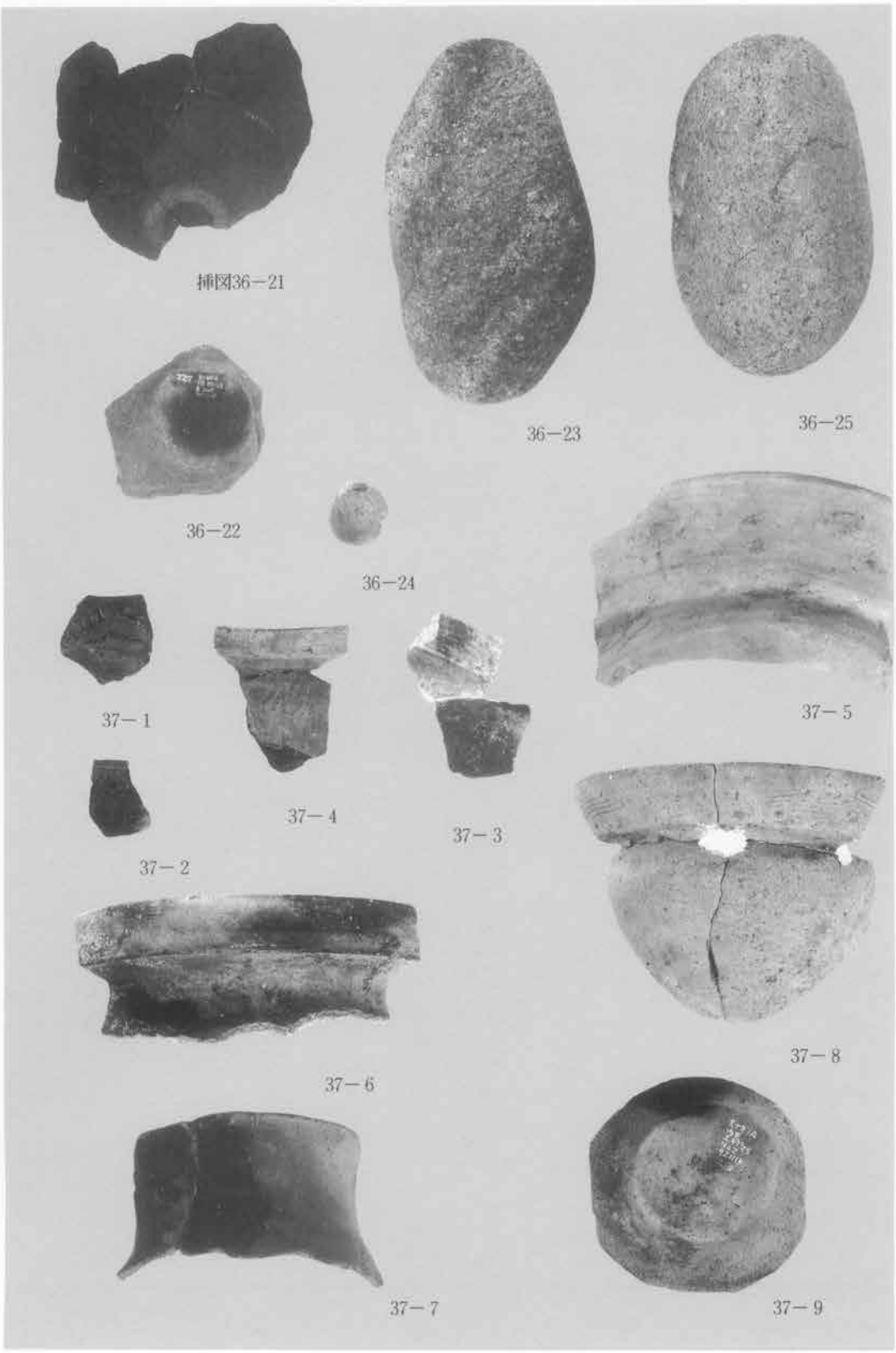
大長野A遺跡　2号大溝出土遺物(2)



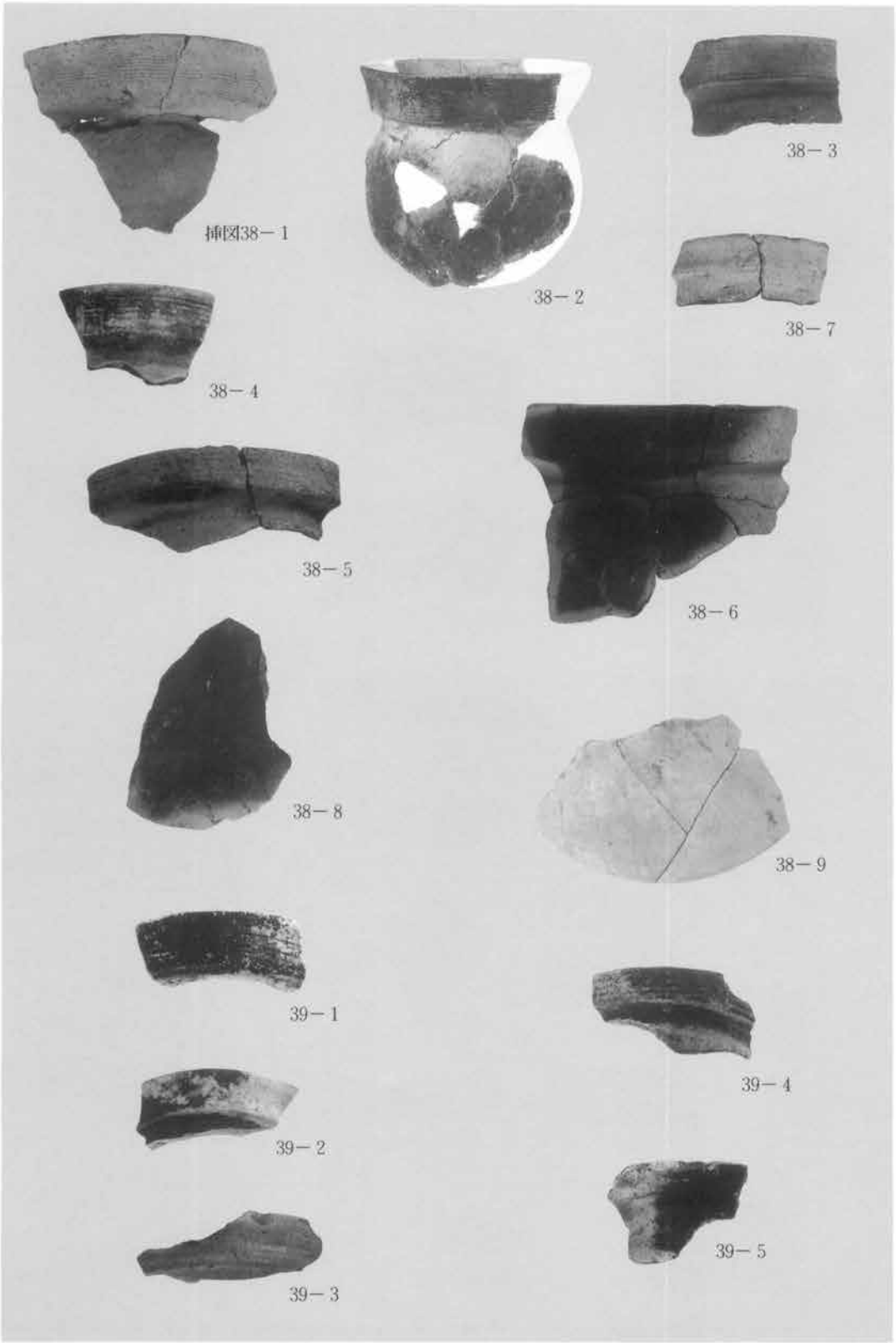
大長野A遺跡　3号大溝出土遺物



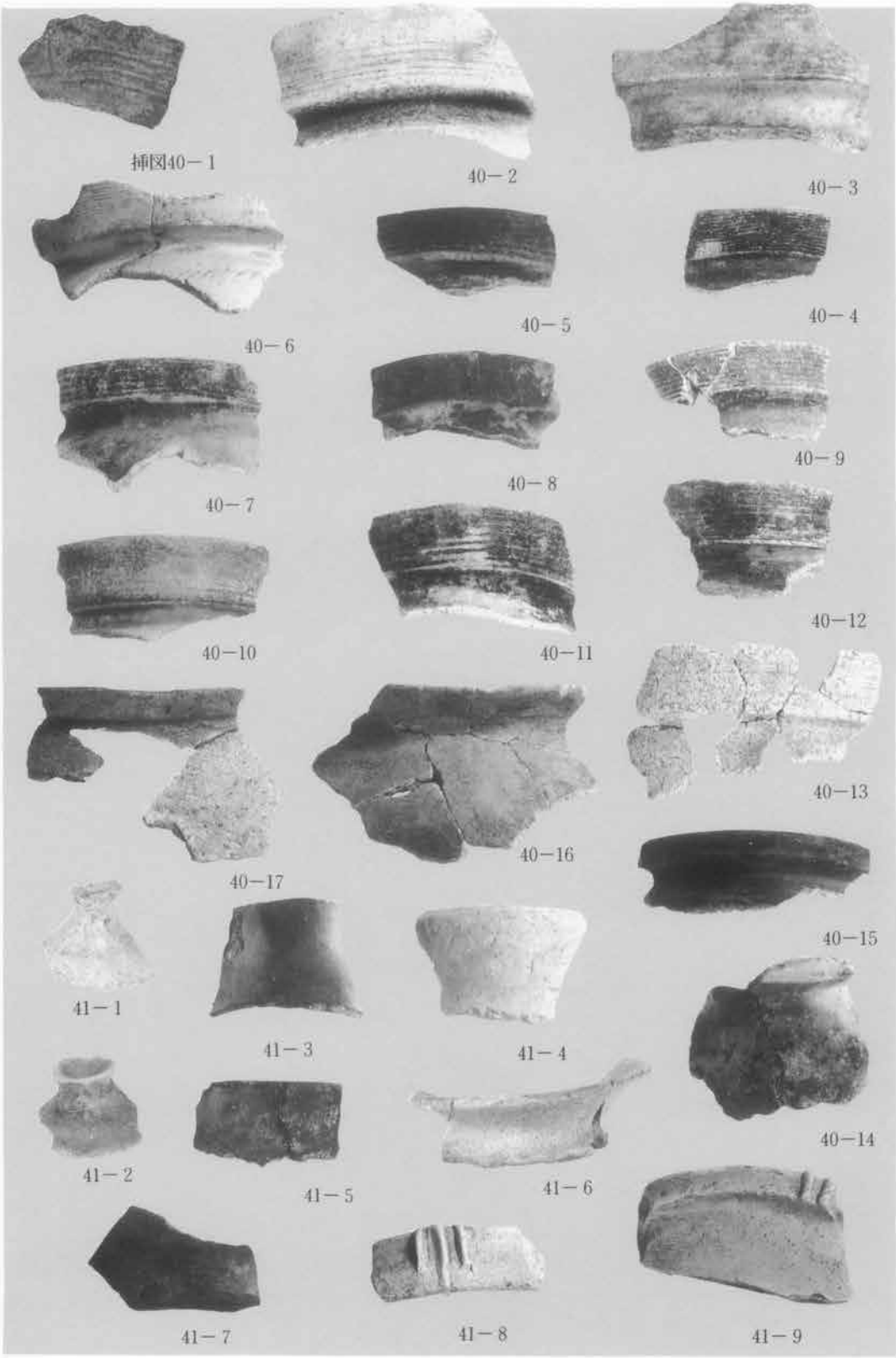
大長野A遺跡　落ち込み出土遺物(1)



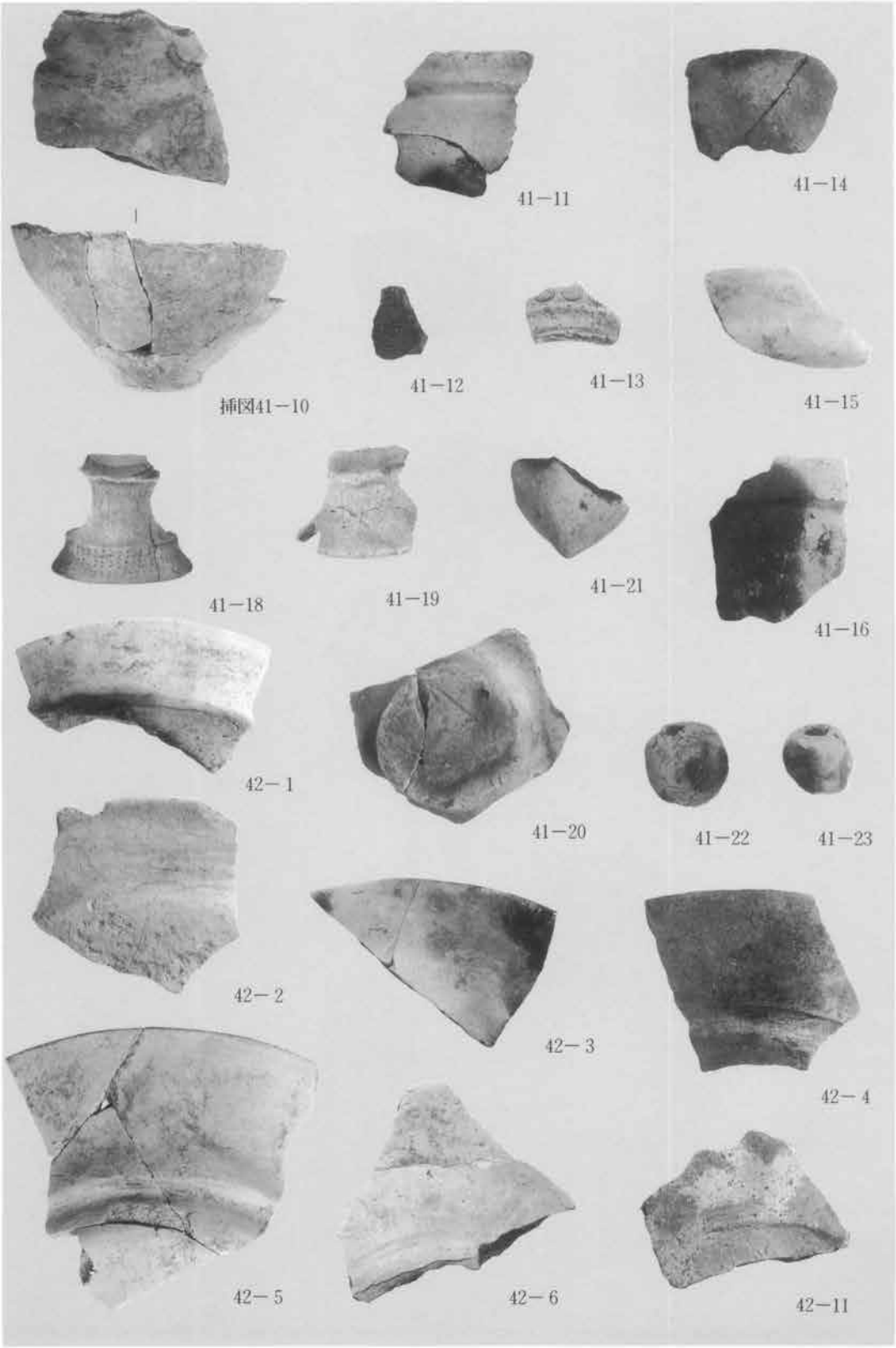
大長野A遺跡　落ち込み出土遺物(2)



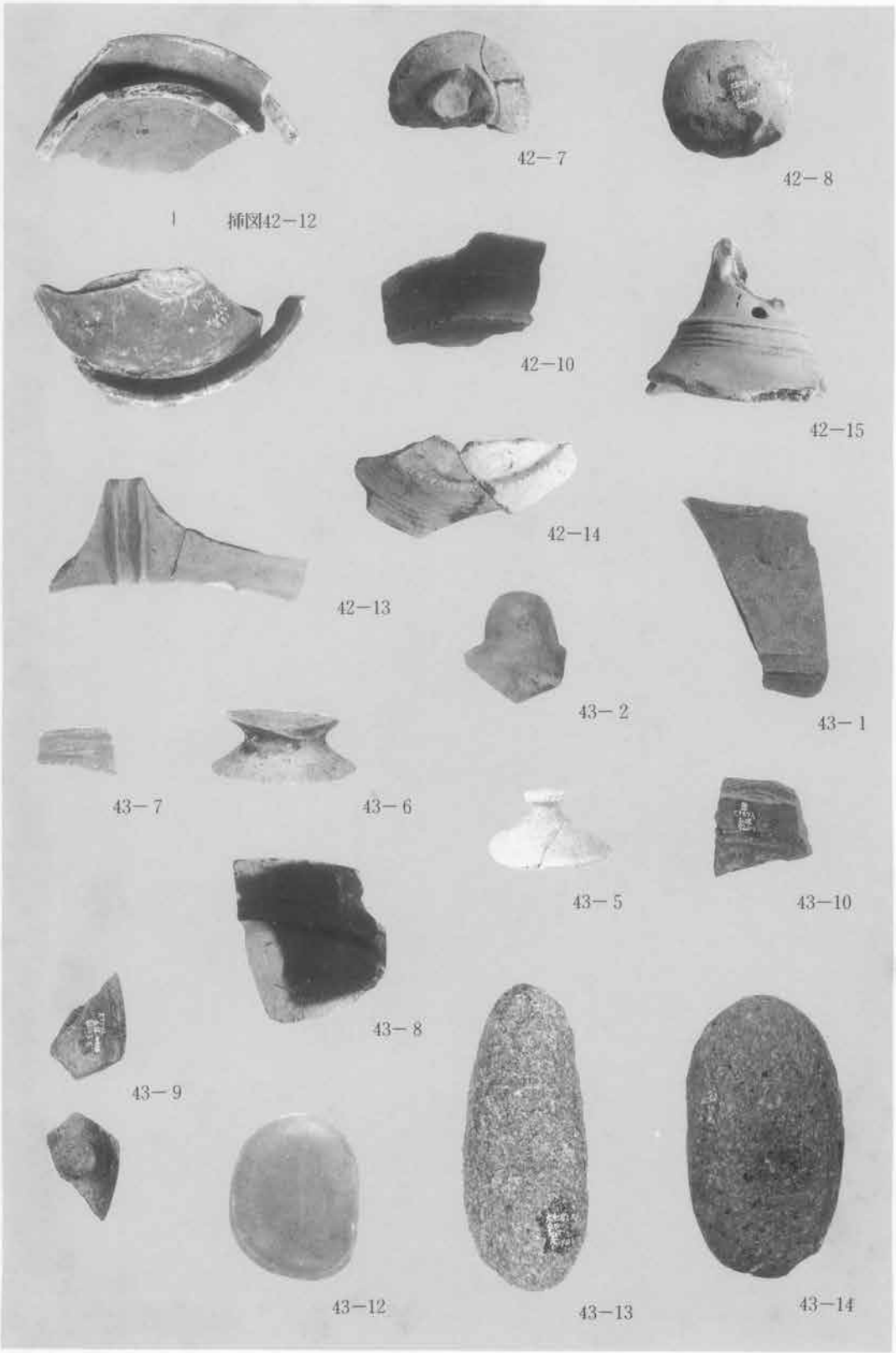
大長野A遺跡　土坑・ピット出土遺物



大長野A遺跡　包含層ほか出土遺物(1)



大長野A遺跡　包含層ほか出土遺物(2)



大長野A遺跡　包含層ほか出土遺物(3)

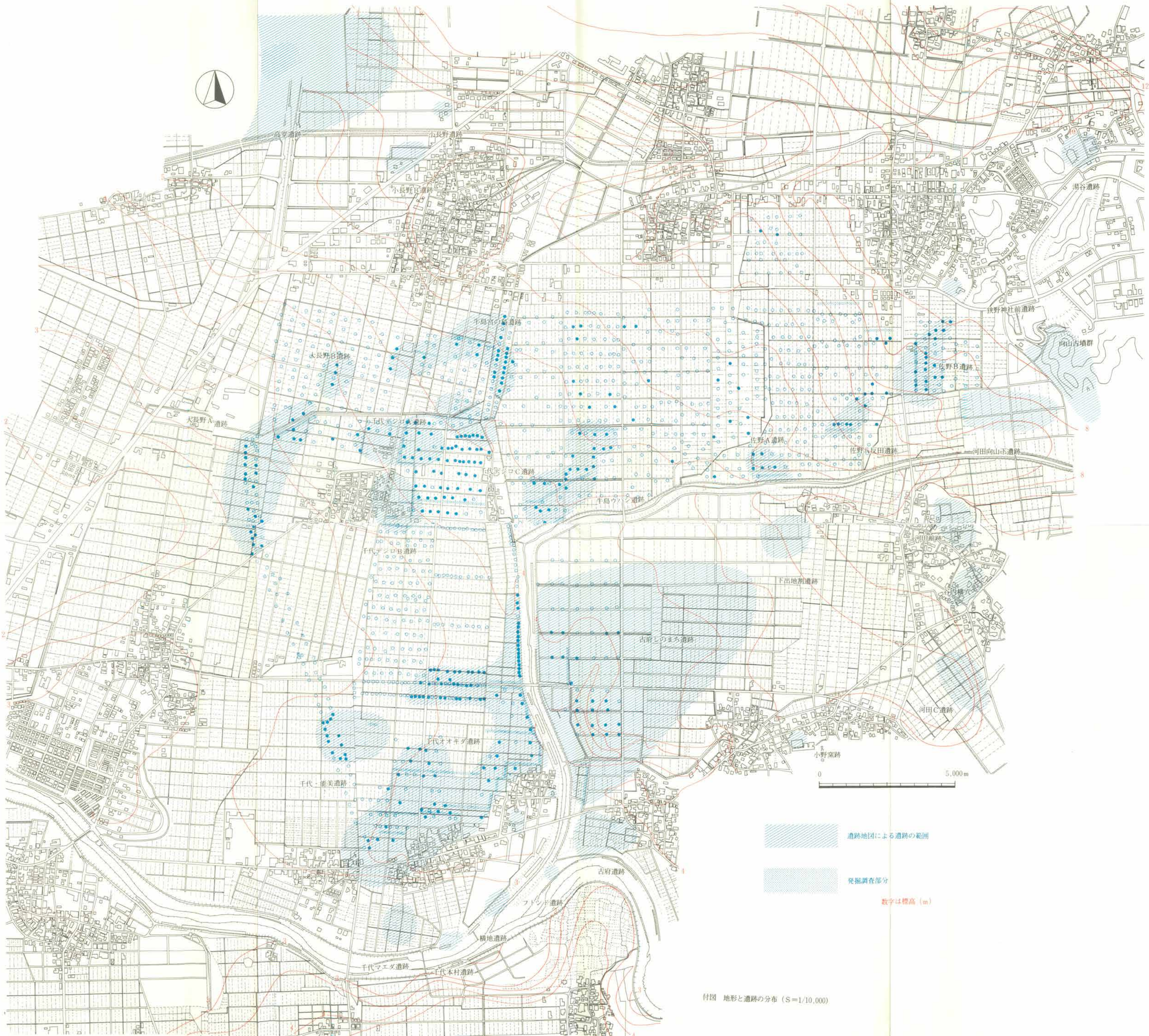
寺井町千代デジロＡ遺跡・大長野Ａ遺跡

ー県営ほ場整備事業寺井南部地区
小杉工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ー

平成７年　３　月　25　日　印刷
平成７年　３　月　30　日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町４丁目133番地
〒921　電話（0762）43ー7692番

印　　刷　能登印刷株式会社



付図　地形と遺跡の分布（S＝1/10,000）